
ソウルイーターの世界にいこう Z E Ⅲ

アリアドネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソウルイーターの世界にいこうZE シ

【Nコード】

N6751R

【作者名】

アリアドネ

【あらすじ】

『只今の主人公設定』恐らく13歳（多分）鍵の武器で狂気を使える（・・）（正直消したい設定ww）ビビリでは無くなり普通より少し上ぐらいの度胸だと思う…本編は原作に追い付いたら困るのでゆっくりと書いています^_^《現在、ババ・ガヤーの城》

始めようか

ピクリとも動かない死んでいるような人が虚空に横たわり眠っている

しばらくするとモゾモゾと動き始めその人は目を覚ました

？「あれ…」

ぼくこんなところにいたっけ

ここはどこだろう？

ぼく？って誰だっけ

何にも思い出せない…」

ひたすら何も無い空間に若干低い男の声が響き渡る。

男は周りに誰もいないことを確認し頼れる人物がいないことがわかると男は自分で考え始めた。

？「とりあえず、ここは何かは置いというて自分のことを思い出そう」

思い出そうZE ヽ

「んー全くだせん！自分以外のことならわかるのに自分のことは全くわからん！記憶障害とかなんかな？？そんな都合のいい記憶障害あるのかな？？ーもういいや。頭が働かんしとりあえず寝よう」

男はそういうと体を横にしようとした
その時

ーズキンー

頭に痛みが走った

「ツツーあれこの体勢何か覚えてるぞただ寝るとき以外にもこの体勢をしたことがあるような……！！思い出した！」

男は何かを思い出したようだ。

その思い出した記憶をたよりに男は自分のことを確認し始めた

ー

ぼくは藤崎無明

自分で言うのもアレだがとくに目立つ部分が無い。

顔は俗に言うフツメン

身長175？

体重60？

中肉中背

運動は出来ないことは無いがいつも普通なぐらいしかない

ゲームやマンガなども好きだが毎日ゆったり見たりしてるわけではなく、二日に一度ぐらいのペースでゆったり見るぐらいだ
ゲームはともかくマンガは一度見たらあんまり読み返さない

趣味は特に無し

友達はいないことは無いが、友達というより赤の他人以上友達未満という表現が正しい。

ようするに普通だ

強いて特徴をあげるなら、親は共働きであまりぼくに関心が無いことかな？

まあ、どうでもいいが…思い出したのはいいが自分は普通すぎて悲しすぎる…

とりあえず自分のことは思い出した。

次はなぜここにいるかを思いださないと

確かあの日

—————

「はあー、

今日からぼくも高校生かあ」

一人呟きながら無明は歩いている。

歩いてるといことは時間に余裕はあるようだ。

「やっぱり高校生になるんだし今までの普通な自分を捨てて積極的になって高校生活を楽しまないと……」

うん、頑張ろう！」

無明がそう固く決心をした時、

プーーーーププーーーー

すぐ真横からトラックのクラクションが聞こえてきた。

無明は音に驚き反射的に横を見てみると幼稚園児みたいな女の子が道路の真ん中に座り込んでいた。

腰を抜かして立てないのか、ケガをしているかはわからないがその場から動けないようだ

無明はその女の子を助けようと思いすぐに道路に飛び出るが女の子の所に行くまでにふと頭に疑問が浮かんだ。

――助けたからって何かあるのか？

自分が危険を侵して助ける必要があるのか？

ここで停まっても助けに行こうとしたと言っ心意気は認められるんじゃないか？

無明の頭の中には様々な疑問が浮かび上がる

その疑問が一瞬、ほんの一瞬だけ女の子を助けようと動いていた体が減速した。

トラックはあまり減速していない。

そして徐々に女の子にトラックが近いて行く。

全てがスローモーションに見えた。

そしてそのスローモーションの中、無明は見た

恐怖に怯え、今にも壊れてしまいそうな女の子を…

無明は様々な疑問を消しひたすら全力で走った！

トラックが女の子を跳ねようとした時、無明が横からダイブをするような感じで飛び込んできた。

無明はダイブをしながら女の子を抱えると自分のお腹に隠し女の子を抱きしめた。

そして

プププーガン！

鈍い音が無明の頭に響いた。

無明はそれをトラックが自分を跳ねた音だと気づいた時、体に激痛が走った！！

無明は激痛に悶えながらも自分の腕の中にいる女の子の安否を確認した。

「わたーたーあーーうーあなーーおとーーにーも
ーから」

泣きじゃくりながら女の子は必死にぼくに何かを話かけている。

とりあえず大丈夫ということはわかった

でもぼくはおそらく駄目だろう…

周りの音は途切れ途切れにしか聞こえないし視界がだんだん狭まってきた。それになんだか眠たい高校生活は楽しめ無かったけど、最後に普通なぼくが人の役にたったかな…？

そして藤崎無明は少し満足気な笑みを浮かべゆっくりとその生涯終えていった……

思い出そうZE ミ(後書き)

やり方わかってはきたんですが、一ページ抜けてたからまた消して
しまった……

もうミスらないように頑張っていこう……

神様に会おうZE ミ(前書き)

この下り必要なのか？
転生するまでが長すぎる…

神様に会おうZE ヽ

「あー、なるほどそういえばそうやったっけ？ぼくは死んだのか
…」

無明は記憶を思い出し自分が死んだということを認識した。

「じゃあ、ここは地獄？天国？どっちだろう？ぼくはあんまり悪い
ことした覚えがないし出来るなら天国へ行きたー」本当に天国へ行
きたいのかね？」

自分しかいないはずの空間に声が聞こえてきた。

「ー誰！？」

何も無い空間に無明は叫ぶ。

「私か？私はお前が助けてくれた少女の父親だ」

何も無い空間が振曲がり言葉が聞こえと同時に、いかにも父親で
すと言ってるような服装をした人物が空間から出てきた。

「！！？？」

何も無い空間から出てきたことに驚きを隠せない無明だったが、深
呼吸をして落ち着き頭が冷静になると考え始め、そして今疑問なこ
とを全て質問した。

「父親！？あの女の子の？ってかどこから出てきたの？ここはどこ

なの？なんで貴方はいるの？さっき言った天国へ本当に行きたいの
かね？ってどういう意味なの？」

「少し落ち着け。一個ずつ答えてやるから」

無明はその言葉を聞くと父親らしき人が答えるの待った。

「まず一つ目」

私は真正正銘あの子の父親だ。信じられないくらいでもあの子
呼んで証明させてあげたいが今は疲れて寝ているから勘弁してくれ。
どこから出てきたか？そこからだ。それ以上でも以下でも無い！！

ここはどこか？ここは天国でも地獄でも無いその狭間だ

なんているか？お前にお礼をするためにきた

さっき言った言葉の意味はそのままの意味だ。天国へ行きたいなら
連れていってやろう。だがお前はうちの子を助けてくれた、そこで
私の力でお前は生まれ変わることも出来る

好きなほうを選ぶ」

「いろいろツツコミ所はあるけど、生まれ変わるって？」

「違う世界に転生させてやるという意味だ。不満か？なんなら特別
な力をやってもいい」

「特別な力は欲しいけど……ってそうじゃ無くて！！なんでそんな
ことが出来るんだよ！」

父親らしき人はおとぼけた顔をして少し時間が経つと、

ああ、そうか

と呟き無明に喋った。

「すまない、あの子の父親としか言って無かった。改めて自己紹介させて貰おう」

あの子の父親のマイシユだ
そして私は

神だ。」

「神様——!？」

「そう神」

「マジで？」

「マジで神」

「really？」

「YES。」

危ない危ない
びっくりしすぎて少しキャラが崩れたよ

「でも、なんで神様がたかがぼくなんかの為にそこまでしてくれるの？」

「神様の立場ではあんまりこんなことはしては駄目なんだが娘に頼まれたもんでね。それに娘の命の恩人の君にお礼をしなければ。」

「頼まれた？」

「そうだ。頼まれたよ
聞いて無かったのか？」

いや聞こえて無かったのか…

娘はお前が死ぬ時に話していただろう？『わたしの為にありがとう。
あなたのことはお父さんになんとかしてもらおうから』と」

なるほど、あの子はぼくにそんなことを言っていたのか…

「質問はもういいだろう。そろそろ決めてくれないか？おとなしく
天国に行くか、転生するか。」

「……………」

無明は手を組み少し考える。

そして答えを出した

「ぼくは……………」

新しい世界で新しい人生を歩みたい！」

「わかった。約束通り転生させてやろう！！ただしどの世界に行く
のかはわからんがな…」

「少し怖いけど……………」

わかった！！」

「フツ…」

転生するついでに先程言ったがお前には特別な力をやろう。この力を活かすのも殺すのもお前しだいだ」

「どんな力をくれるの？」

無明は内心ワクワクしながら聞いてみた。

「それを言ったらつまらんだろう。ただしヒントはやろう。この力は『お前の記憶』だ。だがいつもは封印してある」

「記憶？封印？」

どういうことかさっぱりわからない

「いつかはわかるさ

そろそろ時間だ

ついでにお前の行く世界が決まったぞ。
ソウルイーターという世界だ」

「へえ！ソウルイーターっていう世界かあ

……ってソウルイーター！？それで漫画の世界じゃん！？」

「どこになるかわからんと言っただろう。さて行くぞ準備しろ」

「ええ！？準備って何をすれば……」

無明がいろいろと悩んでいると足元が光り始めた。

「その光に入ったら第二の人生スタートだ」

無明はその言葉を聞いて、いざ決心をすると光に入り始めた。

「最後に娘からの伝言だ『楽しんでね』だとさ。お前が転生すると
言うことがわかっていたんだな」

無明は神の最後の言葉を聞きながら全身光の中に入り意識を閉じた。

神様に会おうZE ヽ(後書き)

こんな主人公じゃ無くて作者的には

「ド。。(ン!!!」グワー!

「ヤッベWWW俺テラチートWWW」

みたいなことを書きたかった…
どこで間違えたんだろうか

やっぱり設定のせいかな

(。・。。(=3はあー

転生したZE ミ(前書き)

長いなー

転生するまで長すぎるww

いつになったら

「やっべww俺テラチートww」

みたいなことかけるだろうか…

転生したZE ヽ

暗い……………

ここはどこなんだ？…………

何かに閉じ込められてるようだ…………

上下左右もわからない…………

！？

あそこに光がある…………

とりあえず光の近くに…………

…………ガ…………レ…………ユ…………モ…………ヒ…………

何かが聞こえてくるな？

おっ、そろそろ出口だ

せつ、狭い！！

「オギヤー、オギヤー、オギヤーオギヤー（ま、眩しい！ってかぼく赤ん坊……！！）」

元気な声で赤ん坊が泣く。

赤ん坊の声が聞こえると近くにいた男がかけよってくる。

「よくやった。雪！！元気な男の子だ！！」

男は赤ん坊を大事に抱え母親の所へ赤ん坊を持って行く。

「ハア……ハア…そうですね！？男の子ですか！！」

「オギヤー、オギヤー（赤ん坊つてことは、この人達はぼくのお父さんとお母さんになるのかな？それにしても…意識はちゃんとあるのに上手く体が動かせないし喋れない…）」

無明は精一杯体を動かそうとするが動かない。

「ハハハ、元気な子だ。名前は何にしようか？」

「オギヤー、オギヤー（今更新しい名前なんていらないよー！！無明のままでいいからー！！）」

必死に無明は念じてみる…

「あなた…どうしてかわからないけど頭の中にふと名前が思い付いたわ。」

「なんといい名前なんだ？」

「無明……香坂無明にしませんか？」

「んーいい名前だ。よし、この子は無明にしようー！！」

「オギヤー、オギヤー（よかった、無明のままだ。それにしても前

のぼくの両親に比べたら仲いいな」

「おおー、この子も喜んでるぞ」

男は子供みたいにはしゃぎながら言う。

「そうみたいですな……すみません、あなた……
疲れたんでそろそろ寝ます……」

「わかった。すまなかったな出産してすぐに名前などを決めさせて、
ゆっくり寝てくれ」

「……い……え……」

よほど疲れていたのだろう。母親は目を閉じるとすぐに寝てしまった。

――
月日がたった

産まれてからの三年は恥ずかしさで死ぬかと思った。

まずご飯、ご飯は母親の母乳。しかも22歳（当時）

そして下の世話。

自分では我慢してるつもりだけどいつのまにか出ている。

最後に愛情。これは嬉しいんだけどなんかいろいろとむずむずした。

まあ、全部引ってくるめて恥ずかしかったよ……

そんなことなどあり、ぼくは今年で五歳になる。

容姿は転生前とは違うが

普通以上でイケメンの三歩手前ぐらいだ。それでも前よりマシかな？

それで今のぼくの両親は、

母親は香坂雪

父親は香坂剣

という。

二人ともぼくに凄い愛情を注いでくれる

言うまでもないかもしれないが日本人

ちなみに某マンガの香 流は使えない。父親の仕事が金庫作りとい

うこと以外、普通の一般家庭だ。

そして五歳の誕生日

「「無明、誕生日おめでとう！」」

「ありがとう。お父さん、お母さん」

ぼくの誕生日に二人は盛大なパーティーを開いてくれた。

「いやー、もう五歳か無明は、月日が経つのは早いもんだな。なんだかつい昨日産まれたみたいだ」

「何言ってるのお父さん」（昨日じゃないよ、数ページ前だよ…ゲ
フンゲフン）」

「何言ってるのあなた。フッフ」

「ハハハ、無明はこんなに大きくなったのに、お母さんは全然変わ
らないな」昔と変わらなくて美人だよ」

「あなただつて全然変わって無いわよ昔と同じでカッコイイわ」二
人は無明の目の前でイチヤイチヤし始めた。
声をかけようとしたがもう二人は自分達の世界に入ってしまったよ

うだ。

無明は産まれて三年でこの光景に慣れてしまった。

確かに二人は若い、若いからそういうことは仕方ないが子供の前でイチャついて欲しくないものだ。

「アッ！」

二人を自分達の世界から戻す為にわざとコップのジュースをこぼした。

「あー、こぼれちゃったよ」

二人は無明の視線と仕草に気づいたようだ。

「ゴホンッ、それじゃあ、私達からプレゼントをあげよう」

そういうと二人は30?×30?ぐらいの箱を無明に渡した。

「つつつおも!!何これ？」

転生する前の無明なら持てたかもしれないが、五歳の無明には持てないようだ

「それはね、貴方だけの金庫よ」

「何故に金庫!？」

「そろそろ無明も大切な物とかが出てくるだろう?その大切な物を無くさないようにこの中に入れといたらどうだ。金庫屋の当主の私を作った金庫だ、そう簡単には開かないようにしてある。ちなみにその金庫はダイヤル式じゃ無い、無明はまだ五歳だし番号は覚えられないと思うから、ほら、鍵だ。」

そういうと剣は無明に鍵を渡した。

「ありがとう。お父さん」

「その鍵は複雑な鍵だから造るのに時間がかかるから無くさないようにな。」

「わかった。」

「プレゼントも渡し終わっだし、そろそろパーティーの続きをしましょ」

「そうだな」

そして無明の楽しい夜は遅くまで続いた。

転生したZE ミ(後書き)

しんどいし次は短く書くつもり…

覚s…じゃなく力の片鱗だZE ミ(前書き)

短く書くつもりが…

あと原作行く前にちょっと寄り道

覚s…じゃなく力の片鱗だZE ヽ

きっかけは、ほんのちょっとしたことだった。

そのときぼくは七歳だった。

いつものように遊んで家に帰り、ご飯を食べて部屋で寝ようとしたら、部屋の隅にある金庫に気づいた。

「そういえば、何も金庫に入れて無かったな…
使わないのも勿体ないような気がするし、何か入れるかな…」

そういうと無明は鍵を貰ったときにしまった机の引き出しから取り出そうとした…

が、鍵が見つからない。

「あれっ、どこいったんだろう？いつもはここに入れといたハズなのに…おかしいな？？」

必死に捜すが見つからない。

「あっ、あつた！

でも、折れてる…」

無明が必死に探し出した鍵は折れて使い物にならなくなっていた。

「お父さんはこの鍵造るのがとても難しいって言ってたな…

頼むとしても今お父さんは金庫作りで忙しいし…確か特殊な武器一族の以来だったっけ？

それにしてもどうしよう」

無明は目をつむり手を組みながら悩んでいると、ふと片手に違和感を感じた。

その違和感を確かめる為に目を開けてみた。

「エーーーーー！！」

その驚きの声を両親二人は聞くと何事かと思い、二人は急いで無明の部屋にきた

「「どうした（の）無明！」」

「お父さん、お母さんこれ…」

そついうと無明は二人に自分の手を見せた。

「あなた…これって」

「ああ、これは」

無明の片手は大きな鍵になっていた。

この翌日からぼくの日常は変わった。
というより変えたのほうか正しいかもしれない。

ぼくは二人に死武専に行きたいと頼んだ。

（このまま両親のもとで暮らしのもいいけど、やっぱりソウルやマ
力に会いたいしね。それに神から貰った力を使ってみたいし、と言
っても恐らくこの鍵は神から貰った力じゃないと思うけどね
だってあの人、『記憶』って言ってたし…）

二人は最初は死武専に行くことを反対したが、何度も頼むと渋々折
れてくれた。

でも、そのかわり二人は条件を出してきた。

一つはケガをしないように体を鍛えてくれと

二つ目は楽しんでくるようにと

二つともぼくのことを考えて言ってくれてるのがわかったので少し
目頭が熱くなった。

そしてぼくの鍛練が始まった。

七歳が出来る限界まで毎日鍛練をした。

対人訓練もしたいんだけどね
相手がいなくて…

そしてある日のこと、

――――――――――

「やっと終わった!」

無明の父、剣が急に叫んだ。

「何が終わったの父さん?」

「ほら、前に言っていただろう?ある特殊な武器一族に頼まれて造
っていた金庫だよ!今回の金庫は時間がかかったな」

「へえー、そうなんだ」

無明は自分には関係ない話なので軽く流していた

「今から届けに行くが、お前もついて来るか？確かその家のお子さんは二人いて、下の子がお前と同じ歳で同じ武器らしいぞ。この際友達にでもなったらどうだ」

無明は『特殊な武器一族』と『二人の子供』という単語に少し頭に引っ掛かる物があったがそれ以上に『友達』になれるかもしれないということに釣られて、

「うん、ぼくも行くよ！」

と言い支度を始めた。

覚s…じゃなく力の片鱗だZE ヽ(後書き)

もう今日は書かん

しんどいぜい…

もしかしたら明日更新するかも…

テストが23日にあるし勉強しなければへ(。(へ)

次はやつと原作キャラが出るかも…

ってかそろそろ出したい！

やっとな原作キャラでたZ E ミ(前書き)

最近書いてて思っんだ…

内容薄くね？

展開早くね？

(;。) = 3 はあー

やつと原作キャラでたZE シ

カラカラカラカラ

カラカラカラカラ

一定のリズムで音が聞こえる。

「無明、いくら体を鍛える為とはいえ金庫を乗せた荷台を自分でひかなくても…体は大丈夫なのか？」

剣は心配した様子で尋ねてみる。

「ハア…ハア…ハア、大丈夫だよ父さん。死武専に行くんだこれくらいのことじゃへばれないよ。」

少し息の荒い無明だがまだその顔は生き生きとしていた

「それに…」

「どうかしたのか??」

「ううん。何でも無いよ」

（あんまりしんどくはない。いくら鍛えてるからといってもどう考えても七歳児の体力じゃなよね。荷台に乗せたからと言っても普通こんなに歩けないよ。多分前世のぼくでもキツイと思う。やっぱり体が違うせいなのか?。）

そんなことを考えいると

「着いたぞ町だ」

無明は目を見開いた。

言って無かったかもしれないが、無明の家は山奥にある。そのせいで基本人とは関わらなく、町に繰り出すこともない。剣は仕事上、町へ繰り出すことが多いのもう馴れたが無明はとても驚いた。

（前世とは違う綺麗さだ、テレビや映画で見た時より味がある。やっぱり本物は凄いな）

無明が自分の世界に入っていると

「おい、無明行くぞ。」

その言葉とともに現実に戻された。

しばらく父親と無明が歩いた

そして

「無明、着いたぞ。ここが依頼人の家だ」

「へえ、そうなんで……って
エエー……!!」

無明は突然驚きの声をあげた

「どうした？無明、この家のどこがおかしいのか？」

急に声をあげた無明を不思議そうにみる

「この家って中務……」

「おつ、字の勉強もしているのか！そうだ今回の依頼人は中務三
郎さんだ」

金庫の依頼人、中務三十郎は椿とマサムネの父だった。

――

「おおー、わざわざすまないね。家にまで届けてくれてお礼に少し
家でゆつくりして行かないか？」

三十郎は気さくに二人に話かけた。

剣はとくに早く帰らなければならない用事も無いし何より好意を無
駄に出来ないので

「ありがとうございます。じゃあ無明少し上げさせて貰おうか？」

「わかった。父さん」

二人は好意に甘えることにした。

「そういえば、剣さんの息子さんは七歳だったか？」

「ええ、そうですよ。」

「ならうちの娘と同年だな。」

今からおじさん同士で会話をするから、時間になるまでうちの娘と遊んでおかないか？歳も一緒ならいろいろ話が合うだろう。」

「それはいいな。無明お言葉に甘えて遊んできたらどうだ。」

「中務さんありがとうございます！（やっぱり椿かな？歳はぼくのほうがだいぶ年上だけどね。）」

三十郎は無明の返事を聞くと自分の娘を呼びにいった。

数分後、三十郎さんの後ろに自分より少し小さい女の子がいた。

「ほれ、この前言っていた香坂剣さんにその息子さんの無明君だ。自己紹介しなさい」

女の子は少し照れながら自己紹介を始めた。

「な…中務椿です。」

予想通り椿だった。

椿は原作と同じように話やすいが、少し相手に合わせてるように感じた。

椿との会話や遊びは楽しかった。

仲良くなってきた所で無明は気になっていることを質問してみた。

「椿さんは二人兄弟で兄がいるって聞いたんだけど…どこか出かけてるの？」

その質問を聞くと、少し答えるのに躊躇ったが答えてくれた。

「兄さんは……」

ある事から人が変わったかのように町へ出かけています。」

「ある事って？」

「…それを説明する前に少し聞いてください。

私の一族では代々伝わる特殊な武器一族なんですけど、先代の能力などは全て受け継がれるんです。

その能力は「手裏剣」「けむり玉」「変わり身」「忍者刀」「日本刀」が在って、これらの能力は全て初子の兄さんに受け継がれるはずだった…

でも……」

「でも？（ある事ってそういうことか）」

一応無明はわかったが話の続きを聞くことにした。

「最近わかったんですが、兄さんには能力が日本刀しかなく、この能力は全て私が受け継いだんです。

私達家族はそんなことはあまり気にせずいつもどおりに接してるんですが、そのことで落ち込んでるのかはわかりませんが、その日から毎日町へ繰り出しています

最近は大変危険という噂なんですけど…」

「そうなんだ。ごめん
そんなことを聞いて」

無明は申し訳なさそうに謝ったが、椿は

「いえ、いいですよ。むしろ話せてよかったと思います。」

と言ってくれた。

椿はやっぱり椿だ

とひそかに心の中で無明は思った。その後、たわいもない話で残りの時間を過ごした。

（今日一日で椿とはとても仲良くような気がする）

無明は満足気だった。

日没手前頃

――――

「そろそろ帰らせていただきます。長居してすみません。」

「いやいや、こちらこそすまなかったね。こんなに居座わさせて、

夜道に気をつけてください」

大人二人が帰りの挨拶をしているときに無明も

「椿さん、今日は楽しかったです。ありがとうございました。」

「私も無明さんとの話は楽しかったです。」

「……椿さん。もう

ぼく達、友達ですよね？」

「はい」

無明は初めての友達が出来てとても嬉しかった。

「おい無明、そろそろ行くぞ。」

「わかった父さん。椿さん。また会いましょう」

「はい また。」

そついうと親子二人は家に帰り始めた。

やっと原作キャラでたZ E ミ(後書き)

これで今日の更新終了ー

次の更新は23日以降

テストがあるもんで…

+ (0 ° ・ ・) + +

えっ…マジDE ミ(前書き)

ゝた

ゝだった

多いなゝ

直そうと思っても中々直せないや(、、(

さていつになったら原作入るのやら……

えっ…マジDE シ

中務邸を出てから数分後、無明達は町を歩いていた。

日没手前ということもあり人が見かけられなかった。

今、無明達が歩いている道だけ人が通らないだけかも知れないがそれでも無明達合わせて数人しかない。

「今日はなんだか、日が落ちるのが早く感じるなそれにここまで人がいないと気味が悪いな…早めに家に帰らないと」

剣は周りの不穏な空気を感じとったのか、少し早く歩き始めた。

しばらくすると突然剣が足を止めた。

「どうしたの？父さん。」

自分の体を探り、少し溜息をつくとき剣は申し訳なさそうに口を開いた。

「ハハハ、中務邸に金庫と一緒に仕事道具も置いてきてしまった。」

「はあー」

なにやってるの父さん……仕方ないぼくが取りに行くよ」

「大丈夫なのか？」

剣は無明に心配そうに聞く。ここまで来るのに金庫を引っ張ってき

て体力はそろそろ尽きるはずだ。七歳児にはキツイだろう

「大丈夫だよ父さん。まだまだ体力はあるし鍛練にもなるしね、それに、いざとなればぼくにはこの力があるよ」

そう言いながら無明は片手を鍵に変化させた。

（鍛練にもなるけどそれ以上に椿さんに会えるしね。さっき別れたばかりだけど…（こんな空気だが一応言っておくけどロリコンではないむしろ同い年だ！））

無明の本音はこうだった。

「…わかった、頼む」

「任せて！！すぐに戻ってくるよ」

そう言うが無明は急いで来た道を引き返していった。

父親の剣と別れて一刻ほど、無明は再び中務邸にやって来た。

呼び鈴を鳴らすと、中から椿が出てきた。

「どうしたんですか！？無明君」

先程別れたばかりの無明が立っていたことで少しびっくりした様子だった

「いや、お父さんが仕事道具を忘れてしまったらしく、それを取りにきたんだけど、どこかに置いて無いかな？」

「あっ！ー！そういえば居間にそれらしきものがあつたような…ちょっと見て来ます。少し待っていて下さい」

「うん」

椿が道具を探しに行くと無明はその場に腰を降ろした。

（急いできたのもあるしさすがに疲れたな）

無明が休憩していると、

「ありました！！これですよね？？」

椿は剣の仕事道具を持ってきた。

無明は幾分か体力が回復出来たので

「ありがとう！じゃあぼくは行くよ。」

と帰る支度を始めた。

「もう日がほとんど落ちて、道が見えなくなってるけど大丈夫ですか？」

椿は心配して聞いてくる

「大丈夫だよ。それにお父さんが待つてるから！時間とらしてごめんね。さようなら」

「いえ、全然大丈夫ですよ。さようなら」

何回も言うが、椿はやっぱり椿だった。

無明は再び道を戻り始めた。

体力はある程度回復しているが父親と合流してからもまだ歩く必要があるので無駄な体力消費を抑えながら、父親の仕事道具をもちながら少し早めに歩いていった。

S i d e ? ? ?

薄暗い町の影で尋常ではない雰囲気放つ人がある。

12歳前後だろうか？少年みたいな幼さは顔には出てるがそのオーラはとも少年には見えなかった。

少年は片方の青年らしき人物に声をかける

「おい、そろそろ殺れよ。お前は鬼神になるんだろ？今だに魂の『た』の字も狩れてないぜ。このままじゃ、鬼神になる所か鬼神の卵にもなれやしない」

「わ、わかってはいる。が、どうしても一歩踏み出せないんだ。」
青年は答える

この青年は少年らしき人物とは違い、まだ年相応のオーラは出ている。

「はあー、そんなだからいつまで立っても魂を狩れないんだよ。絶好の力モがいる。半刻ほど前に親子連れがこの道を通った。でも子供の方は用事があったか知らないが一旦道を引き返した。親父の方は引き返さなかったから再びあの子供はここに帰ってくる。そこがチャンスだ。誰にも見られないような所で待ち伏せをしておこう」

タイミングを見計らって殺れ!!!」

「こ、子供を殺すのか？俺にそんなことが出来るは…「いいや、出来ないはずが無い。なんの為に俺がいると思ってるんだ？お前に力を与える為、そして…お前を狂気に落とす為だよ。素直になれ！自分の気持ちに嘘をつくな！！周りのことなぞ気にするな！！家族なぞ気にするな！！狂気に身を任せろ！！そうするば…いつか鬼神様がお前を導いてくれるはずだ！！」……わかった、フォン。」

「そう。それでいいんだよ…マサムネ……」

青年の目には先程までの戸惑いはなくなった。
そしてマサムネは『力』という狂気に溺れていいた

S i d e o u t

無明は中務邸から離れてからかなりの距離を歩いた。

父親と別れたあとはとくになんとも無かったのだが、なんだか別れたときより少し変な空気が漂っているような…それに胸ざわつきが気になり無明は急いで父親のもとに帰ろうとしていた。

あと、いくつかの曲がり角を曲がって直進したら父親に会えるという所で無明の胸のざわつきが最大になり、そして背後から『何か』

がやって来るように感じ無明は臨戦態勢をとった。

「あれっ！ばれちゃった？？少し狂気出し過ぎたかな？まあ、いいや。マサムネ出番だよ。」

「わかった…貴様には恨みは無いが、俺の夢の為に死んでいけ」

そういうとマサムネはいきなり無明を目掛けて刀を構え突進してきた。

無明は日頃鍛えてるおかげか、体が動きそくざに片手を鍵に変えマサムネが降り降ろしてきた刀を間一髪鍵でガードする。

そして無明は今だせる力を全て出し、刀を振り払った。
振り払うと同時に距離をとる

「いきなり何をするんだ！やめろ！！」
無明は叫ぶ。

マサムネは全く聞く耳を持たない

「敵ながら見事。子供と思っていて甘く見ていた次は本気で斬る。」

マサムネはまさか自分の刀がいくら手を抜いてると言ってもたかが七、八歳の子供に防がれると思っていなかった。防がれたことに少し驚いたが、すぐに気持ちを切り替え本気で殺す為に構えをとりはじめた。

それに比べて無明は体力を使い切ってるせいで肩で息をしていた。最初の一撃は直線的に刀を降り降ろしてくれたから防げたが、その一撃を防ぐ為に全神経とほとんどの体力を使い切ってしまった。

次の一撃は相手も手を抜かずに本気で来るだろう。

その一撃はもう防げない！！ならどうすればいいか？無明は自分の体力の残量が少ないことがわかっていた。

その少ない体力で最善の選択はどうすればいいか考えようとした。だが相手は無明の考えも知らずに向かってきた。

無明はとりあえず目の前のことに集中する為に一切の考えを捨てた。

マサムネはじりじりと擦り足で無明との距離を詰めてくる。

無明は素人丸出しの我流の構えをとった。

お互いの制空圏が近付き、重なるとお互い動いた！

そして勝負はすぐについた。

立っているのはマサムネ

胸に大きな傷ができ今にも死にそうな無明が地面に倒れていた。

地面に倒れている無明に言う

「お前は子供にしたら強かった。パワー、スピード、集中力、冷静さ等はあるが、戦闘経験が丸つきり無い。お前の敗因はそれだ！」

無明はマサムネの言葉に反応せずただ荒い呼吸をしているだけだった。

「もう、聞こえて無いか…」

今、楽にしてやる！」

そう叫ぶとマサムネは刀を降り降ろした…

S i d e 無明

マサムネがじりじりと距離をつめてくる。

ぼくは我流な構えをとりマサムネの攻撃に対処しようとした。

マサムネの攻撃範囲とぼくの攻撃範囲が重なったとき、ぼくは動いた。同時マサムネのほうも動いた。

ぼくはこのあとのことは考えずに全ての体力を使い、マサムネの突きを避けようと必死に体をずらした。

……結果マサムネの突きはぼくの脇を掠っただけだった。

攻撃してきた隙を狙い、ぼくは反撃に出ようとした。

反撃に出ようとした瞬間、ぼくの胸に感じたことの無い激痛が走った。

ぼくは激痛で倒れて行く中見たのは右手に刀を握り、左手を刀に変えたマサムネだった。

しばらく激痛に悶えているとマサムネが何か言ってるのがわかった。でも血を流し過ぎたせいなのか目も良く見えないし、耳もあんまり聞こえなくなっていた。

何を言ってるのかはわからないが、ぼくのほうに近付いてくるのがわかると自然と殺されるということを理解した。

ぼくが、最後に見たのはぼんやり見える刀を振り下ろそうとしてるマサムネと

何故か頭の中に扉と鍵穴が見えた…

ガ
ギ
ン
ッ
ッ

えっ…マジDE シ(後書き)

これが今自分に出来る限界だね+(0°・・・)(++)

えっ?口調違うつて?

そんなんしらん(ヾノ・・・)

えっ?なんか矛盾があるつて?

………そ、そんなんしらん(ヾノ・・・)

えっ?フォンって誰つて?

そんなんしらん(ヾノ・・・)

えっ?戦闘描写薄いつて?

そんなんしらん(ヾノ・・・)

えっ?次は覚醒するかつて?

それは秘密+(0°・・・)(++)

えっ?次の更新日いつて?

そんなんしらん(ヾノ・・・)

期待を裏切るものだZE (前書き)

これは見ないほうがいいのかも…

超台本書きですわ…

スマホに携帯を変えてから使いにくいわ、ストレスは溜まるわで何か気分が乗らなくて…

ただの言い訳にしか過ぎんが…

期待を裏切るものだZE

マサムネが無明に刀を振り落とす。

ガキンッ！

金属の擦れるような音があった。

そこには黒いカマをもった頭にネジが着いてる変な男がいた。

「ふう〜ギリギリ間に合いましたね先輩。」

頭にネジが着いてる変な男はカマに向かってしゃべった。

「一応敵の前だぞ！油断はするな。」

カマから少し顔を出し男が答えた。

「了〜解〜」

カマをもった男はヘラヘラと笑いならマサムネの刀を弾いた。

自分のはなった一撃を軽々と防がれ弾いた男に向かい言う。

「お前らは何者だ！」

「そうですね、僕達は死武専のOBって所ですかね。」

「死武専だと!？」

マサムネは少し動揺するなぜなら、

「『死武専とは鬼神を二度と生みだなさい為に作られた』意味わかりますよね？」

そういうと、頭にネジが着いてる男はマサムネに向かってカマを振り落とす。

「グッ！」

マサムネは刀でカマを防ぐ！

しかしあまりにも重い一撃だったのか防いだと同時に一瞬体勢を崩す。

ネジの男はその一瞬を狙い『魂の波長』魂威を打ち出す。

マサムネはその崩した体勢では防げるはずもなくマトモに魂威を受ける

その一撃で、マサムネは倒れた。

「鬼神は生み出せないんだ。まだまだ将来があつたかもしれないがここで終わりだ！」

倒れているマサムネにネジの男はカマを振り上げそして落とした：

しかしそのマサムネに振り落とされたカマはもう一人の男フォンによって防がれた。

「やっとスキを出してくれたね。ギリギリ間に合ったよ。」

「いつくるかと思い、なかなか来ないからついスキを出してしまったじゃあないですか。」

ネジの男は言う

「そりゃ、天才職人のシュタインとデスサイズだからなかなか行けないよ。」

「この子のつぎはあなたが来ます？」

ネジの男シュタインはやはりヘラヘラしながら言う。

「いや、やめとくよ。勝てる気がしないから。」

フォンはマサムネを担ぎ上げ逃げた。

「おい！シュタイン追わなくていいのか！？」

デスサイズと呼ばれた男はカマから人間に戻りシュタインに言った。

「追ってもいいですけど、そんなことをしたらそこにいる子が死んでしまうかもしれないし止めときましようか。」

そう言うとシュタインはまだかろうじて生きている無明に応急処置を始めた。

「…そうだな。

それにしてもこんなに幼いのによく頑張ったもんだ。将来楽しみだな

絶対助けてやれよ。」

「わかってますよ。」

無明 side

……む……ろ……！……むみ……

なんだか声がぼくに向かって叫んでる。

なにいつてるかわからないや。

ちょっと起きないと…

side out

ここは無明親子の家。

包帯でぐるぐる巻きになって寝ている無明に向かって剣と雪は必死に叫ぶ。

剣と雪の声が届いたのか、無明は深い眠りから目を覚ました。

「あれっ…ここは？」

つかマサムネさんは！

ッッ！」

先程のマサムネとの戦闘を想いだし、声をあげるが傷口が開いたのか、その場にうずくまった。

「あまり、無理しないで下さい」

傷の手当てをしながらシュタインは言う。

シュタインはケガの心配をして無明の家で目を覚ますのをまっていたようだ。

「ありがとうございます…って！
シュタイン先生！？」

「あれっ？ぼくの名前を知ってたんですか？」

「え、ええ、そりゃシュタイン先生は有名ですから。

それよりマサムネさんはどうなったんですか？」

「あの二人は逃げて行きましたよ。そんなことより無明君君は言うことがあるんじゃない？あの二人に…」

そう言うときシュタインは剣と雪を見た。

「お父さん、お母さんごめんなさい」

無明はシュタインの言った言葉を理解すると両親に謝った。

二人はその無明の元気がかわかると、今までけわしかった顔が一瞬和らいだがまたすぐに険しくなった。

「すまなかった。お前を向かわせたばかりにこんなことになって

…本当にすまない。」

剣は深々と無明に頭を下げる。

「いいよ。父さんあれば私が言ったことだし…それに、過ぎたことは今さら言っても仕方ないよ！」

無明は笑って言った。

「その様子だと大丈夫そうだね。ぼくはそろそろ帰ります。邪魔だろうし、用事もあるし…」

「「シュタインさんこの度は無明のことありがとうございました。」

」

剣と雪はシュタインに頭を下げてお礼を言った。

「いえ、礼なんかいりませんよ。無明君に大きな傷を負わせてしまい本来ならこちらが頭を下げなければならぬのに…」

「それでもありがとうございました。お二方のおかげです。そういえばもう一人の方は…？」

雪はキョトンとしながらシュタインに訪ねた。

「スピリット先輩ならほかの任務が入り先に行きました。

…ぼくもそろそろ行きますよ」

シュタインはそういうと家をでようとしたとき

「シュタインさん！必ずぼくは強くなるよ。そしていつかシュタインさんの所に行きます！」

シュタインは無明の言葉を聞くとニッコリ微笑み家を出ていった。

「お父さん、お母さん」

無明に呼ばれ二人は振り向いた。

「ぼく、二度と心配させないように頑張るよ」

剣と雪はただ頷いた。

それから5年と少しの月日がたった。

無明はすすくと成長して13歳になった。

そして……………

「お父さん、お母さん！そろそろぼくは死武專に行つて来るよ。」

「「気をつけていつてらっしゃい」「」

無明は両親二人に見送られながら家をでた。

期待を裏切るものだZE (後書き)

次から原作に入ろうと思う…

確定では無いが…

どう原作に入るか迷うZE (前書き)

今回は書き方が違うから読むのややこしいかも…

原作とどう合わせようかな

疲れたー

どう原作に入るか迷うZE

「ここが死武専かぁ」

今、ぼくはかなりでっかい学校、死武専の前にいます。
えっ？

どうやって死武専にきたかって？

誰もそんなこと聞きたくないだろうし、書くのは省かせてもらう。
それはそうとぼくはやつとここまで来た。

転生してから13年長かったような…

いろいろあったな………

っと危ない。自分の世界に入ろうとしてたや。さっさと校長室に
って挨拶しているんなキャラに会いに行こうと。

ぼくは今校長先生、死神様と会ってます。

「……それで、君はこの学校に来るのが遅くなったんだね」

死神様は相変わらず原作と同じで、ゆったりした感じでしゃべって
きた。

「はい。ちょっと大怪我をしまして、一年間休養してたんですよ」

ぼくは本当は12歳と同時に死武専にくるはずだったんだけど、ち
よっとケガをしてしまって…
で今から転入する所です。

「まっ、仕方ないそれなら。じゃあ今日から入学だね。頑張ってー」
とくにどんなことがあったか聞かれることもなく普通にいけました。

「あっ！そういえば無明君。死武専は実習で悪人と魂をとってくるのは知ってるよね？この実習は本来なら実力にあった魂を取ってきてもらうんだけど、悪いんだけど君の実力がわからないから、もうすぐある補習を受けてくれるかな？」

まさかの補習！

いや、わかってるけど一応聞いておかないと

「なんで、補習なんですか？」

「その補習はいろんな意味を持つ補習で、ついでに実力も調べられるからだよ。」

「そうなんですか
わかりました。了解です。」

もちろん大丈夫だ。

いや、ここで無理とは言えないでしょ。

「じゃあ今度こそ、学校生活楽しんでね」

ぼくは校長室を後にし、クラスへ向かった。

今、ぼくはあるクラスの前にいる。

合図をしたら入ってこいと言われたんだが、合図が来ない。
ちなみに先生はデスサイズのスピリットさんだ。

臨時の先生らしいが：

デスサイズが教室に入ってから今でちょうど五分ぐらい。
待つのが疲れてきた。

そんなことを考えいると、

バコンッ！

と鈍い音がした。

これが合図なのかな？

と思い教室のドアを少し開けると、何故か床に倒れているスピリットさんと、血のついた分厚い参考書を持つてるツインテールの女の子。マカ＝アルバーンがいた。

マカはこっちを見るとあわてて分厚い参考書を隠しニコリと微笑んだが、ぼくは：ドアを閉めた。

「ちよっ、ちよっと待つてよ。」

「はい。何ですか？」

マンガでもみたが実際見てみると生々しい。

「さっきのはパパが悪いの！」

「へ、へえー。そうなんですか。」

「…信じて無いんだね。」

あれ？なんかオーラが出てない？これはぼくもやられるんじゃない？..
話を変えなければ！！

「だ、大丈夫信じてるよ！それよりぼく転校生だから自己紹介を早く終わらせたいんだけど...」

「あつ、そうだった。ごめんなさい。」

オーラは普通に帰り自分の席に戻っていった。

マカの第一印象は怖いと言えなかった。

ぼくは、教壇に立ち自己紹介をし始める。

「えーと、生まれは日本で香坂無明といいます。趣味は特に無いです。これからよろしくお願いします。あつ、あと武器です」

そこらへんのパチパチと拍手が聞こえてくる。周りを見ていたら視線を感じたので視線のほうを見てみると、現ブラックスターの武器椿がこちらを見ていた。

とりあえず会釈をしておいた。

すると突然教室のドアが開いた。

そこには

「誰だ！

俺様より拍手を受けてるやつは！俺様より目立つなんて許せん！！
皆俺に注目しろヒャッハー」

言っまでも無くブラックスターだ。

「ぼくは転校生の香坂無明っていいです。よろしくお願いします。」

「そうか。転校生か！よろしくな！俺様はブラック スターだ。ク
ラスの皆は俺のサインを持っている。だからお前にも俺のサインを
や「嘘は言わない。ブラック スター」ちっ、バラすなよ椿。」

椿がブラック スターとの会話集に入ってきた。

ぼく的にはサイン欲しかった…
と少し思ったり…

「…無明君。お久しぶりですね。」

「そうですね。椿さんあの日以来ですね」

なんか、なんか気まずいよ…

何年も会ってなかったらこんな気まずくなるんだな…
誰かこの空気を壊してくれ！

「ヒヤッハー 椿、知り合いなのか！俺様の偉大さを紹介し「少し、
黙ってブラック スター」お、おう…」

いつもと違う雰囲気と言われブラック スターはすぐに黙ってしまった。

ブラック スター！もうちょい頑張ってくれよ！！
気まずい！

また気まずくなった！

この後だいたい何言われるかわかってるんだよ！

「無明君。ちよつと場所を変えませんか？」

「わかった。」

いや、無理つて言えないよ。

ぼくは今、誰もいない複雑な廊下にいる。
この廊下は確かに迷う
半端ないもん。

「無明君」

「は、はい。」

「本当に申し訳ございませんでした。私の兄が無明君に……」

椿が頭を下げる

「…もう、いいんですよ。終わったことですし、」

「でも、兄のせいで大怪我を負い生死の境をさ迷ったと！本当にすみません！！」

「本当にもういいです。生きてるんだし、それにマサムネさんはぼくを強くしてくれた。」

「兄が…ですか？」

「ええ。強くしてくれた…それより椿さん。あなたはマサムネさんを」

killコーンカーンコーン

「……無明君。授業に遅れます。急ぎましょうか。」

無明は最後まで話せなかったが　とりあえずその場を後にした。

ここに来てから3日が立った。

椿はあの日のことは無かったかのように普通に接してくれる。

ブラック　スターとは相変わらず。

マカとはちよつと距離を…

怖いから…

ソウルはマカ繋がりでよく喋るようになった。

オックス君達とは…多分普通な感じ。

それはそうと今日はマカ達と椿達が魂を取りにいつている。

マカ達はあと魔女の魂一つでデスサイズになれるらしいが、その魔

女の魂を取るのに時間がかかってるらしい。今日で四回目のチャレンジだと、頑張ってるとは思っけどブレアって猫だし…
今までの努力水の泡になるな…

椿達は暗殺と言う名の売名に行っている。

まあ、頑張って

二組とも失敗するけど…

翌日

教室では、皆が皆騒いでいる。
わいわい

がやがや

『アンタ魂何個とった？』

『12個！アンタは』

皆それぞれ自分が取った魂の話してるなあー
魂0個のやつもいるのに…

マカ達が何か話してる。

あ、ソウルまた殴られてるわ。可哀想に…

ガラガラ

「あーだまれー
授業始めるぞ！」

ドアが開くとデスサイズが入ってきた。

周りがざわめく。

「出席はめんどくさいからとらん
あと初めに言っておく

授業の終わりを決めるのはチャイムじゃない…

この俺だ!!

」

皆それぞれかつこいいやら、言ってるが、言われてる本人デスサイズはずっとマカのほうを見ていた。

「オイ!!デスサイズ!!これからお前が担任になるのか?」

まあ、ソウルの質問のこたえは誰もが気になるだろうね。

「あ!?!俺は臨時だ

前くたばった先生の代わりが決まるまでのな
あとデスサイズ先生だら?」

「先生」つけるボケ!!」

…よくこんなんで教師になれたと思うよ。

「それじゃ出席をとりまあゝす」

「男子はとらねえーって言ったんだ
女の子様はとりますよおゝ」

「ふさげんなエロオヤジ!!」

「最低」

ソウル…

黙っていたほうが身のためたぞ…

「いちいちうるせえな…」

きゅっ

「では授業始めるよぉ」

「おい!! テメエー!! 今なんか書いたろ!!?」

「あゝそうそう

マカとソウルと無明。死神様がお呼びだ

授業はいいから行ってきなさい

しっしっ」

とりあえず追い出されたよ。ぼくは道わからないしマカ達について行きました。

もちろんマカが手の届く一歩後ろを歩いていった。

校長室

コンコン

「失礼しまーす」

マカはノックしてから入ってったけどあの長い道があるのにノックして聞こえるわけ無いんじゃないか？
と思ったのは秘密。

このギロチンみたいな鳥居怖いな
と思いながら歩いていると、

「…かわかるか無明？」

「えっ、なんて？」

「だからマカと話していたけど、何の用が無明はわかるか？」

これは言ってもいいかな？

「多分ほ「暗殺道其の一！！闇にまぎれ息を殺し目標のスキをうかかうべし！！暗殺道其の二！！目標と同調し目標の思考・行動を推測せよ！！暗殺道其の三！！目標が自分の存在に気付く前に相手を倒せ！！」しゅっ」

「あ ブラック スターだ何やってんの？」

「でっかい声出してよ。」

で、無明さっきなんて言っただんだ？」

「……なんでもないよ。」

久々にイラッと来たよ。

もしかしたら転生して初めてかも

「なんだよ

ブラック スター達も死神様に呼ばれたのか？」

「まあな

あれっ、無明も呼ばれてるのか？」

「一応呼ばれたよ。」

「とりあえず死神様呼ぼうぜ」

呼ぶよ

と言いま力が4 2 4 2 5 6 4と鏡に書いて電話をし初めた。

あれ、今度3 7 5 6 4でやって欲しいな…

トゥルルル

トゥルルル

ガチャ！

死神様が鏡に写ると皆姿勢を正した

「ハロハロ死神様？
鎌職人マカです」

「暗器職人ブラック スターだ」

これはほんとに言うべきか！

「えーと、無明です。」

「はいはい　ちっすっ！うすっ！ういっすっ！おつかれさーん」

これにどう答えるの？

皆それぞれ挨拶してるけど皆ノリいいなあ

ぼくは普通に挨拶しといた。

「君たちにちとつけてもらいたいもんがあつてね」

皆ポケーとしてるけど、この面子みて気づいて！自分で言ってる悲しい。

「補習」

「エエ！？「補習」っておバカがつけるあの「補習」？」

「やだよ！！最強の「デスサイズ」になる俺がつけるもんじゃねえ！！」

「君たち、職人と武器の義務は？」

「「99個の人間の魂」と

「1個の魔女の魂」を武器に食べさせ死神様の武器　デスサイ

ズ」を造ることです！」

さすがマカ。てきぱきと言ってるな―

「うん でも君たちが今日現在で集めた魂！無明君は仕方ないかもしれないけど

0個じゃん

でっ

補習の内容なんだけど…

もうウワサで聞いてたりする？

この前まで「死武専」の教師だったシド先生の話…

ゾンビ化して生徒を襲ってるって話をさ

生前はシブめのいい先生だったんだけどね

ゾンビになって『死の恐怖』から解放されて生徒に「自分と同じ経験させてやる」って言ってさあ

生徒を襲うはた迷惑で自己満足な授業を繰り広げちゃってるワケ
しかもシド先生をゾンビ化させた何者かが裏で手をひいてるのは確かだね」

その何者かの裏でさらに手をひいてるのは死神様ですよね…
いや、言わないけどもツツコミたかった。

「OK！まかせろよダンナ

ようするにそいつらの魂をとってくりゃいいんだな」

「はい

そゆこと

別におどすわけじゃないけど…

もしこの補習を落とすようなコトがあったら………
みんな仲良く

退学ね

『『『エエ!!?』『』』

ほんじゃまあ

応援なんかしちゃったりするんでガンバッチに

あと無明君アレは言っちゃ駄目だよ」

「了解です。」

アレとは今回の補習のコト。一応ぼくには全部知らせてくれた。

それはそつと補習と言つ名の力試し頑張りますか!!

どう原作に入るか迷うZE (後書き)

矛盾や、普通そんなおかしいやろ！

みたいなところもありますが…？

そんなんしらん、()ノ

次の更新は？

そんなんしらん、()ノ

口調おかしくない？

そんなんしらん、()ノ

次はどんな話？

そんなんしらん、()ノ

台本書きやん？

そんなんしらん、()ノ

主人公の口調時々変わるやん？

そんなんしらん、()ノ

これはゾンビだZ E (前書き)

主人公の性格と口調忘れてるから何かいろいろおかしいね。
,

あ、そういや10000PVだっけ？

突破してましたww

自分で言うのもおかしいけど、これほとんど台本書きで日記みたいなもんで趣味の塊やからそんなに10000PV行くと思わなかった。
, - -) www

これからもよろしく、(*´`)(ノ

これはゾンビだZ E

鉤爪墓地

ぼくは今、墓場に来ています。何かドラキュラとか出てきそうな雰囲気です。

しばらく歩くとシド先生のお墓に着きました。

「なあ、椿…

これがシドの墓か？こんなところにまだいんのかよ？奴は動き回ってんだぜ」

「エエ…

でもとりあえずお墓かなあゝって」

椿とブラック スターは冷静なんだけどマカ達はちよつと壊れてる。いつもの二人じゃないような…

仕方ないけど…

墓場の空気が変わった。

いち早く気づいたのはマカ。足元のほうが気になり見てみると、

ボゴッ

という音とともに地中から腕が出てきた。

その腕はマカの足首を掴むと同時に男が地中からでてくる。

「マカ!!」

ソウルは叫ぶがマカを掴んでいるその男は一切気にも止めず、近くにあった木切れを掴むとマカに刺そうとした。

「オオオ!!」

ソウルは走りながら自分を鎌に変形させ男に突撃した。

男は自分に向かってくる鎌に気付くとマカを離し避けた。

鎌はマカの前に落ちる。

「ありがとう

助かった!」

「おう!!」

マカは突然のことと外見が少し変わっていたので気づかなかったが、あらためて見るとシド先生だということに気づいた。

「マカ。ソウル。ブラック スター。椿。そして転校生。おはよう

こんにちは

くんばんは

お久しぶりDEATH

そしてはじめまして。」

シド先生は言いながら自分の墓を引き抜く。

「なんで?シド先生!?!」

「ゾンビは色んなことがどうでもよくなる
授業を始めるぞ

俺はチャイム通り授業を開始する男だった」

その言葉を聞くと三組は身構えた。

「いいだろう！！久しぶりに見せてやる。俺様の神がかった授業態度をな！！」

「こっちは退学がかかってんだ！！

うけてやるよ！！

テメエーの腐りかけで賞味期限切れの授業を！！」

「二人とも…一応アレ元先生…」

無明は一人呟くが誰も聞かない。

「無駄な努力はやめろ

どうせいつか死ぬんだ

ゾンビになれば「死」へのプレッシャーが無くなる
恐怖から逃れられるんだぞ」

「そんなの間違ってる！！先生はそんなコト言う人じゃなかった！
！」

「聞くより習え！！

とりあえず死ね！」

シド先生は喋りながらマカ達との距離を詰め、持っていた墓を振

りかぶった。

「バカ野郎!!」

何ボケツとしてんだよ!!」

振り降ろされる墓をただ見ていたマカがソウルに言われて反応するが遅い。

墓がマカに当たろうとした時、マカを庇うためブラック スターと無明はマカの前に立ちブラック スターは鎖がまで無明は右手の変形した鍵で防御するが、

「俺は結構せつかち!!」

そんなおどすわけじゃだったああああ!!」

シド先生は足と腰に力を入れるとマカを含め防御していた二人を二、三メートルほど吹っ飛ばした。

吹っ飛ばされた三人はそれぞれ威力を殺し着地をする。

「ゴメン

ブラック スター、無明」

「お前、小物

俺、大物

気にすんな」

「あんまりボケツとしないで下さい」

「killコーン

コーンコーン

さあて二時限目を始めよう
この時限が終わるときお前らも死ね」

無明 side

ぼくは今、傍観してまします。

ブラック スター達二人の攻撃をシド先生はお墓一つで受けてます。
もうあれ人間じゃないような…
いや、ゾンビだけでも…

あつ、マカが吹っ飛ばされた。

あつ、今度はブラック スターがお墓でぶん殴られた。

えっ？

なんでぼくは闘いに行かないのかだって？

いや、色んな意味で怖いし…

色んな意味で……

うわっ、痛そー

シド先生思いつきり鳩尾蹴られたてる。

それやのに、よくブラック スターの追撃よけるな

しかも避けてマカに攻撃してるし、
避けられてるが…

あつ、いよいよ終盤だね。
マカが魔女が…って

「危なっ！」

マカ達とは離れてたのにこっちまで魔女狩り飛んできた！！

で、結局魔女狩り使わんと。

シド先生が土に潜ったよ

こっちに来たら怖いけど、こっちに気づいて無いのかしらんだけど、シド先生来ないや…

出てきたと思ったらマカきりつけてまた土の中に潜ってた。あれがぼくだったら多分キレテルヨ…

つと、危ない、危ない

気抜いたらコレだもんない

本当に困るよ…

ブラック スターが構えた。

これでやっとシュタイン先生のところにいけるかな？

えっ！！

シド先生、ブラック スターの罠を抜け出した！？

それで、また土中に潜ってるし、モグラか！！
あっ、出てきた。

マカ後ろー
って！

気づいて無い！！

ブラック スターも気づいてない！

危ない！！

ぼくはその場を後に全力で駆け出した。

無明 side out

「これで終わりだあ！！」

シド先生は土中からマカの背後に出てくると同時にマカに持っている木切れを刺そうとする。

「えっ……？」

マカはシド先生の声に気付くが後ろを見ると自分を刺そうとしているシド先生の手が…

ソウルでガードしようにも、恐らく間に合わない。

マカが死を覚悟した時、

バキン！！

マカの目の前に大きな鍵が飛び出てきた。

その鍵にシド先生が放った木切れは弾かれた。

シド先生が少し距離を取る

「転校生。お前は後からゆっくり死んでもらおうと思ってたのにな」

「それはちょっと困りますね…」

無明はシド先生の言葉に軽く答えた。

「まあ、いい

お前から先に欠点をつけてやる！！
死ねエエエ！！」

そう言うと、シド先生はどこからか木切れを出し両手に持つと無明を刺そうと突進してきた。

「欠点も死ぬのもお断りします。

『第一解除』

『範囲を指定』

『時間を指定』

『距離を指定』

シド先生！！！！

これで少し落ちついて下さいね

『LOCK』

┐

無明は空中に鍵になつてゐるほうの手をつきさす。
すると、

ガキン！

と言う音が鳴ると壊れたオルゴール人形のようにシド先生はその場に崩れ落ちた。

マカside

急にいなくなつて逃げ出したと思つてた。
私が魔女狩りを出して失敗した時にブラック スター以外の声も聞こえたからいるってことだけはわかったけど、私達と一緒に戦わないから弱虫と思つてた…

でも、私達が苦戦したシド先生を一瞬で捕まえた。

無明は一体何を考えてるんだろ…

それにしても、無明に対して心の奥底に何か引つ掛かるものがある。なんというか、上手く言えないけど、こっ黒いモヤみたいのが…

「マカさん。ブラック スター。動きハ止めてルので今のうちにシド先生を縛って下さい」

呼ばれたから行かなきゃ。

この黒いモヤはまた考えとこ

マカ side out

「マカさん。ブラック スター。動きハ止めてルので今のうちにシド先生を縛って下さい」

無明は二人に言う。

「無明！！俺様より目立つんじ」退学がかかってるんですよ！！早く縛りましょう」お、おう」

微動だにしないシド先生を椿は自分の髪を鎖がまにして巻き付け動きを封じる。

無明はシド先生が動けないようになったとわかると、空中にさしていた鍵を引き抜く。

するとシド先生はある程度動き始めるようになった。

「やっと喋れるようになった…」

それにしてもさっきのはなんだったんだ？」

「ただ、動きを止めただけですよ…」

それより誰がシド先生をゾンビにしたか言ってもらえませんか？」

無明は優しく丁寧にシド先生に尋ねる。

「俺は口の固い男だった！！」

それは死んでもゆずれねエ！！」

「そうですか。」

言えないんですか

ばくじゃシド先生の口を割ることが出来そうに無いので、後は皆で頑張ってください。

ぼくは少し休みます」

「おうわかった

後は任せとけ！！」

ソウルがそういうと無明はどこか人気の無いところに行った。

無明 side

しばらくし休憩して、無明はシド先生のところに戻ると、わかつてはいたが、

頭から出血している男三人。凶器と思われる血のついた分厚い本を持って立ってる無表情のマカ
そしてなにもしていない椿。

「マ、マカさん？」

何でこんな状況になってるんですか？？」

念のために聞いて見ると、

「無明、シド先生をゾンビにした犯人がわかった。」

それだけしか言われませんでした。

今から、皆でシド先生をゾンビにした犯人、『シュタイン博士』の
ところへ行ってきます。

久しぶりに会えるので楽しみです。

言うまでも無いかもしれないが、マカから最低でも三メートル開けて歩きます

side out

これはゾンビだZ E (後書き)

えっ？

原作と少し違う？

(。 - -) 〇 原作通り書いてたら話がくそ長くなるしいろいろ飛ばさせてもらってますww

えっ？

主人公の能力厨二？

(。 - -) 〇 否定はしない！ちなみに鍵といえば、ボボボーボボーボボ 合ってる？
の中に出てくるドンパッチの部下みたいなやつ有能力しか思いつかなかったので若干パクったww

えっ？

台本書き？

(。 - -) 〇 ……

えっ？

恋愛はある？

(。 - -) 〇 ねえよww

えっ？

背景描写が足りない？

(。 - -) 〇 気を付けます…

えっ？

戦闘描写が薄い？

(。 - -) 〇 自分でもわかってるorz

誰かいい描写の上手い小説教えて、参考にするかもしれないから…

えっ？

次の更新いつ？

（。 - - （ っ知らねえよww

これは何ですか？これはシュタイン博士だZ E 前編（前書き）

遅くなりましたね

いろいろ忙しくて…

春休みの宿題とか

春休みの宿題とか

春休みの宿題とかで…

この話多分二時間ぐらいで急ピッチで書いたからいろいろ抜けてるし、話も薄いし、ページも薄い（*、*）

それでもよければ見てください（*、*）

これは何ですか？これはシュタイン博士だZ E 前編

マカ、ブラック スター、無明の三組は目的地に到着し、今つぎは
ぎの研究所の前にいる。

「ここにシュタインがいるんだな」

「さつさと魂取って補習終わらせようぜ」

辺りは暗くマカ達以外誰もいなくて静かだ。

チュー

チュー

何か音かしたので音の方向を見ると一匹のネズミ…
もちろんつぎはぎ

「一体シュタイン博士ってどんなやつなんだろう？」

「マカさん、多分、ってか絶対に怖い人ですよ…」

「無明は会ったことあるの？」

「会ったことあるって言えばあるけど…」

シュタイン博士のことは知ってるって言えば正しいかな？」

「へえ…！？」

二人が話していると研究所のドアが勝手に開く

そのドアの奥から何か音が聞こえて来たので三組は身構えた。

ガラ

ガラ

ガラ

カッン！！

「「「！！」」」

「ぎゃふん」

シュタイン博士がイスに乗りながらドアの奥から出てきたが、ドアの手前でイスが何かに引っ掛かりシュタイン博士はイスと一緒に倒れた。

「……………」

マカとソウルは呆れてるのか拍子抜けしたのか無言だ。

「クソ！！」

まだ調子悪いな…」

じいこ

じいこ

シュタイン博士は自分の頭についているネジを巻き、

「OK

もう一回やらせてくれ」

といい再度よくわからないイスの挑戦をした。

「で、何かようですか？」

「お前がシュタインだな？
お前の魂食いにきた」

「いやいやソウル
これ補習だから
けして捕食じゃないから」

「君たち死武専生ですね？」

「あんだでしょ！
死武専生を襲ってるのは！！
何か恨みでもあるの！？」

「別に」

動機はいたってシンプル
`観察` `研究`
ただそれだけです

`探求心`
そいつが俺の原動力だよ
この世の全てが研究材料
もちろん俺自身もね」

シュタイン博士が言い終わると同時にマカは異変を感じた。

「ねえーソウル
何か変な感じしない？」

「そうか？」

「君たちの魂の波長は随分と安定してないね（ヘラヘラ）」

「真面目でがんばり屋とひねくれもので皮肉屋
共鳴しているようでしてない」

「（どこかでみたような顔だな…）
君、パートナーは？」

マ力達はぐちぐち言うが無視してシュタインは無明に尋ねる。

「……ぼくは一人です」

「一人！？これはまた珍しい
それにしても君の魂は鎖で絡まっていて性質が全く見えないな…
まるで……「ソウルプロテクトはしてませんよ。これは自分の力で
やってるんです」

……博識だね君は。どこでそんなことを知ったんだい？」

「いろいろありまして……」

シュタイン博士と無明が喋っていると、

「ああ…ああ…

うるせえー

ひゃっはー

凡人どもの目立たねえー会話は終わりだ！これからは俺中心の前衛
的な会話になるだろうー！！」

先程からブラック スターの姿が見えなかったのは一人目立つ為に
研究所の屋上に登っていた。

「はっははは

君は凄いなあ」

ものすごく自己主張の激しい魂ですね」

ブラック スターは屋上から飛び降りて地面に着いた瞬間、地面を蹴りシュタイン博士に蹴りかかった。

「ひやはっ
」

「君のような魂に合うパートナーは中々いないんじゃないか？」

シュタイン博士はブラック スターが自分に向けて放ってきた蹴りを見ずに片手で防ぎブラック スターを弾き、そしてブラック スターの顔面目掛けて蹴りを放った。

「ああ、なるほど君が彼のパートナーか
君が彼の魂の波長に合わしてるんだね。」

さうて面白いメンバーだ
実験を始めましょうか？」

「はあ！
」

「オラッ！
」

マカやブラック スターはシュタイン博士に向かってそれぞれ攻撃をするが全て避けられふざけながら反撃をされる。

その頃無明は戦闘体制になってるものの一人シュタイン博士を見て
いるだけだった。

「おい、無明！お前も手伝え！！」

ソウルが叫ぶ。

「手伝うってどうしたらいいの？（一人で戦いたかったんだけど…）」

「なんでもいい！！援護しろ…ゴフッ！！」

ソウルが喋っていたらシュタイン博士の掌底をくらった。

ただの掌底じゃなく魂の波長がついた掌底によってソウルはけして浅くないダメージをおう。

「隙あり！お前だけが魂の波長を打ち込めると思うなよ！！」

ブラック スターはシュタイン博士の隙をみつけ博士の背後から自分の魂の波長を打ち込んだ。

「無駄だ。」

シュタイン博士はまとも

に魂の波長を撃ち込まれたが無傷だった。

そして驚きを隠せないブラック スターに向かって自分の魂の波長を撃ち込み気絶させる

「はい。これで一組終了ー

次はどっちが来る？

それとも両方かい？」

「ソウル！！マカさんはいけそう？」

尋常なくシュタイン博士に向かい怯えているマカのことを心配して
無明はソウルに尋ねるが、

「多分無理だ！

……俺がマカをどうにかするからその間頼む！」

「わかった。」

そういうと無明はシュタイン博士の真正面に立つ。

「今度の相手は君ですか？ヘラヘラ」

「ええ。相手というかぼくは時間稼ぎですけどね」

「へえー

どこまで時間稼ぎ出来るかな！！」

シュタインがそう言うと同時に無明に向かって走り出す。

無明は片手を鍵に変化させずに構える。

「どうした。武器にならないのか！？」

シュタイン博士は無明に向かって左足を軸にして右足で蹴る

「……覚えてないんですね」

無明はシュタイン博士が放った蹴りをしゃがんで避けようとするが

「何をだ！」

シュタイン博士の右足の蹴りは上空で軌道をかえそのまま無明に向かって踵落としをする。

無明はこれを避けられなかったのかそのまま頭に踵落としをくらった

「……数年前に博士、ぼくを助けてくれたんですよ」

よつにみえたが無明は両手をクロスさせシュタイン博士の踵落としを受け止めた

シュタイン博士は受け止められた足をひき即座に無明と距離をとる。

「数年前助けた……」

まさかあの無明君ですか！！」

「ええ、そうです」

シュタインが距離をとると無明は立ち上がった。

「まさか、あのときの子どもが無明君だったとは気づきませんでしたよ」

「あんまり変わってないんですけどね」

「いや」

こんなことになるとは
解体したくなる」

「何故に！！」

無明がツッコミをいれると同時に再びシュタイン博士は無明に向か

つてきた。

これは何ですか？これはシュタイン博士だZ E 前編（後書き）

えっ？

テンポが良すぎるって？

（。 - - ）ハ急いでたもんでついテンポよく書いてしまった…

えっ？

背景描写薄いつて？

（。 - - ）ハハ

えっ？

ほとんど原作と同じって？

（。 - - ）ハ原作をずらすと修正が難しいからどうしても原作通りに書いてしまうんです
はい。

えっ？

次の更新いつって？

（。 - - ）ハ今日か明日

これは何ですか？これはシュタイン博士だZ E 後編（前書き）

頑張りましたよ…

言って内容は薄いですけどね…

急ピッチで3、4時間かかりました。

疲れた…

飛ばすのも見るのもどちらでも…

（

これは何ですか？これはシュタイン博士だZ E 後編

「ほらほら」

シュタイン博士は無明に乱打を撃ち込む。

「撲殺より魂の波長を撃ち込まれるほうがまだましかも……」

そのシュタイン博士の乱打を無明は両手を使い弾きながら喋る。

「余裕ですね」

これならどうですか？」

シュタイン博士は急にしゃがむと無明の足を左手で持ちバランスを崩して無明が倒れると即座に空いてる右手で無明に向かって魂の波長を撃ち込む。

「つつつ！！」

無明は自分に魂の波長を撃ち込まれ少し悶えたが、

「あんまり、図に乗らないでください！！」

そう言うシュタイン博士の右手を引っ張り無明は魂の波長を撃ち込んだ。

シュタイン博士はよろけながら後ろに下がる。

「グハッ！！」

……………何！？

武器が魂の波長を撃ち込んだだと？」

「…ぼくはちょっと特別なんですよ」

「…へえー」

なおさら君を解体したくなってきた!」

再びシュタイン博士と無明の勝負が始まった

シュタイン博士が攻撃すると無明は避け反撃するがシュタイン博士はそれを避ける。

シュタイン博士が魂の波長を撃ち込むと、無明も反撃して魂の波長を撃ち込む。

その攻防が数分間続いた。

「ハア…ハア…」

楽しいですね〜

ああ、解剖したい」

「ハア…、お断りします。」

二人は距離をとりお互いに肩で息をしていた。

「ふう…」

では続きをやりますか!」?

「それは無理ですよ」

「どうしてだ?」

「私（俺）たちがお前を倒すからだ!」

声の発信源はマカとソウル。
先程までとは違い、マカは元気に満ち溢れていた。

「無明君との勝負で君たちを忘れてましたよ…（ヘラヘラ）」

「言っただでしょ、先生。ぼくは『時間稼ぎ』だって…」

マカさんソウル行きますよ！」

「二人ともこい！！」

お前らの魂を見せてみる！！」

「よし！『魂の共鳴』」

マカはソウルと魂の共鳴をして魔女狩りを出した。
シド先生との戦いするときより共鳴率が安定している。

「行くぞ！『魔女狩り』」

はああああ！！」

マカは魔女狩りをシュタイン博士にする。
がシュタイン博士は魔女狩りを受け止め徐々に押し返していく。

「魔女狩りをうてるとは驚いたがまだまだ甘い…」

「先生。ぼくのことを忘れてませんか？」

……しまった！！」

シュタイン博士は無明に気付きマカの魔女狩りを一気に押し返し無明に対処しようとするが、先程の無明との戦いで体力を消費したために出来なかった。

「もう遅い！」

『第一解除』

『人物を指定』

『威力を指定』

『距離は零』

┐

無明は片手を鍵に変えるとシド先生の場合は空中に鍵をさしたが今回はシュタイン博士に直接突き刺す。

すると今まで動いていたシュタイン博士が完全に静止をする

「マカさん、今デす。長く八持たない」

「ハアアアアアア！！」

今まで受け止められていた魔女狩りをいったん引くともう一度振りかぶりシュタイン博士に向かって落とす。

「これで終わりだあああ！」

パライイイイン！！

かん高い音が鳴る。

その音はマカの魔女狩りが碎ける音だった。

「えっ!？」

マカは信じられない様子でその場に崩れこんだ。

そして

「おや? やつと動けるようになりました。」

完全に静止していたシュタイン博士が動き出した。

「さて、完全に戦意喪失しているね。」

「ハア…ハア…ハア」

「君の魔女狩りはまだ未熟だったと言うことさ
そう言つとシュタイン博士はマカに手を伸ばす。

すると、

「俺の職人に手出しはさせねエー!!」

今まで鎌たったソウルが人間に戻りマカにおおい被さりシュタイン博士の手をマカに当たらないようにした。

「それでは君から…」

シュタイン博士はソウルに手を伸ばし頭に手を乗せると

「合格点をあげましょう
補習授業おしまいで〜す」

「へっ？」

「いや〜」

中々でしたよ

君たちの補習」

「補習？でもブラック スター殺したじゃん…」

「ひやははは

面白いこと言うなあお前」

「生きてる…」

もしやシド先生も…」

「ええ、シド先生にも手伝って貰いました。」

「ふざけんな！！」

何だこのクソ話は！！

全部どつきりかよ！！」

マカとソウルは驚きを隠せないようだ。

「それはそうと無明君」

シュタイン博士は微妙な笑顔を無明に向ける。

「な、何ですか？」

その不気味な笑顔に若干引きながら無明は答える。

「ソウル君達の魔女狩りが未熟じゃなければ、俺殺られてたんだけど…」

君とはじっくり話をしなければならないね」
満面の笑みを浮かべ無明に言う。

「…いや、ちょっと熱くなりすぎて……

すみませんでした!!」

無明はその場で即座に謝る。

「まあ、前より強くなってるって言ったことがわかったから、今回は許してあげましょう

お話はしますけどね

聞きたいことが沢山ありますし」

「ほんとですか!?!」

「ええ、解剖させてくれたらですけど」

「それはイヤです!!」

こうして無明達の長い夜は終わった。

翌日、学校に行くと新しい担任が決まった。

言っまでもなくシュタイン博士だった。

これは何ですか？これはシュタイン博士だZ E 後編（後書き）

えっ？

原作のキ（ry？

（。 - - ）（書くのが（ry

えっ？

内容が薄い？

（。 - - ）（

えっ？

ブラック スター空気？

（。 - - ）（そうだったね

えっ？

口調が（ry

（。 - - ）（（ry

えっ？

背景描写が（ry

（。 - - ）（そうだね

えっ？

戦闘描写が（ry？

（。 - - ）（（ry

えっ？

次の更新はいつ？

（。 - - ）（わからねー

えっ？

毎回だれがこんな質問してるかって？

（。 - - ） っ……一人ごとさー

質問は受け付けない！

質問したいやつは作者にいい案を出してから発言するよつにww

死神様だZE (前書き)

あー寝みい

とにかく寝みい(。・`・´)

ぶっちゃけ平日に更新する気なかったんだけど「更新楽しみです！」や「早く更新しようZE 俺の小説より人気無いカスみたいなお小説やけど更新だけはしようか、(*´・`・´)ノ リア友」って言われたから更新しようと思いました(´・`・´)

今回の話はキッドの話です。

頑張ったけど終わらなかったよ…

飛ばすのもよし、見るのもよし…

死神様だZE

k i i i コーン

カーンコーン

あー、寒いし眠い

どうも、こんにちは

無明です

あの補習がおわり数日が立ちました。

補習という名の実技が終わりゆったりした毎日を過ごしていたんですけど、今朝ブラック スターに引きずられながら寝ているソウルがいたので、今度は何をするのかと聞いて見たら

「おつ、良いところに無明もいるじゃねえか！！お前も一緒にこい
」！

と言われて無理矢理、死武専の正面玄関前に連れてこられました。

ここまで来たら理解は出来たよ

死神様の息子キッドだね。

あんまり会いたくないんだけどな…

だって…

会ってすぐに戦闘だし…

それにこの頃のキッド手加減しないから怖いんだよね。

それなのに、

「今日オ!!」

俺はア!!

暗殺しなければならぬ奴がいる!!」

この通りやる気満々です

ブラック スターに連れてこられてもう三時間なのに全くキッドが来ないんだよね。

ブラック スターは相変わらずテンション高いけど、ぼくとソウルはテンション半端なく低い。
っていうかソウル寝てる…

ブラック スターを説得し、ソウルを起こして教室に帰ろうかな? と思つたら

キッドがやつと来ました

ソウルがキッド達といろいろ話してる間にいつの間にか消えたブラック スターをさがしていると、

「ひゃっはあゝ」

もう手遅れだったよ…

死武専の校門にあるオブジェの角の上に立ってたよ。

もう結果が見えてるからキッド達やソウルとかにばれないようにソロロと帰ろうとしたら

「ねえ、どこにいくの?」

パティに見つかりました

「いや、ちょっと…」

ボキッ

答えようと思ったなら今一番聞きたくない音が聞こえてきた

なにもかも手遅れだったよ…

ぼくが一人落ち込んでいると

「売られた喧嘩は買うぜ！！

行くぞ！！

ソウル、無明！」

「一応聞くけど、ぼくも？」

「勿論だぜ！

俺たち三人なら絶対勝てる！

行くぞ！！」

ブラック スターよ

一言だけ言わせてくれ…

その自信はどっから湧いてくるんだ…

パンッ！！

パンッ！！

死神様の息子、キッドはひたすら銃を乱射する。

ひたすら銃を乱射しているせいでキッドには近付くことが出来ず、ブラック スターはひたすら体さばきで避け、ソウルはしゃがみ、無明は突っ立ってるだけ。

なぜ突っ立ってるだけかと言うと、あんまり玉が飛んで来ないからで、10発中8発はブラック スターに玉が飛んで行くからだ。よほどブラック スターにイラついてることがわかる。

「ソウルとぼくはあんまり撃たれないから大丈夫だけどブラック スター大変だなあ〜」

と無明が思ってたられるのもつかの間、キッドは脚に力を入れると大きく飛躍し、ブラック スター、ソウル、無明の間に入ってきた。

キッドは入ってくると同時に蹴りを放つ。

勿論相手はブラック スターだ。

ブラック スターはキッドの蹴りを後退しながら両手でガードをして蹴りのダメージを最低限に抑える。

蹴りを放つとキッドはしゃがみまるで後ろに目がついてるかのよう
にソウルの片手を鎌に変化させた攻撃を自分の銃で片手でガードをし、即座にもう一方の手でソウルの腹に銃口を向けると、躊躇いもなく撃つ

「大丈夫！？ソウル？」

「うお〜」

くそ〜

まじいてェ〜」

かなり大丈夫なようだ。

実弾ではなく魂の波長だかららしいが…

「ブラック スター達も頑張ってるし

さて、ぼくもそろそろ真面目にやろうか」

【視点変更】

「博士、あの子は？」

聞いたのはマカ

「あれは死神様の息子のデス・ザ・キッド君

本校に入学することになったけどやっぱり頭ひとつ抜けてるな…

それはそつとマカさん」

「はい？」

「特別授業です」

「えつと私があの中に入るのはいやですよ？」

マカの方には無明達三人がキッドと殺し合い見たいなケンカをしている。

「いえ、そうじゃなくて魂が見えるようになったんだからキッド君達の魂を見てもらいます。」

「あつ、はい。わかりました」

マカは神経を集中させるとキッドを見る。

「見事に波長が合ってますね。お互い尊敬……いや、憧れですか？」

「大正解です。見事なパートナーですね」

「はい

それに比べてソウルとブラック スターは全く魂の波長が合ってない……！！

博士！無明の魂が何か変ですよ！！

普通の人とは違ってチェーン見たいなのが巻き付いてます！！」

マカは初めてみる魂に驚きが隠せないように興奮や得体の知れないものの恐怖が混じっていた。

「……無明君に聞いたんですが、あれは自分でやっているらしいです」

「なんで自分の魂にそんなこと！？それじゃ本来の力が発揮出来ないじゃないですか！？」

マカは不思議に思いながら博士の方を見る

「それは、マカさん

貴方が知るにはまだ早い……………

おや、決着が着いたようですね。」

「えっ？」

マカがブラック スター達のほうを見てみると、ブラック スターとソウルは倒れてのびていた。
キッドと無明の二人はまだ立っている。

「ソウルやっぱり負けてる…」

「ソウル君達ではやっぱりキッド君には勝てませんでしたか（ヘラヘラ）」

「補習の時に気づいてたけど、ソウル達は倒れてるのに無明はまだ立っているって凄いなあ」

マカはキッドと無明の方を見て言う。

「……死神様の息子が君たちより頭一つ抜けてるなら、無明君は恐らくその死神様の息子を頭五つは抜けているでしょうね（ボソッ）」

「えっ？何か言いました博士？」

「何でもないですよ。
ただの独り言です」

博士は知らず知らずのうちに呟いていたらしいがマカには聞こえてなかったようだ

「何か向こうでしゃべってるようですね。何を言ってるのかは聞こえませ……！！？」

無明君！！それは……！！」

マカは急に大声を上げた博士にびっくりして博士が見ている方向、無明を見てみた。

「何を博士は驚いてるんだろ？

ッ！？

またあの黒いモヤ見たいな感じがする！？

…あれ？ずっと無明のほうを見てたのにいつの間にか消えてる！」

ボコッッッッ！！

「あ、死神様のご子息が！！」

音のほうを見てみると、今までキッドがいたであろう場所に拳を振り上げてる無明が…

そしてキッドは三メートルほど斜め上空に吹っ飛ばされ、地面に落ち二、三回バウンドするとキッドは動かなくなった。

「無明君やり過ぎです！！」

シュタイン博士は急いでその場を離れキッド達のほうへ向かいその後ろをマカと椿がついていった。

【視点変更終了】

死神様だZE (後書き)

別視点が長かったねww

次は元通りになるけど、戦闘描写苦手なんだよなあゝ
もう

ドカーン

「ギャー」

って感じにしたいw

今もたいして変わらんがwww

あと主人公の職人つけようか迷い中ー

(。・。・)try

そろそろ主人公の力を見せようZE (前書き)

なんとなく更新する気分だったので更新したがなんだか後悔してる…
あと眠い…

学校から帰ってきて寝るまで書いてるからねー
勉強全く出来ないさー

今回でキッド編は終わりです (T T)

見るのもよし飛ばすのもよし

そろそろ主人公の力を見せようZ E

マカ達が駆け寄る少し前

パン！！

パン！！

キッドの銃声が聞こえる。

「当たらないよ！」

無明はキッドが撃つ銃弾を避け徐々にキッドに近づいて行きキッドの正面までくると自分の右手を鍵に変えキッド目掛けて横にふる。キッドはその無明の攻撃を片方の銃でガードをするが無明の一撃はキッドの想像を越える威力があり押しきれそうになるももう片方の銃、両手でガードをする。そのおかげで大まかに態勢を崩しはしなかったが少しよろめく。

無明はそのよろめいたキッドに自分が力を込めて横にふった力を利用して右足でキッドの頭後頭部を蹴りながら右手をもとに戻す。

普通の人間であれば後頭部をものすごい力を込めて蹴られれば意識は飛ぶかも知れないが、キッドは意識を飛ばさずに両足に力を込めて態勢を立て直した。

無明はキッドがこうなることを予測してたかのようにキッドが態勢を立て直すと、時間もあけずに左手でキッドを殴りそして殴ると同時に魂の波長を入れる。

「ツツツ！！」

さらにキッドを蹴ったときに元に戻しておいた右手でキッドの服を掴み自分のほうによせると再び左手で殴る。

「ガハッ!」

無明との距離が空く

キッドは少し吐血はしたがまだまだいけるといふ顔つきだ。

「ハアハアハア」

お前はそこの二人とは少し違うようだな」

「まあ、とりあえずバカでは無いかな？」

「誰がバカだと無m「あつ銃弾が」グハッ!」

ブラック スターが突然会話に入ってきたと思いきやブラック スターの頭に銃弾が当たる。

「だからブラック スター忠告したのに!」

「言うのがおせえよ!」

「...そんなことより勝つんじゃないの?」

「そうだぜ!

俺たちは勝つ!

俺らも行くぞソウル!」

「おう!

友情合体！」

ソウルはジャンプをしどこかにありそうな戦隊もののセリフをはくと自分の全身を鎌にしてブラック スターにキャッチされる予定だったのだが、

サクッ

とても気持ちの良い音がするとブラック スターにキャッチされるはずの鎌は^{ソウル}ブラック スターの頭に刺さっていた。

「NOー!!」

ブラック スターの頭から大量に血が出る。

ブラック スターが鎌を持とうとすると重くて持てなかったらしく力をいれ持とうとすると踏ん張り過ぎたのかブラック スターは間違っ^{ソウル}て鎌に魂の波長を打ち込む

無明はもちろんのことキッド達も啞然としながら二人の行動を見ている。

しばらくすると、

「俺たち終わりだな…
別れよう…」

「どういつことだよソウル …」

「このまま近くにいたら俺、お前のこと嫌いになりそうだよ …」

「そつか…、俺たち別れても友達だよな…?」

「バツキヤーロー!!」

あつたり前じゃねえーかよう!!」

「ソウルウ!!」

と友情劇場が始まった。

「死神様…アレ撃つてくれ」

無明はその二人にあきれ返り死神様に頼む。

「いいのか?」

「大丈夫。

キツチリ頭を狙って

もしかしたら頭が良くなるかもしれないから」

キッドは無明の気迫に押され二人の頭に標準を定めると撃った。

「「ばるさ!!」」

二人の頭に銃弾が当たるとわけわからん言葉を発しながら二人は倒れる

無明は二人に駆け寄る。

「二人とも!さっさと行くよ!」

無明が若干怒りながら二人に言う。

ブラック スターとソウルは思い出したかのように

「一度受けたケンカだ！！
行くぜ！！」

「おう！
勝つまでおりられねえ！！」

「来い
次で終わらせてやる」

この場に再び真面目な空気が流れる。

「ウオオオオ！！」

ソウルは右手を鎌に変えキッドに真正面から突撃をし、ブラックスターは空中から、無明はソウルの後ろについて行く。

「デメエーにも波長を撃ち込んでやる！！」

一番初めに攻撃したのはブラックスター。
ブラックスターは波長を撃ち込もうと右手をキッドに向け空中から殴ろうとするがキッドはその手を掴むとブラックスターの空中から落ちてくる勢いを使い一本背負いをする
キッドはブラックスターを投げてから次の相手をソウルに絞りこむ。

ソウルはキッドがブラックスターを投げてスキが出てるときに鎌（右手）を振るう。
キッドがそれをガードするとすかさずブラックスターは背後から蹴りを放つがキッドは両手を交差させ二人に向かって撃つ。

二人は撃たれて倒れる。

「蹴りはフェイントだよ！！」

ブラック スターは蹴り放ったときに自分のベルトをキッドの足に巻き付けそれを引っ張りキッドをこかす。

「ソウル！」

無明はソウルを大声で呼ぶ。

ソウルは意味を理解したのか自分の全身を鎌に変化させる
無明はそのソウルを持ちあげるとキッド目掛けて投げる。

「うおりゃあああ！！」

鎌は回転しながらキッドに攻撃をしようとするがキッドはそれを紙
一重で避けるが、

「そんなに寝てていいの？」

無明はソウルを投げたと同時に走り出してたようでキッドの後ろにいた。

「クッ！！」

キッドはすぐに自分の足に巻かれたベルトを外し無明から距離をとろうとするが

「遅い！！」

無明はキッドが立ち上がる前にキッドに目掛けて踵落としをする。

ドコツツツ!!

鈍い音がなり響く

キッドを中心に半径一メートルほど地面に亀裂が入った

その現場から無明が思いつきり力を入れたことがわかるがキッドはフラフラと立ち上がる。

「…………ゲホツ…ハア…ハア…やはりお前が一番手強いな……
さきにその二人を殺らしてもらおう！」

『魂の共鳴!!』

「

キッドの魂が膨れあがりそれと同時にキッドの銃はまがましいものに変わっていた。

「

死刑執行モード取得

『共鳴率安定

ノイズ3%

3、2、1

撃てるよ』

行くぞ!!

デス・キャノン!!

」

キッドは銃口から銃弾ではなく魂の波長の塊を打ち出した。

「オイ!!

ヤバいぞブラック スター、無明!」

「確かにヤバいね」

「俺様にそんなもん効くかよ!」

BOOMB!!

デス・キャノンはブラック スター達に当たると爆発する

爆風がおさまると、立っているのは無明だけになっていてソウルとブラック スターは気絶していた。

「やはりお前にはきかんか…」

「いや、効かないわけじゃないんだけど…
威力が少し足りなかったただけでもうちよいで危なかったよ」

言葉とは裏腹に無明はピンピンしていた。

「まあいい。さっさと貴様を倒して早くあの折れた棒を直してこの学校を左右対称にする！！
そしてこの学校に平穏を取り戻す！」

キッドはそう言うが無明と再び戦う為に構えようとしたが無明が全く構えようとしないので疑問を感じ

「どうした！？なぜ構えん！」

キッドは大声で無明に言うが無明は

「……………の力？」

何かを言ってるようだが全くキッドには聞こえていなかった。

「何を言っている！？」

「……………の力？」

相変わらず無明が何を言っているのかはキッドにはわからなかった。しかし無明にはただならぬ雰囲気が出てるのを感じると

「何を言っているかは知らんが来ないならこちらからいくぞ！」

キッドは構え無明に向かい銃を撃とうと銃口を無明に向けようとしたが、先ほどまで無明がいたところにはただの普通な景色がありキッドが気づいたときには無明はキッドの懐に入り込んでまさに無明の拳が自分の腹に当たる瞬間だった。

キッドは銃でガードしようにも間に合わないとなっていたのでせめてもと思い腹に力を込めるが無明の拳が腹に当たった瞬間、力を

いれていた腹を壊し衝撃が腹を通りすぎた。

ボコツツツッ!!

とても鈍い音が鳴る。

キッドは上空に三メートルほど飛ばされ地面に落ち二、三回バウンドするとキッドは動かなくなった。

キッドは徐々に意識が失う中、無明が自分を殴った時に言っていた言葉を思い出していた。

『それがお前ノ平穩な力?』

彼、無明は確かにそう言っていた
：

「無明君やりすぎですよ!」

シュタイン博士は近づきながら言う。

「すみません。最近全然やってなかったから久しぶりに使ってみたら二割ほど出す力を出すはずが三割ほどになってました…」

シュタイン博士はキッドの手当をし命に別状が無いとわかると

「今回はあまり力を出さずになおかつ意識を持っていかなったんですよ。よかったものの、気をつけて下さい。」

を使うのを」

博士は無明に言う

「大丈夫ですよ。全力ではあんまり使わないんで。」

マカは密かにこの会話に耳を傾けていた。

もしかしたらときどき無明から感じる黒いモヤの正体がわかると思っただからだ。

だが肝心の部分だけ聞こえずこれ以上情報が得られないとわかると耳を傾けるのをやめソウルを迎えにいった

「ひゃっはゝ 俺はもしや寝てる間にあいつを殺したのか!!」

ブラック スターは椿に起こされるといきなりしゃべり始めた。

「違いますよ、ブラック スター。無明君がやったんですよ」

「なにいい!!」

なら無明！俺様と勝負しろ!!

あいつを倒したお前を倒し俺様が最強になる!!」

ブラック スターはキッドを倒した無明を倒し目立とうと思ったが

「アハハハハ…」

止めとくよ。」

無明は軽く受け流した。

「うつす！

ちやつす

ういゝす

お疲れさゝん」

生ぬるい挨拶が聞こえてくる。
もちろん死神様だ。

「あれっ、キッドがぼこぼこじゃない。
初登校、初イジメかな」

自分の息子がぼこぼこだというのにのんきな死神様だ。
なぜぼこぼこかはシュタイン博士が説明をしておいた。

「んゝなるほど
まあゝとりあえずキッドは連れて帰りますわあゝ
皆ばははゝい

無明君は後で校長室来るように」

死神様の呼び出しという名の死刑宣告をつけ無明は落ち込んでいた。

校長室に行くと、やり過ぎた罰として三週間の廊下掃除を言われた。
した。

ついでにキッドは身体のケガは一週間ほどで治ったそうだが鏡をみて自分の前髪が切れているとわかりさらに三週間やすんでから学校に来はじめたよ（笑）

キッドとはかなり仲良くなれました。

そろそろ主人公の力を見せようZE (後書き)

淡々すぎね？

あと話早くね？

戦闘中途半端じゃね？

(。 - -) へ
……

矛盾が… r y ?

(。 - -) へ r y

口調が r y ?

(。 - -) へ r y

ソウルなんで持てたの？

(。 - -) へ …… ようするにあれたよ、アレ…

キッド弱すぎね？

(。 - -) へ ……

次の更新 r y ?

(。 - -) へ できれば今週にはしたい

質問、要望、ご意見ある方は言ってお下さいな

多分返信するから…

何気ない日常だＺＥ 七不思議編（前書き）

今週中に更新するってかいたから急いで書きました…
疲れましたよ…

朝6時起きで7時頃から友達と大阪に遊びに行つて家に6時半頃に帰宅。

そしていろいろ掃除をして8時半頃に飯食つてから一時50分まで風呂に入つてるときを除いてずっと書いてました。

テストが近いのに…

それで今回の話は原作通りならクロナ編ですが、あんなん書けないので、オリジナルにしますた（・・）

多分次回もオリジナルと思いますよ。

だってクロナ編は介入しようがないからね（ＴＴ）

今回のオリジナルの話はほぼ主人公しかでてこないんで（・・）

見るのもよし飛ばすのもよし…

何気ない日常だＺＥ 七不思議編

こんにちは

無明です

最近、と言っても数カ月も立ってないですが学校には慣れてきました。

皆個性豊かな友達ばかりで毎日飽きません。

こんな毎日がずっと続けばいいんですが…

おっと！

少しシリアスになってしまいました。

こんなことを言うはずではなかったのに…

ぼくが言いたかったことは学校に慣れてくるということとは学校のことを知ることです。

学校というのはいろんな噂が立つものです。

いろんな噂が立ちますが一番、学校で噂になるのはやはり学校の七不思議でしょう。

これはそんな七不思議のひとつ目の話を知ったぼくの話です…

「ねえねえ無明君。」

「ん？なに？」

クラスメイトの女子が話しかけてくる。

「死武専の七不思議知ってる？」

七不思議？

この学校にきて数カ月は立つが全く耳にしない言葉だった。
逆を言えば数カ月しかこの学校で暮らしていないからかも知れない
が…

「全く知らなかった。七不思議なんてあるんだ！？」

「うん。」

最近できたらしいけどね」

「どんな七不思議なの？」

ぼくは少し興味を持ち聞いてみる。

七不思議と言うものは少なからず怖い話もあると思ったからだ。
転生してから全く怖い思いもしたことないし、久しぶり怖い思いを
してみたいと思う

「私も聞いたばかりでほとんど忘れちゃったんだけど、これだけは
覚えてるよ

『学校で失った物を探し続ける霊』

「

「また、ありきたりだなあ」

「ありきたりだから信憑性があるんじゃない??」

「そうかも知れないけど…」

「この霊は夜の学校に出て、うめき声をあげながら何かを探してるらしいよ。噂によれば、その何かを見つければ成仏出来るとか…」

「へえーそうなんだ」

「まっ、夜の学校には気を付けなよ」

そう言うクラスメイトの女子はどこか去って行った。

『探しているのは自分の首だぁアアアア!』

急に背後から大声で喋られビックリして後ろを見ると、

「よっ！無明」

ソウルがいた。

「今の話聞いてたの？」

「ああ。」

失ったものを探し続ける霊だろ？」

「うん。」

「…なあ、無明」

急に声のトーンを下げてソウルが話しかける

「どうしたの、急に真面目な顔をして？」

「この話、俺達でウソかホントか確かめて今夜確かめて見ないか？」

「え、ええー！！」

なんでそんなことを？」

ソウルは無明に近づき耳元で周りを確かめながら喋り始めた。

「…じつはなここだけの話。あの暴力女は幽霊とか、そういう類いのものが苦手なんだよ（ボソッ）」

「うん。それで」

「だからな今夜確かめてこの話がホントだったらまた日を改めて暴力女とここに来るんだよ！
そしてビビらせまくりたい！！」

「…いや、

なら今夜二人で行けよ…」

「バカやろー！！もしウソで何もなかったら面白くないだろ！
だから今夜一緒に確めに行かないか？」

ぼくはとくに断る理由も無いし何より怖いもの見たさで承諾した。

「さすが無明だな!!」

じゃあ今晚の9時に死武専前に集合な!!」

「うん。わかった。」

ぼくがこんな軽々しく承諾しなければあんなものを見ることになる
とは…

いや、もうこの七不思議を聞いた時点で駄目だったのかも知れない…

今更こんなに後悔しても遅いが……

【真夜中の9時】

「あー、寒い」

ぼくは今約束通りに死武專の前でソウルを待っています。

今夜はかなり寒く厚着をしてきたのに全く意味が無いぐらいです。

そろそろ約束の9時になるんですが全くソウルの姿が見えません。

もしや、約束をすっぱかしたか？

と思い始めた頃、背後に何か悪寒が走ったような気がしました。

恐る恐る背後を見てみると ……

『お前の首を変わりにくれええうえ！！』

ソウルでした。

「約束の時間ギリギリだったよソウル」

「ちえっ！

全く驚かないんでやんの」

「だってソウル1パターンなんだもの…」

「なら今度は違うパターンを…」そろそろ行くよソウル」へーい」

こうしてぼくたち二人は真夜中の学校へと侵入することになった…

ぼくたち二人は今学校の迷路とも言われている複雑な階段にいます。
なぜかと言うとぼくは知らなかったんだけどソウルが聞いた話によるとその霊はいろんなところに出るがこの迷路見たいな階段に一番

出るからだそうです。

「ねえ、ソウル
灯りを持ってきて無いの？」

「ああ。持っていない」

「こんな真っ暗なところに灯りひとつつけずにいるとかなり怖いんだけど…」

無明が怖がるの無理はなかった。

周りは真っ暗で四方八方階段。

そして音と言えば自分の足跡や吐息ぐらいでとても不安になりそうな状況だ。

「灯りを持てれば『自分たちはここにいます』って言うてるもんだろ？」

「それはそうだけど…」

「とにかく噂の霊を探そうぜ」

「…うん」

ぼくは少し恐怖と不安を感じながら噂の霊を探し始めた。

「見つからないね」

「…ああ、何もないな」

かれこれ一時間だろうか？

あの会話のあとにぼくたちはほとんど無言で探し続けたが霊のれも見つからなかった。

「どうするソウル？」

探したのはこの階段付近だけだけど、この話はウソっぽいね」

無明はソウルに話かけるがソウルは何も言わずに無言だった。

「…ソウル？」

何も言わないソウルを少し怖くなり再び話かける。がソウルは何も言わない…

「ねえ！ソウルってば！！」

無明が少し大声で話すとソウルは

「しー、静かに。耳をすませろ（ボソツ）」

ソウルは小声で無明に言う。

無明は言われた通りに耳をすましてみた。
すると

「…………ハ…………ダ…………ハ…………コ…………」

と耳の神経を集中させたら聞こえるぐらいの声で何か言ってるのがわかった。

「ソ、ソ、ソ、ソウル…
これって…」

「噂はホントみたいだな…
声の聞こえるほうへ行ってみようぜ」

「……マジデ？」

「……マジで」

「もう一度聞くけど、マジデ？」

「もう一度言うがマジで」

「どうしても？」

「一人でここにいたいならどうぞ」

そういうとソウルは声のほうへ少しずつ近づいて行った。

「ちよつ、待って!!」

無明はそのソウルの後ろを追いかけた。

「段々声の大きさが大きくなって来てる。
近いぞ」

「……………（引き返したい）」

無明達二人は徐徐に声のするほうへ近づく……
すると曲がり角を少し行っただくらいから灯りが見えた

「あつ、灯りがある！！」

「…ちょっとだけ覗いて見ようぜ」

「う、うん」

無明とソウルは静かに曲がり角に近づき、曲がり角から顔を少しだし灯りがする方を覗いて見た…

すると！！

「ああ、

マカ

マカの髪留めはどこだ

これさえ見つけてマカに渡せばパパとしての株が上がるかもしれない。フッフ

ああ

どこだ

マカ

マカの髪留め」

マカのおとうさんがいた。

「……ぼくは何も見なかった。ソウルは？」

「……あ、ああ。俺も何も見てないな」

「……そろそろ帰ろうか」

「……そうだな」

そしてぼくたちは来た道を引き返した。

これで七不思議のひとつ

『学校で失った物を探し続ける霊』

はおしまい……

と思っていた時期もぼくにはありました。

話はまだ終わってなかったんですよ…

何か見落としてるような…

あつ、そうそう

思い出しましたよ。

確かぼくは『聞こえる音と言えば自分の吐息や足跡ぐらい』って言うてましたね

自分の吐息や足跡ぐらいねえ…

では物語は閉幕へ…

死武専正面玄関前

「ねえ、ソウル」

「ん、なんだ？」

ぼくたちは今あの迷路の階段を抜けてやっと死武専正面玄関まで来た。

「死武専の中はかなり暗かったけど外は月明かりで綺麗だね」

「ああ、そうだな」

月明かりが二人を照らしている。

「なんか骨折り損だね」

「ホントだぜ」

帰ってさっさと寝ようかな

あゝ眠い」

「ぼくも眠いや…」

今日のことは忘れようね。ソウル」

「ああ、忘れよう…」

じゃあ俺はそろそろ帰るわ」

「そう」

じゃあね」

「おう、また明日」

そういうとソウルは帰り始めた。

「あつ！！そう言えば忘れ物だよソウル」

無明の言葉にソウルは一旦その場に止まる。

「……俺、なんか忘れ物したっけ？」

「んー、忘れ物っていうか『忘れたもの』かな」

そう言うとならば無明はポケットからペンダントをソウルに渡す。
ソウルはそれを受けとると、

「……どこでこれを？」

「あの迷路みたいな階段の隅っこのほうかな」

無明がそう言うとならばソウルはそのペンダントを開ける。
ペンダントには14歳ぐらいの少年が写っていた。

すると突然ソウルの体や顔がぐにやぐにやと変形し始めペンダント
そっくりの少年になった

『ああ、思い出したよ。
失った記憶

俺の本当の姿を

」

「やっぱりソウルじゃなかったんだね」

『いつから気づいていたんだ？
ソウルに完璧に化けた筈なんだが……』

「最初から

君がぼくの後ろにいたときからだよ。

君には気配がなかった。

それに君から呼吸音や足跡ひとつ聞こえてこない。ブラック　スタ
ーならともかく、ただのソウルにそんなことが出来るはずがない」

『ちょっと酷いなお前は』

「ははっ。そうかな」

『ソウルに同情するよ』

「さて、失ったものを見付けたんだからそろそろ成仏しない？」

『ああ、そうだな。

そろそろ逝こうかな

今日は楽しかったぜ無明!!』

「ぼくも久しぶりに色んな意味でドキドキして楽しかったよ……」

『ふっ、じゃあな』

ソウルの姿をした少年は最後にそう言つとどこかに消えて行った。

【翌日】

死武専正面玄関前

「無明、昨日は悪かったな

急にどうしても外せない用事が出来てドタキャンしてしまった」

ソウルは無明の顔をみるなり謝って来た。

「いやいや、あんまり気にしないでいいよ。」

「いやゝ本当に悪い」

「昨日のマカのおとうさんのことは忘れようね」

「ああ、忘れようか」

「……………」

『……あつ、しくつた』

「……………どうして成仏してないのかな？」

今までソウルの姿だったのものはみるみる姿が変わり昨日の少年の姿に変わった。

『……現世のほうが好きそうかな』
「……と思っ」

「……ってというか成仏の仕方を忘れちゃった」

「……少しぶりっこ風にいう」

「……安心しろ

お前の魂今すぐに狩ってやるよ」

『ち、ちよつと落ち着け

あと俺の名前はルキだ』

「そんなもん知るか!!」

あの時の状況は周りからみたらとても滑稽だったらしい。

ルキは無明と魂が見える人にしか見えないので端からみればわかる人以外は無明が大きな一人言を言っていたとか…

ちなみにソウルは無明と約束をした晩に学校から帰って熱を出して休んできた…

とりあえず七不思議のひとつ

『学校で失ったものを探し続ける霊』

終了ー

何気ない日常だZE 七不思議編（後書き）

なんかねー

話が思い付かなかったんですよ

だから適当に七不思議にしたんですけど失敗だったかな？

ギャグは中途半端、シリアスも中途半端、なんだかなー

あとやっぱり話がテンポよすぎるなー

これが作者の全力なんで変えようが無いんですけど…

あつ、そう言えばお気に入りユーザーいれてくれてありがとうございます
います（。・・）

お気に入りユーザーに入れてくれた人の小説は時間があるときに読
まさせていただいてます。

普通にお気に入り小説入れてくれた人もありがとう（*・・・*）

キャラの口調がry？

（。・・）ry

主人公口調がry？

（。・・）ry

話がおもんない

（・・・）

原作かけー

（　　Ｔ　Ｔ）　　ハ難しいぜよ

次の更新日はいつ？

（　　・　　・　　）　　ハ未定だね。来週はテストもあるし

矛盾が：ry

（　　・　　・　　）　　ハry

いつも誰が質問してんの？

（　　・　　・　　）　　ハ友達と自分の脳内

質問、意見は一切受け付けない！！

質問、意見する人は何かオリジナルの話で使えるネタを提供してから言ってくれww

シリア…シリアルだZE (前書き)

この話は昨日の朝に実は完成させたんですけど、あまりにも恥ずかしい内容だったため投稿出来ませんでしたww

厨二すぎたかなww
あとは

くた。が多すぎるね

まあ、直せと言われても直せないんだが…

まあ、これは読まなくてもあまり原作には影響しないんで、見るのもよし、飛ばすのもよし…

シリア…シリアルだZE

k i i i コーン

カーンコーン

「はあーやっと授業終わったよ」

無明は授業終了のチャイムと同時に机に倒れ込む。

「無明は勉強苦手なんだね」

「うん。苦手だ…よ!？」

無明はソウルかと思い反射的に言葉を返すが声の高さや喋り方が違うから誰かと思い振り返ってみると、

「やほっ
」

マカがいました。

「な、なんですかマカさん？」

「…無明ってさソウル達には普通なのに私には態度違うくない？」

「ぼ、ぼくはうぶなんですよ!」

マカは少し無明に疑いの視線を浴びせ、そして

「…まあ、いいや。それより無明、今度の課外授業も一人でやるの

「？」

今度の課外授業というのは明日にある授業で、悪人の魂を狩りに行くというものである。

「いつも通りに一人でやろうかなーと思ってるけど何で？」

「出来たら私たちの課外授業を手伝ってもらいたくて…これ以上補習を受けたくないから」

「んー、

いいよ。ぼくは20個は魂狩れてるし少しぐらいなら手伝う余裕があるから」

「本当！？

ありがとう！

じゃあ明日の夜9時に協会近くの駅前ね
ソウルにも伝えとくから」

そう言うマカは無明のもとを去って行った。

「……もうそんな時期か…」

無明はマカが去った後も机にずっと座ったままだった。

【翌日の深夜9時】

無明が駅前に着くとマカ達は既に駅前にいた。

「あれっ？時間間違えたっけ」

「いや、合ってるよ。コイツが速く来たただけだ。そのせいで俺も早めに来なくちゃならなくて眠いぜ」

ソウルは欠伸をしてとても眠そうにしていた。

「それで今回の悪人は？」

「エメラルド湖のソンソンじだとさ」

「…そう。そうとわかればさっさといこうか」

ソウルとマカは無明のいつもと違った態度に少し疑問を抱きながらマカとソウルと無明は歩き出した。

「それで今回で魂何個目になるの？」

無明はソンソンじを探しながらソウルに尋ねる。

「三個目だな」

「ははっ、デスサイズにはほど遠いね」

「うるせえ！！絶対に無明よりデスサイズになってやる！！」

「頑張れ、頑張れ。」

ソウルと無明はお楽しく会話をしているがマカはずっと黙っていた。何故かという、このあとに控えてる戦闘に集中するため。そしてソソソソソの魂を探すためにも集中しているからだ。

そして

「ソウル、無明
見付けた！」

マカがそう言うと言わしき走りだし今まで楽しく会話していた二人は真面目な顔になりマカの後についていった。

「お前の悲鳴を聞かせてくれえ！！」

小肥りで紙袋を被った男が包丁を持ち女性を追いかけている。女性は何がなんだかわからなかったが自分の命が危険に晒されていることはわかってるのでその男からひたすら逃げていた。

「ハア……ハア……ハア……」

女性はある街角に曲がり道路の脇に逃げ込むと息を殺して自分を追いかけてくる男が去るのを待っていた。

「ここらへんに来たと思うんだけどなあ」

男は女性が隠れている道路の脇の目と鼻の先を通る。

「……………」

女性は自分の口に手を当てて呼吸音すら出さないようにして男が通り過ぎるのを待った。

「あっちに行つたのかなあ」

男はそう言つと女性のすぐ近くにいた場所を離れて行つた。

女性は男がまた戻ってくるのではと思ひ数分間息を殺していたが戻つてこないとわかれると安心してその場に座り込んだ。

「もう「こないとも思つたかあ」！？」

声がしたのでまさかと思ひ声の方向を見てみるとあの男がいた。

「それじゃ、いい音色を聞かせてくれえ」

「キヤアアアアア！！！！」

女性は目を瞑つて死を覚悟した。

がいくらたつても全く痛みを感じないので不思議に思ひ目を開けると目の前には大きな鎌を持った少女と男の腕を掴んでいる少年がいた。

「危な！！ギリギリだ」

無明は男の腕を掴みながら言う。

「それで、この人がソンソンj?」

「うん。死神様のリストに載ってたヤツ」

「わかった。とりあえずばくはこの女の人を逃がしてからサポートするよ」

無明はソンソンjの手を放し女性の手を掴むとどこかに走り出した

「お願い!!」

「お前ら俺の獲物に何してるんだよぉ」
「お前ら一体何なんだよ」

「職人だ!!」

マカはそう言うと言をソンソンjに向かって両手で力を込めて降り下ろす。

「クッ!!」

ソンソンjは包丁でマカの鎌を防ぐ。
そしてマカは大きく背後にジャンプして距離をとる

「ずっちいゝよ

何でお前らは人を殺しほうだいで俺は殺しちゃ駄目なんだよぉ」

「別に好き放題やってるわけじゃない」

マカは再びソンソンじに向かっていく。

無明は今、ソンソンじに襲われた女性の手を握りマカ達とは遠く離れた場所に来ていた。

「ここまでくれば大丈夫かな？」

無明は女性の手を放しその場に立ち止まると少し伸びをしながら言う。

「…危ない所をありがとうございました。
あの男は一体なんだったんですか？」

「あれはこの辺りで有名なソンソンじと言う殺人鬼らしいですよ
知らなかったんですか？」

無明が言くと女性はきょとんとしながら、

「…私、この辺りの人じゃなくて山のほうにすんでるので…」

「そうでしたか」

「…貴方達は武器職人の方々ですか？」

「そうですね？何か？？」

「私の娘も死武専に通ってるんですよ」

「はあ、そうですね」

「娘の名前はレイナと言うので見かけたら声を上げて下さい。あの娘も喜ぶはずです！」

女性はさっきまでの恐怖の態度と変わり急に元気になり始めた。

「わ、わかりました。」

覚えておきます、それじゃぼくはそろそろ戻らないといけないので…」

「…あつ、ごめんなさい。
女の子が一人だものね。」

「アハハ、そうですね」

若干顔がひきつりながら無明は答え

「じゃあ、戻ります。」

「…本当に今日はありがとう。」

無明はにこりと微笑むと来た道を引き返した。

「このっ！！」

マカはソソソソソソを両手を使い殴るが、

「力が足りないなあゝ」

ソソソソソソは軽くマカの拳を受け止める。

マカは受け止められるのを予想してたのか少し不気味に笑う。

「何がおかしいんだあゝ？」

「だってアンタがバカだから」

「??」

マカの言葉の意味が理解は出来なかったが、

「じゃあお前はそのバカに殺られるんだあゝ」

そう言うマカを力で押し倒す。

そしてマカの両手の動きを片手で止めもう片方の手にどっから出した包丁を持ちマカを刺そうと手を振り上げる。

「ソソソソソソ。」

「なんだあ？」

遺言かあゝ？」

ソンソンじはもうマカをいつでも殺せると思いにやけながら言う。

「私、いつから鎌を持ってないと思う？」

ソンソンじがその言葉の意味を理解する前に背後から何かが突き刺さり、自分の胸につき出した何かを見た。
それはマカが持っていた鎌だった

「くそっ！！」

ソンソンじの口からおびただしいほどの血が流れる。

「マカに氣をとられすぎだぜ」

ソウルは鎌に変形させた手をソンソンじから引き抜く。

「…俺はまだ死なん！！」

瀕死と思われていたソンソンjは最後の力を振り絞りマカに向かって包丁を降り落とした。

マカとソウルはソンソンjはもう動けないと思っていたのでそのソンソンjの攻撃に反応が遅れる！！

マカに包丁が突き刺さるうとしたとき、

「

『第一解除』

『距離を指定』

『対象を指定』

『時間を指定』

『lock』

」

無明の声が聞こえるとソンソンjの動きは止まりソンソンjは力尽きたのか魂だけになった。

「いや」

危なかった

危なかった」

無明はソウル達を見ると言う

「来るのがおせえ!!」

「全力で来たんだけどな」

今さっきまで戦闘していた空気は消え、いつものソウルと無明の空気に戻っていた。

「ねえ、無明」

無明はビクツと身体を震わせマカのほうを向くと

「…これでも全力で来たんで殴るのだけは…」

「無明は私をどう見てるのよ…」

「アハハ

それで、何？」

「さっきの動きを止めてるのは無明の武器の能力だよね」

「そうだけど」

「確かシド先生の時もシュタイン博士の時も使ってたよね？」

「確か使ってたような…」

「使ったびに言ってる『第一解除』って何？」

「あっ！俺もそれは気になった。」

マカとソウルは無明に近付き少し圧力をかけながら言う。

「わかったから、教えるから」

その言葉を聞くと、二人は後ろに下がる。

「えーと、まずソウルはわからないと思うけど、ぼくの魂は鎖で封じてる」

「そうなのかマカ？」

「うん。博士が言ってたし私も見える」

「それで、ぼくの魂を封じてる鎖は全部で5つあるんだよ。こっからもう言わなくていいよね？」

「…『第一解除』というのは1つ鎖を外したということ？」

「当たり前。ぼくは1つ目の鎖を解除することによって武器の能力が使えるようになるんだよ」

「それじゃ、もう1つ

黒い……！！」

マカはいいかけてたことを中断した。

そしてマカは少し黙りしばらくすると口を開けた

「あの協会に武器と職人の魂とそれを囲んでる人間の魂が50〜60もいる。」

「こんなランチみたいなこと死武専生として見逃せない」

「ほっとけよ、そんなやつらきつとパーティーでもしてんだよ」

「何いつてんの!!」

行くよソウル」

「へーい。」

無明、今夜はありかな」

「気にしないでいいよ。」

「ぼくもこれから行くところがあるしここでお別れだね」

「おお。じゃーな」

「うん。」

「気を付けてね」

「??」

「いや、やっぱりなんでもない」

ソウルは無明が言った言葉に疑問を持ったかバイクに乗るとマカを後ろに乗せて走り出した。

「…わかってても友達が斬られるなんてなんか辛いもんがあるなあ」
「…さてぼくも行きますか」

そう呟くと無明はどこかに行き始めた。

「んー、この辺りかな」

無明は人気のない森林に来ていた

「そろそろ出てきたら？」

ぼくには魂感知能力は無いけど、狂気の気配ぐらいならわかるよ」

無明がそう言うと、木々之間から大人一人、子供一人出てきた。

「あれ？またバレちゃった」

「子供に感付かれるとは…」

「久しぶりですね二人とも」

聞き覚えのある声

出てきた二人は

幼い時の無明襲ったフォンとマサムネだった。

シリア…シリアルだZE (後書き)

フラグつくって回収しないんだよねww

レイナっていう人は六割ぐらいの確率で後々出す予定ですけどね。

- -)

もちろん『主人公のアレ』でwwww

あと、ルキは七不思議以外には出さないと思います

主人公以外のオリキャラが喋るとめんどうなことになるんで…

マサムネはいいとしてフォンはどうしても原作に介入出来ない場合に使う予定なんで出来れば覚

えていただきたい(例をあげるとマサムネ対椿の時とか) ・x・

)

ry?

(。 - -) ㇿry

次の更新はいつ?

(。 - -) ㇿ多分土日どちらか

この線の意味は?

(。 - -) ㇿ3つ意味があつて

一つ目は話を変えたい時

二つ目は小説編集でページを変える時の目印

消せよとか言わないで W W W
三つ目は字数稼ぎかな W W

見なくてもさほど原作に影響しないZ E (前書き)

二日連続はキツイW W

自分で言うのもアレだけど物語が坦々としてるねW W
直せばとか言わないで) 、 、 (

これを読まんでもさほど原作には影響しないんで、
見るのもよし、飛ばすのもよし…

見なくてもさほど原作に影響しないZE

深夜10時頃

普段ならあまり使われないであろうこの森林には今、三つの人影があつた。

「それでぼくに何かようですか？

フォンさん

マサムネさん」

「あれ？

名前覚えててくれたんだ！！

もうとつくに忘れてると思つてたよ」

「あの出来事は忘れてたくても忘れられないよ」

何を思ったのかフォンは無明の言葉に反応して少し苦笑するだけだった。

「そうか、そっぴゃお前に用事があるんだつた。」

「…用事？」

無明はあまり予想もしていない言葉に首をかしげながら言う。

「そつだ。

俺達はお前を仲間に加えたいと思ひお前に会いに来たんだ」

「何故、あんたらの仲間にならなくちゃいけないんだ!」

フォンはクククと笑うと口を開く

「本当は気付いてるんだろ？」

『自分の中の狂気に…』

」

「……………」

「俺達は同類じゃないか？」

あんな学校にいてどうなる？

本能、狂気に身を任せて見ないか？

そしたら世の中が変わりそして自分の世界も変わるぞ！

だから俺達と一緒に来いよ。」

フォンは無明に近付き無明の前まで来ると無明に向かって手を差し出す
無明はその差し出された手に向かって手を近付けていき

パンツ!!

フォンの手を弾いた。

「ぼくはあの学校や友達、凝視が大好きだしそれに自分の世界は今のままで充分気に入ってるよ」

「…仲良くなれると思ってただけだな」

まあ、今日はそれを言いに来ただけだし

俺は、な

」

フォンが言い終わると同時にフォンの背後からマサムネが飛び出して来て、無明に向かって刀で切りつける。

「…うわっ!!」

無明はマサムネのその攻撃に反応して二歩ほど即座に後退してマサムネの刀を避ける。

「マサムネはお前と戦いたいんだよ」

「どうして!?!」

「我思ふ。あの時の子供の今の強さを確かめに来た。」

マサムネはそう言うのと再び無明に向かって刀を切りつけて来た。

「マサムネさん

一応聞くがあなたは何とも思って無いんですか?」

無明は右手を鍵に変形させマサムネの刀を防ぎ弾く。

「『何とも』とは?」

マサムネは自分の刀が弾かれると少し無明と距離をとり、無明の隙

を伺う。

「家族や、マサムネさんが殺した罪の無い人々、
そして何より椿さんに対して!!」

普段あまり自分から先手を打たない無明がマサムネに向かって走り
出し自分の片手（鍵）をマサムネに降り降ろす。

「何を言っかと思ったら…」

くだらないことを

」

マサムネは降り降ろしてきた無明の鍵を刀で軌道をそらすと片手で
思いっきり無明の腹を殴り飛ばした。

「ツツ!!」

無明はマサムネに殴られるとメートルほど後ろに飛ぶが空中で体
勢を立て直しスムーズに着地をする。

「もう、無理なんですか…?」

無明は再び問う

「鬼神になるということはそういうことだ」

今度はマサムネが無明に向かって距離を詰め、刀で無明に突きを、
そして影の傀儡を操り無明の死角から攻撃させる。

「……わかりました。」

無明は死角からの攻撃を見ずに片手（鍵）をふるい傀儡を消滅させる。

そしてマサムネの突きを素手で掴むと刀を通して魂の波長を撃ち込む。

撃ち込まれたマサムネは

「グツッ!!」

呻き声を上げてその場に方膝をつく

無明の手からは出血をしていたがさほど痛くないのか出血した手で握りこぶしを作るとマサムネを殴り飛ばした。

「やるね」

フォンが少しちゃちゃを入れるが無明は気にせず、

「本当ならばくがあなたを殺したいところだがそんなことをしたら何も解決しない…」

だから今日はこの一発だけにします」

「俺がお前ごときに殺られるはずがな」「やめろ、マサムネ」「フォン！なげ、止める!!」

マサムネが立ち上がり無明に向かって再び攻撃しようとしたときフ

オンがマサムネの前に手を出し動きを止めた。

「もうすぐ時間だ。」

「クソッ!!」

フォンがそう言つと納得したのだろうかマサムネから戦意が感じられなくなった。

「さて、俺らはこれから行くところがあるから今日はこのくらいで帰らせてもらつよ」

「……」

無明は無言でフォンを睨み付ける。

「そう睨むなつて
それじゃあな

あつ!!最後に」

「何だ？」

「俺は諦めないよ。
君のこと……」

フォンは最後にそう言つとマサムネを連れてどこかに消えていった。

「……とりあえず帰るか」

無明はその場を離れ死武専に帰っていった。

無明が死武専に着くと少しクラスメイトがざわついていた。

無明はなぜざわついているかは知っていたが一応クラスメイトに聞く

「何かあったの？」

「あつ、無明君知らないの？」

ソウルが大怪我をおったんだって!!」

「それでソウルの容体は？」

「よくわからないけどシュタイン博士が今手術をしてるらしいよ!!」

「...そう、わかった」

無明は保健室へ向かって歩き出そうとするが

「今行ってもソウルには会えないよ!!手術中だから」

「大丈夫。もう終わるから...」

「??」

無明はクラスメイトと話終わると保健室へ向かった。

無明が保健室へ着くと保健室のドアが少し開いている

無明が保健室に入ると白いベッドの上に点滴を受けながら眠るソウルとそのソウルを見て涙目のマカがいた。

「ソウルは大丈夫なんですか？」

マカは背後から急に喋りかけられ少しビクツとするが無明というこ
とに気づくと

「…大丈夫だよ」

と無理やり笑顔を振る舞った。

「ぼくがいたらこんやことにならなかったかもしれないのに…」

「無明のせいじゃあないよ」

「でも…」

無明が口を開けて何か言おうとしたとき保健室のドアが突然ぶつ飛
んだ。

「大丈夫か！！」

ソウル！！！！」

ぶつ飛ばしたのはブラック スター、ブラック スターと椿は保健
室の中に入ってくると

「しつかりしろ！！俺様が来てやったぞ！！目を開ける！！俺の笑顔はハッスルの源だぜ！！」

とソウルに股がり寝ているソウルの胸元をつかむと上下に降りながら言う。

「ブラック スター！！」

マカはブラック スターにマカチョップを喰らわせブラック スターも寝かす。

「へへ」

マカはこの光景を見て落ち込んでいる自分が馬鹿らしいと思ったのか少しづつ元気を取り戻していった。

「あらあらドア壊しちゃって……
ずいぶんにぎやかじゃないの」

保健室に再び人が入ってくる。

「メデューサ先生こんばんわ！！」

「オウ！！」

ソウルを見にきたのか？」

「……………」

マカ、椿、ブラック スターはそれぞれ挨拶をするが無明だけは無

言だった。

「それにしても大変だったわね」

「私が無茶をしたからソウルは…」

「元気をだして!!」

過ぎたことは仕方ないんだからこれからはもうこんなことが無いようにしましょう!」

「はいっ!!」

じゃああとはよろしくお願いします」

マカはメデューサにペコリと頭を下げると保健室を出ていき、

「ブラック スター、私たちも行きましょうか」

「オウ!!」

そう言うとブラック スター達も保健室を後にした。

そして保健室にいるのは寝ているソウルと無明とメデューサだけになる。

「無明君、あなたは行かないの?」

メデューサ先生はニコリと微笑みながら言う。

「…そうですね。ばくも行きます
あ、あとメデューサ先生」

「何？」

「ぼくの目の届く範囲ではソウルの黒血と狂気はは必用以上に進めさせませんから」

「黒血？狂気？何を言ってるのかな無明君は」

メデューサは先程のニコリとした笑みを崩さず言う

「…いえ、別に」

無明はそう言つと保健室を後にする。

「…あの子を調べる必用があるようね」

保健室でのメデューサの眩きは誰も聞こえなかった

見なくてもさほど原作に影響しないZE (後書き)

さて、漫画を見てて思ったんだが狼男じゃなくて椿編が先じゃないかww

全く覚えてなかったorz

次は何書こうかなー

エクスカリバーを書こうか、それともオリジナル椿編を書こうかどうしようかね

あと前から聞きたかったんだけど、読者のには原作を坦々としてほしいのだろうか…

オリジナル入れてるけど何も言われないので普通にオリジナル書いてますけど…

意見ある人いるー？(。□。；

誰か何か言ってくれたらこちら書きやすくなるんだがww

物語が坦々

(。 - -)(￣ry

手を抜きすぎ

(。 - -)(￣疲れて…

主人公の口調変わってねww

(。 - -)(￣合つてると信じてる！

ry

(。 - -)(￣ry

次の更新（r y

（。 - - ） 六三日以内にはしたい

エクスカリバー エクスカリバーだZ E (前書き)

皆大好きエクスカリバーですww
読みたければどうぞww

これは多少原作が入ってますよー
いや、大量にか…

見るのもよし飛ばすのもよし

エクスカリバー　エクスカリバーだＺＥ

こんにちは、無明です

そろそろ時期かと思い最近毎日図書室にいつてますが、死武專の図書室は図書館並に本があるので毎日通って本を読んでるうちに読書が趣味になってしまいました。

えっ？

何を読んでるかって？

そりゃアレですよ

ジ、ジャンヌダルク？かな…

それはどうでもいいとして図書室で少しうるさいやつがいたので注意しようと思ったたら変わりにキッドが注意しに行きました。

さて読書に続きをしますか…

うん？

キッド??

つと危ない危ない。

重要なイベントを見過ごすところだった。

イベントってのはエクスカリバーのことだよ。

漫画を見てる限りではちょっとウザいけどそこまでののでは？と思い実際に会って確かめたいと思って…

とりあえずキッドとブラック スターのところへ行ってきます。

「キッド、ブラック スター」

無明の先には本を片手にとりブラック スターとキッドが何かを読んでいた。

「オッス！無明」

「ん？無明か」

二人は無明に言葉を返す。

無明の話し方からキッドとは仲良くなれたことがわかった

「何読んでんのー？」

無明はキッドがもつ本を指差して尋ねる

「ああ、これが

これはエクスカリバーについて書いてある本で、今その素晴らしさについてブラック スターと語り合っていた所だ」

「そうそう

エクスカリバーを持った奴は勇者や王になれるんだぜ！！

「勇者、王、いい響きと思わないか無明！！」

「へえー

そんなに凄いんだ。」

無明はエクスカリバーのことは一応知っているので軽く流した。

「何を喋っているのかと思いきやエクスカリバーね」

「何だ？博士もお仕置きくらったんか？」

「？」

何を言ってるの君は…？」

「聖剣について何か知ってるんですか？」

「聖剣エクスカリバー…」

俺にも無理だったよ…」

そつ言う博士はどこか寂しげな表情だった。

「なら俺達も明日挑戦して見ようぜ！！」

「それはいい考えだ。無明も来るか？」

「明日は特にすること無いしぼくもついて行くよ」

ブリテン島

北部

三人は今とても高い崖の下に来ていた。

地図によるとこの崖の上にエクスカリバーがあるらしく三人はどう

やってこの崖の上まで行くか考えていたのだが、

「ふむ。悩んでも仕方ない
俺はベルゼブブでいく」

そう言うときッドは手からスケボー（ベルゼブブ）を出してスケボーに乗ると飛んでいった。

「うお！！
きたねえ〜！」

くそっ！俺らは自力で登るしか無いのか！！
仕方ねエ！！登るぞ無：明！？」

ブラック スターは自力で登ろうと思い無明に声をかけようと振り向いたら無明はいない。

「ごめん。ブラック スター
先行ってるよ〜」

ブラック スターは上空から無明の声が聞こえたので上を見てみると空中に立ってる無明がいた。

「おい！無明！！
なんでそんなところにいるんだ！！」

「ちよつとした能力の応用で空中に紙を置いてlockして固定させたんだよ〜」

「なにぃ！！キッドだけじゃなくお前もか！！」

「頑張って登ってきてねー
上で待ってるからさー」

無明はそう言うのと空中に紙を置き固定させてその上を乗り、と繰り返し崖の上まで登っていった。

「クソ！

俺も負けらんねえ！！

うおおおお！！」

ブラック スターはキッドと無明な後を追ひ崖を登っていった。

「ふう」

やっとついたぜ！」

ブラック スターが崖の頂上までくるとそこはいかにもって感じの洞窟があり洞窟内部へ続くであろう泥の道が出来ていた。

「結構早かったね

ブラック スター」

「まあ、俺だからな！！

ところでキッドの奴はどこだ？」

「ああ、キッドはそこに」

無明はある所を指差す。

ブラック スターはその指差す方向を見てみると、

「ブラック スター助けてくれ…

下が泥で降りられん…

靴が汚れてしまう…」

「何やってんの？

お前…」

ブラック スターの視線の先には洞窟近くの岩にへばりついている
キッドがいた。

「ってか、俺が来るまで時間が合ったんだから無明助けてやれよ」

「だって見てて面白いじゃん」

「…お前、腹黒いな」

「ブラック スター

おぶってくれ…」

「へいへい、わかりましたよつと」

ブラック スターはキッドをおぶさり無明と三人で洞窟の中に入っ
ていった。

洞窟の中は特に暗いということが無く普通に歩いていけるぐらいの

明るさだ。

三人が洞窟な内部へ進むほど明るさが増していく
そして洞窟内部から一匹の妖精が出てきた。

「!？」

「ん!？」

「あら？」

その妖精は約15?ほどの大きさを服をきて靴を履いてパタパタと
飛んでいる。

『これは妖精か?』

と聞かれたら、

『多分これだよ。』

と答えられるような感じの妖精である。

「エクスカリバーはこの先にあるのか？」

「うん」

出会った時の顔から妖精は怒っているのかうざがっているのかよく
わからない顔で答えると妖精はその場を離れる。

「何だよ

感じ悪いな」

「……………（リアルであの顔されたら絶対に泣くよ……）」

そして再び三人は洞窟の奥へと進んでいった。

「ここで行き止まりのようだ」

三人は洞窟の一番奥へと来ていた。

三人が見る先には神々しい光を放つ剣があった

「あれだね。キッド」

「うむ。間違いない」

それにしても美しい

聖剣と呼ばれるだけはある!!

選ばれた勇者しか抜くことが出来ない剣、エクスカリバー。

は…

欲しい!!」

無明とキッドがそのエクスカリバーの神々しさに入り目っていると

「わーい

俺、勇者!!」

「なんと!!?」

エクスカリバーを抜き振り回しているブラック スターがいた。

「選ばれた勇者しか抜けないはずだ!!」

「えっ？でも俺抜いたし」

「俺にもやらせてくれ」

「いいぜ

何度やつても同じだぜ！！」

ブラック スターは元あった場所に再びエクスカリバーを突き刺す

「抜けたぞ」

「はぁ！？」

キッドがエクスカリバーを持ち引くと意図も簡単に抜けた。

「プププッ！！二人とも勇者だね」

無明は口を手で抑え笑いを我慢しながら言う。

『よく来たな若者たちよ！！』

キッドとブラック スターが言い争っていると突然エクスカリバーから声が聞こえ光だした。

カッ！！

洞窟内に閃光が走る。

あまりの眩しさに三人は手で目を抑える

三人はそれぞれ手をのけると

「しょぼっ」

「……………」

「ブツツツ!!」

文字で表せと言われたら、小学生が精一杯書いた『ある動物が貴族になった』という題名がつけられそうな奇妙な生物がいた。

ブラック スターはありのままの感想を、キッドは自分のイメージと違い落胆して声も出さず、無明は吹いていた。

「お前が聖剣？」

そのなりで？

超しよべえ」

「……………」

ブラック スターはエクスカリバーに普通にものをいうがキッドと無明は声を出さずに笑っている。

「では聞くが君はそのなりで何物なのだ!？」

エクスカリバーは自分の杖をブラック スターに向け尋ねる。

「俺か？」

俺はブラック ス「私の伝説は12世紀から始まった!!」

「して君たち見たところ職人と武器のようだがどこからきた？」

再びエクスカリバーはブラック スターに杖を向けながら言う

「いちいち杖をこっちに向けんな！」

「俺達は死武」そūdいいことを聞かせやろう」「

エクスカリバーは言葉をさえぎり

「私の武勇伝が聞きたいだろう」

再びブラック スターに杖を向ける。

「杖をどける！！

クソ野郎！」

段々ブラック スターの怒りのボルテージが上がっていくので無明が止めに入る。

「ブラック スター、あんまり怒らないで

エクスカリバーはこういう性格なんだよきつと…」

「無明がそこまで言うなら…」

とブラック スターは怒りのボルテージを下げていった。

「ふむ。私のことをわかっているようだね
君の名は？」

「ぼくは無」私の伝説は12世紀から始まった。」

「そうな」12世紀から始まったのだがそれ以前も伝説とは呼ばれないがそれ相応のことをしてきた」

「あの」皆は私のことをたたえいろんな祭りをしたものだ」

「聞い」エクスカリバ」エクスカリバ」フロム ユナйте
ツド キング アイム ルツキング フォ ヒム アイム ゴ
イング トウ キャリフォルニア」エクスカリバ」エク
スカリバ」フロム ユナйтеツド キング アイム ルツ
キング フォ ヒム アイム ゴイング トウ キャリフォ
ルニア」エクスカリバ」エクスカリバ」フロム ユナイ
テツド キング アイム ルツキング フォ ヒム アイム
ゴイング トウ キャリフォルニア」エクスカリバ」エ
クスカリバ」フロム ユナйтеツド キング アイム ルツ
キング フォ ヒム アイム ゴイング トウ キャリフォ
ルニア
」

無明の言葉をさえぎりエクスカリバーが歌い始める。

ブツン

と言う音がキッドとブラック スターには聞こえたような気がした。

「鬱陶しいいんじゃあああつつつつつ!!」

ボコツツツ!!

と言う音が聞こえたのはエクスカリバーが無明に殴られて吹っ飛んだ後だった。

「おっ、おい無明

エクスカリバー死んだんじゃないやあねえのか？

殴られた後に音が聞こえたぞ…」

「アア？」

ブラック スターとキッドが後日言うにはこの時の無明は無明じゃなく鬼を越えて魔王が乗り移ったんじゃないか？と語っておりまして。

ズズッ

緊迫の空気に似合わない和やかな音が聞こえる。

その音の先には、優雅にちゃぶ台の前に座りお茶を飲んでいるエクスカリバーがいた。

エクスカリバーは無明を見ると

「ふん。残像d「糞ガキヤヤ死ねエエエええ！！」ブフォッ！
！」

いつのまにか近くにいた無明はエクスカリバーの元へおり今度こそエクスカリバーの顔面に無明の拳がクリーンヒットした。

エクスカリバーは綺麗に空中で360°ほど回転しながら飛んでいく。

「ハア…ハア…これでアイツも「私の伝説はまだまだ続いているぞ」

「アア！！なんでお前がここにいんだよ！！」

「アレをよく見る」

エクスカリバーが無明に吹っ飛ばされたものに杖を向ける。

無明がよく目を凝らして見てみると

ブラック スターだった。

「ふん。身代わりだ」

「ブラック スター！！」

無明はエクスカリバーだと思っていたブラック スターにかけよる。

「無明…、お前のパンチ聞いたぜ」

ブラック スターはそれだけ言う意識を失った。

「それで私の職人になるにあたり守ってほしい条件をレポートに書いておいた。目を通しておくように」

エクスカリバーは何事もなかったかのようにキッドに話していた。

「キッド…」

「わかっている…」

「「帰るか」」

無明はブラック スターを背負い、キッドと一緒に帰り出す。

「待て!!」

待ってくれ!!」

エクスカリバーは二人を止めようとするが二人の足はコンマ一秒も止まることはなかった。

次の日

『おはよう』

『おは』

『ちいす』

無明、ブラック スター、キッドは廊下でばったりと会った。

「「「……………」」」

「「お互い、いいパートナーを持ったな」」

とブラック スターときは握手を交わす。

「無明も速くいいいパートナー見つけるよ」

「……うん。」

「うっす

みなさんお揃いで!!

散々な目にあっただんだったな無明、ブラック スター、キッド」

三人のもとに突如声が聞こえてきた。

三人は一斉にそちらをむくとぴんぴんしてるソウルがいた。

「もう大丈夫なのか？

お前がいないとやっぱり物足りねえよ」

「オウ!!

サンキューな!!」

ブラック スターとソウルはお互いに拳を合わせる。

「ソウル、元気になったんだね」

「オウ!! おかげさまでこの通りだぜ!」

「……これから大変だと思っけど頑張ってね…」

「ああ、頑張るぜ!」

ソウルはまだ無明の言った意味はわからず普通に返した。

三人に一人加わり四人が教室にむかうと、

マカが教室前にいた。

「あ？マカどうした？」

「ちよつと皆来て」

言われたままに教室に行くと、教室には『いつでも待ってるよブラック スター君、キッド君、そして無なんとか君。』と書かれた大きなメッセージボードと花束があった。

「よし、殺りに行くか」

「「ま、まて無明」」

そのまま出ていこうとする無明をブラック スターとキッドは止める。

「あいつを相手にしてもいらつくだだけだつて！！」

「……それもそうだね」

無明は納得すると教室にとどまった。

「ほら、四人とも授業が始まるよー」

マカの声が聞こえると四人はそれぞれ自分の席へ移動すると授業の支度をしはじめた。

「パートナー、か…」

無明の眩きは誰も聞こえなかった…

エクスカリバー エクスカリバーだZ E (後書き)

リンドウさんごめんなさい！
頑張った結果こうになりました。
アラガミの餌にしな）ry

えーと、今回は時間かかりましたねー
ソウルイーターの漫画を片手に持ちながら書いてましたww
だいぶ疲れたね（。 - -）
次は椿対マサムネですけどオリジナルで行きますよー

今さらだが、この小説は原作知らなかったら読むのだいぶキツいと
だって作者説明書がないので…

えっと、主人公が…

（。 - -） 主人公だってたまにはキレます

エクスカリバー強くな？

（。 - -） へかもね

次回はこういう話？

（。 - -） 主人公対フォンの予定

次の更新）ry

（。 - -） へん、4日から5日以内かな

原作では椿だが今回はオリジナルだZE 前編

killコーン

カーンコーン

つい一刻ほど前に椿が死神様に呼ばれていた
恐らく椿の兄マサムネの話だと思う。

死神様の元から椿が帰ってきた

声をかけようと思ったがあまりにも険しい顔をしていたので声をかけずにそのまま椿が死武専から出ていくのをぼくは見送るしかなかった。

「椿さん…」

椿は無明に気付かずそのまま死武専を後にする。

「……（ぼくが口を挟むことじゃなくこれは椿さんの家族の問題だしね）」

無明はその場を離れようとした時、

『えーと、

無明君、無明君、今すぐ校長室に来なさい
繰り返す …』

突然の呼び出しをくらい、無明は呼ばれる心当たりを探しながら校長室へ向かった。

【校長室】

無明が校長室へ行くと鏡に映る死神様とその横にシュタイン博士がいた。

「こんにちは死神様、シュタイン博士、
ぼくになんの用ですか？」

死神様とシュタイン博士は無明に挨拶を返すと真面目な顔（死神様は変わらないが…）になると話始めた。

「えーと

もちろん無明君は椿ちゃんの兄マサムネのことは知ってるよね」

「ええ、知ってますけど…
それが？」

「じゃあ、マサムネ君と共に行動している子のことも知ってるよね？」

「……フォンのことですよね」

「うん。

でね、今さっき椿ちゃんか鬼神の卵で兄であるマサムネ君にけじめをつけに行っただけで、そのフォン君がもしかしたら椿ちゃんの邪魔をするかもしれない…」

「…わかりました。

要するに椿さんとマサムネさんの邪魔をさせないようにしたらいいんですね」

「うん 物分かりが速くて助かるよ

ついでに、出来たらフォン君の魂も回収してくれたら嬉しいんだけどな」

「…『出来たら』そうします」

「ありがとう
じゃあお願い」

「わかりました。」

無明はきた道を引き返し校長室を後にした。

【東アジア針の村】

「ここか…」

無明は今、東アジアにある針の村という村の近くに来ていた。

あまり村に近寄り過ぎたらブラック スターや椿に気付かれるかもしれないので離れていた

何故気付かれたらいけないのか？

それはまず第一にこれは椿のケジメであり他人が手出しするもので

は無いからだ。

二つ目はこちらに気を取られて欲しく無いからだ。椿のことだからブラック スターはともかく自分には気を使い本来の力が出ないかも知れないから…

ポツン

ポツン

と空から水滴が落ち始めしだいに降る量が増え始めた。

「さて、雨が降り始めたしそろそろかな？」

無明は村から少し離れた大きな木の上にいた。

ブラック スター達には気付かれずに無明はずっと二人のことを観察していた。

雨が降り始め少し半刻ほど経ち雨がしだいに大降りになり始めた頃ついにブラック スターが動き出した。

「…（ブラック スター達は行ったね。ぼくはぼくの仕事をしなくちゃ）」

無明は椿とブラック スターを中心に周りをまんべんなく見渡す。

「いない…フォンは来ないのかな？」

無明はさらに周りを見渡しフォンの姿を探すがいない。
そしていよいよ椿がマサムネの中に入った。

その時、

村のすぐ近くから小さい子だが子供見たいな雰囲気ではなくまがまがしい雰囲気放っているフォンが出てきた。

「！！！？？」

クソっ！！」

無明はその場を離れると大急ぎでフォンの元に向かった。

「さて、マサムネが兄弟喧嘩という名の殺し合いをしてる間に俺はこの村の良質な魂でもいただこうかね」

フォンはマサムネが椿と戦っているのを知ってるので村の注目がそちらに行ってる間に片っ端から魂を狩ろうとしていたのだが、村の手前に来ると足を止める

「あの時のことを考え直してくれるようになった？
それとも邪魔をしにきたのかな？
まあ、後者だと思うけど。ククッ」

フォンの目の前には無明がおり戦意を剥き出しにしながら立っている。

フォンは口元に手を当てて少し笑っていた。

「…椿さんとマサムネさんの邪魔はさせない」

「はて？俺はいつあいつらの邪魔を言った？

俺はただこの村の良質な魂を喰いにきただけ」

「……どっちみちここは通せないようだね」

「ハハハッ！

なら俺を止めて見る！！」

フォンはそう言うとその場を駆け出し、無明へと向かっていく。

無明はフォンに立ち向かうべく片手を鍵に変え戦闘体勢をとる！！

そして無明の鍵とフォンの拳が重なる！

ガキンッ！！

二人はお互いに一步も引かない

無明とフォンは同時に引いた。

お互いに少しにらみ合う、そして先にフォンが動いた。

フォンは何も持たずに無明へただの拳をつきだしてくる

無明はその拳を手ではじき軌道を反らしてから反撃をしようと思い
先ずは手で弾こうとすると、

「バドバードバードバドレイフレイム」

フォンが呟くとフォンのつきだした拳が燃え上がった。

「えっ！？」

無明は手で弾こうともう手をつきだしていた。

「ッッ！！」

フォンの拳が無明の手に当たるとジュツと音がすると無明の手が焼ける。

予想外の攻撃に無明は反撃しようとせず即座に手を引いてフォンから距離をとった。

「魔法!？」

フォンは一度自分の手の炎を消し

「バードバドバードバドバドフレイムフレイム」

そう唱えるとフォンの全身が燃え上がった。

「そう。」

俺は魔法を使える

そして俺の魔法は不死鳥だ」

「不死…鳥!？」

「俺は自分の魔法で全身を包むと体の傷が全て回復する。俺を倒すには即死攻撃をしないと倒せないぞ

さあ、死合いの続きをしようか」

フォンは一度自分の全身を包んでいた炎を消すと今度は最初から自分の両手を炎に包み再び無明に突っ込む。

「……………」

無明はそのフォンの拳を避け近からず遠からずの距離を作る。

フォンはその距離をすぐに詰め無明に拳や足をつきだして攻撃する、が無明は炎を纏っている拳は触れずに避け、何も纏ってないただの足は自分の足や手で防ぐ。

「防戦一方かあゝ？」

フォンは喋りながらも無明に攻撃をし続ける

「…そうだね。じゃあばくもそろそろ反撃しようか」

無明はフォンの拳を避け自分の足をフォンの足に引っ掻けてフォンをこかしフォンが立つ前に炎を纏ってない腹を殴ると同時に魂の波長を撃ち込みフォンの横腹を蹴り飛ばした。

「ガハッツ!!」

フォンは方膝をつき口から吐血をし、手で口を拭う。

「中々やるじゃないか」

フォンは吐血をしたもののその顔はまだ余裕そうだった。

「そりゃ、どうも」

無明も片手は火傷をしているがその他の部分は傷ひとつ見当たらなかった。

「でも、わかってるのか？俺はこんなものの怪我なんてすぐに治せる」

そう言うとフォンはぶつぶつと呟きフォンの全身が炎に包まれると先程吐血した口元は何事もなかったようにキレイになりフォンは笑顔で無明を見る。

「……それはあと何回いけるのかな？」

無明がそう言うと今まで笑顔だったフォンの表情が崩れ真顔になる。

「ぼくは魔法を使えないけど少しくらいわかる。魔法は無限に使えない！！」

「…そうだ

魔法は無限に使えない

…なら勝負だな

俺の魔力が尽きるか

お前の命が尽きるか

さゝて楽しくなってきたぞー」

フォンはニターと笑うと両手両足に炎を纏い無明の元へ走っていく、無明も片手を鍵に変えてフォンに向かって走り出す

「レイムフレイムレイレイム」

フォンが魔法を唱えると空中に炎の矢が複数できて無明に向かって飛んでいく。

無明は一つ一つ確実に避け反撃しようと思いフォンを見るがフォン

は無明の目の前に来ておりそのまま無明に向かって殴る。

無明はフォンの攻撃を紙一重で避けるが中々反撃出来ず、防戦一方だ。

しかし、突然無明は拳を構え反撃の体勢をとるとフォンに向かって拳をつきだす。

「!？」

まさか無明が攻撃して来るとは思ってたので少し驚いたが無明の拳を自分の片手を使いガードする。

「ツツツ!!」

フォンの炎が纏っている手に当たって少し声を出すか、

「ハアッアアア!!」

そのまま無明は拳を離さず全力で魂の波長を撃ち込む。

「グフツ!!」

先程撃ち込まれた魂の波長とは比べ物にならないほどの魂の波長をくらい、一瞬集中力が消えフォンの両手両足の炎が消えた。

その瞬間を無明は見逃さず手や足を使いフォンに魔法を唱える隙をつくらさないほどの猛攻を与える。

フォンは無明の猛攻が効いたのか徐々に防御することも無くなってきた。

「……………これで終わりだああああ!!」

無明は片手を鍵に変えてフォンに止めをさそうと鍵を降り下ろす。

その時だった

無明がとどめの一撃を与える為大きな隙が出来る

フォンはぼろぼろになりながらもニチャーと笑い

無明の腹に槍を突き刺した…

無明はわけもわからずに自分の腹を見てそれを理解した直後激痛が身体に走る。

「…ハア…ハア…何…故？」

フォンは無明の腹から槍を引き抜きぶつぶつと唱えるとフォンの全身を炎が包み炎がおさまると傷ひとつ無いフォンがいた。

「武器になれるのはお前だけの特権じゃないんだよ」

フォンの片手は槍の先端のようになっており、そう言つと片手を通常の手に戻す。

「いや、」

それにしても危なかった

ここにくる前も魔法を使っていたから正直、身体を治せる魔法はさ
っきのでもう使えなくなつたよ
惜しいね」

フォンは腹を手で抑え方膝を着いている無明を見下しながら言う。

「君が俺らの仲間になるんなら助けてあげるよ？」

無明はフォンの顔を見るとはつきり言った。

「…ハア…ハア、前と答えは変わらない！」

フォンは無明の言葉を聞くと首を横に降り残念そうな顔をする

「ハア」

残念だよ、非常に残念だ。

君の力はいぶ高くなつてゐるんだが…

おや？

どうやらマサムネのほうは終わったみたいだな
マサムネはあの娘を吸収したようだ」

無明がその言葉を聞くと少し笑い

「…ハア…ハア…椿さんは頑張つてゐるようですね

ならばくはくで頑張りますか…

∴ 第二解除

原作では椿だが今回はオリジナルだZE 前編（後書き）

最近おもったんだが、ソウルイーターの世界観だけでほぼオリジナルじゃね？

と思います（・・・）

ということでは次の次からは狼男の話に行きますか…

あ、あとやつと100分越えたねww
もう嬉しくて嬉しくて…

書くのを止めたいぐらいだ（ry

まあ、次は200分目指しますか…

ry

（。・・）ゝry

厨二ww

（。・・）ゝ小説書くのに妄想しまくりで最近悩んでいますわ…

そろそろ主人公の能力言おうぜ！

（。・・）ゝ考えて無いので無理

次の更新は（ry

（。・・）ゝ気分によるけど三連休のどれかな？

原作では構だが今回はオリジナルだZ E 後編

…第二解除」

あいつは確かにそう呟いた。

俺は最初何を言っているのか理解が出来なかった

最初はただの苦し紛れの戯れ言かと思ったが、そうじゃなかった。

『解除』

確かにあいつは解除をしたのだ

何を解除したのだった？

そんなもの見ずともわかるさ

あいつの狂気を…

あいつが俺を殺したいと言う感情があいつの狂気を通して発している

そして今からわかることになる

あいつが何故最初からコレをして俺に立ち向かわなかったのか？

それは…

「…第二解除」

無明がそう呟くとカランツと何かが外れたような音がした。

もしかしたら音何て出てなかったかも知れない…

だがそんなことを考えさせられるほど無明の周りの雰囲気が変わった。

無明の周りの木々や葉っぱは自然と無明から離れて行ってるような感じがする。

無明はフォンに刺された腹に当てていた手を退けると静かに立つ。腹の出血は勿論のこと手を当てていた時より血は流れ、無明が動いたことにより更に出血が激しくなる。

「おいおい、何をするか知らんがそんなに気張っていると後五分も経たないうちに死ぬぞ？」

動かなかつたら楽に殺してやるんだけどなー」

フォンは戦闘の素人じゃない

むしろ中々の熟練者だ

それなりに修羅場はくぐって来ている

だからわかっていた

『この感じはヤバイ』

と

だからといって背を見せ敵から逃げるという選択肢はフォンには無かった。

なぜならフォンのプライドが許さなかった。

だから精一杯フォンは無明に強がり言う

「…五分？」

五分もいないヨ」

刹那フォンの視界が変わり気が付いたらフォンは地面に顔を押し付けていた…

「…えっ？」

自分が地面に伏していることを理解すると腹部を中心に身体中に激痛が走る。

「グツツ…ツウウ…ウ」

自分の腹部が無くなかったのでは？と言うほどの激痛が走り悶えるが息を整え、氣力を振り絞りフォンは立った。

目の前には無明がいたが無明は先程の位置から動いた様子は感じられ無かった。

「…一体…何を…した？」

フォンは力を振り絞りよろめきながら無明に訪ねる。

「…お前をはたいた、ただそれだけダ」

「…なん…だと？」

「わかりやすいように、もう一撃やってあげるヨ」

フォンはその言葉を聞くと咄嗟に全身を硬め防御をし無明を見るが、

一瞬足りとも目を離さなかったはずなのに先程の場所には無明がいなかった。

「どこ見てるノ？」

無明の声が聞こえた。

その声はフォンの真横からだ

「!!!?」

フォンは咄嗟に横を見ようとするが気づいたらフォンの体は宙に浮いていた。

そしてそれに気づき地面に落ちて数秒

今度は自分の左腕から激痛が走る

「ぐわあああああ!!」

痛みに悶え悲鳴をあげる。

「ゆっくり見えるように動いて、力加減をしたんだけどな
その様子だとお腹と腕の骨はぼろぼろだね
でもまだまだ終わらないヨ」

その後、フォンはただ一方的にやられていた
勝負では無い
死合いでは無い

ただの一方的な処刑であつた

「ア……ア………アア」

フォンは無明に一方的にやられどこが痛いのか？どこをケガしているのかわからないほどの痛みを通り越した何かを感じていた。

「そろそろ…

死んデ」

無明はフォンにとどめを刺そうとしたとき、

「ゴフッ！！」

口から吐血をした

すると無明の周りの空気はまがましいものではなく普通の空気に戻っていく。

無明の腹部は血だらけになっていた。

「も…う、少しだっ…た…の…に…まだ…だ…第三解じ」

無明は腹部に大ケガをし、それに力を外し無茶をしたせいで傷口が悪化し血をながし過ぎたせいで言葉を発する前に倒れた。

無明に段々死が迫っていく

そして目の前にはフォンの足が見えた。

恐らく好機と思い動かない体を動かし無明に止めを刺しに来たのだろう。

無明はこのまま自然に死ぬか、フォンにとどめを刺されるかわからないまま目を閉じ意識を手放した…

ただ、意識を手放すほんの刹那目立ちたがりやの友の声が聞こえたような気がした…

フォンはただ一方的にやられてどこが痛いのかわからなくなった時、完全に抵抗する気が無くなり死を覚悟していた。

『このまま殺されるな……』

と思っていたのだがある瞬間から攻撃がとまりそこから一切攻撃される事が無くなった

マサムネでも来たのだろうか？

と思い恐る恐る目を開けると、マサムネはいなかったが口から血を吐きそして腹部から大量の血が流れ血で円を書き倒れている無明がいた。

フォンはその光景に少し驚いたが無明倒れている理由がわかると

「は……はは……ハハハハハハ！！」

大声で笑った。

そして笑い、フォンはもうほとんど動かない足を周りの何かに掴まり足を支え立つ

「……俺……勝ちだ！……」

フォンは自分の手を槍の先端に変え無明にとどめをさそうと振り上げるが、

「さっきここらへんから変な音がしたんだよね」

「何かあったのでしょうか？」

と二人の声があんまり遠くない所から聞こえて来た。

フォンはこの声には聞き覚えがあった。

女のほうの声はマサムネの妹、椿ということ

椿がいるということは同時にマサムネは敗北したとわかり、そして男のほうは名前はわからなかったが椿のパートナーだろうということはわかった。

マサムネが死んで、更に自分はぼろぼろ、そこらへんの不良にも負けそうなくらい弱っているときに死武専の生徒が来た

このまま無明にとどめをさせば必ずや自分はその死武専の生徒に見付かり狩られる、しかし無明にとどめをささずに逃げると死武専の生徒は無明を助けるから確実に自分は逃げられる。

無明を殺すためのコンマ一秒が自分の命に関わるとわかるとフォンは槍に変形させた手をもとに戻した。

「…次は……必ず……」

悲鳴を上げる自分の体にむち打ちその場を後にした

「……」

無明が目が覚めると

ベットの上で寝て更に薬品匂いが充満している白が多くてこの前まで自分の友が寝てた場所、保健室にいた。

「やっぱりあの声はブラック スター達だったんだね」

無明は何故保健室にいるかわかり再び布団に潜り無明は寝ようとする、

ドガンー！！

と何か吹っ飛ぶような音が聞こえた。

もしや？

と思いドアのほうを見るとそこには

「大丈夫が無明」

「キャハハハ、大丈夫、無明君」

「ソウルの次は無明か」

「大丈夫だったの無明！！」

「俺の次はお前かよ！」

「ヒヤッハー俺様に感謝しな無明！俺がお前を運んでやったんだぜ
！」

上からキッド、パティ、リズ、マカ、ソウル、ブラック スター、そして

「良かった…」

椿がいた。

「皆来てくれたんだ」

「友達の見舞いぐらいいくよ」

とマカ。

「それにしても無明！なんであんなところにいたんだ？俺様がいなかったら死んでたぞ」

「ちょっと魂を狩りに行つてて…」

それで逆にやられちゃったんだよ」

嘘は言っていない。

魂を狩りにいったのも振り返りにあったのも事実だ。

「無明が振り返ちに合うなんてよっぽど強い相手だったんだね」

と再びマカ。

「ハハハハ」

そしてそれから皆で少し他愛ない話をして時間がたつと

「じゃあそろそろ帰るわ
あまりいても迷惑だしな」

「ケガの治療頑張ってね」

ソウルがマカと一緒に帰ると皆もそろそろと帰り始めた。

「俺様も帰る」

椿はどうするんだ？」

「…私はもう少ししてから」

「わかった。」

なるべく速く帰ってこいよ」

そういうとブラック スターも帰り保健室には無明と椿だけになった。

「……………」

「……………」

お互い会話も無く無明はこの空気をどうしようかと考え始めたころ、
ようやく椿が口を開いた。

「…本当にすみませんでした」

「えっ！！なにが？」

無明は突然の椿の謝罪に驚いた。

「全部、博士に聞きました。」

「…ああ、なるほど」

「私達の為にフォンという方を命懸けで守ってくれたって」

「…なんか若干違うような…」

「それに兄を説得しようとしていたことも…」

「…した覚えは無いんだけど………」

「…兄は最後の最後に言っていました。」

『今ならわかるよ無明君の言葉が…』

と

「マサムネさんはそんなことを言ってたのか…」

無明は少し遠い目でどこかを見る。

「無明君になんてお礼を行ったらいいかわかりません」

椿は顔を下に向け少し肩を震わしていた

「お礼なんていいよ。」

お互い持ちつ持たれつだよ」

「でも…」

「持ちつ持たれつって言ったよね!？」

今度はぼくがピンチの時は椿さん達が助けてよ」

椿は無明の顔を見て少し考えるといつもの笑顔に戻り

「はい」

と答えた。

「そろそろブラック スターも心配するかもしれないから帰るとい
いよ」

「そうですね」

そう言つと椿は無明の一礼すると帰って行つた。

「はぁ、そのヘビ魔女

そんな廊下にいないで保健室に入ってきたら？保健室の先生なんだ
し」

無明は保健室のドアの向こうに向かって言う。

しばらくすると

コツッ

コツッ

とハイヒールの音が聞こえ保健室にメデューサが入ってきた。

「先生に向かってそんな言い方は無いんじゃない？無明君。」

「失礼しました」

一児の母でスパイで鬼神を狙っていて狂気に興味を持ち研究して漢方マニアでソウルの狂気にも興味を持っているヘビ魔女先生」

「…全く何を言ってるかわからないわ
ケガの調子は大丈夫？」

メデューサは少しづつ無明に近づいていく。

「…心配なさらず、もう治りましたから」

無明は布団をめくると自分の腹に巻かれている包帯を外した。

すると傷ひとつ無い無明の腹があった。

「！！？」

さっきまでの傷は！？」

「さあ」

それよりあんまり殺気を出しながらこっちに来ないでください。
怖いからです」

「……………」

メデューサは何も言わずに保健室を後にした。

【とある死武専の廊下】

「クソッ！」

メデューサはとても苛ついていた。

無明のことを調べようと思い調べて見たがこれといった情報が無く一般的な生徒と変わらなかった

それなのに向こうはどこからか自分の情報をほとんど調べられていた。

「計画の邪魔をされないようにしては……」

そう言うメデューサは再びあるきだして行った。

原作では構だが今回はオリジナルだZ E 後編（後書き）

妄想しすぎですねww

気を付けなければ…

取り敢えずそろそろ主人公の能力決めなければ…

ガチで考えて無い

はあゝ

厨二ww

（。 - - ） ひうつさいww

夜のテンションで頑張ってたんだよww

ねえねえ、ソウルイーターはどこ？

（ ´ ˊ ˋ ） ｛……………

口調よww

（。 - - ） ｛（ry

次の話は？

（。 - - ） ひやつと狼男

次の更新は？

（。 - - ） ひやっぱGWだね

そろそろ狼男だZE (前書き)

はっきり言おう

やる気がなかった
ただそれだけだ！

ということでは今回は飛ばしまくりのやる気なしです。

見るのもよし飛ばすのもよし…

そろそろ狼男だZE

あの椿の事件以来平和な日常を過ごしていたが最近マカとソウルの仲が悪いというかマカがソウルのことに気を使い過ぎていた。

そして最近ソウルは保健室に定期検査に通っている。

無明はソウルと同じように定期検査に通っている。実際完璧に治っているから必要では無いのだが形だけだ。そのついでにソウルとメデューサの会話を聞いていた。

「…そこを抜けると俺はマカの腹から出てくるんだ」

「夢の話だし心配しなくていいわよ」

「…そうですね」

二人は検査が終わると会話も終わりソウルは先に保健室を後にする。

「黒血が影響してきたのか…」

「……また、よくわからないことを…」

無明君、検査はどうする？」

「いえ、ぼくは結構です。」

「…そう」

そう言うと無明は保健室を後にした。

教室に戻ると、ブラック スターとマカと博士の三人がいた。

「博士、何してるんです?」

「無明君ですか。」

今ブラック スターの修行の為に吸魂水というものを持って来たんですよ」

そう言う博士は無明の前に独特の壺に入った水を持ってきた。

「これは魂の波長を吸いとる水なんですよ。 無明君ちょっと手を突っ込んで見ます?」

博士に言われたので取り敢えずどんだけ魂の波長を吸いとられるかやってみた。

無明は壺の中に手を突っ込む。
すると何か少し抜けていくような感じがした。

「あー、なるほど、確かに吸いとられますね」

「…ブラック スターでもだいたい苦戦したんですがね」

それだけ言うと博士は壺をブラック スターに渡した。
ブラック スターは壺を受けると、指を突っ込み始めた。
ブラック スターの魂の波長を吸いとられてる時の顔に対して無明が少し笑って閉まったのは伏せておこう

「ねえ無明」

「はい、何ですか？」

「これからあるパーティー
無明も来るよね？」

「行きますよ」

「じゃあ私はソウルを呼んでくるから、ブラック スター達と一緒に後から来てね」

「了解です！」

マカは教室から出ていき、ソウルを呼びに保健室へ行った。

ブラック スターは相変わらず壺に指を突っ込んでいる。

「ねえ、博士」

「何ですか？無明君」

「今度のソウル達の課外授業にばくも参加したいんだけど…」

「それはソウル君とマカが心配だからですか？」

「…ええ。とくにソウルのほうは」

「…わかりました。死神様にも言っておきます。」

「ありがとうございます。」

二人は会話が終わると博士はどこかに行き無明は壺に指を突っ込んでブラック スターと椿を呼びマカとソウルのアパートへ行った。

パーティーはマカ、ソウル、ブラック スター、椿、パティ、リズ、キッド、自分でやりました。

取り敢えずマカの料理は美味しかったですよ。

料理を食べた後は皆で喋ったりブレアの裸を見たり、ブレアの裸を見たり、ブレアの裸を見たり…

うん、ほとんどブレアの裸ばかりだね。

そんな感じで楽しんでいるとマカが

「魔女!!?」

と叫ぶと、マカはどこかに行ってしまった。

ぼくは狂気は感じ取れても魂感知は出来ないから困るよ

このタイミングではカエルとネズミの魔女と言うことはわかっていたからあまり驚かなかったけど、

「マカ!!」

と叫びながらソウルがマカを追いかけて行ったので、もしものためにもソウルを追いかけます

ソウルはマカを追いかけて、そのソウルを無明は追いかけるとある路地についた。

そこには博士とマカとメデューサとソウルがいた。

「博士、何かあつたんですか？」

答えはわかっていたが取り敢えず聞いてみた。

「今さっきまでここに魔女がいたんです。」

「メデューサ先生も魔女に気付いてここに？」

「…ええ。そうですね。」

「保健室の先生にもしものことがあつたらシャレにならないですよ？」

「先程シュタイン博士にも言われましたよ。」

メデューサは少し笑いながら言う。

「もしものことが無いように。」

「…」ご心配ありがとう。無明君「」

博士は恐らく薄々気付いているだろうがソウルとマカはこの会話を普通にとった。

そしてこのあと、博士とメデューサと別れ再びマカのアパートに行きパーティーの続きをして楽しんだ。

後日談だが、無明が言うには、

『今思うと、みんなパートナーと暮らしていていいよね。

しかも異性で…』

と一人愚痴っていたらしい…

【とある場所】

そこにはメデューサと謎の男とカエル魔女がいた。

「…どうだろ何か礼をしたいのだが？」

「…じゃあ一つだけ

ある武器と職人を潰してほしいの
簡単でしょ？」

「死武専か？」

「ええ。その三組は明日課外授業でロンドンに向かうからその時を狙うといいわ」

「ああ、わかった消してやるさ…」

「でも油断しないようにね。その三組の中の一人は色んな意味で要注意人物だから」

「俺を誰だと思っている？大丈夫だ。問題ない」

男はそう言うところかに消えて行った。

「本当に大丈夫かしら」

メデューサは一人呟いていた。

【ロンドン】

雪が降るロンドンの真夜中に無明、マカ、ソウル、ブラック スター、椿はロンドンのある橋の上に来ていた。

とても寒いはずなのだが、

「ブラック スター

イン・ロンドン

ひゃっはああああ！！」

とブラック スターだけめっちゃめっちゃハイテンションであった。

椿とブラック スターはいつも通りなのだがソウルとマカは誰が見ても仲が悪そうに見えた。

二人とも顔を合わせても何も言わずにただ顔を逸らすだけであった。

無明は二人の仲がなぜ悪いかはわかっていたが何も言わずに黙っている。

そしてマカが魂関知すると数10メートル先にある男が立っていた

「向こう側から来てくれるとは楽だぜ」

「…気を付けて、あいつ多分魔法使うよ」

「……………（不死とはめんどくさい）」

それぞれ戦闘体勢に入ると、まずブラック スターが魂の共鳴をして妖刀モードになると一気に駆け出し男に斬りかかるが男に斬りかかる前に魂の波長が底を尽きてブラック スターは倒れた。

マカは呆れて見て、無明は少し笑っていた。そしてソウルは

「オッサン、ここは戦場だぜ」

片手を鎌に変化させて男の腹部に突き刺していた

「（ソウル容赦ねえ）」

だが男は全く聞いていないようだ。

「無駄だ。なぜなら俺は不死だからな
俺の本当の姿を見せてやる」

そう言うと男の体は叙々に変化すると男の体は狼になった。

「マカさん、椿さん、ソウル、行きますよ」

「はい！」

椿からは返事が返ってきたがマカから返事が返ってこない。理由は魂の波長が合わないということとわかっていた。

「闘狼拳！！」

狼男は構えると長い爪が伸びている手をつきだしマカに向かって一気に距離を縮めつきだした

「何ボケツとしてる！！」

が無明がマカの前に表れ狼男の攻撃を弾く。

「ほう。中々反応が早いな」

狼男は更に自分の爪で刺そうと無明に攻撃を繰り返すが

「あんたが遅いんだよ」

攻撃を避けたり弾いたりして全て当たらずそして無明は狼男の胸を殴りながら魂の波長を撃ち込む。

「効かん！俺は不死だからな」

狼男は一步も引かずに無明に向かいそして

「ウィルツフルブスウルフルブス」

魔法を唱えるとソウル、椿、マカ、無明の四方八方に巨大な氷柱が出てくる。

「死ね」

狼男はただそれだけ言うと、その氷柱を一斉に無明達に打ち込む。

全ての氷柱が打ち込まれ無明達がいた場所は巨大なウニのようになっ
ていた。

「…なるほど、一筋縄では行きそうにないな」

狼男がそう言うのと無明達はその氷柱だらけの所から無傷で出てくる。

「どうやってあの数を防いだ？」

「…ぼく的能力で、ぼくたちの周りの空気をrockしただけだ」

「なるほどな、それがあの魔女から聞いたお前の能力か（ボソツ）」

「ここはぼくがやる！ソウルとマカさんは下がっていて椿さんは二人の様子を！」

「私も手伝」正直言っ
て今のマカさんとソウルは足手まといだよ」

「…」

「何が足りなくて何が必要なのか

それがわかったらもう一度二人の魂の波長は合うよ」

無明はそう言っていると狼男を見る。

「待たせたね」

「最後の会話は終わったのか？」

「言ってる！」

無明は狼男に駆け出し、また狼男も無明目掛けて駆け出した。先に攻撃したのは狼男。狼男は自分の前に魔法で氷の壁を作るとそれを殴り粉碎した

無明目掛けて大小と氷の破片が飛んでいく。

「くっ！」

無明は必要最低限氷の破片を避ける。あまり当たっても威力は小さいのだが氷の破片が大量にあるため視界が狭まり狼男の姿を一瞬見失う。

「魔眼砲！！」

氷の破片が少なくなりようやく前が見える頃になり無明は狼男を探すと、狼男は無明から少し距離を取り次の攻撃を繰り出していた。

狼男の口からエネルギーの塊がビームみたいに飛んで来る。

無明はそれを二三歩横にずれ避けると一気に狼男との距離を詰め狼男の胸ぐらを掴むと橋から海に向かって投げる。

「このまま帰ってくんない!!」

狼男はぶん投げられるが、

「帰ってくるぞ」

狼男は空中の足下に氷の台を作るとそれを蹴り再び橋に戻ってこようとするが

「それを断る!」

無明は狼男が戻ってくるとわかっていたようで狼男が橋の上に降りる位置を予想し、その場に行くと自分の片手を鍵に変えて構えると

「お前、まさか!?!」

狼男が橋の上に戻ってくると同時に野球のように渾身の力を使って打った。

再び狼男は海に向かって落ちていくが

「不死!」

それだけ言うと、またもや足下に氷の台を作りそれを蹴りまた橋の上に戻ってこようとする

「もう一発行つとく?」

「いいや、遠慮しとくよ」

狼男は先程の二の舞にならないようにして自分の足についている鉄球の周りに魔法で氷を付加して巨大な氷の鉄球になるとそれを足を使って持ち上げ空中で回転しながら無明目掛けて氷の鉄球を落とす。

ドンツッ!!

一体何キロの力がかかったのか、氷の鉄球が地面に叩きつけられると橋が少しゆれた。

「こんなもんじゃ、終わらないよなあ」

「ああ、そうだね」

無明は氷の鉄球を避け狼男の背後にいた。

狼男が後ろを振り返る前に背後から両足を蹴り狼男がバランスを崩して両膝をつくと狼男の首を持ち勢いよく回らない方向に無理矢理回した。

ボキッ!!

と言う音とともに狼男の首は前後が逆になっていた。そして狼男がその場に崩れ落ちる。

「椿さん、ソウルとマカの様子はどう？」

無明は少し離れた所にいる椿に向かって話かける。

「今ちょうど二人ともお互いのことがわかったようですよ」

椿の横には鎌を持ったマカがいた。

「良かった。タイミングぴったしだね」

無明の前にいた狼男はいつの間にか首が元に戻り無明と距離をとり構えていた。

「さて皆で行くよ!!」

無明のかけ声と共にマカは魂の共鳴をしていた。

マカは魂の共鳴をするとソウルの魂に喰われそうになる感覚におちいった。

「ソウル!! 精神を強く持つんだ! 狂気に持つていかれるな!」

無明がそう言うのとソウルに聞こえたのか、マカが先程襲われた感覚が無くなり魔女狩りを無事成功させる。

「無明、援護お願い!!」

「了解」

マカは狼男に向かっていき鎌を振るうが狼男はマカの攻撃するちょっと前に魔法を唱え壁を作りマカの攻撃を防ごうとするが、

「背中がから空きだよ」

無明が狼男の背後に回ると両手で狼男に対し魂の波長を撃ち込む。

「何っ!!」

恐らくダメージはすぐに回復するが無明に魂の波長を撃ち込まれ少しよるめき狼男が作った壁が少し脆くなる。
その瞬間を狙いマカは全力で魔女狩りを振る。

「うオオオオオ」

マカは壁ごと狼男を切る！！

「なんだとおおお！！」

狼男の胸に斜めに浅い斬り傷が出来る。

「お前は私がああ！！」

マカはそう言うと言と鎌を捨てて狼男の片足を持つとタックルをしながら橋の外に落とすが勢いをつけすぎて自分も落ちる。

そしてソウルが駆けつけるとマカの足首片手で持ちもう片手で橋の棒を持ちマカを支える。

落ちたと思われていた狼男はマカの左半身に爪を立てて落ちずにいた。

「俺が一人で落ちると思うか？」

ああ、落ちないさあ！！！！」

二人分の体重を支えることになったソウルは徐々にきつくなりそしてマカと狼男と落ちそうになるが突然狼男の腕が切れた。
そして狼男は落ちていく

「ひゃっは」

やっぱり俺がいないと駄目だな！」

先程の突然腕が切れた現象はブラック　スターが手裏剣を投げたからだった。

「フハハハ、まだ終わらんさ」

狼男が再び足下に氷の台を作ろうとするが、

「いいや、もう終わりだよ」

いつの間にか狼男の上に無明が来ており無明は狼男目掛けてかかと落としを繰り返す。

「グハッ！！」

かかと落としをくらった狼男は物凄いスピードで海に落ち、そして見えなくなった。

無明はもう狼男が戻ってこないとわかると懷から数枚折り紙をとりだし自分の足下に置くと

「さて、地味なrock」

折り紙が空中で固まるとそれに無明は乗り足場が出来落ちなくなると今度は自分の少し上に折り紙を投げ固定させてそれに飛びうつり、また上に…

と繰り返し再び橋の上に戻っていった。

橋の上ではブラック スター以外が皆口を開けてポカーンとしていた

「もう戻ってこないかと思ってた」

とマカ

「戻ってこれないならあんなことしませんよ。

さて早く課外授業すませよう」

「そうだぜ」

そしてこのあと三組は授業の悪人を狩り死武専に戻っていった。

そろそろ狼男だZE (後書き)

GWボケなのか全くやる気がなかった

反省はしていない
後悔は若干してる

時間があつたらとばすこともなかったのに

言い訳ww

さて、次は何書こうかな…

次の話は？

(。 - -) へ考えないと

次の更新は？

(。 - -) へ今週にはしたい

でもやる気しだい

・ 番外編、授業風景だＺＥ （前書き）

今日が日曜ってこと忘れてた…

急いで書いたさｗｗ

あくまで、番外編、なんでｗｗ

あとこれ見たら主人公のイメージが崩れるかもしれないから崩したくない人は見ないように…

・番外編、授業風景だZ E

死武専は主に悪人の魂を狩るということで有名だが死武専も一応立派な学校である。

学校であるからには勿論授業もある

担任はサディストで解剖好きのシュタイン博士だが一応教師であるからには解剖以外の授業もたまにはする。たまには…

これはそんなシュタイン博士のたまにする真面目な授業風景& a m p : 無明の日常

えーと、今回はぼく、無明視点で行かせてもらいます。

まず朝6時30分起床

ジリリリリリリリリ!!

物凄い音が目覚ましから鳴る

Bannon!!

目覚ましのスイッチが押され目覚ましがりまりいつもの様子で無明が目覚める。

「ああ〜うるさい!!

眠い。ていうかだるい…」

つぎはぎの小鳥が鳴き何となくにやけているような気がする太陽が窓の外から見え無明は一度カーテンを閉める。

「…低血圧は朝に弱い」

少しふらつきながら洗面所へ向かう。

途中つぎはぎのネズミがいたような気がしたので蹴飛ばしておいた。

バシヤッ

バシヤッ

「ああゝさっぱり!!」

無明は顔を洗うと目が覚めたのか先程より機嫌が良くなりそしてタオルで濡れた顔を拭こうとするが

「あれっ？タオルが無い…」

いつもの位置にタオルが無く仕方なく別のタオルを使おうとタオルが入ってる戸棚を開けると白い無地のタオルが全て赤いエクスカリバーの刺繍が入っているタオルにすり替えられていたので取り合えず

「いつかぶっ殺す！」

と心に強く抱きながら全てのタオルを燃やす。

朝7時00分

朝食の時間なので朝食を食べる。

「…いただきます」

別に主人公の

俺って実は家庭的なんだＺＥ　！！

みたいな補正は無く普通にパンと牛乳で食べている。

毎朝の日課の

「どうせ今頃、

『ソウル！！朝ごはん出来たよ！早く食べて遅刻するから！！』
や

『そろそろ起きて下さいブラック　スター！！朝ごはんが出来ましたよ』

みたいな感じになってるんだろうな…

うらやましい…」

と妬みを発するのは忘れない

朝7時30分

「いつてきまーす」

と無明は誰もいない自分のアパートに言い死武専へ向かう。

朝8時00分頃

『おはよー』

『おはよう』

死武専につくといろんな人の挨拶が聞こえてくる。ぼくも挨拶をしたり返しながら教室へ向かう。

朝 8 時 1 0 分

教室につくと

『キッド君、ブラック スター君、あと…無なんとか君私は待っているよ！』

エクスカリバーより』

花束と一緒にメッセージがあつたので取り合えず燃やす。

教室には3分の1ぐらいの生徒がいたがいつものメンバーは来っていない。

死武専は8時45分からHRが始まるのでまだまだ余裕がある。

朝 8 時 3 0 分

「ソウル早く起きてよね！遅刻するところだったじゃない！！」

「お前の目は節穴か！！まだまだ余裕があるだろ」

と痴話…じゃなく普通に喋りながらソウルとマカが登校してきた。自分の左手に拳が握られたのは多分気のせいだろう

「おはよう。マカさん、ソウル」

無明は挨拶をすると

「あ、おはよう無明」

「よっ！」

と挨拶を返して来た。

それから二人と雑談を繰り広げていると、

「は、放せ！」

リズ、パティー

こんな中途半端な時間に登校なんて虫酸が走るわ!!」

「はいはい。遅刻するぞ」

「キッド君諦めなよ」

キッドがパティーとリズに引きずられながら仲良く登校してきた

バキッ！

「!？」

無明、今何か変な音しなかった？」

「ぼくには聞こえなかったですよ？」

「そう？なら私の勘違いかな……」

ぼくの左側にある椅子がぐだけ散ったのは恐らくイスの寿命が来た

からに違いない。

そしてキッド達と挨拶をして皆で会話をしていると

killコーン

カーンコーン

とチャイムが鳴った。

皆それぞれ席につき始める。

ガラガラガラガラ

と音と共にシュタイン博士が椅子に乗りながら教室に入ってきた。

「じゃあ出席を取ります」

博士が出席をとり始める

「あれっ？またブラック スターと椿は遅「ひゃっはー！！俺様参上だぜ」早く席に着くように」

ブラック スターと椿がいつものように目立つ為に遅刻をしてきた。皆もうなれているせいか誰一人ブラック スターを見ない。

ブルッ！！

「無明！！今なにか感じなかった？」

「ボクハナニモカンジナイデスヨ」

「そ、そう？私の勘違いなのかな…」

ぼくを中心として皆が何かを感じてるのは恐らく勘違いだろう。
ぼくは何も感じないしそれよりぼくは今なら凸ピンで人を世界一週
をさせそうな左手を抑えるのに忙しい

朝9時00分

一時間目数学

シユタイン博士だって一応教師だから解剖以外の授業もするが、

「…で、ここにXを当てそしてこの式に当てはめると解剖によつてバラバラにされたカエルの数がわかります」

うん。数学だ

数学以外の何者でも無いな。

ぼくはそう信じてる

ただぼくがこの世界にくる前の授業と何かが違うような気がするが
恐らく勘違いだろう

朝10時00分

二時間目英語（国語）

「じゃあこの文をブラック スター読んでみて」

「俺様を当てるとは正解だぜ博士！！わかった！この俺様がこの文
を俺様的に読んでやるぜ！よし！それで博士！！

本が無いぜ！！」

「廊下に立ってなさいブラック スター
じゃあ無明君代わりに読んでください」

無明は教科書を開き読もうとするが

「すみません。読めません」

と即答する。

「何故ですか？」

無明は無言で教科書を博士に渡した。

「…事情はわかりました。」

無明の教科書はエクスカリバーの本に変わっていた。

「先生、一時間もあればこの世から抹殺出来る自信があるのでエクスカリバー抹殺許可をお願いします」

「気持ちはわかりますが、あれはあの世にも迷惑をかけるかもしれないので許可出来ません」

「…それじゃあ仕方ないです」

朝11時00分

三時間目理科（解剖）

「それじゃあ今日の解剖は二ホンオオカミです。」

「先生、それは絶滅したんじゃないんですか？」

確かに絶滅したっていう記憶がある

「俺が絶滅する前に何匹かペット（解剖）の為にこっちに連れてきたからこれは本物だ」

「…先生、それっていろんな意味でアウトじゃ…」

「ばれなきゃ問題無い（へらへら）」

教師らしからぬ発言をしたと思ったがそれはぼくの耳が悪いからだろう。

そう信じてる

正午12時00分

昼食

皆でお昼ご飯を食べることになった。

グラウンドの隅のほうで皆で固まって食べようとしたが、あることに気づいた。

「皆…お弁当なの？」

「俺は椿に作ってもらった弁当があるぜ!」

「俺はマカに…」

「俺もキチンと左右対称の弁当を持ってきている」

なんだろう

このイライラ感は

「無明君お弁当を持ってきたくないのですか？」

椿がぼくに聞いてきた。

「いや、あるんだけど弁当じゃ無くてパンで…」

断じて妄想しすぎて弁当を作るのを忘れたわけではない。
断じて増加達の弁当を羨ましいわけでは無い。

「パンだったら腹減るだろ？俺の弁当わけてやるよ」

「無明だつせえな」

仕方ねえ、Bigな俺様が弁当わけてやるよ感謝しな！！」

と二人がお弁当を分けてくれた。

キッドは

「俺も分け…いや、しかし左右対称が…でもここは（ボソボソ）」

と一人何か呟いていた。

「でもいいの？二人ともせっかく作ってもらったお弁当を…」

「気にすんな、俺達友達だろ」

「小さいことを気にすんな！！俺様はそんな小せえことは気にしねえ！何故ならBigだからな！」

「二人とも……」

無明は少し涙目になる

「「それに……」」

「それに？」

「「いつでも食えるし」」

このポタポタと零れ落ちる涙は決して負けたからでは無い
嬉し泣きだ
絶対にそうだ

午後13時00分

四時間目社会

「……と言うことで俺はマカという天使に出会った！愛してるよマ
「死ね」ギャアアア」

先生が変わりデスサイズが代わりに社会を教えてくれる予定だった
んだけど途中からマカさん誕生の話になり今デスサイズがマカさん
により天へ召されました。

「皆、何も見てないよね」

マカはデスサイズを天へ召したらあとそれはそうまるで天使のよう
な笑みでこちらを振り返りながら聞く。
クラスの皆の答えは、

『あ、あつちいな
ん？』

下敷きで扇いでたから俺は何も見てねえ……』

『あつ、ペンを落とした！
ん？』

俺も何も見てねえ……』

『あ、あー何だか眠い
ん？』

寝てたから俺も何も見てねえ……』

「そう
」

本当にこのクラスはマカの恐ろしさを知っているようだ。

午後14時00分

五時間目体育

今日の体育は組み手練習だ。
ぼくの相手は勿論、

「ブラック スター、ソウル、キッド
一緒にやろうか」

これ以上にならない笑みで誘ってみるが、

「ひ、ひゃっは
俺様には先客が……」

「お、俺もいいや」

「こ、断らせていただく」

「皆、照れるなって！」

このあと四人でとても楽しい楽しい組み手をした。

えっ、ソウル達はって？

大丈夫、先程まで生きてたよ（ニコッ）

午後15時00分

六時間目自習

今度のテストに向けて自習の時間になった。

ぼくも魂学を勉強しとかないと…

あんまり悪い点はとりたくないしね。

マカは分厚い辞書を置いて勉強してるし
椿とリズ、パティーは必至にキッドとブラック スターの介護をし
てるし

ぼくも勉強します。

16時00分

下校

家に帰ったらもう時間なので晩御飯にした。
今日の晩御飯はカレー
勿論レトルトだ

「…いただきます」

朝食と同じく毎日の日課の

「今頃

『ソウル！御飯出来たよー』

や

『ブラック スター。冷めないうちに御飯を食べて下さい』
とか言われてるんだろな」

と妬みを発するのは忘れない。

午後21時00分

自主練習

この時間帯はいつも実戦の為の練習をしている。

相手はいないのは仕方ないがそれを想像力で補う

「今日の相手はエクスカリバーだと思って…」

いつもより何だか動けたような気がした。

午後24時00分

就寝

風呂やら歯磨きやら明日の準備やらその他もろもろを終わらしてベ
ットに入る

「ふぁゝ今日はもう寝よう」

つぎはぎのコウモリとにやけているような月がつつとつしいのカー
テンを閉めて寝た。

午前06時30分

ジリリリリリリ！

そして再び朝がおとずれる…

・番外編、授業風景だＺＥ（後書き）

反省はしている

だが後悔はしていない

こういう主人公が書いてみたかった

ただそれだけだ

口調が）ry

（。 - - ）ハry

キャラ）ry

（。 - - ）ハry

次の話は？

（。 - - ）ハ正直考えて無い
原作にするかオリジナルにするか…
ただテストとキッドの話は書かない

次の更新は？

（。 - - ）ハテストが近いのでわからね
いつになるか未定

鬼神編でも書こうZE 三前編（前書き）

妄想激しすぎww

今回もだいぶ手を抜いて書いてしまった…

どうやって話をまともにするか悩んだ…

鬼神編でも書こうZE 三前編

【前夜祭前日】

あの狼男の事件から数日経ち今日は前夜祭前日だ。

無明は少し焦っていた

前夜祭には原作通りなら鬼神の復活は確実だ。もし鬼神が復活したとしたら全世界の人達に悪影響が起こる…

勿論自分の狂気だつて進んでしまう

出来る限り鬼神は復活させたくはない。

しかしシド先生も言ってるようにソウルプロテクトをかけてる状態ではこちらからは何も出来ない…

色々悩み結局、メデューサの本性が出る前夜祭当日に捕まえることにした。

そして

前夜祭当日

バーン

バーン

今日は死神武器職人専門学校創立記念前夜祭。

いつもなら暗く静かな町デスシティーが花火が打ち上げられ住民は宴をあげ賑やかになっていた。

その祭の中心である死武専でも盛大なパーティーがやっている。

「あつ！！こつちだよ無明

早くしないと始まつちゃうよ!!」

突然無明は声をかけられる。声の主はマカ

このパーティにはほぼ全員参加ということで無明も参加していた。
違う意味もあったが…

そしてパーティにいくということでした。いつものメンバーで待ち合わせ
をして行くのだが無明は一人遅れていたためマカ達を探していた時
にちょうど声をかけられた。

「皆ゴメン。仕度に手間取って遅れちゃって…」

「だっせえな。無明は」

「あゝ気にすんな

マカでも遅かったんだし」

「私でもってどういことよ!!」

「ソウルとマカさん、そろそろパーティ始まるんじゃない…」

「あつ、行けない!

皆行こつ」

「へいへい」

いつもならソウルとマカの喧嘩が始まるところだったんだがさすが
にパーティは大事なようでマカもソウルも口喧嘩を途中で切り上げ
死武専のパーティ会場へと無明を合わせた五人は入っていった。

五人がパーティー会場に入ると死神様の息子キッドとそのパートナーの二人がいる

パートナー二人はいつも通りだったがキッドは少し元気が無かったキッドが元気が無いのは鬼神のことを死神様から聞いたからということがわかっていたので皆がキッドに絡んでいる中無明はその光景を見ながら意識は少し遠くにいるメデューサに集中させていた。

少し時間が立つと死神様からの挨拶が入った。

「ちゅす！！うすっ！！ういゝす！！どもども、ほいさ！！おつかれさゝん！！」

相変わらず訳のわからない挨拶が入る。皆が突っ込まないのは慣れたせいなのか？と少し疑問を無明は抱いているうちに死神様の挨拶が終わった。

死神様の挨拶が終わり息子のキッドが代わりに真面目な挨拶をする
とブラック スターがそれを邪魔しそれにキレるといういつも通りの死武専生というか二人のボケが終わるといよいよパーティーが始まった。

このパーティーは特に重大なイベントもなく皆が騒いで食べるだけなので

「……………（今のうちに）」

無明は人混みに紛れパーティー会場を後にする。

「もうそろそろ来てるはず……どこに……」

無明は死武專の屋上の屋根の上でキョロキョロと首を動かしフリーとカエル魔女を探していた。

メデューサはほぼ皆無に等しいがシユタイン博士に何とかしてもらうとしてインディペンデント・キューブと言うあのややこしい魔法を使われるの前にどちらかの邪魔をして魔法が使われなければ、鬼神復活阻止の確立が上がると思ったからだ。

「早く来すぎたかな？」

無明はその場で止まり時が来るのを待っていた。

「マカさん見たいに魂関知出来たらな」

無明が魂関知出来るのならば即座にしてフリーがカエル魔女を倒しに行くのだがそれが出来ない為に無明はブラック スターと同じく五感を使って二人を探していた。

「……!?!?」

すると無明は突然あることを感じた。

「まさか……」

こんな時に」

無明はある気配、もといある狂気を感じた。その狂気の気配は段々自分に近づいてくる。

そしてそれは無明のいる死武専の屋上に来た

「しばらくだね」

無明がある芳香に呟く。そこには

「久しぶりだな無明」

幼げな体に不釣り合いなオーラを放っているフォンがいた。

「…どうしてこんな時に」

無明が訪ねるとフォンは少し不気味に笑うと

「あのヘビ魔女に頼まれたんだよ

『鬼神を復活させたいから手伝ってくれるかしら?』とな

勿論俺はOKしたよ。鬼神様を復活させるんだぞ?来るに決まっているだろ」

「鬼神を解き放つと世界に悪影響を及ぼすってことは知ってるのか?」

「知ってるもなにも悪影響?大歓迎さ

この世は腐っている…

鬼神様はこの腐った世の中を変えてくれるさ

狂気に満ち毎日暇をしない世の中にな!」

フォンはそう言うと無明に向かってくる。

「今回は前と違い最初から全力で行く！！
鬼神様のことがかかってるからな」

フォンは無明との数10メートルの距離を一秒とかからずに詰める。
そしてフォンは片手を槍の先端に変えて無明に向かって突きを繰り出す。

「！！？」

無明は咄嗟のことで驚いたがそれを紙一重で交わしフォンに向かって反撃の魂の波長を撃ち込もうとするが

「反撃の隙を与えるか！！！」

フォンは更にスピードを上げて何回も突きを繰り出しながらブツブツと唱える。

「！？」

無明はこのままでは危ないと思いフォンから距離を取るが、

「休む暇を与えるか！！！」

フォンが手を上げると無明を中心として半径一メートルから炎の柱が出てくる。

「まだだ！！」

バードバドバードフレイレムフレイムレイレム」

フォンが手を上げると今度は約300本ぐらいの炎の矢が出てきた。

「行け」

炎の柱が立っているところに向かって300もの炎の矢が四方八方から炎の柱に突っ込んだ。

炎の矢が全て柱に突っ込むと炎の柱の炎は更に威力を増しそして爆発した。

「……………」

フォンは気を抜かずに爆発したところをずっと見ている。

少し時間が立ち煙が晴れると

「ハハハハ、

体を暖めてくれてありがとう」

無明が立っていた

無明の衣服はほぼ破れていたがその服の下の皮膚にはケガをしている様子は見れなかった。

「どういたしまして

それより俺は全力で魔法を打ち込んだつもりなんだが…
化物か？」

「失礼な…

自分の周りの空気を能力で全力で固定化させただけ。最後の攻撃で壊れたから少し食らったけどね

今度はこつちから行かせてもらっ」

無明が構えると

「はっ！」

フォンが鼻で笑う。

「何が可笑しい？」

「いや、なに

余裕だなと思つて

あいつらそろそろ演算が終わるぞ？」

はっ！と無明は思い出し周りを見てみるとフリーとカエル魔女が演算らしきことをしていた。

「メデューサがいない！！まだ間に合う！」

無明は目の前にいるフォンのことを後回しにして背を向けて全力で二人のところに向かった。

二人のところに着く少し前にメデューサが死武專のバルコニーから出てきたのを確認すると

（まだ間に合う！）

と思いそのままフリーの前に行こうとしたが

「隙だらけだぞ？」

無明の背後からフォンの声が聞こえた。

無明がフォンに対応しようとしたがフォンは即座に無明の首根っこを掴むとバルコニーに向かって全力で投げた。

バゴッッン！！

投げられた無明はパーティー会場にあるテーブルにぶつかり止まった。

打ち所が悪かったのか意識はあったがかなり朦朧としてフラフラしていた。

「！！？」

どうした無明！」

ソウルが無明に気づきかけよってきた。

『空間魔法

無干渉領域』

バルコニーの外から声が聞こえてくる。

「……くっ！まずい！！

ソウル！

後から行くから先に行っててくれ！！」

無明はそう言うつとフラフラして動きにくい体を無理に動かしソウルの服を掴むと思いつきりシド先生の方向に投げた。

『施錠』

『強制土葬』

外からそう聞こえると同時に中からシド先生の声が聞こえると床から棺桶が出現しそのままシュタイン博士、キッド、パティ、リズ、ブラック スター、椿、マカ、そしてソウルが棺桶の中に入ってしまった。

（間に合ったか…）

無明はソウルが間に合ったのを見ると安心したのかその場に崩れ意識を手放した。

死武専の地下

先程シド先生によって棺桶に入れられた8人が死武専の地下にいた。

「恐怖」と戦う準備があるか

俺とくるか来ないか

君たちの魂が決める

「

「「「行きます！」「」」

皆は一斉にそう言い戦う決意が目に写っていた。

「そう（へらへら）」

シュタイン博士はにつこりしながら答える。

皆の意見を聞くと地下に向かって全員走り出した。

「博士！」

「ええ…」

マカが博士に言う。博士はわかっているのか答えた。

「すぐそこ…」

影の向こうにだれがいる

この魂間違いない

ひわいでサイテーな感じ…

パパ！」

「酷いな…

マカは…」

影の向こうにはマカの父親であり死神様の現武器のデスサイズがいた。

デスサイズがマカ達に合流しそれぞれがそれぞれの武器を持ち再び地下へ向かって進みだす。

「そう言えばソウル、無明は大丈夫だったの？」

「『後から行くから』って言ってたし問題ねえだろ。」

「そうだといいんだけど…!!?」
「誰か来る!!」

皆がその場で止まる。

ペタッ

ペタッ

と足音が近づき徐々にその人物が見えてきた。

「クス、待ってたわよ」

足音の正体はメデューサ。ソウルプロテクトを解除して戦闘意欲が出ていた。シュタインはそれを確認し気を引き締め声をかけた

「さて皆行きますよ!」

「『はい!』」

鬼神編でも書こうZE 三前編（後書き）

いやww主人公よ最初からリミッター外して全力で行けよwwww
（。 - - ）　　ゝそんなもん書けねえよwwww

いやww大人しくパーティー会場で一緒に土葬されろよww
（。 - - ）　　ゝやかましいわww

フォン出すぎじゃね？

（。 - - ）　　ゝしゃーない、しゃーない

次の更新は？

（。 - - ）　　ゝわかんねー

鬼神編でも書こう 三 中編（前書き）

あああああ！！

はずい！！

ってことで中編です

一回書き終わって削除してしまったときは泣きそうになった

鬼神編でも書こう ミ中編

「……と言つことで三人とも鬼神復活を阻止してください。

最後にみなさんこれだけは守ってください

命だけは落とさないこと!!

わかったな?

」

「「「はい」「」

「作戦会議は終わったかしら?」

「ええ。それじゃあ行きますよ!」

シュタインのかけ声と共にブラック スター、マカ、キッドは走り出した。

「来なさい!

『ベクトルアロー×3』」

一方その頃

死武専では……

死神様が死武専の地下に鬼神が封印されてると皆に喋ってから数10分が経過していた。

フリーの魔法に閉じ込められてから合計で約15分ほどたっている。

「くそっ!!それにしても一時間が長いぜ」

黒人の少年キリクが言う。

「そうだね」

こんな魔法は持って一時間だけど少し一時間が長く感じてしまうね

「

「死神様…何か余裕つスね…」

「焦っても仕方ないでしょ

暇だしランプでもする？」

死神様のおかげで孤立したこの空間に閉じ込められた死武専の生徒は最初のほうに比べると少しずつだが恐怖や不安などが薄れていた。

「はい上がり

私の勝ち」

「死神様ずるいつスよ」

皆がランプや他のゲームでもりあがっていた頃

ガタッ

と近くのテーブルから音が鳴る。

「あつ、起きちゃった無明君」

死神様の目線の先には衣服が少しボロボロになった無明が立っていた。

「すまない無明俺にもつと力があればお前も逃がせたんだが…」

「…全然

気にしてないですよ

それよりここに閉じこめられて、ぼくが気絶してどれくらいたちま
した？」

「えーと

ざつと20分ぐらいかな

あつ、起こしたほうがよかった？」

「いえ、心地よく寝れたんで…

それより20分ですか…

ふ、フフ、フフフフ」

無明は閉じ込められた時間を把握すると突然不気味に笑いだした

「どうしたの無明君打ち所が悪かったのかな？」

「いやいや、いつも通りのぼくですよ

ただ少し頭にきて…」

「気絶させられたことに？」

「それもありますけど… それより鍵の武器であるぼくに

『こんなちつぽけな鍵つきの箱』

に閉じ込められたことが一番頭にきてます

「

「まあ、仕方ないじゃない
あと40分までばここも「一分だ」ん？」

死神様の言葉をさえぎり無明が言った。

「こんなちっぽけな箱ぼくが一分で開けてやる」

無明はそう言つと少し皆から離れる

「

『第一解除』

『第二解除』

フフフフ

待ってるよ…あの糞狼ガ」

無明は自分の魂についている鎖を2つ外す。

そして片手を鍵に変えて自分の足下にその鍵を突き刺した。

「

セット

open

『開放』

「

無明は足下に突き刺した鍵をひねりそう言つと今まで無明達を閉じ込めていた『無干涉領域』の魔法は消え孤立していた空間が元に戻る。

「ヒュー

やるね」

無明君」

「あの糞狼を殺し…じゃなくてシユタイン博士を手伝つて来ます」

「何か聞こえたような… まっ、いつか
頑張つてね」

無明は死神様の返事を聞く前に死武専の地下へと走り出した。

無明が死武専の地下へ着き暫く走っていると少し先のほうからドン
パチと戦闘音が聞こえてきた
無明は

（まだ間に合う…!）

と思い走るスピードを上げる
無明がそこにつくとシユタイン博士とメデューサが闘っている姿が
あった。

「なんで貴方が… ぐっつ！」

メデューサが少し無明に気を取られた瞬間を見逃さずにシュタインはメデューサに魂威を撃ち込みぶっ飛ばした。

「遅かったですね無明君」

「それでも速く来たつもりなんですが…」

…それより手伝いましょうか？」

「いや、いい」

それより鬼神復活の阻止の為に先に進んでくれ!!」

「わかりま…」

シュタイン博士にぶっ飛ばされたメデューサは二人が話している間にダメージが回復したのか無明に向かって大量のベクトルアローを降り注ぐ。

ドスドスドス

ドスドスドス

「余裕をかましているからよ」

メデューサはベクトルアローが大量に突き刺さっている場所に呟く。

「無明君!!」

シュタイン博士は少し反応が遅れながらも無明のいたところに向かって走り出す。

「はい。隙みつけ

『ベクトルアロー』」

博士が無明のところに走り出した瞬間にメデューサはシュタインに向かつて魔法を唱える

「！！！」

くそっ！」

意識が無明に向いていた為少し反応が遅れるがシュタインはデスサイズを使ってベクトルアローを弾こうとしたが突然それは横から突き出てきた拳によって握り潰された。

「！？」

自分の放った魔法が弾かれるのではなく掴まれたことにメデューサは驚いた様子を見せる。

「……どういつもこいつもうっとうしいな！！！」

その拳の正体はもちろん無明。

どうやってベクトルアローを避けたのかはわからないが無明は生きてシュタインの横にいた。ただ少し至るところに切り傷がついている

「メデューサ元先生

一つお願いがあるんですけど」

無明は先程の怒った口調と反対に丁寧にメデューサに話しかける

「何かしら無明君

元保健室の先生が聞いてあげるわ」

メデューサも少し調子に乗りながら答えた。

「いや、ちょっとしたお願いなんですけど…

死ンデ…

」

そう言い終わると同時に無明はその場から消える

ポタッ

何か落ちる音が聞こえた

「あ、首を落とすつもりが勢いつけすぎて間違えた」

無明の声がメデューサの背後から聞こえる。

「！！？」

な……に……」

メデューサは素早く後ろを見た。

と思い自分の残った右腕を見た。

そこには…

（繋がってる…）

ちゃんと肩から繋がってる自分の右腕があった。

その時、急にメデューサはバランスを崩し倒れそうになる。

「!?!」

メデューサは少し驚きながらも尻のヘビを使って 倒れずにはいたが

ボタッ

と何か落ちた音が鳴った メデューサはその落ちた何かを見る。

そこには

メデューサの右足があった

「!?!」

またもや少し遅れて激痛がメデューサの全身を駆け巡る。

「あれっ、間違えた

まっ、いっか

次こそ首ヲ」

無明の声がメデューサの背後からまた聞こえる

メデューサか勢いよく振り返るがそこには誰もいない

『次は首だよ 次は首だよ 次は首だよ 次は首だよ 次は首だよ
次は首だよ 次は首だよ 次は首だよ 次は首だよ 次は首だよ
次は首だよ 次は首だよ 次は首だよ 次は首だよ 次は首だ
よ 次は首だよ 次は首だよ 次は首だよ 次は首だよ 次は首
だよ 次は首だよ 次は首だよ 次は首だよ』

「いい加減にしなさい!!」

『ベクトルアロー×5』

『ベクトルストーム』

またもやいたるところから無明の声が聞こえメデューサは自分の周りに向かって魔法を出す

「これでど…う!？」

メデューサは全ての言葉を発する前に自分の視界が天井に向かって勝手に向くことに気づく。

ドサッ

少し重い音になる

メデューサは目線だけその音のほうをみたら

そこには

首の無い自分の体が倒れていた

「アハハハハハハ」

メデューサの首は狂ったように声を上げながら地面に落ちる。

「無明君!!」

シュタイン博士がいつのまにかメデューサの近くにいる無明に駆け寄った。

「そんなに急いでどうしたんですか」

「今すぐその状態をやめなさい!」

「??」

無明は何もわからないまま『第二解除』した状態を止める

「まさか!？」自分の力を抑え冷製になり気付いた。

「そうです。」

俺も無明君もいつのまにか狂気に飲まれ少し自我を忘れていたようです

鬼神が復活しました

「

鬼神編でも書こう ミ中編（後書き）

なんかかんや言っ更新したと…

テスト明日からやのに… まっ、そのぶん文字数少ないけどね。

- -)

そろそろ厨二卒業時しろww

(ノ、)…最近書くの止めようかと思いはじめたよ

いやいやメデューサそんなちやうしww

(ノ、)…

次の更新は？

とりあえず木曜までテストと言っとく…(;、)

鬼神編でも書こう 三後編（前書き）

最近自分の小説が読めないんだが
恥ずかしすぎて…

鬼神編でも書こう 三後編

辺りの空気が変わり死武専を中心に狂気が空間を支配していく。

「…まだ間に合う!」

「待つんだ、無明君!!」

無明は博士が止めるのを無視して『第二解除』をして全力で走り始めた。

廊下を通り階段を駆け抜ける。

無明は徐徐に辺りの狂気が濃くなっていくのを感じながら封印の社に着いた。

封印の社には倒れているブラック スターとキッドがいる

そしてその近くに全裸の鬼神がいた。

何故鬼神とわかったか？普通に考えてもわかるが何より、そいつからは狂気その物が出ていたからだ。出ていたというより狂気そのものというほうが正しいかもしれない。

「また来客か!! そんなに見送りに来なくてもいいぞ!」

鬼神は無明のことに気づき言いながら奇妙に自分の皮を伸ばし自分の体に巻き付ける。

「…!!」

復活して申し訳ないけど死んでくれル」

無明はそう言い終わると先程のメデューサ戦の時のように無明の姿

が消えた

ドッゴオオッッン！！

何かが壊れたような音になる

壊れたのは御神体

無明はメデューサの時のように鬼神が油断している瞬間を狙い一瞬で勝負をつけようと鬼神の首を狙い手刀を打ち込んだ。

だが

「中々体が鈍っているもんだ」

鬼神は無明の首を狙った攻撃をガードをしたがあまりにも無明の攻撃の勢いがついていていた為衝撃を殺しきれずにぶっ飛び御神体の下敷きになっていた。

鬼神は御神体の下から出てくる。

「面白いことをするな。狂気をそんなふうに使うなんて」

鬼神は無明の『第二解除』の状態を一発で見抜いた。

「だがいいのか？狂気は使えば使うほど自分の体を狂気に染めていきいつかは自分の本能で動くただの動物になる」

「……………」

「見たところ、お前は狂気を外部とともに内部まで染めて身体能力を上げているようだが、そのせいで少しお前の心自身に狂気が染まっているじゃないか クカカカカ」

「うるさい!!」

無明は鬼神の言うことを聞かずに再び鬼神に向かって普通では見えない速度で首を狙った攻撃をする。

が

「無駄無駄、甘い!!」

今度は首を狙った手刀を防ぐばかりか掴まれる

「お前と遊ぶのもいいがあんまり遊び過ぎたら死神が来てしまう…だから遊びは終わりだ」

鬼神は無明の掴んでいる腕を自分の元によせる

「狂気の使い方を教えてやるよ…」

「クッ……………!!」

そう言うと鬼神は無明に向かって凸ピンをした。

すると

無明の頭の中に膨大な負の感情が流れてきた。

「ま、……まだ……だ……まだ行ける！」

無明は声を上げると鬼神に向かって突進してきた。

先程のスピードに比べると天と地の差があるような遅さだ

「……………」

鬼神は何も言わずに自分の手を軽く振ると無明は何かの力に遮られ鬼神の元へ向かう途中に吹っ飛ばされ再び壁にぶつかる。

「ガハッ……」

無明は口から少し血を流すと無明の視界はだんだん暗くなり無明の意識は閉じた。

「…ん。あれっ」

無明が目を覚ますと見覚えのある部屋のベッドの上にいた。

「また、ここか……」

勿論この見覚えのある部屋は保健室だ。

無明が辺りを見回すと両隣にもベッドの上で寝ている人がいる。

「ふあゝあ。よく寝た」

「ん？ここは……」

ブラック スターとキッドだ。

二人は無明にきずき今までのことを思い出すと慌てて質問をしてきた。

「おい無明！あいつらは！！？鬼神はどうした！？ってか何でお前もこんな所にいんだ！？」

「鬼神は…鬼神はどうなったのだ！？」

無明は二人をなだめると一つづつ質問に答えていく。

「一つ目の質問は

メデューサは殺った。他の奴らは知らない…

二つ目

ばくも鬼神復活防止の為に頑張った結果がこれ

で二人とも気になってる

三つ目

鬼神は…」

ブラック スター、キッドが息を飲む。

「恐らく今も生きている」

無明の答えに二人とも一瞬黙り静かな時が流れる

「あー！！いつまでもうじうじしても仕方ねえ！！
復活したならまた封印すりゃいい話だ！」

「ふふ、そうだね」

「…そうだな」

ブラック スターの言葉により静かだった空気が一気にいつも通りに戻っていった。

ガチャ

保健室のドアが開く
入ってきたのはシュタイン博士だ。

「皆起きたようですね
ケガのほうは大丈夫？」

「こんなケガは掠り傷にもならねえ！！」

「ボチボチです。」

「ん。ならよかった
…さて何から話そうか」

シュタイン博士は保健室のイスに腰を下ろすと三人の方に向いた。

「鬼神はやっぱり…」

キッドがシュタイン博士に聞く

「復活したよ。とめられなかった」

博士は顔の表情を一切変えずに言った。

「椿達はどうなったんだ？」

「マカとソウルが少し傷を負ったがぐらいで他の皆は無事だよ」

「これからの死武専は…」

「とりあえず、鬼神対策をしていくだろうね」

三人はそれぞれ質問が終わると黙った。

「君達がこのことに対して負い目を感じることは無いよ
むしろよくやったと言える。だから君達はこれからもいつも通りで
いなさい」

そう言うとシュタイン博士は立ち上がり保健室から出ていこうとする。

「三人とも今日はゆっくり休めよ

あと最後に無明君、死神様がお呼びだ。明日の朝一番に死神様の所
に行くように」

博士はそう言うと保健室から出ていった。

（何だろう??）

無明は呼ばれる心当たりが無いのでいろいろと考えていたがいくら考えても心当たりが無いのでとりあえず寝た。

【翌日】

無明は死神様がいる校長室に向かっていた。

校長室に行くまでにいろんな生徒に出会ったが皆いつも通りであり鬼神の影響は無いようだった。

校長室に着きソックをして入り少し歩くと鏡の中にいる死神様とその隣にとデスサイズがいた。

「おはようございます。死神様、先生」

「おっは〜」

「おっ」

「それで死神様、ぼくは何で呼ばれたんですか？」

「うん。そのことなんだけどね」

無明君、狂気の使いすぎで少し狂気に染まっているでしょ」

「……………」

「シュタイン君に聞いたよ。」

無明君は狂気を他の人より上手く使いこなせるから狂気を上手く使

って自分の力を上げてるって

シュタイン君に聞いてるよね？」

「…はい

『強大な力には強大なリスクがある』」

「そう

そのリスクが狂気に染まると言うこと

鬼神阿修羅が復活したことにより世界中に狂気が伝染する。

いくら無明君が狂気の使い方が上手くて出来るだけ狂気に染まらないようにしたとしても鬼神の放つ『狂気の波長』には耐えられない。このまま無明君が狂気を使っても使わなくてもいずれ無明君は狂気に染まり本能のまま動くことになるよ」

「……精神力を強くしたら大丈夫でしょうか？」

「うん。それもあるけど一番いい方法は『パートナー』を見つけることだね」

無明は少し首を傾げた。

「狂気を使うなって言っても使うでしょ？」

「…まあ、はい」

「精神力を鍛えるのもいいけどそんなに早く鍛えられるもんでも無いし、何より狂気を使うなら君を狂気に染まらせない為の心のパートナーが必要だと思う

マカちゃんとソウル君みたいだね」

「…気づいてたんですね。二人のこと」

「もちろんじゃない」

まっ、そゆことで心のパートナーを見つけて尚且つ精神力を鍛えるんだよ」

「わかりました」

そして無明は死神様に一礼すると校長室を後にした。

鬼神編でも書こう 三後編（後書き）

ええ。言いたいことはわかってますとも無理矢理ですね
わかります三（　　。　　。）

最後のほうなんかめちゃくちや適当ww

そんな設定いつからあったんだww

（　　。　　。　　。）　　小さいことは気にするな

いやいやww

ほかに色々と言うこと聞くことあるだろう？

（　　。　　。　　。）　　知wwるwwかww

次の更新日は？

（　　。　　。　　。）　　出来れば明日か明後日、多分ただけ遅くても水曜
日までにはしたい

パートナーでも探そうZE ミ(前書き)

なんやかんや言って水曜になりましたWW

パートナーでも探そうZE ミ

「うーん」

無明は手を組み考え事をしながら歩いていた。

考え事というのは先程校長室に行き死神様に言われたこと『パートナー』を見つけることだ。

「どうしようかな」

無明が教室に着くとマカとソウルが駆け寄ってきた。

「無明、死神様になに言われたんだ？」

「あつ、それ私も気になる！！」

二人は無明が死神様に呼ばれたことが気になるのか少し興奮（主にマカ）しながら聞いてきた。

「まあ…色々と話したんだけど、簡単に言っと『パートナーを見つけてこい』って言われた。」

「『パートナー！？』」

二人が同時に大きな声で叫んだ為無明は少しびくつとする

「な、何をそんなに驚いて…」

「だってお前がこっちに来てからもう数ヶ月立つのにずっと一人で

やってるからこのまま一人でやってくと思つてたぜ」

「私もソウルと同じ」

「いや、まあそれは探す気が無かっただけで…」

「でもお誘い来てたよね」

「うっ、まあ…」

無明は結構もてていた。

恋愛感情的な意味では無く（本人曰くそっちのほうがよかった）パートナー的な意味でだ。

無明は一年生では結構有名なほうで今現在魂を62個持っている。

この魂の量は一年生の中ではかなりの上位に入る。これ以上の魂の量を持っている人も勿論いるが、パートナーと協力してとったものであつて無明のように一人でこれほどの魂の量を持っている人はいない。だから無明の強さや魂の量にひかれてパートナーの誘いがくる。

「…でもあの人達」

「…確かあいつら」

「「全員パートナーいたから」」

「ええ！！そうなの！？」

マカは無明の言葉にかなり驚いていた。

「うん。」

今のパートナーと頑張れよ
って言いたかったよ…

まあ、普通に断ったけどね」

「どんな感じで？」

「いや、直球に『無理』って」

「お前もうちよい優しく断ってやれよ…」

ソウルが無明の肩に手を乗せ溜め息をつく。

「でも本心見え見えだったし…

それよりマカとソウルはどんな感じでお互いパートナーになろうと思
ったの？

パートナー捜しの参考にしたいから教えて！」

無明が二人に頼み込むと二人はお互いの顔を見合せ少し照れくさそ
うに話し始める

「ソウルはね、いきなり『俺はこんなやつだ！』とか言って私の
前でピアノを引き始めたの。それで何かキザな奴で面白いと思って
パートナーになったの。」

「俺は…なんというか『コイツしかいない！』と思ったからかなー」

「面白いと直感かぁ」

「まあ、それは私達のことであって無明は無明の好きなようにすればいいと思うよ」

「うーん

そうするよ。ありがとう!」

無明はお礼を言うと二人の元を去っていった。

「うーん、どうしょ」無明君!私とパートナーになって下さい!」
いきなりなに!」

無明が廊下を歩いていると一人の女性徒が告白パートナーのをしてきた。

「聞いたんですよ。ソウル君達と話てる会話を。今ごろかなりこの話は広まってますよ。」

「なんですと!」

無明は女性徒の話を聞くと驚き慌て始める。

「それでパートナーになってくれるんですか?」

「ごめん。無理。じゃあ!」

無明は一つずつ単語をはっきりというといつと急いでその場を後にする。

「無明君!!」

「無明殿」

「ダーリン」

「いつでも私は待っているよ」

「無明くん!」

「無ー無ー」

「「「「パートナになってください!」」」」

無明が先程の告白を断ってから無明の姿を見るやいなや沢山の人物がパートナの申し出をしながら追いかけてくる。

「間に合ってます!!!!」

無明はそれらの申し出を断りながら廊下を走って逃げていく。そしてその場に突然ある人物がやってくる。

「おいおい!無明。なんで俺様より目立っているんだ!俺様のほ「ブラック スター」助けてくれ!!」俺様に頼むとは正解だ!俺様が何とかしてやろう

さあ、皆俺様を讃えろ!

」

ブラック スターが無明を追いかけている集団に向かって言うが

「『じゃま！』『』」

沢山の女性徒の勢いにはさすがに勝てなかったのかブラック スターは

「お、おう……」

と言って素直に道を譲る。その間にも無明は走って逃げ沢山の女性徒は無明を追いかける。

「諦めてください！」

「『じゃあパートナーになって！』『』」

無明は走りながらも言う。そしてこの光景を見た人物や話を聞いた人物がさらに追いかけてくるようになり最終的に

「『『『『『パートナーになって！』『』『』『』『』」

と物凄い大人数の人達に追いかけられるようになる。

「あー！！うるさい！」

無明はさらにスピードを上げて追ってを撒き

「よかった！図書館だ！！」

近くにあった図書館に勢いよく逃げ込んだ。

「はぁ…はぁ…」

と、とりあえず一旦休憩しよう…」

ふらふらとした足取りで無明は図書館の中にあるイスに座ろうとするが

ぐいっ

と自分の袖を何かが掴んだので無明は後ろを振り返るが

「あれ…、誰もいない。」

無明は後ろを振り返っても誰もいなかったので再び前を向きイスに座ろうとするが、また

ぐいっ

と引っ張られたので

「何だよ!」

と少しイラッとした口調で言つと

「…図書館では静かに」

無明の後ろには無明の頭の1・5倍ほど小さくて大きな本を持っている女の子がいた。

「君がさっきからぼくの袖を引っ張っていたの？」

「……………（じくん）」

どうやらさっきが無明の袖を引っ張っていたのはこの女の子のようだ。

「ああ、悪かった…」

図書館では静かなしなないといけないね…」

「…わかればいい」

そう言うとその女の子は大きな本を持って無明の座ろうとしていたイスに座りテーブルに本を置くとその本を読み始めた。

無明も息を整える為に近くにあったその女の子が座っているイスと同じテーブルに座った。

「……………」

「……………」

女の子は本を読んでいるため勿論のことそれを見ている無明も邪魔をしないように無言だったが沈黙に耐えられなくなり無明が口を開く、

「どんな本を読んでいるの？」

「ファンタジー」

「へえ、どういった話？」

「女の子を男の子が助ける話」

「ふん。よくある話だね」

「憧れる」

「その女の子に？」

「うん」

無明とその女の子が短い会話をしていると、

バタンツ！！

と急に図書館のドアが開く。

『『『『いた！！』』』』

そのドアから先程の無明を追いかけていた生徒が入ってきた。

「つつバレた！」

『『『さあ、私とパートナーになつて！！』』』

「だから無理だって！」

無明は必死に断るが、

『『じゃあ納得のいく無理の理由を説明して』』

「だから……」

無明達が話していると、

「図書館では静かに」

と先程の女の子がまたもや注意をしてきた。

「!？」

無明はその子を見ると何か思い付いたのか無明はその女の子の手を引くと、

「ぼくはこの子とパートナーになる!!」

と皆に向かって言った。

パートナーでも探そうZE ミミ(後書き)

よくある話ですネww
わかります。

どこのタバサやねんwww

ソウルイーター早くしろよww

(。(。 - -) 原作にかなり追い付いてるからあんまり原作通りに
かけないんだよww

いやwwべつにパートナー男でもいいじゃんww

(。(。 - -) ふうっせえよww

まさかのww

(。(。 - -) ふうまさかだよww

次回の更新は？

(。(。 - -) 特に決めてないと

パ、パートナーでも探そうZ E ミ（前書き）

昼間にこれ見てたら恥ずかしすぎて顔から火吹きそうW W

パ、パートナーでも探そうZE 三

無明の発言により無明を追いかけていた生徒達がいつせいに黙り辺りは静かになった。

静かになってから数分が経った所で無明を追いかけていた生徒の一人が口を開く。

「ハッ…ハハ、ハハハハハハハ！」

一人が笑い始めてから連鎖するように他の生徒も笑い始めた。

「……………」

無明のそばにいる女の子は何も言わず、無明はなぜ皆が笑い始めたのかがわからなかった。

「何がおかしいの？」

無明が尋ねると生徒の一人が答えた。

「アハハハハハハハ、

だ、だってあの白兔がパートナーって

あれもしかして無明君知らないの？

その子のこと」

恐らくこの生徒が言う白兔とはこの女の子だろう。と無明は思い聞き返す。

「この子がどうかした？」

「あれっ？知らないんだ。ヒーローと同じくらい有名なのに……まあ、教えてあげるよ

その子はね、かなりの落ちこぼれなんだよ。この学校に入れたことが奇跡としか言えないくらい。その子は職人の癖に体力は無い、力も無い、速さも無い、技術も無い、センスも無い、かと言ってそれらを補う為のマカやオックス君のような頭も無くテストはいつも赤点。昔はねこの子にもパートナーがいたんだけどこんな感じでしょ？上手くいく筈もなくすぐにパートナーは解散。

と言うことで無明君がこんな子のパートナーになるなんて冗談だと皆思ってたんだよ

ちなみに白兎と呼ばれる理由は、その子の容姿は真っ白でしょ？その意味の『白』でまるで兎が弱いつて意味で『兎』この2つを合わせて白兎ってことだよ」

この説明を聞いて改めて無明はその子を見た。

どういうわけかわからないが髪の毛は白のセミロングで服装は白のワンピース、履いている靴は白だし靴下も白、肌は真っ白とまではいかないが普通の人より白い。見た感じでは誰もが病弱と言いそう若干細めな体つき、顔はまるで小動物のようで幼げな顔だが笑顔が全く無い無愛想な顔のせいで大人びて見える。

（なるほど…）

確かに白兎と言う名前にぴったりだな。でも…）

無明はその話を聞きその子を見ている内にパートナーになりたいと強く思い始めた。

最初はパートナーの誘いを断る為に適当についた嘘だったがこの子の話を聞いている間はふとこの子を見てみると顔色一つも変えず、また何も言わなかったが無明はこの子の全身からはつきりとあることが伝わってきた『助けてほしい』ということが……それはどういう意味で言ったかはわからないが無明はここで助けなないと一生後悔するような気がした。そして適当についた嘘の気持ちは本物に変わった。

「例え赤点だろうが、落ちこぼれだろうがぼくは気にしない。ぼくはこの子とパートナーになりたいんだ。と言ってもこの子の返事しないんだけどね」

無明は少し照れくさそうに顔を下げ頭を書きながら言った。

そして

「一方的で困ると思うけど出来ればよく、香坂無明の『パートナー』になってくれませんか？」

無明はその子と顔を合わせて面向かってパートナーの告白をした。

「さっきの話聞いてたの？」

私は落ちこぼれ
パートナーにならないほうがいい」

その子は表情一つ変えずに言うが

「君こそ聞いてなかったの？ぼくは落ちこぼれたろうが何だろうが

気にしない

他人にどういわれようがどうでもいい
ぼくは君の気持ちが聞きたいんだ!」

無明は真剣な表情で言い返した。

「……私何かでいいの?」

「『何か』じゃないよ。ぼくは『君が』いいんだ」

「……よろしく」

「つつ!」

こちらこそ!」

その女の子は了承とともに手を差し出すと無明はとても嬉しそうな
顔で手を握り返した。

「……ホントにパートナーになっちゃったんだ」

無明を追いかけていた生徒達はその光景を見てとても驚いた表情を
している。

「もうぼくはこの子とパートナーになったから」

無明がそう言うとはば全員が「あーあもうちょいで単位とれたと等
しかったのに…」、「デスサイズが…」、「名声が…」など言いな
がら帰って行くなか先程無明に説明をしていた子だけ残った。

「一つだけ聞かせて」

その子は無明に向かって言う。

「何？」

「どうしてその白兎を選んだの？無明君は他の人を選ぶこともでき
たはずなのに」

「…うん。そうだね、『直感』っていうのもあるけど一番の理由
は…」

「理由は？」

「この子はぼくにしか救えなくてそしてこの子はぼくを救ってくれ
ると思ったからだよ。」

「それも直感の一種なのでは？」

「ハハッ、そうかもね」

「…はあー、まあいいや。理由も一応聞けたしパートナーは諦めます
けどいつでも私は待ってる」

その生徒はそれだけ言うが無明のもとを去っていった。

私はよく子供っぽいと言われるが女の子を助ける男の子の話が大好きだ。

私の夢はいつか本に出てくるような男の子に助けられることだ。

こんな夢はかなわないと言うことは十二分にわかっている、だからせめてそんな本を読んで私だけの世界に浸ろうといつも通りに図書館に来て本を持ち読もうとしていた。が

バタンッ！！

と言う大きなドアの開く音が聞こえ誰か入ってきた。

私は静かに本を読みたかったし、その入って来た誰かに静かにしてもらおうと思いその人を見た。

その人はたまに噂になって人気者の香坂無明ということは一発でわかった。

なぜわかったのか？

それは前々から無明のことを知っていたから。

私はパートナのいない落ちこぼれ…

この死武専でパートナがいないというのは自信家でバカを見る奴が皆から除け者にされる奴の二組だと思っていた。

私は後者だ。

でもある時

「聞いたー？無明君また一人で魂狩りに行って成功して今回の魂25個目だつてー」

「うそっ！！マジ？俺でもパートナーと狩りに行ってまだ一桁なんだけど…」

（一人で魂を狩りに行ってきた？？

無明…か）

私はふと耳に挟んだ会話が気になり無明と言う人の名前をたよりに色々と探してみた。

するととても凄いことがわかった。

私とは反対でとても強く、皆から頼りにされている人望がある人とわかった。実際無明というひとは見たことなかったが、この前の前夜祭の時に敵の魔法で私達のいる場所が別空間に飛ばされたとき、生徒は勿論のこと先生も何も出来ずあの死神様でさえも手も足も出なかったのをあの無明と言う人（死神様が名前を呼んでるのを聞いてわかった）は一瞬でその魔法を解除した。

私はその時に一瞬

（憧れる…こんな人がパートナーならいいな）

と思ったが私には高嶺の花ということがわかっていたからそんな考えはすぐに捨てた。

この後からまた無明と言う人の名声が上がってもうそんな有名人には会えないと思っていたから目の前にいてこんな至近距離にいるということにかなりびっくりした。

有名人だろうが、なんだろうが取り合えず図書館では静かにと言おうと思い袖を引っ張って見たが向こうは気付かずもう一度引っ張って見たらやっと気づいてくれて一言だけ言っておいた。

向こうも言葉を返してくれて私は懂れる人とのたった一言だが会話が出来て内心有頂天になりながらイスに座りいつも通りに本を読もうとしていたら無明と言うよりは私の前のイスに座り私に話しかけてきた。

私は多分いつも通りに会話出来たと思うが内心は無明と言う人と短い会話だったが大天にも昇る気持ちだった。

私が少し気持ちが高まり過ぎて自分の世界に入っているとまたもや

ボタンッ！！

と大きなドアの音がしてその拍子に私は自分の世界から戻ってきて前を見てみると無明と言う人が居なかったので帰ったのかな？と思って図書館のドアのほうを見てみると沢山の生徒がいた。

私はまた一応注意しにいくと何があったかわからないが無明と言う人は私をパートナーにするって言ってきた。

一瞬この人が何を言ってるかわからなかったから落ち着いて周りの状況を整理して考えると多分、この場を何とかするための嘘だとかって私は黙っていることにした。

そしてその後に沢山の生徒の中の一人が私のことを無明と言う人に説明し始めた。

わかってはいたけど、他人に自分のことを言われ悲しくてなぜかそのことを無明と言う人に私のことを言っているのを聞くのが苦しかった。

嫌だった

悲しかった

苦しかった

聞いてほしくなかった

こんな私を見てほしく無かった

『助けてほしかった』

願いが通じたのかはわからない

その子の話を聞いた後、無明と言う人は私に対して真剣な顔でパーナナの告白をしてきた。

私はすぐにでも『うん』と答えたかったが無明と言う人のことを考えると私としては不幸となると思って私は断ったが無明と言う人は

『…君がいいんだ！！』

と言ってくれた

私は必要とされている

そう思うと今までの苦しみが全て無くなったような気がした。

このことに対しての私の答えは勿論『はい』だった。

私の夢が叶った

私を助けに来てくれる人が表れた

夢は現実になった

こんな私を救ってくれた無明は今度は私が救う番

そう固く決心した。

「そついや君の名前を聞いて無かったね。君の名前は？」

無明が聞くとその子は無明の目を見つめ言う。

「レイナ、

レイナ＝カタスフィ」

「レイナ？どつかで聞いたような…」

まあ、いつか。改めてよろしくねレイナ」

「よろしく無明」

「それで、死神様にパートナーの報告したいから一緒についてきてくれる？」

「……………（こくん）」

レイナは顔を上下にふり頷くと片手に本をもち片手には無明の手を握り図書館を急いで後にした。

「まさか…無明君がレイナちゃんね？」

無明達は校長室に着くとパートナー報告を鏡の中にいる死神様にした。

「なんかダメな部分でもありますか？」

「いや、無いよ

って言うかベストなパートナーだと思うよ」

「…もちろん」

レイナは片手でグッドサインを死神様に向けてやっている。

「さて、また新しい明日が始まるけど出来るところは無明君、君がレイナちゃんをリードするんだよ」

「わかってますよ。

報告はしたんでこれでぼくたちは帰ります」

「……帰る」

「了解ーお疲れー
また明日ね」

死神様と軽い挨拶をして無明達はその場を後にする。

ここは無明達が出ていった後の校長室。ここでは二人の人が密かに会話していた。

「俺が言うのもなんですけど死神様、あの二人は上手く行くんですかね？あまりにも実力に差があるとおもうんですが…」

「まあ…あるね。」

でも実力うんぬんより私はお互いがよければそれでいいと思うよそれに…」

「それに？」

「レイナちゃんの波長は無明君にとってはとても良いと思う。しかも対魔の波長も持つてるしね」

「あの子が…なるほど」

そうとわかれば確かにいい組み合わせだ

無明はレイナの戦闘をリードし

レイナは無明の精神力をリードすることになるのか」

「そう。スピリット君

これからあのふたりの将来が楽しみだよ」

パ、パートナーでも探そうZE ミ(後書き)

どこのラブコメ?って言われても仕方ない(笑)

設定無理矢理ww

(。 - -) っそうだねww

うわぁ…

(- -) - (- -)

次の話は?

(。 - -) っそろそろ設定でも書こうかなと思ったり

次の更新?

(。 - -) っ決めてない

正直題名なんてできとつだZE 三

無明がパートナを決めた翌日、無明はレイナと二人で死武専へ登校をしようと支度をしていた。

「……早い」

「いやいや、レイナが朝起きるの遅いんだよ
ほら、行くよ」

「…………（こくり）」

レイナは頷くと無明の後をついていく。

二人はパートナになってから同居をするようになった。レイナが無明のアパートに住むことになり毎日の日課の無明の朝食時の妄想は無くなったが無明もまた同居によりいろんな悩み事が増えるようになった。

その話はまた後日……

「そついや今日からデスサイズが増えるとか言ってたよね」

「三人増えるらしい」

「デスサイズねえ……」

「何か嫌なことでも？」

「……いや、別に無いよ」

「そう」

二人はこのあともしづつ世間話をしながら歩いてると死武専へ着いた。

「…私はこっちだから」

そう言ってレイナは自分のクラスへ向かおうとする

「昼休み時間空いてる？ ぼくの友達にレイナのこと紹介したいから…」

「わかった。昼休みは開けとく」

「ありがとう。じゃあまたね」

「また」

そう言っつとレイナは無明と離れ自分の教室に向かった。

「……………一緒にクラスのほうがいいかな？」

無明はレイナが教室に向かったのを見送るとその場を後にして自分の教室へ向かった。

ガラガラ

と教室のドアを開けるとブラック スター以外のいつものメンバーがいる。

「おはよう、今日は皆早いね」

無明が挨拶すると皆挨拶を返してから一斉ににやけ始めた。

「ちよっ！ーえっ？急にどうしたの？」

「おうおう、聞いたぜ無明！！パートナーもう決めたらしいな」

「どんな子がさっさとはいちまいな」

リズとパティーが無明に突っかかりながら言ってきた。

「あれっ？皆知ってるんだ」

「だいぶ噂になってるぜ
で、どんな子なんだよ？」

「ちよっ、リズ近い。」

昼休みにまた皆に紹介するよ」

「えー、せっかく朝早くから来て無明にいろいろ聞こうと思ってたのにー」

「朝からこんな調子なんだよ。この暴力女は（ぼそぼそ）」

ソウルは無明の耳元で呟いたようだが

「マカちよっつぶ」

ゴンッ

とソウルの頭の上に広辞苑並みの分厚い本が落とされた。

「うおおお、いつてえええ!!」

どうやらマカにはソウルの呟きは聞こえてたそうだ。

「そう言えば…父上から聞いたが今日からデスサイズが来るらしい」

「…三人来るらしいね」

「ぱぱよりましな人がいいな…」

「大丈夫だろ。多分…」

k i l l コーン
カーンコーン

チャイムとともに皆が席につきはじめガラガラとドアの空く音がするとシュタイン博士が入ってきて一時間目の授業が始まった。

余談だが一時間目が始まった瞬間にブラック スター達はやって来た。

昼休み

昼休みにチャイムとともに無明の周りにメンバーが集まると

「さて、そろそろ教えて貰おうか」

「わかった。わかったからリズ近い。呼んでくるよ」

無明が席を立ちレイナを呼びに行こうと教室のドアを開ける。

ガラガラ

「……昼休み」

レイナがドアの前に立っていた。

「…心臓に悪いからそういうの止めて」

「…努力する」

無明はレイナの手を取りマカ達の元へ向かった。

「この子がぼくのパートナーのレイナだよ」

「…無明のパートナーのレイナ。よろしく」

あ、マカおひさ」

「久しぶり。無明のパートナーってレイナちゃんだっただ」

どうやらマカとレイナは知り合いだったようだ。

「マカさん知ってたの？」

「まあ、図書館でよく会ってたから…」

マカと無明が喋ってる間レイナは他の皆と挨拶を交わしていたようで、無明達が喋り終わると

「…椿の髪黒くて綺麗」

「レイナちゃんの真っ白な髪も綺麗ですよ」

「おめえ真っ白だな、幽霊に近いんじゃないか？」

「…じゃあブラック スターを死ぬまで呪ってあげる」

「ふむ。中々左右対称ないや、なんでも無い」

「…キッドは一部だけ髪白いね（フッ）」

「どうしたらそんなに肌色が良くなるんだ？
私にも肌が良くなる秘密を教えてくれ」

「…もう手遅れ」

「びゅーん。ばんばーん」

「…ブルンブルン。キーン」

「……………」

「……………」

「中々やるな？」

「…そっちこそ」

レイナは皆と仲良くなれたようだった。

マカも無明の元をはなれそこに混ざると交代したようにソウルが無明に近づいてきた。

「大丈夫なのか？あいつと組んで」

「大丈夫だよ。いざとなったらばくが守るし」

「ならいいが…」

俺の二の舞にはなるなよ？」

ソウルは自分の胸を指先でトントンと叩き言った。

こうしてソウルと話をしているといつの間にか昼休みが半分以上過ぎていていた

「ソウル君、無明君」

椿が二人の名前を呼ぶ。

「んあ〜？」

「なんですか？」

「今日の放課後、レイナちゃんとの交遊を深める為に皆でバスケットボールをやるのかな？って言ってるんだけど二人も来ない？」

「あゝ、俺は暇やしいいぜ」

「レイナがいいって言うならいいよ」

「良かった。レイナちゃんも参加するらしいから今日の放課後公園に集合らしいです」

「へーい」

「了解」

約束をしてからしばらくすると「次の授業もうすぐ」といいレイナは自分の教室へ帰り無明達も午後からの授業の用意を始めた。

放課後

無明達八人は公園の中にあるバスケットコートの中にいた。

「バスケやんぞ」

「オウツ」

「……うん」

「ん」

他に返事が無いもののマカを除いた七人はコートの中にいる。
マカ本人はコートの近くのベンチで本を読んでいた

「……」

「……」

このままでは人数が均等に分けられないためブラック スターはマカを呼ぶ

「オイ マカ
バスケやんぞ」

「……」

何でよ！！

横で本読んでていいって言ったじゃん」

「あれはウソだ」

ブラック スターが一言言うつらついたのかマカはてにもっていた本をブラック スターに投げるが

「あーもうやればいいんでしょ」

なんだかんだ言いながらベンチから離れコートの中に入ってきた。

「しょうがねえだろリズムがこれなくなっただからさ」

「私バスケのルールわかんないよ

それに安静にしとけって言われてるのに」

「……私も知らない」

「ぼくもあんまり……」

上からブラック スター、マカ、レイナ、無明この四人でチームとなり

残りのソウル、キッド、椿、パティの四人でチームとなった。

「ただバスケやんのもつまないからさ
負けたチームのキャプテンが罰ゲームやるってのはどうよ」

「おっ！！いいな！うけてたつぜ！！」

「こっちが負けたらキッド家の額縁二センチずらすわ」

「オ…オイッ！！」

普通の人なら家の額縁を二センチずらされたところで微塵も気にしないであろうが、何せあのキッドだ。非常に神経質な彼にとってはものすごい大変なことなのかとてもあせっている。

「あはははは
それおもしろい」

「じゃあこつちが負けたらキャプテンマカが『マカパパと一日デー
ト』するぞ」

「はあ!？」

「いやいや、キャプテンはブラック スターが無明がやるべきでしょ
…」

「わかっているが無理にお前を誘った償いだ」

「ぼくバスケわからないんで無理です」

「ちよっ?こんなところで律儀にならないで!!
無明!私も知らないから!!」

「もういいだろ?

始めるぞー

ピー」

ソウルの口笛によって試合が始まった。ソウルは何故か敵のブラッ
ク スターにボールをパスして何故かブラック スターはそのボー
ルを再びソウルに返した。

ボールを受け取ったソウルは

「オシ

行くぞ」

と言ってドリブルをしてブラック スター達のスキをうかがう。
ブラック スター達は

「レイナ、無明、キャプテンマカゾーンで守るぞ！」

「え？ああ、うん」

「……………わかった」

「え？ゾーンて何！？
ルール教えてよ」

無明とレイナはマカの近くの適当な位置について適当にバスケットをやり始める。

「何かおかしくね？」

マカと無明はバスケットをやっている間始終そう思っていた。

ゲームセット

その言葉とともにゲームが終わった。

「20対4でマカチームの負け」

「最後までルールわからなかった…」

マカはそう言いながら地面に両手をつき肩で息をしていた。

「罰ゲーム、罰ゲーム」

ソウル、パティ―、ブラック スターはずっとそう叫んでいる。

「なんかおかしくない？最初はレイナちゃんとの交遊会みたい感じだったのに…」

まあ、ちゃんとやるけど」

「…………ごめんマカ（ふっ）」

レイナがマカに言った言葉の後に若干笑みが入ってたのは無明以外気づかない。

「じゃあ、行ってくる」

マカはそう言うと、何故か近くにいたスピリットにデートの誘いをしにいった。

「うあゝマカパパ嬉しすぎて吐いてる」

「よっぽどマカに誘われたことが嬉しかったんだな」

いろんなことを言いながら話しているとマカは戻ってきて

「胃薬誰かもってない!？」

大きな声で言ってきた。

「もってねえよ!!」

ぎやはははは!!!」

ついこの前に鬼神が復活したとは思えないほど平和な日常であった

正直題名なんててきとつだNE 三（後書き）

そろそろ原作をやるのかなと思ってバスケットを…

まあ、あまり追いつかないようにゆっくりと書いて行きますわ（

、
、
）

レイナってキャラおかしくね？

（。 - - ） へ気にするな。その日の作者のテンションによってレイナのキャラは変わるんだよ

進むの遅っ！！

（。 - - ） へうるさいwwwあまりやりすぎるとすぐに原作に追いつくんだよwww

バスケットぐらい書けよ

（。 - - ） へ作者バスケット部じゃあないから詳しいこと知らんし書けねえよwww

レイナって運動神経…

三（。 - - ）

次の更新は？

（。 - - ） へ最近疲れてるしやらなければならないことが沢山あるしいつになることやら…

クロナって性別不明だZE ミ(前書き)

どんな ときだっ
ずつと 二人で

何でも無いです。はい

ギリコ終わるまで原作にそってやるつもり…

クロナって性別不明だZE ヽ

マカとマカパパがデートをした後日のこと、授業が終わりいつも通りに無明とレイナとソウルとマカ達四人は帰ろうとしていた時のこと、マカが死人先生に呼ばれた。

数分が経ち死人先生の元から帰ってきた

「どうしたマカ？また課外授業のことか？」

「ううん。クロナのことだって」

「クロナ？あいつがどうかしたのか」

「いや、クロナのことに話したいことがあるからこの後一人で来てくれって

あつ、無明とレイナちゃんはクロナのこと知らないよね。クロナは私の友達だよ」

無明はクロナのことは知っていたし鬼神の所へ行くときにチラッと一瞬だけ顔を見たので「そうなんだ」とレイナは「……………そう」といつも通りに返す。

「それで悪いけどソウル。ちょっとクロナのことに話して死人先生のところに行ってくるけどソウル達はどうする？」

「ん？帰ってもどうせ暇だし待ってるよ。」

「ぼくも暇やし待ってます」

「……二人に同じ」

「そう

わかった。じゃあちよつと行ってくる」

マカはそう言つと無明達つもとを離れ駆け足で死人先生のところへ向かった。

「マカさんなんかつかれてるよね」

「クロナに会えるかもしれないからだろ
それよりマカが帰ってくるまでどうする？」

無明は特にしたいことも無く首をかしげて考えていると、

「……私、無明と波長合わせる練習したい」

とレイナが言ってきた。

「ん？ああそう言えばパートナーになってから一度もしてなかった
っけ？」

「……………（こくり）」

確かに無明とレイナは一度も波長を合わせて武器と職人になったことはなかった。鬼神の後にパートナーになったということもありいろいろ時間が無かったのだ。

「じゃあちよつと向こう広場で練習してみようか。
ソウルもできる範囲でばくやレイナに助言してくれる?」

「おう、いいぜ

じゃあ早速行きますか」

「……………」

無明達三人は死武専にある広場へ歩き出した。

広場

「ここらへんでいいかな」

無明達三人は広場に着いた。

死武専には少し大きな広場がある。イベントやパーティーなどに主に使われるところでありこの前の前夜祭の時のパーティーもこの広場でした。特にこの広場は使っては行けないと言う決まりもなく無明達以外にもチラホラと生徒が雑談していたり遊んだりしていた。

ちなみに大きさは体育館の少し小さいくらいである。

「じゃあ早速始めようぜ」

「……………」

「わかった。」

無明はそう言う自分の体を完全に武器にしようとするが、

「あれっ？」

無明の片手が鍵になったただけであった

「…お前もしかして完全に武器になったことあるか？」

「いや、無いね」

ソウルの質問に速答する。

「はあー、まずはここからか

いいか？体を完全に武器にするっていうのはだな…」

ソウルの講義と的確なアドバイスのおかげで、

「…よっと」

五分ほどで無明は完全に武器になることが出来た。

「（それにしても奇妙な感じだなー自分の人間の体はくつきりとわかるけど実際ぼくの体は今鍵になってるし…それにこの空間と言うか精神の中というか……うん。取り上えず奇妙だ）」

無明は今まで感じることの出来なかったことを武器になり感じていた。

「無明が武器化したらそんなになるのか」

今現在の無明の姿は先程まで人間であつた面影は無く剣のような鍵になつていた。大きさは約70?ほどで持ち手には持ちやすいようにグリップが巻かれてありその周囲には簡単に落とさないように囲いが出来、その鍵の先端の両端には30?ほどの鍵の形をした凹凸の刃がついている。

「じゃあレイナ、無明を持つてみる」

「……………（こくり）」

レイナは完全に武器になつた無明を拾う。

「……………持てた」

レイナは顔には出さなかつたが内心とても喜んでいた。

なぜなら、もしパートナーとしての波長が合わなければ無明を持つことによつていろいろと障害が起きるのだが、その障害が無明とレイナの間では起きなかつたからだ。

「波長も見た感じ合つてるようだし取り合えず無明を振つてみたら？」

「……………うん」

レイナはソウルがいった通りに無明（鍵）を降るが七、八回振つた

ところで

「ハア…ハア…ハア…もう、無理」

と言ってその場に座り込んだ。レイナが座り込んだところで無明は人間の姿に戻る。

「波長は合ってるけど…」

「ああ、波長は合ってるけど」

「「身体能力が無さすぎる」」

「ハア…ハア…うるさい」

レイナの体は細く、実はきの細い体の中にとてつもない筋肉が入っているということは無く見た目通りに全くと言っていいほど筋肉が無かった。

「これは結構キツいな…」

「レイナって筋トレとかしたことある？」

座っているレイナに聞いたところ、

「……………いつも本を持って筋トレしてる」

「なるほど、要するにしていない…か」

そう言つとレイナの表情が心なしか不機嫌そうに見えた。

「なら、今から鍛えて行けば何とかなるかな？」

「……………無理」

「どうして？」

「…今まで私にそうやって考えた人が何人も諦めてる」

そう言つたレイナは顔を伏せ実際表情は変わっていないが先程の不機嫌な顔から悲しげな表情をしているように無明は見えた。

「大丈夫だよ。ぼくは諦めない」

なんだってパートナーなんだからね。だからレイナも頑張つてほしい」

無明はそう言つて座り込んでいるレイナに手を伸ばすと

「……………うん」

レイナは無明のその手を握り立ち上がる。

「あーお取り込み中悪いが練習しないのか？」

なんかいい雰囲気になっていと感じたソウルはその空気に割り込む。

「そうだね。やらないと」

再び無明は鍵になる。

レイナは鍵を持つとまた振ろうとしたが

「ちょっと待て」

ソウルの制止により振ろうとすることを止める。

「……………何？」

「そんな急に身体能力は上がらないし、どうせやるなら一度『魂の共鳴』をやってみないか？」

確かにそんなたった数分で筋力はつかない。それにソウルの言葉にも一理あると感じた無明はレイナと相談して『魂の共鳴』をやることにした。だが二人とも『魂の共鳴』の仕方がわからなかった為にやり方をソウルに聞いてみると、

「いいか、魂の共鳴の仕方はだな、まず片方が片方に魂の波長……」

またもや数分ソウルの講義が続いた。

「よし……じゃあやりますか……!」

「……………うん」

「『魂の共鳴』」

先程ソウルに教えてもらったアドバイスと共に魂の波長を送り送られた方はそれを増幅させて送り返すそしてそれをまた……とやっていき魂の共鳴をするが

『ソロ…あつ』

途中で魂の共鳴状態が解かれる。

「やつぱりいきなり成功はしないね」

「でも中々いい線行つてたと思うぜ
取り合えず練習をしていかないとな」

「……………頑張る」

この後も少し武器の無明を振つたり魂の共鳴の練習をするがこれといった成果はあげられなかった。

「そついや、あいつ遅いな何してるんだ？」

「そう言えば長いね〜
ん？あれってマカさんじゃない」

ふとマカを含めた三人が広場の近くを通った。それに気づいた無明は指を指してマカの名前を呼ぶ。

「マカさ〜ん」

マカはこちらに気付いたのか手を振り近付いてきた。

「ちょうどいいところにいた無明とレイナちゃんにも紹介しとくね

私の後ろに隠れている子がクロナだよ

それで、この人はマリー先生。ほらバスケの時に会ったでしょ？」

「よろしくクロナ、マリー先生」

「……………よろしく」

二人が挨拶すると

「バスケの時にいたね。よろしくね二人とも」

「……………うん」

マリー先生はテンション高めで、クロナはマカの後ろから横にでて言った。

そしてマカからクロナが体験入学をするということを教えてもらうとそれを心配したのか、ソウルが

「どうだ？校内を見て回って…
上手くやっていけそうか？」

と言うが、クロナは

「無理だよオ
死んじゃうよオ」

やっていけそうになかった。

「だ…」

大丈夫だってみんなついてるんだし」

「無理だよォ」

やってられないよォ」

ヘヤノスミスの所へ行くよォ」

「蹴り飛ばしてエ…」

ソウルはあまりにも کروناが マイナス思考であつたためかなりイライラしていた。

ちなみに無明も

（エクスカリバーとはまた違ったイライラだな）

と心の中で思い少しイライラしていた。
そんな کروناを励ます為にマカが

「ならさっ

こういうのはどう？

詩を書くの

」

と提案した。その言葉と共に

「ぶッ

詩って…

お前ッ…

「詩を書くの」
くはは」

「ぶっ！……詩ですか
詩……」

「……………フッ」

上からソウル、無明、レイナ。三人ともマカの言葉に対して笑っている。
それに対してマカはどこからか分厚い本を取りだしソウルと無明を殴る。

「いてえー俺と無明だけかよ」

「これは痛い……」

そう呟いているソウルと無明を無視してマカは

「私もね何か悩んだりしているときよく詩を書くんだ」

「ふーん」

クロナに言う。

「マジかよ……お前ホント暗いやつだな
相談に乗ってあげますよ？」

学習をしないのか自分もよく詩を書くと言ったマカに対して再びソウルが突っ込んだ。勿論無明は先程のこともあり黙っていた。またもやマカはどこからか分厚い本を取りだすと

ゴンッ

「いつてエゝお前……」

ゴンッ

「人の話を聞……」

ゴンッゴンッ

「ちょっと待っ……」

ゴンッゴンッゴンッ

「ちょっ……」

ゴンッゴンッゴンッゴンッ

「俺が悪かつ……」

ゴンッゴンッゴンッゴンッゴンッゴンッゴンッゴンッゴンッゴンッ
ゴンッゴンッゴンッゴンッ

「……………」

有無も言えなくなるまでマカはソウルを叩き潰した。

御愁傷様と無明が思ったのは言うまでもない

叩き潰したソウルを無視してマカはクロナとの話を続ける

「一緒に書きあいっしょ」

「マカが言うのなら……」

そして30分後:

「……で……で……で……で……で……で……で……」

「できたの？」

「うん」

出来上がったクロナが書いた詩をマカは受け取りマリー先生と真剣に読み始めた。

「アホくせえ」

いつのまにか復活したソウルがチャチャをいれるがその言葉も耳に入らないほど真剣に二人は読んでいる。

「どうかな……？」

クロナが二人に感想を求めるが二人は広場の隅のほうへいき「何て暗いの…」「生まれてきてごめんなさい…」と呟き始めた。

そんな時

「オウツオウツ

オオ　　ウツ！！！」

パンーになったブラック　スターがやって来た。

「外はいい天気だったのによ、お前らモヤシハゲどもはこんなところで何やってんだよネクラ白ブタめ

まあ安心しろい！！俺様は太陽のような男だからな。迷ったら俺を見る！！必ず道は開かれるぞ！！」

とてもハイテンションなブラック　スターがうざかったのかレイナはクロナの詩の書いた紙をもちブラック　スターに見せた。

「生まれてきてごめんなさい」

そう呟きながらブラック　スターも広場の隅に行く。

「……………面白い」

ブラック　スターにも聞いたクロナの暗い詩の効果を面白がって無明とソウルにも見せた

「そんなに効くのか？」

「どんなんだろう……」

二人はその内容が気になりクロナの詩を読むと

「ごめんなさい…」

「ぼくが悪かったです…」

二人とも広場の隅に行きぶつぶつと呟き始める。

「……………一体何が書かれてるんだろっ」

レイナはその詩を読み始めたが

「……………そこまで酷くない」

クロナの詩はレイナには通じなかった。

「一体どうしたんだこれは!!」

広場にやって来た死人先生はマカ達を見るなり驚いた声を上げる。

「……………先生。これ」

レイナはこの詩のせいで皆がこうなったと言おうとしたかったのだが、いろいろ省いてこれが原因と言うつもりでクロナの詩を死人先生に見せる

「なんだコレ…ごめんなさい…」

死人先生もクロナの詩を読んで広場の隅の行く。

そしてそれから数分後…

ようやくレイナを除いた五人が立ち直った。

「死人先生、私たちに何か用事があったんじゃない…」

「あ、ああ。そういえばそうだった…」

チェコの方で軽い事件があった『最古のゴーレム』が突然暴れたし
たらしい。それを課外授業として調べてきてほしい」

「クロナはどうするんですか？」

「見学ということで同行を許可する。無明も念のためについて行
て欲しい… 勿論もレイナもだ。いきなり実践は難しいと思うからマ
カとソウルや無明の動きをよく見るように
あとブラック スターは今回は課外授業は無しだ。」

「へーい」

「「「わかりました」」」

「「……………了解」」

「よし。それでは準備ができ次第チェコに向かってくれ」

マカ、ソウル、クロナ、無明、レイナの五人は急いで準備をすると
チェコに向かい始めた。

クロナって性別不明だZE ミ(後書き)

作者はキーブレードって名前だけは知ってるんですけどキングダムハーツは知らないんですよね〜

Googleでキーブレードの画像調べて書いてみたけど今一説明が旨く出来ないと…

まあ、とにかく無明はキーブレードと思うといて下さい)。 - - (

ちなみに原作で広場なんてあるか知らんよww

ソウルが別人に…

(。 - -) へなってるでしょうねww

レイナの体力枯ってか、むしろ異常ww

(。 - -) へ最初は弱い方がなんか書きやすいやんww

いきなり魂の共鳴した後の武器の名前わかるんだねww

(。 - -) へ気にすなww

ちなみにソロ…だけでわかる人もいるかもねww

次の更新は？

(。 - -) へわからんww

決まり次第活動報告に書いてるかもしれないね

e m e t h … ゴーレムだ Z E ミ (前書き)

だいはぶいてるんで。(。 - -)

あと今回あんまり主人公出ないよ

e m e t h … ゴーレムだ Z E ≡

マカ達五人は準備が終わり死武専を出発してチェコにバイクで来ていた。

「三ケツノーヘルと二ケツ…」

死武専生って言うだけで捕まらないもんだな」

「ここに来るまでに何回警察に止められたことやら…」

五人はそれぞれバイクを降りると事件があったレーフ村に向かう。

「……………煙たい」

「そこから中煙突だらけだしね」

「ゴーレム造りのさかんな村だからな…」

「一家に一つかまどがあるんだろ」

ここリーフ村は村人の八割がゴーレム造りのプロでありゴーレムを造るのは当たり前であり日常だ。一家に一つかまどがあるのは生活の中にゴーレム造りを取り入れているためだろう

と無明は心の中で思う。

（それにしても…あんまり好かれてる様子じゃないかな）

最古のゴーレムのことを聞いてほしくないのだろうか、無明達を見る住人の目は何か汚物を見るような目をしている。

「皆、暴れたゴーレムの話聞いても皆が何も知らないって言うんだけど……」

「100%嘘でしょうね。それほど隠したいことなのかな？」

無明達五人は一切の情報が得られずに足がその場で止まってしまふ。このまま何も進展が無いものと思われたが五人の間に一人の人形技師が現れた。

「なあ、お前ら事件を聞き付けてやってきたみたいだが、俺があの事件の中心である最古のゴーレムの所に案内してやろうか？」

この人形技師の名前はソウ。無明達はこの提案を勿論断らず五人はこの男に着いていくこととなった。

「……………」

「無明。どうかした？」

「……いや、ただゴーレムのことを考えていただけだよ

・
それよりレイナ、誰に襲われるかわからないからばくの横にいて」

「……わかった」

無明は『ゴーレム』という言葉を使わずあえて『誰に』という言葉を使ったがソウル達は勿論、ソウもピクリとも反応はしなかったがほんの一瞬だけ空気が変わったような気がした。

「……………」

「どこまでいけばそのゴーレムがあるんだよ？」

「…もうすぐさ」

「さっきからそればっかだな」

少しイラついた口調でソウルは言った。

「同じ質問をすれば同じ答えが返ってくる」

ソウルが少しイラつくのも無理は無い。かれこれ20分は歩いているが最古のゴーレムらしき物は見つからず、いくらソウに質問しても同じ答えが返ってくるだけであった。

そのソウの態度にイラついたのかソウルが喧嘩口調で言った。

「気味が悪いんだよ
お前もこの村も」

喧嘩口調で言われたソウは怒らずに冷静に言葉を返す。

「この村はね
村に誰も寄せ付けないように魔除けのゴーレムを置きおとなしく平穏にくらしたいんだ…
何の問題もなく平穏に…
争いこともなくゴーレムのようにじっとしていた

人も同じだろ？角の立たない良い人面の奴に限って

心の中は真っ黒なのさ

「

ソウが喋り終わったとたん

ドシンコ

ドシンコ

と遠くから重量感のある音がする何かはこちらに向かってやってくる。

徐徐にその何かは向かってきて

バキバキバキバキ

という音がしたと思うと側にあった木をなぎ倒し木の向こうからはおよそ三メートルはありそうな巨体のゴーレムが現れた。

「ソウル…」

マカの掛け声に反応しソウルは武器化をする。

その武器になった鎌をマカは持つと構える。

「レイナ、ぼくはソウル達のサポートをしなくちゃならないから、あのゴーレムの攻撃が当たらなくて、出来るだけ遠くにならないところについて」

「わかった」

レイナは無明の側を離れると無明の10メートルほど離れた木の影に隠れる。

「エ！？うそ！？」

「……………」

マカが何か驚いた表情でゴーレムを見て無明はそのゴーレムをただ見詰める。

「どうした？」

「ゴーレムから魂の波長を感じる…
何なのコレ…ただのゴーレムじゃない
魂の波長があるなんてどういうこと…」

「……………蜘蛛女か」

「！？」

アラクネのことを知っているだ？」

ソウは驚いた様子で無明を見る

「こんだけ狂気をプンプン撒き散らされたら嫌でも感じるよ」

「まさか、お前……」

まあ、いい

それよりどれだけこの時を待ったか800年は長かった……」

「800年？何を言ってるの？」

「この時が来た……」

やっと力が蓄えられた……

これでようやくこのクソつまねえ人生から解放される……

ソウという名前をすて再びギリコになれるんだ……！！

何が「案内してやる」だ

面白すぎて腹が捻れそうだったぜ

そんなお人好しいねえよ

普通は出会い頭にキックだろうよ」

「あいつの身体……」

彼も武器なのか、ギリコは喋りながら体を変型させて完全に武器になると最古のゴーレムに自分『チエーンソー』を持たせる。

「職人なんかいらねえ

自分で造ったゴーレムに俺を使わせる！」

そう言うと同時にゴーレムはチエーンソーを振り上げるとマカに向かって勢いよく振り落とすが

マカは半歩横にずれてゴーレムの攻撃を避ける

「直ちに攻撃を中止しなさい
これ以上続けるのならお前の魂狩るぞ！」

マカはゴーレムとギリコに忠告をするがゴーレムはギリコはそんな忠告を聞かずにゴーレムは

「まだエンジンはかかってないぜ
やれゴーレム」

チエーンソーのエンジンをかけた

うゝおんウゝオン

エンジンがかかったことによりもの凄い衝撃がきてマカ達は飛び退く。

「今までの人生はなんでもねえ！！
クソ食らえだ！」

ゴーレムはチエーンソーを振り回し周りの木々を切り刻んでいく。

「社会のルールなど知ったことか！！
守るほどうたいしたもんかよくそつたれが

ところ構わず屁をぶっぱなす

俺がクソを垂れ流す！！

その瞬間からそこが便所だ！

そしてここがお前らの墓場だア！！」

ゴーレムはチエーンソーを振り回す。マカは振り回される攻撃は避けられるが反撃することは出来ず回避行動で精一杯だった。

「質量の違いで圧倒されちゃう…
スキについて中に飛び込みたいのに…」

「じゃあぼくがあのゴーレムのスキを作ってあげますよ」

「ホントに!?!
でも、どうやってあの巨体のスキを作るの?」

「的はでかいしあの巨体は素早く動けない…次にあのゴーレムが攻撃しようとした瞬間ぼくがあいつの懷に飛び込んで波長を撃ち込んでスキをつくります。」

「わかった!?!」

「何をペチャクチャしゃべってんだ!?!」

ゴーレムはチェインソーを思いっきり振り上げマカと無明に対して降り下ろそうとする。

「今だ!?!」

無明はゴーレムがチェインソーを降り上げた瞬間、思いっきり大地を蹴り加速しゴーレムの懷に入るとチェインソーを持ってる腕とチェインソーに向かって波長を撃ち込みゴーレムを踏み台にしてジャンプをしてその場を離れる。

「ぐっ!?!なんだと?」

無明が波長を撃ち込んだことによりチェーンソーを振り回してるゴーレムの手が一瞬とまりチェーンソーのエンジンも止まる。その一瞬を見逃さずにマカはゴーレムの懐に入るとゴーレムの胴を鎌を使って切り裂いた。

「ガキどもがちよこまかと…
だがそんな攻撃じゃ俺のゴーレムは倒せない」

ゴーレムは再びエンジンをかけるとマカをチェーンソーで尻ぎ払おうとする。

「左からチェーンソーがくるぞ!!
無理すんないったん離れる!」

「それ以上は駄目だマカさん!!」

ソウルと無明はマカに向かって忠告するが

「大丈夫!!まだ行ける」

「そついう問題じ…」

マカは二人の言葉を見殺してゴーレムを追撃しようとする

「えっ!!」

突然マカの動きが止まった。

「おい、マカ！！どうした」

ソウルがマカに対して声をかけるがマカは全く動かない。
その間にもゴーレムは攻撃を止めようとしない。

「だから言ったのに！！」

「うじゅ〜…」

無明は片手を武器にして、クロナはラグナロクを使って二人はマカの前に立ちゴーレムの攻撃を防ぐがゴーレムの力に押し負けられ三人は吹っ飛ばされる。

無明は吹っ飛ばされる瞬間に少し後ろに飛んでいたのであまり吹っ飛ばされず武器になっっている自分の片手を地面に突き立て吹っ飛ばされた威力を殺しながらそれを軸にして空中で体勢を立て直し地面に立つ。

マカとクロナはそのまま勢いよく木にぶつかりマカはその場に倒れ込みクロナは黒血があるおかげで全くダメージが聞いて無いのかすぐに立つ。

そして動かないマカを心配してソウルは武器から人間に戻るとマカに寄り体に触れ

「糸？」

マカの体についている糸に気づいた。

「だから言ったのに…」

ソウル、それは魔法だよ」

「魔法だと？」

「そう。」

まためんどくさいのが来た…」

「何のこと

…！？」

ソウルはマカのこと集中してたために気づかなかったが無明の言
った言葉により始めて気づく。

周りが蜘蛛で囲まれていることを…

「何だあれは…

ゴーレムに蜘蛛が集まっていく…」

「ゴーレムの中の魂にひかれているんだ…」

ザッ

と言う音と共にクロナは動かないマカとソウルの前に立つ。

「守るよマカ」

「おお！」

マカはクロナの行動に少し喜んでいる。

「んじゃあここはぼくも…」

レイナのついでに守るよソウル」

「俺はついでかよ！！」

「つてか嬉しくねえよ！！」

こんなことを言ってる間にもゴーレムに蜘蛛が集まっていく。

「鬼神が復活し狂気が走る世界！！」

あんたが寝ている間にいい世の中になったぜ」

ゴーレムに集まってる蜘蛛が固まり真っ黒になるとその黒い中から一人の女性が現れた。

「そうですね。とても心地よい世の中ですわ」

その女性の名は魔女アラクネ。

e m e t h...ゴーレムだZ E 三（後書き）

書いてる途中で気づいたんだ…

チェーンソーじゃなくてホントの名前はチェンソーだったわw w
クロナ空気エ…

何故ゴーレムの動きは波長撃ち込まただけで止まったん？

（。 - - ）　　ゝあんまり気にすなw w

いやいや、原作知ってるんだからいろいろできたり言えるだろw w

（。 - - ）　　ゝアンチじゃないからそんなことやらねえよw w

主人公狂気使えよw w 楽に勝てるだろw w

（。 - - ）　　ゝ……………

主人公一人で頑張れよw w

（。 - - ）　　ゝあくまでマ力達の課外授業のサポートなので…

クロナ空気エ

（。 - - ）　　ゝだね

次の更新は？

（。 - - ）　　ゝ週二回の更新はさすがにまずいと思うので頑張って
今週に更新するつもり…

ゴーレムの倒し方は頭文字のeをとるか首を落としましょうww(前書き)

なんだかな

何も思い付かなかったのよ…

今回は主人公頑張りますww

あと原作とだいぶ違うので

重要な話

『主人公はマカがアラクネを倒すまでしか原作知らないということにしたいと思いますm(_____)m』

ゴーレムの倒し方は頭文字のeをとるか首を落としましょうww

「アラクネ…

とりあえず現状の説明だが…」

ギリコが現状の説明をしようとする则アラクネは「しなくていい」という意味で手をギリコの前にかざす。

「マカ…

ソウル…」

「!？」

「な、なぜ私たちのことを…」

自分の名前を言っていないのにアラクネに名前を言われて二人は驚く。

「見てましたのあなた達に限らず

世界中の何もかも…

800年間

蜘蛛の子を散らして」

「無明…

鬼神が復活したのにあまり狂気が進んでないみたいね…

そこの木の影に隠れている子のおかげかしら？」

「わかってて聞いてますよね…」

「ホホホホ…失敬

そしてクロナ…

私の妹メデューサの子か…」

クロナはメデューサに似てるアラクネが怖いのか体を震わして動こうとしない。

そんなクロナを気づかい無明はクロナの肩に手を置き

「ここはぼくがやるよ。クロナはマカを守ってあげて」

クロナを下がらせる。

「無明君が相手…

まあ、いいですわ…

でもその前にギリコ、目障りなそのメデューサの子を消して」

「はいはい」

ギリコはいつの間にか武器から人間に戻っておりアラクネの側を離れるとクロナの側にかけより右足を軸にして左足の回し蹴りをクロナに向かってするが

バシッ！！

「人のことを無視しないでほしいな」

無明はギリコの左足の蹴りを横から素手で弾いた。

「へえ、中々やるじゃん俺の鋸足の鋸の部分に触れずに上手く弾くとは」

「まあ、ハエが止まりそうなら遅い蹴りだったからね」

「ああ!？」

無明はギリコを挑発して自分に意識を向けさせる。

「じゃあこれならどうだ!!」

回転速度3速!!」

ギリコがそう言うのと先程のクロナを攻撃した時の鋸の速度より更に速くなりギリコは両足を鋸足にすると無明に対して右足で踵落としを入れる。

無明はそれを弾かずに横にずれて避ける。

ドゴッッ

先程無明がいた場所はギリコの蹴りにより大きなクレーターが開いた。

「まだまだ!!」

ギリコは右足をクレーターから勢いよく抜く。抜くと同時に地面の岩を無明に対して蹴り放ち無明の視界を曇らせる。

そして無明の首を右足の鋸で刈ろうとするがギリコの右足を空を斬った。

「何っ！なぜ俺の攻撃を避けられる！？」

「ぼくは見なくてもお前の殺意という狂気が視えるんだよ」

無明は首を狙ってきたギリコの右足の攻撃をしゃがんでかわし、鍵に変化させた右手でギリコの軸になっている左足の底に鍵をいれ持ち上げようとする。

「うおっ！」

ギリコはバランスをくずし背中から地面に倒れそうになるが体を捻り無明に向けて捻った力を利用して無明にむけて蹴りを放つ。

無明はその蹴りを避けギリコの視角に回ると思いっきりギリコの横腹を蹴りあげ空中に上げる

「攻撃が軽いな！！」

「でもこれならきくでしょ？」

空中から落ちてきたギリコに向かって右膝で背中を右肘で腹を同時に狙い当て一緒に二ヶ所から魂の波長を撃ち込む。

「つつつてえなああああ！！」

ギリコは腕からチェーンを出すと無明目掛けてふるつ。

「……………」

無明はそのチェーンを避けるためにギリコから離れいったん距離をとる

「職人無しで武器がここまで動けるとはなあ」

「お前も凄いと思うけど…」

「誉め言葉として受け取っておくぜ！」

ギリコは自分の胴体と腕にチェーン巻き回転させる。

「これでどこにも触れられねえな！！
もうそろそろ死ねよ」

ギリコは両足のチェーンを上手く回転させ地面を足を動かさずに走り無明との距離をつめる。

ギリコは無明に攻撃が当たる範囲まで近づくと再び無明に向かって蹴りを放つ。

「よいしょ」

無明はギリコの蹴りを避けると同時に懐からピンを取りだしギリコの顔目掛けて投げつける。

「なんだ？」

どう反撃してくるのかと考えていたギリコは思いもよらない攻撃に少し拍子抜けをするが無明が投げつけてきたピンをチェーンで壊すすると中から小さく四角に切つてある大量の折り紙がギリコの周囲に舞う。

「かかったな

」rock」

その瞬間を見計らつて無明は狂気を使い鍵の能力を発動させ折り紙の動きを止める。

「何がし…!!?」

ギリコは無明に向かってチェーンが巻いてある腕で殴ろうとするが大量の折り紙がまるで壁のようになりギリコはその場から指一本動けないようになった。

「やっぱり人をrockするより折り紙をrockするほうがあまり力を使わないな」

無明はのんびりした口調でゆっくりとギリコの近付き、

「はい、終わり」

シュタイン博士が補習の時ブラック スターにやっていたようにギリコの頭に両手で魂の波長を流し込む。

「アゝアゝアゝアゝアゝアゝ」

ギリコは動けずなすすべもなく悲鳴を上げる。

「ぼくはあんまり優しくないんで

そのまま死ネ

アハハハハハハハハ」

更に波長を強くしようとしたとき

「無明」

レイナの声が無明に聞こえた。声が聞こえると無明は波長を流し込むのをやめて、rockしていた折り紙を解除しギリコから離れる。ギリコは意識をうしなっていてそのまま地面に倒れる。

レイナはいつの間にかマカ達のそばにきていた。

「……ありがとうレイナ。もうちょっと狂気に吞まれる所だったよ」

「気にしない。パートナーだから」

「ふふっ、そうだね。」

それにしても地味な嫌がらせをしてくるんだねアラクネ。」

無明はゴーレムの近くにいるアラクネを見る。

「あら、気づいていたの？」

私が貴方の少しづつ精神干渉していたのを」

「冷静になってようやく気付いたよ」

「そのまま狂気に吞まれていればよかったのに…

まあ、いいですわ次は私が相手になりましたよ」

アラクネは扇子を取りだし広げ戦闘体勢を取るが

「いや、遠慮します

ばくだけじゃ貴女に勝てる気がしないので」

無明は構えようとしない。

「貴方が戦う気がなくても私は見逃す気はないですわよ」

「……………見逃すことになりますよ」

「何を言って…」

ズドコン！！ズドコン！！

ズドコン！！ズドコン！！

遠くからとても大きな爆音が聞こえてくる。

「もうすぐデスサイズかくるからね」

「……………取引と行きましょう」

「取引？」

「そう。マカちゃんにかけた魔法は普通には一生解けません。しかしその魔法を解く薬がここにあります。これを渡す変わりにギリコを私に渡してくれないかしら？」

アラクネは懷からビンのようなものを取りだし無明に向けて掲げる。

「…そんな取引しなくてもデスサイズが来たら二人がかりで貴女から奪えばいい。」

「そうしようとした場合私の魔法で何がなんでもこの薬を消滅させます。そしてギリコを私に渡す前にデスサイズが来たらこの薬を消滅させます。」

「…その魔法が普通に解けないとは限らない」

・

「なら試してみる？誰かを使って」

そう言うアラクネはレイナをほうを見る。

「…わかった

その薬でしか解けないでしょう。最後にその薬が本物だという証拠は？」

「私を信じて貰うしかないですわ」

「…はあー、わかったよ
取引を受けよう。」

まずその薬をクロナに渡す。クロナなら黒血のおかげで貴女から不意打ちをくらっても大丈夫でしょう。クロナが受け取ったらぼくはギリコの側を離れる。勿論ぼくはクロナが薬を受け取った瞬間ギリコにとどめをさすという卑怯なことはしない。」

「…わかりました。では取引をしましょう」

「クロナ。マカを助ける為に取ってきて」

「……………うん」

マカを助けるという言葉に反応したのか今まで震えて動けなかった体を動かしてアラクネに近づいていく。

「そんなに震えて落とさないように」

アラクネはクロナに薬を渡す。クロナはそれを受け取りマカ達のもとへ行くとマカにその薬を飲ませる

「大丈夫？マカ」

「うん。ありがとうクロナ」

おかげでさっきより体が楽になったような気がする」

「ホホホホ…」

その魔法は強力ですから薬を飲んでも直ぐには治りませんわ

さあ、今度はギリコを渡して貰いましょう」

「わかった」

無明はそう言うつとギリコの元を離れマカ達のほうへ行つた。

アラクネは無明がギリコから離れるとギリコに近付きギリコを起す。

「…あれ？俺は何を…」

「そんなことよりもうすぐゴーレムの電池が切れますわ。デスサイズも来るようなので一旦ここは退きましよう
迎えも待っているわ」

「…わかりました。姐さん

おい。そのガキ」

ギリコは立ち上がると無明を見る

「何？」

「次会つたら命は無いと思えよ」

「じゃあ会わないようにしとくよ」

無明がそう言う頃にはギリコはアラクネを抱えその場を去っていた。

「おい！無明

追わなくていいのかよ！？」

「あんなんに追い付けないよ…
それよりアレを処理しないと」

そう言うが無明はある方向を指をさす。

無明が指をさす方向には雄叫びを上げこちらに向かってこようとす
るゴーレムがいた。

「そっぴゃあいつがいたな…
俺も手伝うぜ無明」

ソウルは立ち上がると片手を鎌に変える。

「あー大丈夫。そんなことをしなくても…

『法を守る銀の銃』

…ほらね」

聞いたことの無い声が聞こえたと思うとゴーレムの首が胴体と離れ
倒れる。倒れたゴーレムの後ろには神父服を着てイヤホンをつけて
立っているデスサイズの一人、ジャスティン・ロウがいた。

「おや、良かった。全員無事なようですね」

「一人動けないですけどね」

「おお！それは大変だ！！急いで博士に診てもらいましょう」

ジャスティンはとてもうるさい爆音がする棺桶型バイクにマカを運ぶ。

「マカまだ体は動かないのか？」

あのアラクネって魔女がかけた系の魔法が全然解けないな…」

「うじゅ〜」

「弱りましたね」

「まあ、少しづつ解けるって言ってたし大丈夫と思うけど」

「無明と同じ」「おいズドコ、待ンてコラ

ズド動けコンないズからドってココのン棺ズドコン桶のズ中はド無いコよね」

「……はい？」「……」

マカが何を言っているのかよく聞こえず四人は手を耳に当て聞こえないというポーズをとる。

「おいクソ神父！！さっき無明とイヤホンつけたまま話してただろ！！」

ジャスティンは恐らく読唇術でマカが何を言っているのかわかるだろうがあえて無視をする。

「とりあえず早く博士に診てもらうか」

「そうしましょう」

「おい、お前ら今普通に聞こえてるよな？」

「マカ、お花」

「マカの愛読書^{フッ}」

クロナはマカの棺桶に花をいれレイナはマカが好きな本を入れる。

「ありがとうクロナ」

レイナはわざとだよね

私が動けないのを知っててわざとだよね？」

「よく聞こえない」

「ああー……もう!」

無明達が死武専に帰るまでマカの愚痴は続いた。

ゴーレムの倒し方は頭文字の e をとるか首を落としましょう w w (後書き)

なぜギリコ対主人公やったかって？

原作書いてたら主人公空気になるからだよ w w

それにしてもジャスティン来んの遅っ (@ @:!)!!

そしてギリコ弱っ!! 主人公強っ!!

重要な話

『主人公はマカがアラクネを倒すまでしか知らないということにしたいと思います m (_ _) m』

戦闘 w w

(。 - -) へ w w

ゴーレム、アラクネ空気エ…

(。 - -) へ一気に書けるかよ w w

アラクネ、最初から強力な精神干渉しろよ w w

(。 - -) へやる気がないのだよアラクネは

おいおい w w 便利だな主人公の能力

(。 - -) へほんとに便利だわ w w

狂気が進むという設定であんまり使わないようにしてたのに…

何、その魔法

(。 - -) へびつくりだね w w

ゴーレム…

（。 - - ）　　☆可愛そうに…（笑）

次の更新& a m p ; 話

（。 - - ）　　☆わからね　　話はちよこつと原作やってのオリジナルかな？

題名が思い付かないZE ミ(前書き)

なんにもネタが思い付かなかった…

題名が思い付かないZE 三

アラクネ達と戦った後、死武專に帰るとマカを皆で保健室に連れていった。

「ありがとうね。無明のおかげで徐々にこの魔法は解けていくみたい」

「あの薬が本物でよかったですね」

「うん。よかったんだけど…」

マカの片指は動くようになったが他の部位は全然動かせないようにマカの看病にと皆が集まり保健室が賑やかになりすぎていた。

「…速効性のある薬がよかった…」

「ドンマイ（フッ）」

レイナは少し鼻で笑いながら言った。

「絶対心の中ではそう思っただけだよねレイナちゃん…」

少しジョークを混ぜながらも皆でワイワイとやっていたがブラックスターがいなくなるとそれを追うようにソウルも保健室が出る。

（ソウルどうしたんだろう？）

無明は真剣な顔をして出ていったソウルが気になりソウルの後をつ

けて保健室を出た。

無明がソウルの跡をつけていくとソウルはブラック スターと合流し二人揃ってなにやら死人先生とナイクズ先生の話を盗み聞きしているようだった。

無明もブラック スター達と距離をとりながら話を聞いているとどうやらアラクネの研究施設の一つがあるらしくそれをブラック スターが密かについていき壊すということだった。そしてソウルがこちらに近づいてくる。

別に無明は逃げる必要も無いのでその場にいてるとソウルと目があった。

「…無明、お前今の話を聞いてたのか？」

「まあ、一から十まで聞いてたよ」

「そうか…無明はブラック スター達と一緒に行くことはしないのか？」

「呼ばれて無いしいかないよ」

ソウルは「そうか…」と言うと保健室の方へ向かって歩き出した。どうやら椿を呼びにくらしい。無明も特にやることも無いので一緒にソウルと歩いていたがお互い会話が無い状態であった。

「なあ、無明」

が突然のソウルの一言により会話の無い状態が破られる。

「うん？」

「俺は武器だよな」

「そうだね」

「あの男もジャスティン先生も武器だよな」

「まあ、そうだね」

「同じ武器のはずなのにパートナー無しでどうしてあんなに動けるんだろう」

俺はマカが動けなくなった時ただ突っ立てることしか出来なかったのに」

「あれらはデスサイズと800年生きてる男やし仕方無いんじゃないかな」

「その800年生きてる男を無明は倒したと思うけど…」

「それは能力がたまたま相手にきいたからだよ」

「…それを含めて無明の力だと思う俺にもそんな力があれば…」

「ソウル達はソウル達で他人とは違うとても素晴らしい力を持つてると思うけどな」

だからあんまり気にしないでいいんじゃない？」

「……………」

この後の会話は続かなくなり二人は無言で保健室へ行きソウルは椿を呼んでからマカの看病をし、無明はレイナと一緒にしばらくマカの看病をしてから帰り始めた。

帰宅途中レイナが無明に話かける。

「今日は皆凄かった」

「アラクネ達の時のこと？」

「そう。あんなに動けて凄いと思う」

「そりゃ動かなかったたら最悪死ぬからね」

無明は笑いながら答える。

「私もいつか皆の隣に立つ」

「期待してるよ ぼくのパートナーでもその前にぼくを振れるぐらいにはなってるね」

「…痛いところをつかない」

最近レイナの口数が増えてしゃべるようになったなと無明は感じながら二人でアパートに帰った。

無明とレイナは夕御飯を食べるとジャージに着替えアパートの近くにある広い空き地へと移動する。

「さて、今日からこころで訓練しようか」

「おー」

「再確認だけどレイナは頑張ってぼくを振れて「七、八回」…だったね」

無明は少し頭を抱え考え込む。

「…まあ、筋力はおいおいつけるとして…レイナは足とかは早い？」

「100m14秒。300m以上は体力がもたない」

実際14秒なら普通の間隔では早い方だと思うが死武專の女子の同年代の平均は10〜11秒であり14秒とはかなり遅いほうにあたる。

「足はまあまあだね」

「何を考えてるの？」

「ん？ああ、この先どういふふうに二人で戦っていくかって

できる限りぼくだけが戦うのじゃなくてレイナにも戦って経験をつんで強くなってもらいたいんだ。
もしもの時のためにね」

「もしも…？」

「絶対に無いとは言えないからね。それよりどうしようかなーぼくたちの戦闘スタイル…足だけじゃあ…」

再び無明は頭を抱え考え込む。

「…もしかしてこれ使える？」

レイナは考え込む無明の側に行くところがある事をする。・・・

そのある事をみた無明は今まで抱えこんでいた頭から手を離すと

「…これは！！

これは使えるよレイナ！！一体いつから！？」

今までの悩みが吹っ飛んだのかおおはしゃぎをする。

「無明を持ったとき何か重なったような気がした。その時から」

「そうなんだ！よし今日から重点的に足を鍛えてこれも鍛えはじめるよ！！

勿論他のこともするからレイナ覚悟してね」

「……………」

レイナの返事は聞かずに無明はトレーニングをし始めた。

三時間後

レイナは空き地の地面に肩で息をしながら倒れていた。

「ハア…ハア…ハア…も、もう無理…ハア…ハア…」

「そうだね、そろそろ暗いし今日はここらへんにして帰ろうか」

「ハア…ハア…ハア…動けない…立てない……………」

どうやらレイナはトレーニングのしすぎでその場から動けなくなつたようだ。

「じゃあ先に帰るよ」

「ハア…ハア……………鬼」

息が整ってきたのかあまり激しい呼吸から静かな呼吸に変わっている。

レイナは体は動かないので首だけ動かして無明をじっと見つめる。

「……………わかった。おぶっていくからそんな顔でこっち見ないで。ガチで怖いから」

「…ふつ、私の作戦勝ち」

無明はやれやれと首を振りながらレイナをおぶる。

「軽っ！！一体なんでこんなに軽いんだよ！」

「…実は私幽霊だから」

「えっ…」

「うそ」

「…だよ。でもホントに軽いな」

「変態」

「なんで!?!」

二人は暗い道の中楽しく会話をしながらアパートに帰っていった。

後日談だがたまたまその時無明を見かけた人が言うには

「背後に白いなにかがいた。不気味なあれは絶対に幽霊だった…」

と言ってる人が多数いた。

翌日

無明が学校につくとケガをしているブラック スターがいた。椿に聞いたところによるとどうやら強敵がいたらしくその人にだいぶやられたらしい。やられたことが悔しいらしく教室の隅ですつと筋トレをしていた。

「それは大変だったね…」

「はい。悪い人じゃないと思うんですが…」

「ミフネさんにも事情があるんだよ。きっと…」

あつ、そろそろ一時間目が始まるよ」

「あ！そうですね

ブラック スターー！！」

そして一時間目が始まるとあつという間に時間は過ぎて夕方になった。

無明とレイナは学校がおわるとアパートに帰ると昨日と同じ空き地へ行き訓練をする。

訓練が終わるとレイナはその場に倒れこみ無明がレイナをおぶりアパートに帰る。そして翌日学校に行く…

と繰り返して五日が過ぎた。

五日後

「最近レイナの体が湿布だらけだけど何かあったのか？」

レイナはしょっちゅう保健室へ行き湿布を貰っていたのでマカの看病をしているソウルはよく見かけていたらしい。

「最近訓練してるからね」

「ああ、なるほど

で、どういう具合なんだレイナの方は？」

無明は大きく息を吸い込むと

「だいぶ進歩してるよ！！」

とはつきり言った。

無明の自信満々な顔につられてソウルも少し笑いながら言う。

「そりゃ、良かったじゃねえか！！どんな感じに進歩したんだ？」

「400mまで走れるようになったしぼくを最大11回ぐらいまで振れるようになったよ」

「……………そうか」

無明の一言によりソウルの笑みは一瞬で消えた。

「この前より成長したんだって!!」

「でもそんなんじゃない…」

「…わかった。じゃあ一度成長してるのを確認するついでに明日ぼく達二人と戦ってみない？」

「おお。別にいいぜ!どんたけ成長したか俺が見てやるよ」

「絶対にびつくりするよ」

「期待して待ってるわ」

ソウルはそう言つと「マカの看病してくるわ」と言つてその場を去つていった。

明日のことを考えて一人その場で無明が笑っていたことは誰も知らないだろう。

その日の夜中、無明のアパートでは明日のことについて作戦会議をしていた。

「…ということで明日のソウルとの勝負は…」

という作戦で行こうと思う」

「わかった。頑張ってみる」

「まあ、明日は気楽に行こうよ」

「
うん
」

作戦が決まると体調を考えすぐに横になった。

題名が思い付かないZE ミ(後書き)

かなり字数稼ぎと無理矢理な部分多かったww
レイナの能力はすぐにわかるだろうね(笑)
なんにも思い付かなかったんだよ…
誰かネタくれ、ネタを…

最初の方の主人公とソウルの会話よww

(。 - -) ム字数稼ぎじゃいww

急にそんなに体力上がらんだろww

(。 - -) ムびつくりだねww

ソウルの適当さww軽いなww

(。 - -) ム無理矢理やるしかなかったんじゃいwwww

次の更新&p:話

(。 - -) ム土日で話はソウル対無明&p:レイナです

初めてのおつか…対戦だZ E ミ(前書き)

最近友達にキングダムハーツ(D S 版)を借りたけど中々だったね
w w

アクセルがとてもしかっこよかった^ | ^ ;

初めてのおつか…対戦だZ E 三

授業などはあつという間に終わり現在は放課後の時間になっている。約束の時間まであと少しだがレイナと無明は先にグラウンドで待機していた。

「初めから勝とうと思わず一発いれるぐらいの気持ちでいこうよ」

緊張しているのか動きがガチガチになっているレイナに優しく言う。

「…わかった」

無明の一言がきいたのかガチガチであったレイナの動きが少しだけほぐれた。

「そろそろくるかな」

無明は首をふって辺りを見回しソウルの姿を探した。

「あつ、きたきた」

無明の目線の先には死武専から出てこちらにやって来るソウルと椿がいた。

「おう、待たして悪いな。立ち会い人として椿を呼んでたんだ」

「よろしくお願いします」

椿は無明の前で頭をペコリと頭を下げてから今から始める模擬戦のルールを説明し始めた。

「勝敗は私の判断で決めるか負けを認めるかどちらかです。
これは模擬戦なのでお互い武器の刃は丸めること
他は……」

ルールの重要なところはだいたいこの二つであり他はそこらへんの試合とほぼ同じであった。

「ルールはわかった。

それじゃ、どれだけ成長したか俺が見てやるよ
少しモチベーションを上げようか、そうだな……俺に一発でもいれられたら何でもレイナの言うことを聞いてやる」

ソウルは無明達と少し距離をとり、自分の片手を鎌に変えた。

「お手柔らかに
その言葉忘れない

……………無明」

「うん」

レイナの呼ぶ声がに反応して無明が武器の姿になる。武器の姿になった無明をレイナは両手で持つ。

「二人とも準備はいいですか？」

「いつでもこいー!!」

「…大丈夫」

二人の準備が出来ると

「…わかりました。それでは

始め!!」

椿の掛け声とともに二人の勝負は始まった。

「…先手必勝」

先に動いたのはレイナ。長期戦になると不利になるということがわかっていたので一気にその場から駆け出すとソウルとの距離をつめようとする。ソウルとレイナとの距離はおよそ5メートル。二、三秒あればすぐに距離をつめられる。レイナはおよそ三秒かけてソウルとの距離をつめるとまずは鍵をソウルの顔目掛けて下から上に突き上げた。

「おっと」

レイナの顔を狙った攻撃をソウルは鎌に変化させてあるほうの手で防ぐ。

そしてすぐにもう片方の普通の腕でソウルはレイナの腹を殴ろうとするがレイナがその場から一步後ろに下がったことによりソウルの

拳は空をきつた。

「……………すうー」

レイナは深呼吸するとその場で鍵を持ったまま体を捻り回転させてソウルに遠心力をつけて鍵を右から左へ横に一閃する。

どんなことをするのか少し様子を見ていたソウルは反応が遅れて避ける時間が無くなり左側から来た攻撃を右手の鎌で防御をするが

「くっ！（結構重いぞ）」

予想より攻撃が重かったためこのまま防ぎきれないと思ったソウルは鎌を捻りレイナの鍵を鎌の平面の部分を滑らせて軌道をずらして攻撃をかわす。

攻撃をかわすと回転の勢いでまだ少し回っているレイナに対してソウルは鎌で突くが、

「……………危ない」

ガキンツと金属音になる

レイナは鍵の取っ手の部分でソウルの突きを防いでいた。

防ぐと同時にまた体を捻らせソウルの突きを受け流すと今度はレイナが鍵を使ってソウルを突いた。

「ガハッ！！」

ソウルは防御も出来ずにもろに鳩尾にレイナの突きを食らってよろめきふらふらと後ろに下がると息を吐いた。

「いってえゝ腹に穴が開くぜ」

ソウルは痛がつてはいるもののまだ冗談が言えるほどの余裕があった。

それに対してレイナは

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア……………」

肩で息をして、少しよろめいていた。

「…無明の言う通りだいぶ成長したのはわかった。
でも、まだまだだな…」

「ハア…ハア…まだ、…………まだ…行け…る」

「そんな調子で行けるのか？」

「ハア…ハア…ハア…やって…みせる!!」

レイナは珍しく声をあげまだ戦えるとアピールをする。

「ハア…わかった。じゃあ俺からも行くぞ」

「ハア…ハア…ハア……………（こくり）」

レイナは何も言わずただ首を振る。ソウルはレイナが首を振ったのを確認するとレイナの方へ走り鎌を降り下ろす。

レイナは防御をせずにただ横にずれてソウルの動きをかわす。

「反撃はしないのか！」

ソウルは攻撃の手を緩めず鎌で突いたり振り払ったり、手足を使つてレイナを攻撃するがどれも紙一重でかわされる。

ソウルは徐々に苛立ちを覚え始めて自分の攻撃が単調になっていくのを感じたため自分のペースをもとに戻すためにいったん距離をとりリラックスをする

「私は無明に二つのことを教えてもらった」

レイナはまだ少しふらついているが防御も反撃もせずただソウルの攻撃を自分の動きを最小限にしかかわすだけであつたため先程より幾分体力は回復していた。そしてソウルに向かって話始める。

「…何を教えてもらったんだ？」

ソウルもいったんレイナの話に耳を傾ける。

「一つ目は体さばき

私は体が弱いから一発でもくらつたらアウトだから自分の小さな体格をいかして相手の攻撃を最小限の動きでかわすことを教えてもらった」

「なるほどな。どつりでよくかわすわけだ…」

「そして二つ目…」

私の戦闘スタイル」

そう言うとレイナは鍵を地面に突き刺す。

レイナは少し目を閉じ集中すると目をあける。

「無明」

「わかってるよ」

レイナは地面に突き刺さっている鍵を引き抜くと上空へ投げた。

「おいおい、どこにそんな力があんだよ」

ソウルは上空に投げられた無明（鍵）をみる。

「ってか投げてどうする？」

ソウルが上空にある無明から視線を外し、そうレイナに言おうとしたが

「あれっ…？」

さっきまでいた場所にレイナはいなかった。

レイナを探そうと思った瞬間背後から拳銃に撃たれたような衝撃が

走った。

「ツツツ！！なんだ？」

ソウルが慌てて背後を見る。見ると同時に今度は足に衝撃が走った。ソウルが少し膝をつく。そして前方を見ると、手からバチバチと電撃のようなものをだしているレイナがいた。

「まさか！？魂の波長を撃ち込めるん
ガハッ！！」

ソウルは突然自分の背中に走った衝撃で地面に倒れこむ。目の前にいたレイナが何かしたわけでは無い。何かが自分の背中に当たったのだ。そう思うと同時にソウルは気づいた。

「そうか…忘れていたぜ。無明のことを…」

ソウルはゆっくりと立ち上がりレイナのほうを見た。ソウルの目線の先には鍵を地面に突き刺してその横に立っているレイナがいる。

「よく上空に投げられたな」

「共鳴度を調整して無明を極限まで軽くした」

「なるほどな。でも同じ手は通用しない」

ソウルの言葉を見殺して再びレイナは上空に鍵を投げる。

「動き続けていれば当たらない!!」

ソウルはすぐにその場を離れるとレイナに向かって駆け出した。

ソウルはレイナの目の前までくるとしゃがみこみレイナの足を狙って鎌を横に振るその攻撃をレイナはジャンプして避けた。

「無駄だ!」

ソウルは鎌を下からレイナ目掛けて突き上げる。

(…終わりですね)

その場面を見ていた椿はそう感じた。ソウルも勝ちを確信する。

が、レイナはソウルの攻撃を予想していたのかソウルが鎌を突き上げようとした位置に足を置く。そんなことを気にせずソウルはそのままレイナごと鎌を突き上げるがレイナはソウルの攻撃と全身のバネを使って突き上げられた瞬間にさらに上空へ飛んだ。

「「なっ!!」」

ソウルと椿は驚きを隠せずに口を開けていた。

「一体何をしよ…」

ソウルがレイナに対していいかけた時にふと気付いた。

(そういつた無明が降ってこない…
まさか!?)

ソウルがあることに気づく時にはもうレイナ達はすぐ上にいた。

レイナはソウルの攻撃と同時に上空へ上がると上空に上げていた鍵を掴む。そしてその場で前に回転をしながらソウル目掛けて落ちていく

「これが私の今の全力!!」

レイナの体重&遠心力&無明の体重&重力が加わった攻撃がソウル目掛けて落ちる。

(これはやばい!!)

防ぎきることも時間的にその場から逃げることも出来ないと感じたソウルは武器化をしてせめて生身の部分に当たらないようにした。

ドッッゴッッーン

レイナの攻撃は間一髪武器化したソウルには当たらずソウルのすぐ横の地面に当たる。もしソウルが生身であつた場合、痛いというところでは済まされなかつただろう。地面は半径3、4メートルほどのクレーターが出来ていた。

そしてソウルは武器の状態から人間に戻りレイナに近づき鎌を向ける。

「ハア…ハア…ハア……もう動けない。降参」

「はぁーやつとかよ…」

「この勝負。ソウル君の勝ちです!」

椿が高らかに宣言をする。この勝負はソウルの勝ちで終わった。

「それにしても凄いですね。あそこまで動けるなんて…」

椿は勝負が終わったのでレイナに近づき言った。

「頑張った」

動けないレイナは無明におんぶされながら椿のほうに首を向けて言う。

「頑張ったって…凄い努力をしたんですね」

「……………別に（ボソッ）」

レイナは恥ずかしいのか椿と顔を合わせず無明の背中に顔を向けていた。

「もう少しで俺が負けてたよ
凄い努力だな」

ソウルもレイナに近づき言った。レイナは二人に言われて恥ずかしいのか耳まで真っ赤になった顔を無明の背中に顔を埋めていた。

「よくこんな戦い方を教えたものですね…」

「体重が軽く小柄なのと魂の波長を撃てるのをいかして考えた結果こうなったんだよ」

「お前の言った通り物凄い成長だな」

「ぼくからしたらまだまだ危なっかしい戦い方だけどね」

ソウルの言葉に対して少し笑いながら無明は答えた。

「……………あつ」

突然レイナは無明の背中から顔を上げたと思ったらソウルを見る。時間がたったことにより先程の真っ赤な顔からいつもの顔の色になりそのいつもの顔でソウルに言った。

「何でも言うことを聞いてくれる」

「あつ！！」

ソウルはそのことを完璧に忘れてたため不意に驚いた。

「そうだったな…
何がいいんだ？」

自分が言ったことなので今さら取り消す訳にも行かずにソウルは覚悟を決めた。

「…まずは」

「まずは！？」

言うことが一つだけだと思っていたソウルはまたもや驚く。

それから数分レイナはやってほしいことをソウルに告げた。

「…それを俺に明日やれと？」

「そう」

「間違いなく俺は死ぬよな？」

「約束^{フツ}」

レイナは少し鼻で笑った。

「……わかった。やってやるよ！！明日楽しみにしとけよ！！」

ソウルはそう言うとその場を去っていった。

「じゃあぼくたちも帰るか」

「……………（じっくり）」

そのあと無明とレイナは椿にお礼を言って死武専をあとにした。

帰り道

「負けちゃったなー」

無明はおぶっているレイナに対して言う。

「……………」

「初めは仕方ないさ
次は負けないようにすればいいよ」

「……………うん」

「まあ、でも今日はよく頑張ったと思うよ」

「……………」

レイナは何も言わずにただ無明の背中に真っ赤に染まった顔を埋めていた。

初めてのおつか…対戦だZ E ミ(後書き)

もうほんとにネタが無いのだよorz

戦闘だけで一話だ…と？

絶対に前半より後半のほうが動き激しかったよねww体力がなぜか
もったつていう…

たった数日で成長しすぎだろww

(。 - -) へ若いからだよwwそう思っておこうか

いやいや、軽く体力やらなんやら限界突破してるだろww

(。 - -) へ恐らく気のせいだ

運動出きるよね絶対。むしろ得意だよな

(- - - ;)

最後の技絶対自分自身にもくらってるような…

(。 - - -) へ細かいのは気にするな

いやいや、そんな戦闘スタイルでこの先やって行けるのかってはなし
(。 - - -) へこの先多分こんな戦い方あんまり使わないだろうねー
まだわからんが…

約束だZE ミ(前書き)

何書いてるんだろ自分…

約束だZE ミ

昨日の勝負により、何でも言うことを聞かなければならなくなったソウルはレイナの提案したあることにより現在はブラック スター達がすんでいる部屋の前に来ていた。

「…なあ、本当にやらなくちゃ駄目か？」

「勿論。心配しなくてももしものために私がいる」

レイナはソウルが本当に提案したことをやるのか確かめる為にソウルの隣についてきていた。

「お前がいるから逆に心配なんだが…」

ソウルの言うことを無視をしてレイナはソウルの手を取ると

「レッツゴー」

ブラック スター達がすんでいる部屋のチャイムを鳴らす。

ピンポーン

ピンポーン

「はい。今行きます」

部屋の中から椿の声が聞こえて来る。

ガチャ

「どなたですかー？」

あ、ソウル君とレイナちゃん」

「お、おう」

「やほ」

「えーと、今ブラック スターは出掛けてていませんよ？」

「大丈夫。ソウルが椿に話がある」

「私に？」

レイナは首を降り頷く。

「わかりました。立ち話もあれなんでどうぞ上がって下さい」

椿の好意に甘え二人は部屋に上がらせて貰う。

椿とブラック スターの部屋に入ると普段あまり見慣れない和の空間が広まっていた。

「そこらへんに座っていて下さい。今お茶を持ってくるので」

そう言うと椿は一旦ソウルとレイナのもとを離れる。

「私はトイレを借りてくる」

「お、おい」

「大丈夫、すぐに戻る」

そう言つてレイナもその場から離れる。

ソウルが一人部屋で待っていると椿が先にお茶を持ってきた。

「あれ？レイナちゃんは…」

「トイレに行つたよ」

「そうですか。それでソウル君は私に何か用が…」

ソウルがゴホンと咳き込むと椿に話始める。

「実は…」

「実は？」

「どうしても椿に言いたいことがあつてここに来たんだよ」

「言いたいこと？」

「…ああ。これは俺の推測なんだが椿つて

とってもエロいんじゃないか？」

ソウルがそう言った途端その場が凍りつく。

「……………は？」

「いや、だっていつも胸元開けてるし足も見えるしパンツは以外と白だし…」

「ソウル君、大丈夫ですか？昨日の勝負でどこか頭でも打ったのでは？」

「いや、大丈夫だ。それよりそんな椿にこれは俺から心の籠ったプレゼントだ」

ソウルは持っていたカバンから一冊の本を取り出し渡す。

「エロ本だよ！グハッ！！」

本を渡した瞬間椿に蹴飛ばされる。

「ソウル君は私をどんな目で見てるんですか！！」

「癒し系の頼れるお姉さんと見せかけて、胸がデカいたただのエロ

いや、ちょっと待って！！これはレイナに言わ…「ちょっとソウル君お話ししましょうか」…はい」

ソウルと椿のお話は数十分にも及んだ。

あれから椿の家を離れて二人はキッドの家に来ていた。

「これもやらなくちゃ駄目か？」

「勿論」

「つくそ！！あんなこと言わなければ良かったぜ！」

そう言いながら二人はキッドの家のチャイムを鳴らす。

鳴らしてからしばらくすると中からキッドが出てきた。

「ん？誰かと思えば…珍しい組み合わせだな
何か用なのか？」

「ソウルがキッドの家にある絵画を見たいらしい」

「別に構わないが…絶対に触るなよ」

二人はキッドの尋常じゃない圧力に気圧されながら

「お、おう」

「うん」

と言ってキッドの家に上がっていった。

「…そしてこれが…」

キッドの家に上がるとすぐさま絵画鑑賞することになり説明を受けながら只今二人は絵画を見ていた。

「ソウル…そろそろ」

レイナが小さな声でソウルに耳打ちをする。

「わかったよ…」

ソウルの決心を確認するとレイナはキッドのほうへかけより

「トイレの場所教えて」

と尋ねる。

「ああ、それなら…」

キッドがレイナにトイレの場所を教えるのに絵画から目を離れた隙を狙ってソウルは絵画を右に4？ほどずらす。そして次々に飾つてある絵画をずらしていく。

「覚えた。ありがとう」

「ああ」

キッドは再び絵画の説明をしようとソウルがいた方へ振り向くとそ

ここには誰もいない。

「ソウルはどこにいったのだ…!!?」

ソウルのことを探そうと思った瞬間気づく。

「し、シンメトリーが…」

ソウルうウウウウウウウウウ!!」

キッドが怒りながら絵画の位置を直している隙に二人はキッドの家から脱出していた。

「なあ、こんなのをやる意味はあるのか？」

「特にない。強いていうなら面白そうだから」

二人はキッド邸から離れ死武専に来ていた。

「面白そうって…」

「気にしない。これで最後頑張って」

ソウルはやつと最後かと呟きながら重い足を動かして死武専に入っていた。

「本当にこれを言えと？」

「頑張つて」

「……………」

ソウルは頭を抱えながらとある人物に話かけに行く。

「おい！デスサイズ！！」

とある人物はマカのお父さんだった。

「ああ？なんだカマ野郎」

ソウルはこれで最後ともしかしたら俺死ぬかもという思いを抱えながら言った。

「俺はマカが大好きだぜ！もうパートナーという領域とかじゃない。likeじゃないloveなんだよ！お前の知らない間になB？マデイツタンダヨ？もうマカは俺から離れられないな！！」

ソウルは一通り言うとデスサイズの様子を見る。デスサイズはただソウルを見ているだけだ。しばらくするとデスサイズが口を開く。

「おいカマ」

「な、なんだ」

「友人に別れをつげたか？親に「ごめんなさい」と言っただか？神様にお祈りをしたか？」

「は？」

「出来てるようだな…
なら死ね」

「ぎゃあああああああ！！」

ソウルの悲鳴は死武専内に響いた。

今日一日ソウルの横にいたレイナは全てを見て

「面白くない」

ただそれだけ言うと無明のいる我が家に帰っていった。

約束だZE ミ（後書き）

そろそろ更新しなくては…と思いしたけど

日にちあけすぎて以前考えてたネタ忘れた…

それで今回は適当に考えたんだが、自分でもこれはなんか可笑しい
と思うけどネタが無いから仕方なく…

誰かネタをだしてくれないだろうか…

それともそろそろ原作書こうか…

と悩んでいます（（（（（；。 （（（

次の更新は木曜以降でww

それまでに誰かネタplease（＊
（ノ

原作でも書こうZE ミ(前書き)

あかん駄目だ…

原作でも書こうZE 三

あのアラクネの事件から一週間がたった頃。

killコーン
カーンコーン

「それでは授業を始めます」

マカはアラクネからかけられた魔法もとけ久々に授業に出ていた。

勿論無明も授業に出ている。

「マカさん、やっと体が動けるようになったんですね」

「うん。今まで動かなかったのが嘘みたい」

「じゃ、放課後うちのパーティにこれる？」

「授業中に立ちなさんなパーティ」

「うん うん」

「やっぱりパーティーにはいい曲必要だよな…
ソウル何かオススメの踊れる曲持ってない？」

「ああ…」

「じゃあ何枚かレコード持ってくわ」

「無明達も来るよな？」

「うーん…まだ何とも言えないよ
レイナと少し相談しとく」

「ブラック スターも…
ってあれ？椿、ブラック スターは？」

「また…
例の…」

椿が喋りだした途端シュタイン博士からメスが飛んできた。
メスは椿の数？横に刺さる。

「私語をつつしみなさい

次…狙うよ？」

ガラガラ

突然教室のドアが開く。

シュタイン博士は勿論クラスの皆もドアの方向を見るとそこには少し怪我をしたブラック スターがいた。

「悪い…遅れた」

「また決闘？」

「ああ」

「それで結果は？」

「勿論勝った！！」

「まあ、結果はどうであれ、遅刻したんだから廊下で立ってなさい」

ブラック スターはしぶしぶ廊下に行った

「朝のHRで言った通り今日から新しい授業を始めます。
これから学ぶのは

アラクネ達に対する対抗授業だ！！」

シユタイン博士は少しアラネに関して話す。

簡単に言つと敵は巨大なので一人で闘わずチームで戦うためにチームでの魂の共鳴を学んでいくということだった。

「……………（チームで魂の波長を合わせるなんてしたことないし、だいたいこの前まで一人で戦ってきたからぼくにはちょっと難しいかな…）」

「まずはオックス君ペア、ソウルペア、ブラック スターの三組でやろうか

初めての授業だし先生の胸を借りるつもりで来なさい

さあ、解剖してやろう」

悪魔のような顔をしながら首をゴキゴキ鳴らしシュタイン博士が構えた。

それから五分後…

いろいろあり何故かブラック スターとオックス君が決闘することになった。

「せい」

やる気が感じられないかけ声と共にオックス君は自分の武器の雷王を使ってブラック スター目掛けて突くが簡単に避けられると

「うるせええ！！」

ブラック スターに殴られ吹っ飛ばされるオックス君。

空中で三回転ほどしてから地面に落ちたオックス君はピクピクとしか動かなくなった。

「チームを吹っ飛ばしてどうするブラック スター…

まあ、いい。次はキッドペア、椿、無明君で行こう

ブラック スターはオックス君を保健室へ連れていきなさい」

「めんどくせえゝな」と呟きながらブラック スターはオックス君を担いで教室から出ていく。

呼ばれた三組は机から離れシュタイン博士の前まで移動する。

「よし、それじゃ来なさい。」

キッドが博士に向かって銃を撃つ。

それを合図に椿と無明はその場から離れ博士の元へ向かう。

「俺が博士の動きを封じるからその間に頼む」

キッドは博士に向かって銃を乱射するが博士は近くに合った本やノートを使って防ぐ。

その間に無明と椿はそれぞれ博士に向かって攻撃を繰り広げるが時には避けられ時にはカウンターで攻撃を食らうことがあった。

「くそ！！（…やっぱりちょっと難しい）」

無明はチームプレーでいつもの動きが出来ずどうしようか悩んでいると、何か思い付いたかのか博士からいったん離れキッドの元に向かって耳打ちをする。

キッドがわかったと言うように首を縦に降り

「椿さん！！」

無明は椿の名前を呼ぶ。

椿は無明の方を見た。椿は無明の言いたいことがわかったのか

「はい！『煙玉』」

椿は自分を煙玉に変えて辺り一帯を煙で博士の目を眩ます。

「なるほど煙玉か…」

パンッ！！パンッ！！

「そこか！！」

博士は銃声の聞こえた方目掛けて走り人影を見つけるとその首もとにメスを突きつける

「さっきのブラック スター達よりはまだチームプレーはマシだったか…な！？」

煙が徐々に薄くなり晴れ博士は自分の目の前にいる人物を見て驚愕する。

「いや、マジすいません」

自分がメスをつきつけていたのはキッドのパートナーのリズだった。そして博士の周りには椿、キッド、無明がいつでも攻撃ができるように構えている三人がいた。

「まあ、一応チームプレーは合格としときましょう」

「ありがとうございます」

「ただし、囷作戦なんて実戦では使わないように」

「はい」

「それと無明君はチームプレーも練習するように。レイナちゃんにも言っておいて」

博士は無明がいつものように動けていないことがわかっていたらしい。博士が忠告すると

「…わかりました」

と言つて無明は自分の席に戻っていった。

「よし次は…」

このあとチームプレーの授業は続いて行った。

原作でも書こうZE ミ(後書き)

今回の話は省きまくりでしたねww

何か気分が乗らないんだよ(; ﹂、)

久々に書いたせいなのか…

眠いせいなのか…

まあ、とりあえず次の更新は三日以内とだけ言っときます(＊

)ノ

いやいや原作書けねえZ E ミ(前書き)

来るゝ

きつと来る

いやいや原作書けねえZE 三

ブラック スターがオックス君をぶつとばした放課後。パーティーの件をレイナに言つと

「行く」

と一言で返事が帰ってきた。無明も特に断る用事が無いのでキッドにパーティーを参加すると言つ為に現在キッドを探していた。

「やっぱりパーティーの準備の為に先に帰ったのかな？」

「……………」

死武専のなかを二人は歩き回るのが見つけられずに一定の場所を行ったりきたりしていた。

「うん、いない。やっぱり家に戻ったんだね

飛び入りになつちゃうけど直接キッドの家に行こうか」

「わかった」

無明はレイナと一緒に死武専を出ようとした

「おつ、いいところに二人ともいたな」

突然背後から声をかけられる無明とレイナは振り替えると青い死人もといシド先生がいた。

「あつ、先生さよなら」「待て」…なんですか？」

「なんで逃げる？」

「シド先生が自分から声をかけるなんて絶対に何かあるときですよ」

「まあ、間違つては無いが…」

「それでぼく達に何か？」

「あ、ああ、そうだった。お前達にこの課外授業をしたもらいたいんだ」

そう言つてシド先生は懷からある紙を出してきた。

無明は授業の内容を把握するためにその紙に書いてあることを読む

「『井戸から出てくる悪霊』？先生これって……」

「貞子って言われているな」

「先生…死んだときに頭に湧いた蛆を取り忘れてるじゃ無いですか？」

「ちゃんと全部取ったから大丈夫だ。お前らはまだパートナーになつてから一度も魂狩りに行つて無いから実力試しに行つてこい」

えっ？湧いてたんだ…

「いやいや、先生わかってます？貞子ですよ！？絶対呪われますって！！生きて帰ってこれる気がしないですよ！！」

「呪われそうになる前に狩れ」

「先生… もう一回死にます？」

「大丈夫」

無明とシド先生が言い合っているとレイナが割り込んできた。

「私がいるから大丈夫」

「ん…」

心強いのか… かな？

いや、待てよ…

もしかしたらレイナを同族と思って攻撃してこないかもしれないな… (ぼそっ)

「聞こえてる」

「アハハ」

まあ、でもレイナがこの授業受けるって言うならばくも受けるよ」

「私は受ける」

「よし、決まったな。」

悪霊の詳細はその紙に書いてある。その悪霊の居場所は隣街にある、

森の中だ。

初授業頑張ってこい」

「はい」

無明とレイナはパーティーを行けないとキッド達に連絡し準備を整えると死武専を後にした。

薄気味悪く人が通らず木のざわめきと虫の鳴き声しか聞こえない例の井戸がある森。その森に無明とレイナは来ていた。

「いや、だいたいわかってたよ……
わかってたけど何故夜中にしか幽霊は出ない!？」

現在二人はだいたいの子供が寝静まった夜中にこの薄気味悪い森の中を散策している。

「静かに。襲われるかもしれない」

「えっ?もしかして貞k……」

「動物に」

「……だよな」

二人は少し話をしながらも紙に書いてある井戸のある場所まで向かっていく。

「信じたく無いけどコレっばいよね」

「多分」

二人が森に入ってから数十分たった頃にようやく例の井戸を見つけた。

「えーと

紙には『貞子は井戸から出てきますが人が近くにいないときは出てこず井戸の中で待機をしている。あくまでも井戸に近寄らない限り襲われることは無いでしょう』へえゝ近寄らなかったら大丈夫なんだってレイナ。アハハハハハゝ」

「現実を見て無明」

そう言ってレイナは井戸を指差す。

その井戸の穴からは誰のかわからない両手が見えていた。

「あつ、ぼくもう無理です。じゃあレイナ後はよろしく」

無明はその場で武器に変化した。鍵となった無明は地面に突き刺さる。

「オツケ」

レイナは鍵となった無明を引き抜き魂の共鳴度を調整して極限まで軽くすると構えて貞子を待つ。

貞子は井戸に手をかけるとゆっくりとその姿を表した。

顔は下を向き大量にボサボサの髪の毛がかかっていて表情が読み取れずとても生きているとは思えない色をした肌に両手には丸でナイフのような長い爪が伸びていて足は裸足で、着ている服は恐らく白いワンピースだったのだろうが返り血で真っ赤なワンピースに染まっていた。

そしてその貞子は一步、また一步とゆっくり近づいて来る。

昼間この光景を見ても恐怖を覚えるかもしれないが夜の薄気味悪い森が更に貞子の怖さを駆り立てていた。

「ちよつ、無理無理！！あれガチだって！」

少しでも怖さをまぎらわす為に大きな声を上げる無明だったが

「少し黙ってて」

とレイナに一蹴される。

一步、一步近付いてくる貞子から逃げずにただずっと構えているレイナ。

貞子はレイナに手が届く距離まで近づくといったん立ち止まりナイフのような長い爪が伸びている手で突いてきた。

「……………フッ！！」

待つてましたと言わんばかりにレイナはその突きを鍵で受け流し反

撃に貞子の腹を横に一閃する。

「よし、授業終わり!!」

無明はレイナが貞子を倒したと思い喜んでいた。

「まだ」

レイナの目の先には何ともなかったように立っている貞子がいた。

「えっ……マジで?」

「……………フツ!!」

もう一度レイナは鍵で今度は貞子の足を斬りつけた。

だがレイナの攻撃は空を斬るだけであった。

「肉体が無い?」

「多分そうだろうね」

「じゃあ……くっ、どうすれ……っツ!!、ば」

貞子はレイナが攻撃してこないとわかると自分の番だとも言うようにレイナに向かって引つ掻いたり突き刺そうとしたりときには蹴りを入れて攻撃してくる。

それをレイナは体さばきで動きを最小限にしながら避けるが自分の攻撃は当たらずにただ貞子の攻撃を避けるだけで徐々に体力も無く

なり始め焦りを感じていた。

「危な……い」

ついに疲れがたまり体力が無くなりレイナの脚が止まった瞬間貞子はまた突き刺そうと手を伸ばしてくる。避ける時間が無かったためレイナは鍵を使って防御するが非力なレイナは貞子の真正面からの攻撃に力負けをして鍵が弾かれる。

弾かれた鍵はレイナの二メートルほど後ろに落ちる。

体力が無くなりどうしようも無くなったレイナに貞子は止めを指そうとおもいつきり手を振り上げ降り下ろす。

ガキンッ！！

と金属音が響いた。

「……………」

レイナの前には片手を鍵の先端に変えた無明がたっていた。

無明はその爪をいったんはじきレイナを抱えて距離をとる。

「……………あ、りがと……う」

肩で息をしながらレイナは無明に礼を言う。

「気にしないでいいよ。」

それより…、なんで向こうの攻撃はこっちにあたるんだろう？」

「…幽霊…だか…ら？」

「いや、あれは幽霊じゃない

もし幽霊なら魂を集めてる死武専生なら一発でわかるだろうし」

「幽…霊じゃな…いつて…わか…ってたの？」

「うん？勿論。最初からわかってたよ

中々迫真の演技だったでしょ？」

「……………」

無明とレイナが話してる間にも貞子ゆつくりと近付いて距離をつめようとするが歩くスピードが遅いため逃げ続ける無明とレイナには追いつけずまた無明とレイナは逃げてる間にもどうしたらいいのか作戦を考えていた。

「もしかしたら…」

「…心当たりがあるの？」

「うん。最初は幻かと思ってたんだけどこっちに攻撃が当たるのを見ると…」

恐らくあれは精神攻撃の一種かもしれない」

「精神攻撃？」

「うん。この前にアラクネが使ってたのと似てる。

多分ぼくたちの精神に直接攻撃してきてるんだろうね。精神が攻撃されることにより現実の体にも影響を受けてるんだよ。ほら、病は気からっていうしね」

「それじゃ、どうするの？」

「もし、そうならこの精神攻撃を出してくる本体をぶっ潰しに行かないと駄目なんだけど…どこにいるんだろうね」

「こついうときに魂感知出来たら便利なんだけどな」

「私出来ない」

「ぼくも無理」

「…まあ、地味に探していきますか」

「どうする？」

「レイナは井戸の周りを調べといて。ぼくは周りの木々などに隠れてないか調べるから」

あつ、あと貞子には注意してね」

それから数分がたったが無明とレイナは全く本体を見つけれず、ただ時間が過ぎていった。

「はあー、ぼくが調べる限り周りにいなかったよ」

「同じ」

「あー！どこにいるんだ！」

無明は少しイラつき足元にあった地面の石ころを拾うとゆっくり近づいて来る貞子に向かって投げる。

勿論貞子には当たらず体をすり抜けると井戸に当たる。

それを真似してレイナは石ころを投げるが貞子には当たらず井戸の穴に落ちていった。

石ころは井戸の中でひゅーと言う音をだしながら落ちていきポチャンと言う音がするかと思えばコンツと言う音が鳴った。

「ん？」

変な音だなと思い無明は井戸の穴目掛けて少し大きめの石を投げ込む。

今度はゴンツと言う音が鳴り貞子がまるで映像のように少しぶれた。

「レイナ…」

「ん。わかつてる」

無明は鍵に変化してその場に突き刺さる。レイナはその突き刺さった無明を引き抜き魂の共鳴度を調整して極限まで軽くすると井戸の穴の上空におもいつきり投げる。

レイナの元を離れた無明は本来の重さに戻り重力に従い徐々に加速しながら井戸の穴に落ちていった。

無明が穴に落ちてからしばらくすると貞子が消え井戸の中から一個の魂をくわえながら井戸の穴から出てくる無明がいた。

「やっぱり井戸の中にいたよ…」

何かあっけなかったね」

「灯台もと暗し」

「ん…そうだね」

無明とレイナはやけに低いテンションのまま魂を回収しデスシティに帰っていった。

いやいや原作書けねえZE ミ(後書き)

前より気分はのってきたぜい() b

話の中おかしいところありまくりかもしれんけど眠いのを我慢して
書いたんだ…だから見逃して

だから？と言われたらおしまい…

次の更新は今週、以上！！

再び登場エクスキャリバーだZ E ミ前編

死武専というものは職人と武器でパートナーになりパートナーで協力して魂を集め死神様の武器『デスサイズ』を作ることが目的であるが容易に作れる訳では無い。デスサイズを作るにはそれこそ絶対的な信頼を誇れるパートナーを見付けることが大事なのだがそうそうそんな人は見つからない。これ以上の説明はかなり長くなるので省くが何が言いたいかと言うとぶっちゃけ武器も職人も余ってるということだ。

余ってる人達は自分一人で何とかしようと思うやつもいればただ単純にパートナーの申し込みを断られたりするやつもいれば自分にはもつと釣り合うやつがいると夢見てるやつもいるし一発を狙うバカもいる。

そしてここにも『夢見て一発を狙うバカ』がいた。

「こ…これが…聖剣エクスカリバー

、勝利」と、栄光を…

この僕が、英雄に…

、聖剣、さえパートナーにすればもう誰にも馬鹿にされない」

その人物の名前はヒーロ。名前負けするほど弱い職人であった。

「おい、ヒーロ…！焼きそばパン買ってこいよ！」

「じゃあついでに俺の分も」

「私はジュース×クラスの分」

「は、はい！わかりました！！」

ヒーロは死武専のなかではかなり有名であり知らない人はあまりいなかった。（主にパシリで）昔からヒーロはパシリやいろいろな技の実験台にさせられていたが最近はよりいっそう酷くなった。

死武専でソウルや無明の学年では二大落ちこぼれとしてヒーロとレイナがいたが二大落ちこぼれの片方レイナはパートナを見付けその称号から抜け出した。レイナは無明とパートナになりとても充実している生活を送ってるがヒーロはそうはいかなかった。今まではパシリと言ってもほぼ男子からしかされなかったが…（女子も少数いる）最近女子も大量に増えた。これは無明のパートナを狙っていた女子である。無明のパートナになったレイナにはあたりにいく訳にはいかず腹いせにヒーロにあたりにいくようになったのだ。

「おい！！これは焼きそばパンじゃあねえよ！！どう見たってフランスパンだろうが！！」
「買いなおしてこい！！」

「ちょっとヒーロ、ジュースが緩いんだけど…」
「私冷たいのを飲みたいのだからもう一度買ってきて」

「わ、わかったよ」
（くっそー！！なんでぼくがこんな目に…二人でならこの状況を乗り越えられると思ってたのに…レイナのやつパートナを見つけやが

って！しかもそのレイナは…

「…マカ、本ありがとう」

「どうだった？この本面白かったでしょ？」

「…（こくり）」

「次はこれ貸してあげるよ…」

仲良く友達と喋りやがってパートナーを見付けただけでこんなにも差が出るなんて！ぼくも必ず聖剣を手にいれこの状況から抜け出し皆を見返してやる…！」

ヒーロは心の中でそう強く決心した。

「おい、何つつ立ってんだよ！早く買ってこい…！」

「わかってるよ…」

ヒーロが強く決心をした翌日

いつも通りに無明とレイナが学校に登校していた。二人が校門に入ると同時に

「…うわあああああ」「…」

複数の生徒が吹っ飛んできた。

「えっ？」

突然のことに驚く無明だったが校庭にいる人物を見て納得した。

「ふふふ、バカな人達だ」

これは今まで僕をバカにしてきたバツだよ」

校庭には自信満々に立っているヒーロがいた。

「これをヒーロがやったのか？」

怪我人のもとにかけよる人物、ブラック スターは驚いた様子である。

「あ、ブラック スターいたんだ」

「俺様のBIGさに気づかなかつただと！？」

「だって…あっちの方がインパクト強くて…」

「くっそー！！ヒーロごときに俺様が負けただと！」

「いやいや、あれもある意味インパクトがあるけど違う。ぼくが言いたいのはあっち」

無明はある方向を指差す。ブラック スターは無明が指差した方向を見てみると長い帽子をフリフリと揺らしながら歩いてくる奇妙な生物がいた。

「死武専もたいしたことない」

「まさかあいつは…」

「うん。あいつだね」

「私の武勇伝のほうが刺激的だった生徒諸君に聞かせてやろう」

私の伝説は12世紀から始まった

あれは日差しの強い真夏の日だったかな？いや…肌寒くなる秋だった…当時は私も『悪』でね。そう言えばもう冬だったかもしれない

(略)

…それでは伝説を語ってはいかがか」

ここまでウザイ生物はただ一人。奇妙な生物はエクスカリバーだった。

「うぜえ」

「まあまあ、相手にしなかったらいいんだよブラック ス」私の伝説は12世紀から始まったがそれ以前にも活躍はしていたものだ」
「ター」

「でもよくただ無視するだけじゃ意」そうだ。私が誕生した話を聞

「なら俺も手伝うぜ」

無明の後ろには黒人の壺職人キリクがいた。

「俺達も手伝おう」

ブラック スター、キッドも集まってくる。

「別にいいけど、一発目は任せて

必ず当ててるから……

ふふふ」

無明の周りに黒いオーラのようなものが渦巻きそれにおじけついた
三人は

「お、おう」

とだけしか言わなかった。

「ふふふ、どこからでもかかってくるがいいさ

勝利、栄光、我のぶべらばつつつ!!」

ヒーロが決め台詞を言っている間とうとう無明は我慢出来なくなり
ヒーロの懐へ潜るとおもいきり腹にパンチを浴びせた。

「げほっ…、ま、待て。まだ僕はエクスカリバーを握ってなあべし
つつっ!!」

またもやヒーロはしゃべっている最中に無明に殴られ吹っ飛ばされる。

「わざわざお前がエクスカリバーを握るまで待つてあげるほどぼく
は優しくねえよ」

「ちよっ、まつ…」

ゴンッ ゴツッ ボコッ バコッ バキッ ドゴンッ

ヒーロに有無も言わず無明は殴りつつげた。

「ちよっ、無明やりすぎだって…」

「抑えろ無明!!」

ブラック スター、キッド、キリクは無明をとめに入る

「アアッ!!」

いいんだよ!!」

無明は三人に言われて殴るのは止めるが悪びれた様子は無かった。

「し、死んだんじゃ無いのか？」

「誰が死んだって？」

ボコボコに殴られて地に伏せているはずのヒーロは多少流血してい

るがダメージはあまりあるように見えなぜか空中でエクスカリバーを持ち静止していた。

「どうせ、エクスカリバーに助けて貰ったんだろ？」

「これも僕の方だよ無明君」

「はいはい。とりあえず一発は殴れたしぼくは抜けるよ」

「逃げる気か？」

「ヒーロには勝てるけどエクスカリバーには勝てそうに無いからね
(いろんな意味で)

まあ、後は頑張って三人共」

もしこのまま続けていたら死人が出るかも知れないと思った三人は即効首を縦に振った。

「君達が相手か…」

まあ、いい… かがつてきたまえ」

「言われなくてもいつてやらああああ!!」

ブラック スターは妖刀を持つとヒーロに斬りかかった。

「翼を持たないものがぼくに追い付けるはずが無い」

ヒーロはいとも簡単にブラック スターの攻撃を避ける。

「かかったな!!」

ブラック スターの攻撃を避けることにより多少の隙を出したヒーロに対してキッドは銃を撃ち行動を制限させると同時にヒーロの背後からキリクの攻撃がせまる。

「ふふ、無駄だよ

『ヒーロ・ザ・アトミック!!』」

ヒーロはエクスカリバーの力をかりて瞬間移動をするとうまくわからない技名を叫ぶ。

ヒーロが叫ぶとキッド、キリク、ブラック スターの三人はなぜか吹っ飛ぶと地面に倒れ動かなくなった。

「見たかい。僕の『ヒーロ・ザ・アトミック』」

ヒーロが呟くのを遠くからレイナは見ていた。

「.....」

再び登場エクスキャリバーだZ E 三前編 (後書き)

急いでかきましたww

だいたい三時間かった…

キャラ崩壊してるかもしれんが気にしない気にしないwww

今現在3時なので寝ます

おやすみなさい(- | -) z z z

最後に…

あまりツッコむなwww

再び登場エクスキャリバーだZ E 三後編（前書き）

最初にいつとくが

ギャグじゃ無くなってしまった…

どこで間違えたんだろ…

最後に…

期待はするな!!

再び登場エクスキャリバーだZ E 三後編

先日校内きつての武闘派三人（キリク、キッド、ブラック スター）をヒーロが破ったことによりヒーロに手出しする生徒はいなくなつた。

力を手に入れ手出しする生徒がいなくなつたことによりヒーロは好き勝手やるようになりまず死武専をしめた。
そして今日も勿論のことヒーロは好き勝手やっていた。

「カツサンド買ってきてくれる？」

「なんで俺がそんなこと…」

「あれえゝ僕に口答えしていいのかなゝ
ぶっ飛ばすよゝ」

「くっ…！！わかつたよ」

「じゃあ、お願いね ああ、五分以内でよろしく」

「な！！無理に決まつてんだろ！売店まで五分以上かかるぞ！！」

「お 願 い ね 」

「……覚えてろよ」

そう吐き捨て生徒A（仮名）は売店へ走っていった。

「ふふふ、これが強者の立場か…悪くないな」

パシらせた生徒が売店に行って帰ってくるまで暇となったヒーロはエクスカリバーの力を使って何かしようと廊下を歩いていた。

今まで廊下にいた生徒達はヒーロの姿を見ると自分は関わらないと言つように目をそらしたり道をあけたり教室へ逃げ込んだりしていた。

「ん、楽しいな。こんなにも世界が変わるなんて」

ヒーロは廊下のだ真ん中を歩いていると先にある曲がり角から一人の女性徒が出てくるのが見えた。

その女性徒はヒーロの姿を確認すると『げっ』と言うような顔をして自分が歩いて来た道を引き返そうと回れ右をしたがそこにはヒーロが立っていた。

「この前、僕にジュースを買いに行かせた生徒B（仮名）じゃないか。なんで僕の姿を見て逃げるんだい？」

「…別に、ただ用事を思い出しただけ

で、私に何か用」

「ああ、そうか

いや、用と言うほどでは無いけどちょっとした復讐をね…」

そうヒーロが言い終わると同時に女性徒Bの視界からヒーロの姿は消え気がつくとヒーロは女性徒Bの片胸を揉んでいた。

「！！このツツ変態が！！」

女性徒Bはヒーロを殴ろうと手を振るうが女性徒Bの手は空を斬る。

「ははっ！！無駄だよ」

いつのまにかヒーロはその女性徒Bの背後に立っており今度は後ろから先程と反対の胸を揉む。

「ド変態が！！」

女性徒Bは背後にいるヒーロを蹴り飛ばそうとしたが背後にはもうヒーロはいない。

女性徒Bは自分の胸を
守るために胸の前で手を組むが、

「こんなことも出来るんだよ」

今度はスカートを捲って来た。

「もういやー！！」

女性徒Bはその場に座り込む。

「まだまだこれからだよ（はぁはぁ）」

鼻血を出し若干興奮しながら女性徒Bを見下ろすヒーロはまさに変態と言えるだろう。

この変態行為を周りの生徒はただ見ていることしか出来なかった。

「はぁ…はぁ…次は…」「…そこまで」

徐々に女性徒に近づくヒーロの手を一人の生徒が掴む。

「ん？誰かと思えばレイナじゃないかなぜ止めるんだい？」

「…貴方は力に溺れている」

「はははっ！何を言うかと思えば僕が力に溺れているだって？面白いこと言っね」

「…このままだといずれ貴方は狂気に落ちるようになる」

「そんなことは無い！！」

「自覚していないだけ」

「この僕が！英雄の僕がそんなことになるはずが無い！！」

「違う、貴方は英雄じゃない。ヒーロと言っただの死武専の生徒」

「違う！違う違う！！違う違う違う！！僕は英雄…僕は英雄なんだ
ああああ！！！」

我を失い始めたヒーロはレイナの手を振りほどくとエクスカリバー
できりつけてくる。

「つつ！！！！」

とつさのことで避けることも忘れてレイナは本能的目を瞑り自分の
頭を抱え込む。

いつまで立つても衝撃が来ないので不思議に思い目を開けると

「おいおい、ヒーロこんな早さがあるなら売店に買いに行くのにそ
う時間がかからないのじゃないのか？」

「み、見た目より力あるのね…今度はジュースとパンも買ってきて
貰おうかな」

「いつからこんな手が出るのが早くなっただ？」

いつもヒーロをパシらせているクラスメイトやヒーロと目も合わせ
なかった生徒達がそれぞれヒーロの手や足にしがみついて動きをと
めていた。

「邪魔するなああああ！！！」

だがエクスカリバーを持っているヒーロのほうに力が強く一人また一人と生徒達を剥がしていく。

「ヒーロ怒りに捕らわれず目を覚まして」

「うるさい、うるさい！」

自分の動きを封じていた生徒達を全て除けるとヒーロは再びレイナに斬りかかった。

「僕は、僕は英雄だあああ！！」

ガキンッ

レイナの目の前でよく聞く金属音が鳴り響いた。

「やっぱりエクスカリバーの近くいたら誰でもキレるのかな（笑）」

「無明」

「冗談だって、そんなに睨まないで」

「…無明、私な友達を助けたいの。力を貸して」

「ん、了解」

無明は武器化して鍵の姿になると地面に落ちる。レイナはその鍵を掴むとヒーロ向かって構えた。

「僕と戦うつもりなのか!!」

「…貴方の目が覚めるまで」

「言ってる!」

急にレイナの視界からヒーロの姿が消える。レイナは驚きもせず、その場にただ立っているだけ。

「僕はここだよ!!」

ヒーロはレイナの背後に表れるとエクスカリバーを振り上げ降り下ろす。

「えっ?」

だがヒーロの攻撃は空を斬った。そこにいるであろうレイナはその場所から半歩横にずれヒーロの攻撃を避けていた。

「シッ!!」

ヒーロの隙をつきレイナは鍵を振り払った。

「うわっ!!」

その攻撃はヒーロの手元に当たりヒーロは傷みで思わずエクスカリバーを手放す。

「くそっ!!何故だ!なんでエクスカリバーを持っている僕が何故

負ける！」

「ヒーロ、忘れたの？」

「何を！」

「『いつか強くなって、ぼくたちみたいな人を守ろう！！』二人で決めた」

「……………」

「今の貴方は昔の見る影も無い
思い出して、昔を、あの頃を」

「昔……………」

『強くなって皆を僕が守ってあげる！！勿論レイナも！』

『いない』

『酷っ！！何故？』

『貴方が強くなれるとは思えない』

『言ったな！絶対に強くなって皆を守ってやる！！』

「思い出したよ……………どうやら僕はいつのまにか道を踏み外してしま
ったようだね」

$$\dots, (1 \vee 2),$$

レイナは首をふり頷く。

「今頃気づくとは僕もバカだなあ」

ねえ、レイナ……いつか、いつかまた、本当の意味で強くなったらもう一度戦ってくれる？」

「もちろん。待ってる」

「あー、お取り込み中すみません。ちよつとエクスカリバーの方を壊さ…回収したいんだけど…」

「ああ、僕にはもう必要無いよ。勝手に持って行って」

ヒーローはエクスカリバーを拾うと無明に渡した。

「ありがとう。じゃあ壊そうか（にこにこ）」

この時の無明は心の底から笑っていたらしい。

無明はエクスカリバーを自分の足下に置き足で一回踏みつける。

「では……死ねえええええとえええええ工工工工工えええ！」

片手を鍵に変え思いっきりエクスカリバーにその手を降り下ろす。

バキンッツツ!!

何か壊れるような音になる。

【改ページ目】

「こんなんじゃ壊れないのは知ってるよ。まだまだお楽しみはこれから……ら!？」

無明の足下には真っ二つに折れたエクスカリバーがあった。

「えっ？」

「「「エエエエエ!」「」「」

廊下に驚きの声が響き渡る。周りにいた生徒達は驚きの声をあげたが無明は口を開けポカーンとしていた。

「う、嘘だよね

エクスカリバー!!」

「名前を呼んだのは誰だ？」

ふと聞き慣れた声が無明の背後から聞こえてきた。無明はびっくりして後ろを振り返るとそこには相変わらず見えているだけで腹立たしい奇妙な生物がいた。

「あれ……? な、なんで……」

「何をそんなに驚いている」

「だって真つ二つ「それは私の分身だ」えっ…？」

「どうしても出掛けなければならない用事があり私の代わりに置いていったのだよ」

「マジ…」

「それは私の約12の1の力があつたんだが壊れるとは…
ん？12だと？そういえば私の伝説も12世紀から始まった。あれは…」

「ぼくの心配を返せ」

その日のうちに再びエクスカリバーはもといた洞窟に返された。

あれから数日たった。

あの事件をきっかけにヒーロをパシらせる生徒は0になりヒーロは毎日にこやかに生活を送り初心に返り自分を磨き始めるようになった。

（いつか…いつかまたレイナと勝負をするぞ！

今度は負けない！！）

再び登場エクスキャリバーだZ E 三後編（後書き）

皆大好きエクスキャリバーは空気

ヒーロは狂ってる

なぜかかなり強くなってるヒロイン

…やり過ぎたかな

あまり突っ込まないで…

最近七不思議を書きたいとは思ってるけどネタが無いっていうW W

次も原作書きますW W

BREWでも取りに行こうZE ミミ（前書き）

1週間ぶりかなww

今回は久々に主人公が無双する話かな笑

BREWでも取りに行こうZE 三

「休む暇があんまりない…」

「何か言ったか？」

「いや、何でもない…」

現在ぼくを含めて少人数の生徒と先生、そしてシド先生率いる部隊が複数の舟に乗っていた。

少し前のこと…

チームでの魂の波長を本格的に合わせる訓練が終わり一段落できるなと思つて自宅でレイナと一緒に休んでいたらマカ達に呼び出され、死武専に来てくれと言ふことで行ったら、

「ちょっとアラスカに行つてきて」

「はっ？」

無明はいきなりの宣告で口をポカーンと開ける

「死神様。それじゃ省き過ぎです。」

「いや」

ゴメンゴメン

説明苦手で…代わりにマカちゃん説明してくれる？」

「わかりました。

簡単に言つと…」

マカの説明によると、アラスカにある島がありそこに魔道具「BREW」があるから取ってきて欲しいということだった。

ただBREWをアラクノフォビアも狙っているらしいので先に奪わなければならない。

無明はBREWと言う単語でだいたいの意味がわかったので適当に話を聞いている。

「わかったけど…」

それはいつから行くの？」

「明日」

「絶対にこの戦いが終わったらぼくは休むんだ…」

「聞いているのか無明」

「あ、すみません。聞いてます」

「じゃあ話を続けるが」

シド先生が率いる部隊がアラクノフォビアを抑えている間に俺とマリー先生が磁場に入りBREWを取ってくる。

君たちの任務は磁場の外で磁場に入ろうとするものを排除し、俺達の帰りを待つこと

わかったね？」

皆それぞれ返事をしていく

無明は改めて周りにいるメンバーを確認して行った。

（オックス君ペアとキムペアとキリクペアとぼく達といつもものメンバーか…もうちょい増やしたら楽だったのに）

無明は勿論口には出さず心の中で密かに思っておく。

こうしていると舟が沖に着いた

「足元に気を付けて皆付いてくるんだ。」

博士とマリー先生が先頭に立ち島の磁場にある方向へ少しづつ進んで行く。

十分ほど経つと博士率いる生徒達は磁場の目の前まで来ていた。

「これが磁場…」

「イカツイな」

目の前にある磁場は例えるなら巨大なハリケーンでまるで誰も入ってくるなど言わんばかりに荒れていた。

「これからマリー先生と磁場に入るが君たちは作戦通りに動け。いいな？」

「「「はい」「」」

「では行ってくる」

博士とマリー先生は磁場に入っていた。

15分後
：

「あつたかい」

「いやー、便利だねその能力」

「チツ、金とればよかった」

無明達はキムの能力で暖まっていた。

「遅いですねもう15分になりますか…」

「確かに遅い」

皆、それぞれ博士のことを心配しはじめ会話が博士のことばかりになる。

無明はわかっていたので黙っていたがこの場でもう一人、マカが黙

っている。

「どうしたんだマカ？」

一言も喋らないマカを心配してソウルは尋ねてみる。マカはソウルに言われようやく口を開いた。

「博士とマリー先生の「魂反応」が消えた……」

「わかるんだ。魂関知ってやっぱ便利だね」

「ノイズが酷いからぎりぎりだけど……」

恐らく中で何か起こってる」

「よし……俺が見てこよう」

「一人じゃ危険だって」

「しかし……」

「俺達も行くぜ！」

「しかし……」

キッドがどうすればいいのか悩んでいると近くの岩場から突然マカの方に対して手裏剣が飛んで来る。

「せいっ、やっ……！」

オックス君がそれに気づき自分の武器の槍で弾く。

「どうやら敵に見つかってしまったようですな」

奇襲が失敗するやいなや周りの岩陰からぞろぞろと敵が出てきた。

「悩んでも仕方ないし行ってきなよ。ここはぼく達に任せて」

「そうだ、行つてこい！」

「ごめん！！行つてくる」

そう言うとも力達は磁場に入り姿が見えなくなった。

「いや」

格好つけたのはいいけど敵さん多いね」

「多い」

「行けるよね、レイナ？」

「もち」

無明とレイナの背後に徐々に近づいてくるゴーレムが一体。

「おい！！二人共後ろ！！」

キリクは二人に向かって叫ぶ。

それと同時にゴーレムは二人に向かって腕を降り下ろす。

ズンツッ!!

と鈍い音がなり雪が舞った。

「無明、レイナ!!」

ゴーレムは腕を持ち上げて自分の潰した敵を確認するがそこには何の跡も無かった。

ゴーレムはおかしいと思い首を傾ける。

そしてゴーレムの首はそのまま落ちた。

「ゴーレムってパワーはあるけどスピードが足りないねー」

「ね」

無明はゴーレムの肩に立ち、レイナはゴーレムの落ちた頭の近くにいた。

「あまり驚かさないでくれ二人共」

その様子を見たキリクは二人に言った。

「アハハ、キリクゴメン

じゃあ真面目にやりますか」

「わかった」

こうしてかな？」

ゴーレムの足下に行くとも明はゴーレムの足に向かって蹴りを放つ。マカの足に当たる瞬間に魂に波長を足に流し蹴りの威力を上げて蹴り飛ばす。

ゴーレムの片足にはヒビが入る。

「オオオオオオオオオオ」

ゴーレムは悲鳴のような雄叫びのような声を上げると自分の足下にいる無明を踏み潰そうとするが

「遅いよ」

軽々ゴーレムの踏み潰しを避けると先程自分達がヒビを入れた足に向かって両手で魂の波長を流す。

「オオオオオオオオオオ！！」

ゴーレムの片足は無明の攻撃によれ壊れゴーレムはバランスを崩しその場に倒れ込む。

「キリク。今！！」

「おう！！フレイム・フリント・フィストFFF」

キリクはパートナーと魂の共鳴をすると自分の武器のグローブのよ

うな拳が燃えはじめ燃えている拳でゴーレムの顔を殴る。

ドツツツゴオオオン！！

と音がなった。

キリクの拳は直撃したのだがゴーレムの顔は少しヒビが入っただけであつた。

「何だコイツ！？硬え」

「ん？どれどれ？」

無明がゴーレムの顔に近づき顔に手を乗せると魂の波長を流し込む。

ボツツツンン！！

と言う音を立ててゴーレムの顔は粉々に砕けちった。

「そこまで硬くないと思うけど？」

「…………お前一人でアラクノフォビアと戦ってこい」

「えー、めんどい」

「はあ…俺も磁場に入ればよかった」

「愚痴は後で、敵はまだまだいるよ」

休む暇も与えてくれることもなく今度は二人の先には先程より小さい普通のゴーレムが10体ほどいた。

「これは…冗談きついで」

「キリクはそっちの二体お願いね
ぼくはこっちの八体を相手にするよ」

「大丈夫なのか？」

「大丈夫」

「わかった！
やられるなよ！！」

キリクは再び魂の共鳴をするとゴーレム二体に突撃していった。

「しんどいけど…
頑張りますか」

そう言うが無明は懐から水の入ったペットボトル二つと何の仕掛けもない持ちやすそうな15センチほどの木を取り出す。

無明はペットボトルの蓋を空けて木の上で逆さまにする。ペットボトルの水は重力に従い木を伝って落ちていく。

「これぐらいかな？『rock』」

無明は能力を使い水の時間を止める。

「まあ、上出来かナ」

無明の手にはまるで剣のような形をしている水が持たれていた。
それをどうようにもうひとつつくる。

無明は水の剣を両手に持つとゴーレム八体向かって構える。

「剣術なんて知らんがなんとかかなナ」

無明はそう言うとゴーレム向かって駆け出していった。

「おいおい、急いで助けに来たんだが助けいらなかったか？」

キリクは自分の相手のゴーレム二体を数分で倒すと無明の元に向かったが当の無明は

「あ、早かったねキリク」

八体いたゴーレムは全て地面に倒れて、無明はその八体の中のひとつのゴーレムの体に座っていた。

「もし、無明が本当は職人だったと言っても俺は信じるな」

「アハハ、残念だけど武器なんだよね」

「はあ…そういやこれでゴーレムは全部か？」

「多分ね。さあ次はオックス君や、レイナ達の手伝いに行こうか
キリクはオックス君とキムをばくはレイナを手伝いに行くよ」

「わかった」

そう決めるとまず無明はレイナを探しはじめた。

「えーと、レイナは今どこに…！！」

ツツ！！危ない！！

数10m先にレイナを見つけるがそのレイナのすぐ後ろにはボロボロになったゴーレムがいた。

レイナは目の前にいる敵に集中して気づかない

（倒せてないじゃないかキリク！！）

無明はその場から全速力で駆け出す。

が足下が雪で覆われている為にいつも以上にスピードが出せなかった。

無明がそのゴーレムにたどり着くより先にゴーレムは最後の力を振り絞りレイナを掴んだ。

「えっ…」

いきなり背後から掴まれ驚く。そして抜け出そうとするが非力のレ

イナじゃゴーレムの手から抜け出せず、無明がゴーレムにあと一歩という所でゴーレムは振りかぶるとレイナを遙か遠くへ投げ飛ばす。

「間に合えええええ！！！！！」

無明は一瞬第二段階の狂気を使い自分の肉体能力を上げるとゴールを踏み台にしてレイナ向かって跳ぶ。

無明は精一杯自分の腕を伸ばすとレイナの服を掴む。

その服を引っ張りレイナを自分の元へ寄せると抱き締める

「っし!!しっかり捕まっといて!!」

「でも……」

「
い
い
か
ら
！」

無明はレイナを抱き締めたまま重力に従いどこかに落ちていった。

BREWでも取りに行こうZE ≡ (後書き)

久々の更新

疲れたよ…

昔みたいな更新が出来ないorz

次の更新はいつになるだろうか…

水の部分、上手く説明出来ないと…

どうしても見たかったら某漫画を読んできてww

BREWでも取りに行こうZENZEN (前書き)

間違えて完結になっていた…

再投稿スマソ。(。 - -)

BREWでも取りに行こうZENEN

バキバキ

バキバキ

「くっ!!」

無明は少しでも落下の速度を緩めようと木の枝にぶつかりながら徐々に落ちていく。

「よ…し、スピードが落ちはじめ……!!」

無明はこのまま地面に落ち雪をクッションにしようとしていたのだが無明が落下する先には直径3メートルほどの大きな岩がいくつか転がっていた。

「くそ!! レイナ! 下が岩だからぼくをふみだ……レイナ?」

無明はこのままでは岩にぶつかり共倒れになってしまうと察知しレイナをまず岩のないどこかにいってもらいそれからなんらかの方法で自分は岩にぶつからないようにしようと考えていたのだがレイナに声をかけてみると返事がなくレイナは無明の腕の中で気絶していた。

「……………これは覚悟しないと駄目かな……………」

どうすることも出来ないまま無明は腕の中にいるレイナを更に強く抱きしめながら落ちていく。

あと5メートル……4……3……2……1……

ゴンッ！！

「う……あっ……」

岩にぶつかった瞬間なんとも言えない感覚が流れそしてすぐに体中に激痛が走る。

それで終わりとはいわずに他の岩にもいくつかぶつかり無明は地面に投げ出された。

「……………レ……………イ……………ナは？」

少しずつ意識が薄れていく中自分の腕の中にいるレイナの様子を見る。

「……………すう……………すう……………」

どこか怪我をした様子もなく自分の腕の中で静かに眠っているレイナを確認すると無明の意識は失った。

ポト

一粒の雪が自分の肌に落ちて無明は目を覚ました。

「…はは、何本いったかな… ツツっ!!」

無明はレイナを腕から引き離し自分の隣に置き立とうとしたが足が自分の言うことを聞かずに無明はその場に崩れ落ちる。

（刺された時も痛かったがこれもまた違う意味で痛い。体の内部の骨がどこかに刺さってるのか口から血も止まらないし…）

声を出さずに無明は地面に崩れたまま体力を少しでも回復させようとじっとしていた。

（これはキツいかな… ぼくの服はビリビリに破れ体中切り傷だらけで血は無くなつていくし体温はこの寒さで無くなつていくし…でも…）

無明は自分の体にむち打ち近くの木々があるところまで這いずる。木々まで行くと適当に転がっている太い枝を持つとそれを軸にして立ち上がった。

（まだまだこんなところでは死ねない!!）

無明は太い枝を支えにしながら倒れているレイナにゆっくり近づき起こそうと声をかけたりつついたりすると衝撃を与えるが一向にレイナは目が覚めることは無く眠ったままだった。

（もしかしたら落下の衝撃で…）

自分の気がつかない間に脳のどこかを損傷したのかもしれない…
あまり衝撃を与えずじつとさせていたほうがいいんじゃないか？

と無明は考えていたがこのままじつとしているうちに雪はどんどん降ってくるし徐々に日も落ちてきているから気温も下がってきている…、このままでは凍死してしまうと思った無明はどこか雪を防げるところまで行こうとしてレイナを担ぐ。

（はははっ、レイナが重く感じるなんて…）

無明はレイナを担ぐと太い枝に体重をかけながら一歩、また一歩と歩きだす。

一歩、また一歩と歩く度に体から出血をし無明の服は真っ赤に染まり無明が歩いた道には血で赤く染まった雪がまるで絨毯のようになっていた。

（ゴホッ……はぁ……はぁ……感覚が無くなって来た……そろそろ限界か……な……？）

無明が歩くのを止めようとしたその時、

（も…しか…し……て……あれは……！？）

よく目を凝らすと数十メートル先に横穴らしき場所を見つけた。

（持って……くれよ…ぼく…の体）

無明はその横穴を見つけるとどこからか力が沸き上がってくるのを感じゆっくりと近づいていった。

(よかつた…これで雪が…防げる)

無明は背中からゆっくりとレイナをおろし静かに横にする。

(ただ…の脳震盪だとい…いが…

少し疲れた…た…ぼくも…少しだけ休んでから
助…け…を…呼…び…
…に…)

無明は壁にもたれ掛かるとスイッチが切れるようにすぐに意識がなくなった。

「レイナ、朝だよ!」

もう少し寝る…

「早く起きて、今日はマカさんと一緒に新しく出来た本屋見に行く
って昨日言ってたでしょ。」

そんな約束してた?

「昨日散々ばくに言っというて今さら…
早く起きないと約束の時間に遅れるよ」

……ふあ……

「アクビしてないで顔洗ってきたら」

…そうする

それにしても眠い…

新しい本屋なんて出来たっけ？

まあ…いい

とりあえず顔を洗って……

「……………？？」

私…こんな厚着してたっけ…

なんでこんな服を…

まるでどこかに行ってたみたい…

！！

そうだ。私は…BREWを取りにある島に皆で行ってたんだ

それで敵と戦って、不意をつかれて崖から落ちてそれを無明が…！！

あのあとどうなったんだろう？

聞いてみよう

「無明」

「ん？なに？」

「崖から落ちた後私たちがどうなったの？」

「崖から落ちた？何を言ってるの？」

「BREWを取りに行った」

「BREW？なにそれ？夢でも見てたんじゃない？」

「夢？」

「そつ。夢」

夢…

夢にしてはリアル過ぎるような

……やっぱりあれは

「夢じゃない」

「……………」

「たしかに私はBREWを取りにいく任務に参加した」

「夢だつて」

「夢なはずが無い。夢ならこんな服を着てない」

「……………」

「そして何より…無明から狂気が感じない!!」

ツツ!!

急に走った頭痛にレイナは頭を抑えた。

「やっぱり夢…」

夢であつたことがわかりある意味ほつとした。もしこのまま寝ていれば寒さで凍え死んでいたかもしれないからだ。

「この穴にいなかったら凍えて…」

穴？」

レイナは自分のいる場所が横穴だと気づく

「……………！無明は？」

崖から落ちてから無明がこの場所まで連れてきてくれたと思ってお礼を言つたためにレイナは無明を探そうとしたとき手に何かが触れた。

水かと思い見てみると…

「……血！！」

血であることに気づく。

「……もしか……し………て」

呼吸が早くなり心拍数や脈拍も上がる中ゆっくりとレイナは血がある方向を見る。

そこには電池のきれた人形のように体からおびたたしい血が流れ真っ赤に染まった服を着ながら横たわっている無明がいた。

「ハア……ハア……い、…イヤアアアアアアアアア！！！！」

「

レイナの悲鳴は横穴を響き渡った。

B R E Wでも取りに行こうZ E Z E 三（後書き）

何日ぶりか忘れましたww

やっぱり雪降ってたこういう風な展開欲し いなと思いかきました
（笑）

普通だったら死んでるね 便利な能力あるんだから使えよっていい
た いかも知れんけどそこは言わないでおこう Z E ） 。 - - ）

さて…

次の更新いつやら…

ってかこの後どう書くのか……

シリアスなのにタイトルのせいでシリアスじゃないZ E ミ(前書き)

今回はキャラ崩壊とあまりいいとは言えない表現があるのでそれを
わかって読んで下さい(――)

シリアスなのにタイトルのせいでシリアスじゃないZ E 三

気がついたら私は船の上にいた

あの後どうしたかなんて覚えていない

皆が言うにはマカが魂感知で私たちを見つけてそれから全員で私たちを助けに来てくれたらしい

だが今はそんなことはどうでもよかった

デスシティーに着くと無明は即座に病院に運ばれていった

私はそれをただ見てることしかできなかった

保健室にポツリと一人の少女がベットの上で座っている。

その少女はずっと下を向いてまるで何かを待っているようにそわそわしていた。

ガチャッ

と保健室のドアが開く

少女はこれ waited いたのかドアが開くと今まで下を向いていた顔はドアの方に向いた。

「…休めと言っただろう」

「…休めない」

「まずは氣力を回復させてからだな…「先生!!」……………」

体中包帯を巻いた保険医、ミーラ・ナイクズの言葉を遮りレイナはナイクズ先生の見る。

「…なんだ？」

「無明は助かるの？」

「心臓は動いている」

ナイクズの言葉を聞いてレイナの表情が一瞬明るくなった。

「…それじゃあ…」

「……他はほぼ死んでいるがな」

その言葉を聞いた瞬間レイナの動きが止まった。

「……………っ!!」

「頬骨骨折	腰椎破裂骨折	肋骨粉碎骨折	鎖骨亀裂骨折	上腕骨
複雑骨折	舟状骨骨折	前腕骨複雑骨折	中手骨骨折	脛骨骨

大腿骨骨折 膝蓋骨骨折 腓骨骨折 踵骨骨折……これはわかりやすく骨折している場所だ。まだまだあるぞ。それに骨折以外にも大量にある」

ナイクズはあらかじめもっていた大量のカルテをレイナのいるベツトの上に投げる。

レイナはそれを取ると恐る恐る一枚ずつじっくりと見始める。

「これ以上は私も言いたくないが隠してもいずれバレるから言うておく……」

お前のパートナーの無明は、植物状態だ

レイナの手からカルテが落ちていく。

「……う、嘘」

「嘘じゃない全て事実だ
原因は落下時の衝撃か血を大量に流したせいか………」

ナイクズの喋っていることなどもはやレイナの耳には届いていなかった。

レイナの意識は散らばったカルテの一枚に書いてある、植物状態、という文字にしかなかった。

「聞いているのか？」

「……………」

「私だって可愛い生徒の一人がこうなったことは辛いしこうなったのは敵を殲滅出来なかった教師達にある……レイナは何も悪くない」

「……………」

「……最後に一つだけ言うが希望は捨てるな」

「……………希望？」

「植物状態からでも回復した例はある。だから希望は……………無明に……会えます……………か……？」……今は無理だ。病院のほうに話を通しておくからまた明日来い」

「……………わかり……………ました」

レイナはそれだけ言うつとふらふらした足取りで保健室を後にした。

翌日

死武線のある廊下で生徒達が話をしていた

「聞いたか？噂によれば午後からスパイ潰しが来るって話だ」

「死武専にスパイだって？」

「ああ、なんだかこええよな」

「確かに。……そういえばアノ話聞いたか？」

「アノ話って、アレのことか？」

「馬鹿なことを……、どうせ白兔でも庇ったんだぜ……」

「全く……あんなやつのパートナになるからこうなったんだ。バカなやつだ。俺なら敵の攻撃なんてかわしてパパッと敵を殲滅出来るのによ

重症なんてへまはしねえ……」

ボゴツツツ

先程まで話をしていた男子の一人が急に壁際まで吹っ飛んだ。

「……………」

吹っ飛ばされた男子は壁にもたれ掛かりながら起き上がり自分を吹っ飛ばしたやつを見る。

そこには無表情で静かに怒っているレイナがいた。

「ツツツ……!!何すんだ!」

「……無明をこれ以上バカにするのは許さない」

「ハッ！許してもらえなかったらどうなるんだ！？さっきのは不意をくらったが今度はそう行かねえぞ！！」

壁にもたれ掛つていた生徒は壁を蹴ると駆け出しレイナに殴りかかるがその攻撃は空をきった。

「へっ！まぐれで避けられてよかったな。だが今度はそうはいかないぜ」

男子生徒はまたもやレイナに殴りかかった。

「……もう喋るな」

レイナはそのパンチを避けずに手で横から弾き軌道をずらして、自分の方に向かってきている男子生徒の腹に手を当てると魂の波長を流し込んだ。

「アアアアアアアアアア！！」

男子生徒はあまりの痛さに悲鳴を上げる。

レイナはそのまま魂の波長を流し込もうとすると横から腕を捕まれる。

「もう止める」

腕を掴んだのはブラック スターだった。そしてブラック スターの後ろにはマカヤソウル、キッド、キリク、キム、オックスなどの任務に参加していたメンバーがいた。

「……………離せ」

「嫌だ」

「……………こいつらは無明をバカにした。許せない」

「それでも離せねえな」

「それでも離せねえな」

「……………お願い」

「何度言おうが無理だ」

ブラック スターとレイナのにらみ合いが続く。

「ハア…ハア…そのまましめちまえブラック ス…」

男子生徒は全て言い終わる前にブラック スターに思いっきり殴られ数メートル吹っ飛んだ。

「おい。その」

「な、何…」

吹っ飛ばされた生徒と話をしていた生徒にブラック スターは声をかける。

「そいつが起きたら言っとけ。『今度無明をバカにしたら俺がぶっ潰しに行く』って」

「わ、わかった…」

「わかったならそいつを連れてさっさとどこかに行け。目障りだ」
もう一人の男子生徒は倒れこんでいる生徒をかつぎ一目散に逃げ去った。

「……ありがとう」

「気にすんな」

「少しはレイナの気持ちを考えようとしなのだよ」

「全くだ。虫酸が走る」

「……皆ありがとう」

「……それでレイナちゃん無明は…」

「…植物…状態」

「「「「「！」「」「」」」」

レイナの言葉に皆が一斉に言葉を失った。

「俺ら…重症としか聞いて無くて…悪い」

「…構わない」

「…これからどうするんですか？」

「…許可をもらって無明に会いに行く」

「そうですね…」

そこで会話がとぎれ誰も何も喋らず重い空気が流れる。

数分後レイナのもとにナイクズがやって来た。

「病院の許可が下りた。先生が言うには声をかけてやってくれ…と言ってる」

「…わかりました。」

レイナは許可が下りたと聞くとその場を駆け出し病院へ向かった。

「先生！！私たちも一緒に行っていていいですか！？」

マカを筆頭に皆がナイクズ先生の方を見る。

「…駄目だ。レイナ以外許可が下りていない。
それに今日は二人きりにさせてやれ」

ナイクズは小さくなってほぼ見えないレイナを横目で見て言った。

「そう…ですね」

マカ達はただ徐々に見えなくなるレイナをじっと見ていることしか出来なかった。

とある病院の一室

シュコー

シュコー

と一定のリズムで呼吸音が流れる

その部屋にはたくさんの器具がつけられ体中に包帯が巻かれた男の子がベットの上で眠っていた。

ガララララ

その部屋のドアがあくと一人の少女がドアの前で立っていた。

「すみませんが特例なんで面会時間は五分になります。」

「…わかりました」

少女はその部屋に入るとドアをしめ男の子が眠っているベットの近くに移動する。

「…無明」

少女、レイナは眠っている無明に声をかける。

「……………」

もちろん返事が返ってくることもなくただ器械の音が聞こえてくるのみである。

「……………無明。私と会ったときのことを覚えてる？」

「……………」

「あの頃は私はいろんな意味で弱かった」

「……………」

「弱くてどうしようもなかったこんな私を貴方はパートナーにしてくれた」

「……………」

「私は感情を顔で出すのが苦手が無表情だったかも知れないけどあの時私はとても嬉しかったんだよ」

「……………」

「パートナーになってからいろんなことが合った」

「……………」

「そのたびにあなたは私を助けてくれた」

「……………」

「ねえ……無明……」

「……………」

「私まだ何にも無明にお返しできてない……」

「……………」

シュコー

シュコー

と呼吸音や器械の音は聞こえるがそれ以外は来たときと同じ全く聞こえなかった。

ガララララ

「すみませんが面会は終わりです」

「……はい。ありがとうございました」

レイナは面会終了と告げられると「……また」と無明に言って病室を後にした。

そしてその夜ある事件が起こった。

ある事件とはスパイ潰しのB Jの殺害

そして…

B J殺害の容疑者としてシュタイン博士ともう一人香坂無明の名前が上げられたことをレイナは知ることになる

いろんな人が一夜で去っていったZE ミ

「はぁ…はぁ…」

一人の女性徒が廊下を走っていた。

その生徒はまるで他のことなど頭に無いみたいにひたすら廊下を駆け抜ける。

ようやく目的地に着いたのかある教室で足が止まった。

ガラガラ

息を整え教室のドアを開けるとそこには馴染みのある面子が揃っている。

「レイナちゃん…」

教室にいた生徒、マカはレイナの顔を見るなり何とも言えない表情を作る。

「…一体どういう」待て、今から説明するからまずそこに座れ」…」

レイナが事件のことを聞こうとしたときナイクズがレイナの言葉を遮る。

レイナはとりあえずナイクズの言うことに従いマカ達と一緒に席に座った。

「ようやく揃ったな

皆揃ったところで昨夜の事件について改めて話そう」

ナイクズは一呼吸置くと話の続きを語りだした

「BREWでの任務でシュタインの狂気が異常に進む結果になった。マリーがついているかぎり本来ならあり得ないことだが実際シュタインの狂気は進んでいった」

「我々はシュタインの狂気が進む結果になった理由は死武専にスパイがいると結論づけ我々はスパイ潰しのため『死武専内部調査官』のBJに来てもらい内部調査をしてもらっていた。」

「スパイ…そんなものがいたとは…」

「話を続けるぞ

だが昨夜そのBJが殺された」

「それが博士の失踪と無明の失踪とどう関係あるんですか？」

マカはその場に立ち身を乗り出して言う。

「話を最後まで聞け

最初はスパイがBJが邪魔になり殺したと思っていたんだが…

現場にシュタインしか吸わないタバコが落ちていた」

「!？」

でもタバコだけじゃあ…」

「私たちは無論シュタインの無実を信じているが他の人たちはそうでないらしい」

「博士が狂気に身を任せて殺したと言ったことですか？」

「そういうことだ」

「…無明の件は」

「それが問題なんだ…」

現場にはタバコと一緒に無明の包帯が落ちていた」

「包帯って…無明は今植物状態なんじゃ…」

「私たちも何かの間違いと思い確認したところ

病室に無明はいなかったらしい」

「いなかった…た？」

レイナは喜ぶべきか悲しむべきか困った表情をしている

「上の奴等が言うにはこうだ。

『無明は無意識のうちに狂気を使い体の傷を癒し動けるようになった

たが無意識だったため狂気を使いすぎてしまい狂気に吞まれたまま街中を歩いていたB」と出会い殺害した。殺害したあと正気に戻った無明は自分のしたことを恐れ逃げ出した」

「……無明はそんなことはしない!!」

レイナは声を張り上げて言う。

「わかっている。わかっているが今はどうしようも出来ない」

「……」

改めてどうしようも出来ないとわかった生徒達は一斉に黙り下をむく。

その沈黙をブラック スターは破る。

「あゝ、お前ら何黙ってたんだよ!!俺達は知ってるはずだろ?博士や無明がそんなことをするやつじゃ無いって!俺らはただ信じて待てればいいんだよ!!」

ブラック スターの発言によりマカ達は顔を上げると

「そうだよね!!博士や無明がそんなことするはず無いもんね!」

「……帰ってきたら洗いざらい話してもらおう」

「そうだな!俺らが信じなくてどうするって話だよな」

「そうだ。そのいきだぜ！！
話も聞いたことだし俺様は家に帰る」

「アハハハー、すみませんが先に帰らせて頂きます」

ブラック スターと椿は皆がばーんという口を開けているのを無視して帰っていった。

「俺達も帰るか」

「そうね」

マカ、ソウル、その他の生徒達もぞろぞろと帰っていった。

皆がかえったことにより教室にはレイナとナイクズの二人きりになる。

「大丈夫なのか？」

「大丈夫」

「パートナーがこんなめに合って辛いと思うがあまり気を落とすな
私たちは無明やシユタインがそんなことをしていないと確信している」

「…私もそう思ってます
だから帰ってきたら…」

「帰ってきたら？」

「…思いっきり一発いれようと思います」

「ふっ、ほどほどにしとけよ」

レイナはナイクズの言葉を聞くと一礼して教室を後にした。

B Jが殺されるおよそ二時間前の話

シュコー

シュコー

と一定のリズムで呼吸音が聞こえる。

周りには沢山の機材が置かれその中心にはレイナのパートナーの無明が寝ていた。

「……………」

勿論何かを発することもなく無明はただじっと目を積むっている。

ガララララ

その部屋にある人物が入ってきた。

「さて、427号室の無明さんは…
大丈夫ね」

それはただのナースであり無明と周りの機材の確認に来たようだ。なにも異常がないとわかるとナースはドアを締め去っていった。

そしてその数分後：

今度は若い女性二人がガラララとドアを開け入ってきた。

その人物は無明もよく知る人同じクラスのキムとそのパートナジャッキーだった。

「本当にやるの？」

「…うん。私の再生魔法で無明を治す」

「魔法を使ってもし魔女だとばれたらキムは死武専にいられなくなるのよ！」

「大丈夫、ばれないようにする」

キムはにっとうと笑うと呪文を唱え始めた。

「タヌンクーンラクーンクーンポーンポー」おいおい、タヌキの魔女よちょっと止めてくれないか？」誰！？」

キムが呪文を唱え終わるころにキムとジャッキーの耳にある男の声が聞こえた

男は最初からいたのかわからないが暗闇の中からゆっくりと出てき

た。

「いど…も…?」

「ジャッキー!! 早く武器になつて!!」

ジャッキーはその子供に少し驚いたがそれよりもキムの怒鳴り声に驚きすぐに武器になった。

「背丈だけで子供と思うのは酷いんじゃないか?」

「…ふうー…ふうー……………」

キムは心拍数が上昇しているのか大きく口で息をしながら子供を見つめる。

「キ、キム…何をそんなに興奮し「うるさい!!」」

キムはジャッキーの言うことを聞かずにただ威嚇するようにその子供から目をはなさない。

「その武器のいう通りそんなに興奮するなよ…」

まあ、ゆっくり話で「一体何のようなの!?!」…少し声の音量を下げようか」

「質問に答えて!」

キムは興奮して叫ぶように言う。

「聞こえなかったようだな…」

『黙れ』

「

男がそう言うと同時にキムはまるで口を押さえられたように黙った。

「俺がここに来たのは…」

あれ？」

男が喋りだそうとするとうー、うーと言いながら悶えているキムがいた。

「ああ、すまん。つい無明の時と同じぐらい圧力をかけてしまったな…」

男がそう言うのと押さえられているようなプレッシャーがなくなるとキムは静かに話始めた。

「…無明を知ってるの」

「ああ、勿論。何度も戦ったよ
無明は強かった…」

だがパートナーなんて作って弱体しあげくのはてにはパートナーを守ってこの有り様。もう笑いしか出てこないね」

「…無明のやったことは間違っていない」

「ん？間違っていないだと…？

ハハッ、ハハハハ！間違い以外何なんだ。パートナーなんて下らない」

「…もう、頭に来た

キム、こいつをぶん殴ろう」

「ぶん殴る？ああ、構わんよ

ぶん殴れるならな

」

男はそう言うつと先程とは桁違いの圧力を二人にかける。

その圧力に二人は立つどころか息も絶え絶えになっていた。

「全く最近のガキは…

無明ならともかくお前らごときが俺に触られる訳無いだろう」

圧力をかけられながらキムは息絶え絶えにに言う。

「…な……にし………にきた…の」

キムの言葉を聞くとあっ！と驚いた声を上げる

「あー、本来の目的を忘れてた」

男はそう言つと無明の方へ向き担ぎ上げた。

「無明を……どう……する気!？」

「ちよつと一仕事して貰うだけさ」

男はそう言つと無明を担ぎ上げたまま窓から飛び降りていった。

男がいなくなり圧力が無くなった二人はただその場にぼーと立っている

「ねえ、キム

あの男は一体なんだつたの？」

ジャッキーの質問にキムはゆっくりと答える。

「あの子供はフォン

私や、魔眼の男と同じ魔女界で有名な異端児

でも一体なんのために……」

キムとジャッキーはただ窓を見詰めることしか出来なかった

ネタが無いZE ミ

BJ殺害事件から数日たったが博士と無明のことは一切わからないままであつた

それはそうとパートナーがいないからと言って単位が貰えるということとは無いのでレイナは今課外授業の依頼の掲示板の前でどれにするか悩んでいた。

「……………」

いろんな授業があるためレイナは自分に合うようなやつを選んでいるとある課外授業が目に入つた

「『人を誘う魔性の本を調査せよ

受注条件は強い精神力』……コレにしよう」

レイナはこの魔性の本という部分が気になって選んだようだ。受注条件の項目を見るとレイナは一人では不安なのかマカ達を誘いに行くが…

「ごめんね…私はもう決めてるから」

と断られてしまった

それで仕方なくレイナは一人で受付に行く

「…………コレ」

「…はい。わかったよ
頑張っというで」

受付のおばさんはじーとレイナの顔を見たあと課外授業の詳しい説明を始めた。

「…………ここに本が…」

おばあちゃんの説明によりローマにその本があるとわかったレイナは現在一人きりでローマに来ていた。

「…………魔性の本」

デスシティーからだいぶ離れているローマに来て少ししんどそうなレイナであったがそれよりも魔性の本と言うものが気になり内心テンションが上がっていた。

「…保管場所は図書館。れつつごー」

その本がどこにあるのかわかっていたのでレイナは保管されている図書館にゆつくりとローマを観光しながら歩いていった。

歩き出して数時間後、レイナは今大きな図書館の前に来ている

その図書館というのはローマにある図書館の中で最大級の大きさらしく死武専にある図書館とは比べ物にはならないであろう大きさであった

レイナはその大きさに少し驚いたがすぐに我にかえるとその図書館の中に入っていった

「……わあー」

中は勿論のこと上から下まで大量の本で埋め尽くされていてレイナの目は輝くばかりであった

本を読みたいと言う欲求をおさえながらレイナは図書館関係者を探す

「……………（キョロキョロ）」

あまりにも広いしレイナ以外にも沢山の人が来ているため探すのに時間がかかったがそれらしき人を見つけるとその人のところへゆつくりと近づく

「……すみません。従業員の方？」

「はい。そうですよ
なんででしょう？」

「……死武専から来た」

「あ、ああ、お待ちしておりましたよ！詳しい話をしたいと思うのでこちらのほうに…」

その従業員の指示に従いレイナはある部屋へついていった。

その部屋はとくにかわったようすもなく一般的な部屋であり部屋のイスに従業員の人が座るとレイナも腰かける。

「……魔性の本について詳しく聞きたい」

「わかってます。あの本のことですね

実は…

あの本は盗まれてしまっています…」

「…盗まれた？」

「ええ…

魔性の本というだけあります。これで今月は四回目です」

「…四回目」

「はい。多いときは月に10回は盗まれてしまいます。でもなぜか盗まれて3日以内にはその本は再び帰って来るんです」

「…どういうこと？」

「私にもよくわかりませんが、盗んだ本人が返しに来るんです」

「……???」

レイナの頭の中は疑問で一杯になる

「盗んだ本人達は全員揃ってはあんな本は二度と見たくないと言ってるんですが…」

私たちにはよくわかりません…」

「……………死武専ではそんなことは聞かなかった」

「報告していませんでしたか？」

これはすみません。こちらのミスです」

「かまわない」

「…ちなみに盗まれたのは二日ほど前なのでもうじき帰ってくるとは思います」

「…………返ってくるまで待つてても？」

「ええ、かまいませんよ

ワタシの経験的に晩頃には返ってくると思いますので、こちらの部屋で休んでいて下さい

私には仕事があるので…」

従業員はそれだけ言っているとレイナを一人部屋に置いて出ていってしまった。

レイナは晩まで時間もあることなので一人、情報の整理や適当に部

屋内をぶらつく。

「……………ひ……………ま」

あまりにもすることが無くてレイナは再びイスに座り込んだ。

チラツと時計を見るが現時刻は16時15分晩と呼ぶまでにはまだまだ時間があつた。

「マカ達についていけばよかった…」

一人部屋でイスに座りながら足をプラインと降っているとコンコンとノックが聞こえた。

ガチャ

という音と共に先程の従業員の方が入ってくる。

「……………何？」

「ああ、すみません

お暇かと思ひまして適当に本数冊を…」

従業員は両手で分厚い本を何冊も抱えて持ってきたようだ。

「…ありがとう

重かった？」

「両手でやっと持てましたよ

私ももう歳ですかね
ハハハッ」

「…そんなこと無い」

「若い娘さんにそんなこと言ってもらえてお世辞でも嬉しいです
それじゃ私は仕事のほうへ戻りますので」

そついうと再び従業員はドアから出ていった。

「…何か読も」

レイナは渡された本を適当に見ているとコツンと何かが手に当たる
のに気づく。

「……ジュース？」

先程の従業員の人が気を効かしてもつてきてくれたのかなと思い
レイナはあんまり気にもせず本を選ぶと読み始めた。

「……………」

その本はありきたりなファンタジーだがレイナは夢中でその本を
読んでいた。

「…面白かった。でもどこかで…」

ボタンと本を閉じ少し余韻に浸りながらレイナは考えていた。

自分はこの本を読んだことがある

と、でもレイナは何冊も本を読んでいるのだから似たような本があってもおかしくないとあまり気にしなかった。

「喉…渴いた」

本を読む前にジュースがあつたのを思いだしレイナは机の上にあつたジュースを手にとると飲み干した。

「……時間」

レイナは時間のことを思いだし部屋の時計を見る。

「18時00分…か」

そろそろ晩と呼べる時間になってきたが従業員からの連絡は無いので犯人はまだ来てないとわかるとまたもやイスに座り込む。

別の本を読んでもいいのだが時間も時間なのでただじっとレイナは待っていた。

一時間が立ち19時00分。

レイナは少しうとうとしているとコンコンと部屋のノック音がして目をさます

ガチャ

という音とともに従業員の人が料理を片手に持ち入ってくる

「お腹空きませんか？」

「…空いてた」

「あまり美味しいと言えませんがディナーです」

そういうと従業員はテーブルに料理を並びはじめる。

「ありがとう」

「いえいえ…」

「犯人はまだ？」

「ワタシの読みが外れたんですかねー
まだ来てないです」

「わかった」

「それじゃ…私は…」

従業員は料理だけ並べるとそのままドアから出ていった。

「美味しそう」

レイナは並べられた料理を見て素直に感想をのべると料理を食べていく。

レイナは数十分かけて完食する。

時刻は20時00分

このまま犯人は来ないのでは？と思いレイナは従業員を呼びにいうとする

（そういえばいつも向こうから私のところに来てた…）

そんなことを思いながらレイナはドアを開けた

「えっ……………」

ドアの向こう側には普通の廊下は無く上下左右本が敷き詰められて作られた廊下になっていた

ネタが無いZE ミ(後書き)

わけわからんねww

自分でも何書いてるんやろと思う

はつきり言つがネタが無いからただの時間稼ぎノ・ノ・ノ

この後の話を考えてないわ…

はあゝ、どうしよう…

ネタが無いZEEZEE 三

「…どういつこ…と？」

レイナはその本でできた廊下に一歩足を進める。

その感触は普通の廊下のようなものでは無く少し弾力があり本で廊下が出来ているには間違いないとわかる。

（部屋に戻るべきか…

それとも進むべきか…）

レイナはその場に立ち止まり考え始める

（部屋で待機していてもあの従業員の人が来るかわからない

それに…従業員の人はこの現象のことわかっているかも知れない

…進もう）

考えた結果【進む】と決めたレイナは部屋のドアを閉めると慎重に足を踏み出し始めた

ギシッ…ギシッ…

とまるで今にも壊れそうな廃墟のような音がレイナの顔に少し恐怖を宿す

（…暗い…）

昼頃来たときは明るくてあまり気にしてなかったが廊下には数メートルごとに蝋燭があるだけで他の灯りは全く無く不気味な空気が流

れる

キィィィィ…

レイナは突然の音にビックリして全身を一瞬震わす

本の廊下で気付かなかったが数メートル先にはドアがありそのドアが開いた音だと気づき念のため戦闘体勢をとりドアの先を見つめる数分がたっただろうか、その部屋から誰か出てくることも無く入ってくることも無くドアは半開きのままであった。

（風…だったのかな？）

レイナは戦闘体勢を作りながらおそろおそろ部屋のほうへ近づいていく。

部屋のすぐ横までくると顔をドアから少し覗かせる

部屋の中はどこにでもあるような違和感の無い和室だった

（この部屋…まるでブラック スターの……！！）

そうして部屋を見ていると背後に気配を感じレイナはとっさに振り向く

暗くて顔ははっきりと見えない誰かがこちらに向かって刀のようなもので斬りつけてこようとするのが微かに見えレイナは咄嗟にしゃ

がむ

ヒュン

とレイナの頭わずか数ミリ上を刀のようなものが通る

「チツ！」

殺せなかったことに腹を立てているのか、刀を持っている誰かは舌打ちをすると顔を見られたく無かったのかレイナに背を向けると走り去っていった。

（一体、何だったの…）

レイナは立ち上がると自分を襲った誰かが走り去っていった方向を見る

（……何かわかるかも）

自分を襲った誰かは何かを知ってると思いその誰かが逃げていった方向へレイナは進み始めた

暗闇が比較的多いこの廊下では相手の姿が確認しにくいがそれは相手にもいえることでありレイナは自分の位置がばれないようにと静かにゆっくりと進む

先程の部屋からおよそ五分近くは歩いただろうか？またもや先程と同じように微かにドアが開き部屋から光りが漏れている。レイナは

慎重にその部屋に近づき中の様子を覗く

「……………まさか……………!？」

レイナが少し驚きの声を上げる。覗いたその部屋は自分と無明が暮らしているアパートの一室になっていた
そしてその部屋の真ん中には

「……………やあ、久しぶりだね

レイナ」

レイナのパートナーの無明が座っていた

「ほ、本当に無…明？」

「それ以外に誰に見える？」

「なんで……………」

レイナは聞きたいことがありすぎて逆に何も言えずただ無明の姿を見ているだけだった

「なんでここにいいのか？なんで動けるのだった？
そんなことどうでもいいじゃないか

僕はここにいるからいるんだ
それでいいと思わない？レイナ」

「……………！！（こくこく）」

レイナは目に涙を浮かべながらただ頷く

「ま、言いたいことは沢山あると思うからとりあえず座りなよ」

「……………うん」

レイナは無明の目の前に座る

「よし、それじゃ一応なんで僕がここにいるのか？
について話そうか」

「わかった」

レイナの返事と共にゆっくりと無明は話始める

「僕は、あのBREWの事故のあと植物状態になってたらしいね」

「……………うん」

「多分その時だと思っただけど僕はある夢を見ていたんだ」

「夢？」

「そう、夢。」

その夢は僕にあることを教えてくれた」

「あること？」

「…まあ、それは置いといて……」

それで僕は夢の導き通りに進んでいくといつのまにか目が覚めていたんだ

。生存本能が働いたのか自分自身で狂気を無意識で使ったのかはわからないけど目が覚めていた」

「周りを見ると病室だということに気づき僕は自分に置かれている状況を整理しはじめた」

「整理しているときに夢の教えを思いだしたんだ……」

「それはとっても簡単な教え……『自分の狂気に従え』ってこと」

「そして僕は狂ったように病室から飛び出した……!」

「無……明？」

急に声を上げ興奮しながら喋る無明を見てレイナは声をかけるがその静止を無視してさらに無明は喋る

「『狂気を解放したい』それだけを思いながら僕は夜の街を走った……!」

「走って、走って、走って、走って、走って、走って」

「そしてようやく見つけたんだよ……」

「まさ……か」

「そうBJさ」

BJは僕を見るなり銃で撃ってきたよ

当たるわけないのにただひたすら撃ってきた」

「レイナ、僕の狂気はね

『平穏』

ただそれだけなんだよ」

「刺激がある日常なんていない。

平穏の日常でいいんだ

だから

『コロシタダヨ』

「

「無……明」

「あの男はいろんな意味で邪魔だったし、ほっとけば僕の日常も崩

れそうだったしね

それにしても楽しかったよ…

死ぬ間際まで『マリー…、マリー…』と呟いていてね

殺しがいがあつたな―

アレハ…

あはははははははははは―！

無明はにた―と笑みを浮かべると狂ったように笑い声を上げた

「もう止めて―！」

「いやいや、最後まで話を聞こうヨ」

「もう聞きたくない…」

もう…聞き…たくな…い」

「まあ、聞こうか。

とりあえずB Jを殺したあと僕は考えたんだ

『どうすれば平穏が訪れるか』

それでね、答えがわかったんだ

『そうだ…』

みーんな、死ねばいいんだ』

って…

わかりやすいでしょ？

だからねレイナ…」

無明はその場をゆっくりと立ち上がるとどこからか刀を取り出すと

「シンデヨ」

一瞬の躊躇いもなくレイナに降り下ろした

「……………！！」

とつさのことだったがレイナは横に転がり間一髪無明の斬撃を避ける

「アレ、避けちゃったノー

折角油断させれたと思ったのに」

レイナは無明が話しているうちに距離をとり立ち上がる

「…ねえ、一体何があったの無明

どうしちゃったの…」

「どうもシテナイヨ

ただ自分の狂気に従っているだけさ！！」

無明は刀を構えるとすぐにレイナに向かって突きを繰り出す

「ツッ……！！」

レイナは近くにあつた座布団を掴むと無明に向かって投げる

「ナニがしたいんだい？」

無明は視界に迫ってくる座布団を突き刺し刀に突き刺さつた座布団を振り払う

「ンン？なるほど、ナルホド
目眩ましつてわけだね」

無明が少し目を離している隙にレイナの姿はその部屋から消えていた

「はぁ……はぁ……！！」

レイナはひたすら廊下を走っていた。

（今はとりあえず時間が欲しい！状況を整理するだけの時間が！）

レイナは他のことは考えずに時間を稼ぐために無明から逃げる

息が切れ始めたころ、ようやく一番初めにいた部屋にたどりついた

ガチャッ

レイナは勢いよくドアをあけると中に駆け込み部屋を閉めその場に座り込む

「なんで…無明…」

今まで押し殺していた感情が一気にかけ上がるとレイナはまた涙を浮かべる

「こんなの…おか…しい？」

ん？とレイナは自分で言ったことに対して首をかしげる

レイナは今までの経緯を思い出しながら必死に考え込んだ

（おかしい…、よく考えればおかしいことだらけ

まず第一にこの場所は普通じゃない

第二に無明がこの場所で待ち伏せする必要がない。本当に私を殺したいなら病室を脱走したときに私を殺しにきているはず

第三にこの課外授業は『人を誘う魔性の本を調査せよ
受注条件は強い精神力』

強い精神力…

……もしかして！）

ネタが無いZEEZEE 三 (後書き)

まあ、最初に一言

何だコレ？

ソウルイーターじゃないよね…

あとわけわからん

久々の更新で以前この話を書いてなにがしたかったのかを忘れてしまったよww

自分で読み返しても話わからんから仕方なくこの話は

『適当に終わらせることにしました』

うん(´、´)

まあ、この後の展開なんて皆のご想像通りさww

早めにこの話は終わらせたい…

ネタが無いZEEZE 三

レイナが閃くと同時にドアの向こう側から無明の声が聞こえてくる

「レイナ」

僕たちパートナーなんだからパートナーの願い事ぐらい聞いてくれよお
」

ガチャッ

と言う音と共にドアが開くと共にレイナが部屋から出てくる

「とうとう腹くくった？レイナ」

「……………」

「だんまりですか」

「……………」

「殺してくれっていう意味かな」

「無……の……な」

「うん？何だつて？」

「無明の真似をするな！」

「…何を言ってるのかな？レイナは」

「もう、わかった
貴方は無明じゃない」

「何を…」

「どこからどう見ても僕じゃないか」

無明は呆れたようにレイナを見る

「小細工はいい…」

恐らくこれは貴方の精神攻撃」

「フフ、ウフフフフフ」

無明は突然笑いだしたかと思うと無明の姿がまるでスライムのように徐々にどろどろになると姿が変わる

「ちょっと演技がくさかったですかね」

それはレイナが図書館に来て会った従業員だった

「……貴方は何者」

驚きもあったがそれ以上に警戒の眼差しでレイナは睨み付ける

「そんなに見ないで下さいよ」

私ですか？

……そういえば名前なんて無いですね
とりあえず言えるのは最高傑作の魔道具兵の一人です」

「……魔道具兵？」

「……自分の敵ぐらい把握しときましょう
私達はアラクノフォビアです
わかりましたか？」

「……充分」

レイナは完全に魔道具兵が自分の敵であるとわかったと同時に戦闘の構えをとる

「勘弁してくださいよ

私は精神世界に引きずることしか出来ないんで戦闘能力は皆無なんですよ」

やれやれと言うように魔道具兵は両手をあげ困ったような顔をする

「……そう」

レイナはチャンスと思い魔道具兵に近づくと魂の波長を流し込もうとするが何故かその腕を捕まれ攻撃は失敗に終わる

「……！？」

「ああ、先程も言った通り私は戦闘能力は皆無ですよ
……私はね」

その魔道具兵の姿はブラック スターに変わっていた

レイナはその掴まれた腕をはずそうともがくが掴んでいる力が強くなっただけで一向に腕が外せない

「私はね、相手の精神に入ると相手のことを読み取り相手の精神に影響を与えた人物になることが出来る。

完璧に本人になるわけでは無いから強さは本人には劣るがそれでも貴女を倒すには充分だ」

魔道具兵はそのまま掴んでいる手でレイナを引き寄せるともう一方の手で思いっきりレイナの腹に拳をぶちこんだ

「ゴフ…ウ…」

レイナは殴られると痛みのあまり倒れ込む

「貴女のことは読み取っているのでわかってますよ
とても打たれ弱いということが…ね！！！」

魔道具兵はレイナの手を引っ張り無理矢理立たすと先程殴った場所と同じ所に膝で蹴る

「グウ…ウウ…！！」

「痛いですか！？」

ゴンッ！！

「……………ウ……………アア……………」

「アハ！！！」

ゴンッ！！ゴンッ！！

「……………ア……………ア……………」

「アハハハ！！！」

ゴンッ！！ゴンッ！！ゴンッ！！

「……………ア……………」

「アハハハハハハハハハハハハハハハ！！！」

ゴンッ！！ゴンッ！！ゴンッ！！ゴンッ！！

「……………」

「アハハハハハハハ……………ん？

気を失いましたか

まあ、いいでしょう

遊びは終わりです。今樂にしてあげますよ」

魔道具兵は掴んでいる腕を離しまた姿を変えた

「この姿で死ねるなら本望でしょう」

再び魔道具兵は無明の姿になるとどこからか刀を取り出し刃をレイナに向ける

「精神で死ねば現実では廃人になる…
少しの間ですが楽しかったですよ！」

魔道具兵は刀を振り上げるとレイナの首に向かって降り下ろす。

「なん…ですと？」

そのまま行けばレイナの首は胴体とおさらばするはずであったが刀はレイナの首の少し上で止まっていた。

何故なら

「……これ…以上…無明をバ…カ……にする……な」

レイナがその刀を掴んでいたからだ

素手であるため勿論刃がついている刀を握ると血は出る。

ぽたぽたとレイナの腕から落ちるがそんなことも気にもせず刀を握ったまま立ち上がる

「は、離せ」

今にも倒れそうなレイナだが魔道具兵はその尋常では無いレイナの雰囲気と姿を見て圧倒される

「…もう……許さ……ない!!」

レイナはゆらゆらと魔道具兵に近づいて行く

「く、来るな」

そのまま蹴るや殴るやなんでもいいので攻撃すればレイナは倒れるであろうが魔道具兵はそんなことも考えられずに腰を抜かして地面に座り込む

「……………!!」

レイナは魔道具兵の前まで来ると魔道具兵に殴りかかろうとする

「……私は……貴……方……なんかに……負けない!!」

「う、うわああああ!!」

フッ

「……………??」

そのレイナの拳はそのまま魔道具兵の顔に当たるはずだったがレイナは一番始めに魔道具兵に案内された部屋で自分の腕を枕にして顔を沈めていた

顔を上げ自分の体を隅々まで見ていくがどこも怪我をしている様子

も無かった

「……夢？」

夢だと思ったが体を見るのに意識を取られて気付かなかったが周りの景色がおかしいと気付く

周りには本など無く食べ物もジュースも無い部屋にあるのはテーブルと椅子、時計だけであり

若干腹立つような顔をしている太陽はまだは上っていた

そして時間は

「……… 16時00分」

レイナは静かにその部屋を出た。外は長い廊下など無くどこにもあるような短い廊下であった。そのまま外に出ると図書館などでは無くただのボロい一戸建ての家であることにレイナは気づいた。

「……現実だね」

どうやらレイナはこのボロ家の前で精神世界に連れていかれたようであり先程のことは長くて短い幻覚であった

「……力をつけなくちゃ」

レイナはその家に背を向けると死武専に向かって帰り始めた。

「……ということだった」

「わかったよ

レイナちゃんお疲れ様」

死武専に帰ると校長室に行き、レイナはこれまでの経緯を死神様に伝える

「それにしても阿修羅の狂気も大変なのにアラクノフォビアもだいぶ力をつけて来たねー」

「そうですね…

やはりこれ以上アラクノフォビアが力をつけないためにも…」

「うん。

そろそろ私達も行動しなきゃね

あ、レイナちゃんはもう帰ってもいいよ」

「…わかった」

レイナはそのまま帰ろうとするが

「ちょっと待て」

とデスサイズに止められてしまった

「……？」

「俺はなデスサイズで死神様の武器だ」

「……………うん」

「……………でもな……
俺は教師なんだ」

「……………うん」

「教師たるもの生徒の成績をつけなくちゃならない」

「……………」

「だがこの課外授業は俺達のミスだ。だから今回の授業は成績をつけない」

「……………やた」

「でもな……レイナ
課外授業は点数が高いんだ」

「……………?」

「ようするに……だ
今回の課外授業でかせげなかった点数を補習で補ってもらっ」

「……………ゑ」

レイナの今日最大の不幸であった……

少し時間は遡りレイナがテーブルの上で目が覚めるほんの少し前

「ここは…！？」

…なるほど

不幸中の幸いでした」

先程の魔道具兵はレイナが目覚めた家のある部屋にいた

「まさか私の精神攻撃を強制的に破るとは…
なかなかの退魔の波長…」

魔道具兵はその家から出る

「現実の世界では勝てないですから今日の所は帰りましょう
今度会うときは必ず…フフ」

魔道具兵はそう言うと静かに消えていった

ネタが無いZEEZE ミ(後書き)

えっ…新キャラうざいって？

大丈夫、すぐ消すから(。 - -)

それにしてもどうでもいい話が長かった…

えっ？内容が普通すぎるって？

気にするなww

さて…

次は何書こうかな…

そろそろ原作入る準備でもしようZE 三

時間が数日前に遡る

子供は走っていた

自分が持っている人物を落とさないように丁寧に抱えながら走っている

「あゝ、しんど、休みてー

でも早くせんと感のいいやつには見つかるしな…

デスシティーでソウルプロテクトは解除出来んし…

全くめんどくさっ!!」

子供は更にスピードを上げながら走っていく

「ん？これは…」

何かを感じとったのか子供は吸い込まれるようにある路地に入っていく

パンパンパン!!

突如銃声が聞こえた

子供は自分が向かっている路地の先から銃声が聞こえてきたので少し急いでその場に向かった

そこは

「鬼神様の安息を脅かす者には処刑を言い渡す」

「マ」

シュパン

身動きが出来なくなった男の首にギロチンが落ちた瞬間だった

「おいおい…、もうちょい処理のしやすいように殺せよジャスティン」

ギロチンは人間の形に戻ったかと思うと静かに子供のほうに振り向く

「処理？処理なんてしませんよ。このまま死体は置いておきます
片付けに来る人がいるでしょうし」

ああ、それにしても久しぶりですねフォン」

「ああ、久しぶりだな…
最後に会ったのは数年前だったか？」

「どうでしたかね…
それより、なぜ貴方は無明君を担いでるんです？」

「ん？ああ、これはちょっといつに一仕事してもらおうと思って
な」

「一仕事？」

「ああ、それは…

ん？ちよつと待てよ…ジャスティン今は何分だ？」

「今ですか？38分ですが…」

「あー

一仕事のことは後で話すから少し待ってくれ

もうそろそろ無明自体がヤバイかも知れん

呼吸器を外してから数分経ってるしな」

フォンはそう言うのと動かない無明を地面に下ろす。

「悪いなジャスティン。今からソウルプロテクト解除するわ」

「別に構いませんがなぜ…」

「それは…

今から無明を『治す』からだ」

『ソウルプロテクト解除』フォンはそういうと即座に魔法を使うための呪文を唱え始める

およそ数秒で呪文を唱え終わると無明の全身が炎で包まれる

炎に包まれている筈の無明の体は一切の火傷もせず服の欠片も燃えなかった

そして無明を包んでいる炎が消えると同時にフォンは再び自分にソウルプロテクトをかける

「さて先程の話の続きだが、こいつに……………をやっ
てもらおうと思っとな

そうすればお前も鬼神様を探すのに集中出来るだろ？」

「なるほど…

確かにそうですね

ありがとうございますフォン」

「気にすんな、それより誰かくるぞ」

それは耳をすませないと聞こえない程度の音だったがコツコツと足音がこちらに向かってきていることがわかった

「お前はまだ顔を見られたくないだろ？

ここは俺が殺しておくから無明を連れてどこかに隠れている。万が一無明が目覚めたとしても全身を動けるぐらいまでは治してないから戦闘になることは無いだろうしその時はまた気絶させてくれ」

「わかりました」

ジャスティンは無明を静かに担ぐと少し離れた場所に隠れる

隠れたのを確認するとフォンは静かにこっちに向かってくるであろう相手に身構えた

フーッ

微かにタバコの煙が風にのり漂ってくる

その誰かはお互い顔が見れるであろう距離まで来ると立ち止まった

「…なんだ、あんたか」

「へらへら、あれえ？何か狂気と魔女の魂が一つずつ感じ取れたと思ったの二、いるのは子供一人かナ。へらへら」

それは全身継ぎはぎで白い衣服を着てまるでヤブ医者にしか見えな
いであるうシュタイン博士がいた

「タバコなんて吸っていいのかな？」

「俺も最初は止めてたんだけど…
やっぱりいい、我慢はする必要が無いと思ってネ

そんなことより解体させちクレ」

シュタイン博士が急にフォンに向かって殴りかかってくる

「あゝあ、これは狂気で完璧にいつちまってんなー」

フォンはただ横にずれ足を少し出す

普段のシュタイン博士ならそんなものに引っ掛かるはずもないのだが

「あ……レ」

とフォンの足に躓き地面に転がってしまった

「……情けないな

昔の面影が全然感じられない」

「へら……解体……解剖……」

シュタイン博士はフォンの言うことに耳もかさずただ自分の欲望を口走る

「狂気を無理に拒んで中途半端なことをしているからそんなことになるんだ

……これ以上生き恥を晒すのも酷だろう
俺が一思いに殺してやるよ」

フォンは自分の片腕を槍に変えるとシュタイン博士に向ける

「……じゃあな」

ヒュッと風を斬る音が鳴りシュタイン博士の頭蓋骨に刺さる

……はずだったのだが、その槍はジャスティンの二本の指によって止められた

「……どういっつもりだ？」

「生き恥を晒して生きるのも悪くないかと思ひまして」

「本気で言っているのか？」

「冗談ですよ。シュタインにはまだ使い道があるのでここは私に任せて貰えませんか？」

自分がやることに邪魔をされ少しイラっているフォンであつたが、わかつたと言つように自分の片腕を槍から普通の腕に戻す

「ありがとうございます。それじゃここからは別行動ということで……」

ジャスティンはシュタインの襟をもち絞め落とし気絶したのを確認するとシュタインを担いで路地裏から消えていった

「神父のくせに何を考へてるやら……」

まあ、いいさ

精々頑張つて鬼神のけつでも追いかけてろ」

先程までジャスティンが隠れていたであろう場所まで行きそこにいる無明を担ぐ

「もう少しだ……」

俺の願いはもう少しでかなう

それまで頑張つてくれよな無明」

その時のフォンの顔は嬉しそうでどこか悲しそうな顔をしていた
そしてフォンもまた路地裏から消えていったのであった。

時間は再び数日後に戻る

「……この問題はな」

教室に一人、デスサイズに補講をやってもらってるレイナがいる

「……（コツクリ、コクリ）」

今でこそ鍛えてもらい少しは強くなったレイナだったが戦闘に力を入れるあまり頭のほうを鍛えていないレイナにはデスサイズの補講はただの呪文にしか聞こえずうたた寝をしていた

「そして、おい！聞いているのか」

デスサイズの怒鳴り声によりレイナは空想の世界から現実に強制的に戻される

「……ばっちし」

まるで当たり前だというようにgoodのサインをやるレイナにデスサイズは頭を抱える

「はあ…、お前な。」「すみません、ちょっと…」なんだ？」

あきれ果てているデスサイズの元に黒服の男がやって来たと思うと黒服の男は教室から廊下にデスサイズを連れ出す

「…………ふあー」

レイナはあくびをしながらしばらくデスサイズの帰りを待っていたしばらくすると少し険しい顔をして再び教室に入ってきたかと思うと

「悪いな、少し用事が入った。補講はまた今度だ」と告げた

「…………？」

レイナはいきなりのことと訳もわからず首を傾げる

「急用なんだ。他に先生もいないし今日は好きにしてくれ」

デスサイズはそれだけ言うと教室から出ていった

補講が無くなり好きなことをしていいと言われ内心とても嬉しかったが、よく考えてみればとくにしたいことも無かったので帰りの用意をする

「……帰ろ」

用意が終わるとレイナは教室から出ていき正面口から自宅に帰ろうとすると突然聞き覚えのある声がした

「レイナちゃん」

レイナは声のあるほうを振り向くとそこには

「…………マカおひさ」

マカがいた

「おいおい俺達ももいるんだぜ」

そしてマカの後ろにはソウル、オックス君、キリクもいる

「…………皆も久しぶり」

「……なんかオマケみたいだな……」

「…そんなことない…よ」

「……絶対思ってたやがる……」

「…それより皆課外授業？」

「うん、私達は今帰ってきた所だけど、オックス君達は私達より少し早く死武専についてみたい」

「……なぜ今もここに？」

「なんか先生にキム達に伝言を届けてって頼まれたらしいよ」

「……そう」

「それでね、さっきオックス君にも話したんだけど……」

ヴオオオオオ

と突如マカという言葉が轟音が遮った

皆、一斉に轟音のするほうへ見るとそこにはジャックリオンに股がり空からこちらに降りてこようとしているキムがいた

「マイ・フェア・レディー

キムウー！！！！

おかえりなさああい！！！！」

真つ先にオックス君がキムの元にかけるがキムはそれを華麗に無視するとマカとレイナの元にかける

「マカー レイナちゃん」

「キムー」

「……おひさ」

「……………うん、OK、OK

おかえりなさいキム

おかげはありませんか？」

「わざわざお出迎え？」

「エエ！！貴女に9割方貴女に会いたくて待つてましたが伝言を頼まれまして」

オックス君は少し悲しそうな顔をするがキムにかけよるといつもどおりにはアプローチを交え伝言を伝えようとする

レイナはとくに自分に用があるわけでもないし、皆との挨拶をすましたので帰ろうとした時に気づく

「……………（生徒じゃない人が沢山いる）」

少しレイナは警戒するがどうやら自分には敵意が無さそうなので様子を見ていると

「キム、ジャックリン。ちょっと私と一緒に来てくれ」

ナイクズ先生が遠くから二人に声をかけた

キムとジャックリンはナイクズ先生の元に向けより何かを話すのをレイナを含め皆が遠くから見る

そして黒服の男が徐々にキム達に近づきジャックリンの腕を掴んだと思うと突然掴んだ手を離し黒服の男がのけぞっているうちにキ

ムは武器化したジャックリンにまたがりどこか飛んでいつてしまった

レイナ達は訳がわからずキム達がとんでいった方向をただ見ていた
数秒が経ち我を取り戻したレイナ達は何があつたのかと尋ねに行く

「先生、キムとジャックリンは一体何を？」

ナイクズ先生は少し戸惑いながら話そうとした時

「皆落ち着いてくれ」

「キッド…」

今まで姿を見かけなかったキッドがそこにいた
キッドはナイクズのほうを見ると話しはじめる

「ナイクズ先生、キムのことは俺から皆に話をさせてください
死神としてでなく仲間としてぜひ …」

「…わかった」

「ありがとうございます。
皆落ち着いて聞いてくれ …」

そろそろ原作入る準備でもしようZE ミ (後書き)

え、急展開って？

あまり気にしないでくれ…

さて、そろそろ原作に入っていきますよっと)。 - (

ネタが無いんでねー

カサカサカサカサ…だZ E ミ(前書き)

あまりやる気が出なかった…orz

だから今回はほぼ原作通り

流し読みでも内容は理解できるZ E

カサカサカサカサ…だＺＥ　≡

「じゅうなぐん

今日は１００ｍ走のタイムはかるよ！！」

ピッ、ピッ

と言う合図とともに生徒達は男女関係無くペアを作り柔軟体操をし始める

『１００ｍとか一番だるいよね』

『マジで！お前もあのテレビ見てたのかよ』

『はあー休みてえ』

いつもと同じ場所、いつもと同じ風景でありながらもキムとジャックリンの話が出てくることは無い
何故か？それはある噂が原因であった

『キムは魔女。ジャックリンはそのパートナー』

生徒の大多数は自分には関係ない、関わりたくないということで二人の名前すら出すものがいなかった。出すものがいたとしても話のネタに出すくらいで二人のことを心配しているものはほとんどいないだろう

勿論二人のことを心配している生徒は数少ないがいる

そな少ない生徒の中にレイナはいた

キム達とレイナはそこまで深い関わりがあつたわけでは無い。友達とは言えないことも無いかも知れないが親友に値するという訳でもない。

だがレイナは友達だから、他人だからとかはどうでもよかった。

そんな小さいこと云々では無く重用なのは二人が孤立しているということだ。レイナは他の誰よりも知っていた。孤立する寂しさを…自分と同じ辛さを人に味わせたくない、そして皆がいることをわかってほしい

自分に出れることは願うことだけしか出来ないかもしれないがこの二人を救いたいとレイナは強く思っていた

「レイナちゃんの番だよ」

「……うん」

レイナはマカに言われて少し急ぎながらスタートの位置につく少ししてから

バンッ

と言う銃声が聞こえた

それを合図に一気にレイナは駆け出す、自分が出せる全力で

「…………ハア…ハア…」

ゴール近くにきて少し減速をしてしまったかも知れないがレイナは100mを走り抜いた

「レイナ」カtasファイ13秒57

タイムだけを見るとまだまだだが前回の測定時に比べると格段に上がっている。これからは努力を怠らないように!!」

「ハア……ハア……ありがとうございます」

そして次々と生徒達は100m走のタイムを測っていき授業が終わると全員体育でかいた汗を流すために死武専の中にあるシャワー室にシャワーを浴びにいった。

昼休み、シャワーを浴びたレイナは授業までの開いた時間に本を読もうと図書室に行く

図書室ではうるさい輩（主にブラックスター）がいないため図書室独特の静かな雰囲気が漂っていた

「レイナちゃん？」

いつものように適当に本を読もうと本棚で本を探していると背後から声をかけられる

振り返るとマカがいた

いつものように喋ろうと思ったがいつもと違う雰囲気ですしレイナ

は疑問に思った

「…………マカ怒ってる？」

マカはつい少し前まで興奮していたのかはわからないがいつもより呼吸が少し粗い

「怒ってるように見えた？全然怒ってないよちょっといろいろあっただけ…

それよりレイナちゃんも読書？」

「……………うん」

「そうなんだ。私も一緒にいいかな？」

「……………構わない」

レイナは特に断る理由も無かったのでマカと一緒に適当に本を取り読みはじめる

「……………」

レイナは本を読みながらマカの様子を見ていた

マカは黙々と本を読んでいるように見えるが、実際マカの眼は本を見ずにどこか違うところを見ているようだった。レイナは自分の読んでいる本をパターンと閉じるとマカに向かって話す

「……………やっぱり怒ってる」

「えっ？」

「……メデューサのこと？」

「やっぱりわかつちやうか……」

そう。メデューサにクロナのことを聞きにいったの」

「……………それで？」

「あいつ惚けるだけで何も喋らなかった！！！」

「……………」

「絶対にクロナのことについて知ってる筈なのに…………！！！」

マカは苛立ちが押さえられないのだろう、呼吸が荒くなっていく

「……………マカ。落ち着いて」

「……………」

マカはレイナの一言により徐々に怒りを押さえっていく

「……………怒ってもクロナは見つからない」

「でも……………」

「……………メデューサが言わないなら自分達でクロナの情報を集めていたらいいい」

「…うん。そうだよね！」

ごめんね。レイナちゃんも大変なのに…
無明のほうはどう？」

「……………わからない
でも…いつか帰ってくると信じてる」

「ふふっ」

「……………何か可笑しい？」

「やっぱりパートナーだなと思って…」

「……………うるさい」

レイナは照れ隠しの為かマカから少し顔を横にずらす

「レイナちゃんのおかげで少しすっきりしちゃった。これでやっと勉強が出来るぞー」

「……………そう、よかった」

「レイナちゃんにも勉強教えてあげよ」「いらない」……………」

この後二人は次の授業まで黙々と本を読んでいた

二日後

マカとソウルはいつものように授業を受けていた

ガララ

と教室のドアが空き死人先生が入ってきたかと思うと

「マカ、オックス、ハーバー、ソウル、キリクちよつと来い」

と特定のメンバーが呼ばれる。マカ達はなぜ自分達が呼ばれたのか疑問に持ちながら教室から出る

死人先生は空いている教室にマカ達を連れていき座らせると一呼吸置いてから口を開いた

「アラクノフォビアの本拠地がわかった」

「……!?」

「落ち着いて聞いてくれ」

アラクノフォビアの拠点ババ・ガヤーの攻略作戦、その中心になるのがお前たちだ」

「我々はババ・ガヤーの周りで囷になる。お前たちはババ・ガヤーの内部に進みアラクネを倒すと言う作戦だ」

「そしてこの作戦を実行する為に強力な協力者を用意した。この作戦の指揮者でお前たちの上官にあたる人だ」

皆それぞれ見当もつかないのか頭を捻り誰かを考えていた

「まさか…」

マカは考えた結果、ある人物を思い出す

「お前たちも知っている通り三日前に投獄された魔女メデューサだ」

「「「！！！」」」」

「なんでキム達を追い出したやつの下につかないといけないんだよ
！！！」

「嫌なら降りても構わん」

「なら俺はおりる」

ソウルはあまりにも納得がいかなかったのかそのまま教室から出ようとするがマカに引き留められる

「なんだよ」

「メデューサに近づくチャンスよ…
クロナの居場所を聞けるかも知れない」

ソウルはマカの言うことに納得したのか再び席につく

「オックスはどうする？」

「…この作戦は僕たちの力が必要としているから呼ばれたんだ
命令であれば従うよ」

「…そうか、オックスまでもそう言うなら俺も行こう」

こうして全員がババ・ガヤーの作戦に参加することになった

「我々の無茶を通してすまない。何かお前たちで言いたいことはあるか？」

死人先生の言葉でオックスとマカが手をあげる

「何だ？」

「この作戦にもう一人人数を追加しては駄目でしょうか？」

「それは人によるな…」

秀才の二人は一体誰を推薦するんだ？」

「レイナちゃん（さん）です」

死人先生は両手を組んで考え込む

「理由を聞かせて貰おう」

「レイナさんは冷静さがあり感情にあまり左右されないと思います。それについてこの前BREWを取りに行ったとき数多くのゴーレムを相手に出来るほどの実力が確認出来ました。ブラック スターには遠く及ばないと思いますが力もあると思います」

「ふむ……」

（レイナといえば成績は下、戦闘能力も下、だがオックスのいう通り冷静であり、そして最近は無明のパートナーになり実力をめきめきとつけ、課外授業も一人でこなした…尚且つ精神力も強い…）

「……わかった。少し待っている」

死人先生は教室から出て数分するとレイナを連れて帰ってくる

「……………何？」

「急なことですまんが落ち着いて聞いてくれ……」

レイナは死人先生の話をしっかり聞く

「……わかった。私も参加する」

「降りても構わんだぞ？」

「……大丈夫」

「そうか…他の皆ももういいのだな？」

「」「はい……」

「よし。作戦は明朝6時作戦決行だ。この作戦にはキッド達も参加

する。各々明日の為にゆつくり休め
解散！」

ガチャッ

レイナはアパートの部屋を開ける

「…ただいま」

返事は返ってこないこの部屋は本来は二人で住んでいたのだが今は
レイナしか住んでいない

（無明はない…

一人きりの本格任務

皆の足を引っ張らないように頑張ろう…）

レイナは明日の作戦に向けていつもより早めに布団の中に入ること
になった

梟が鳴き草木も眠る丑三つ時薄暗い森の中に子供が一人座っている
特に何かしているようには見えないのだがまるで威嚇をされている
ようにその子供には近づきにくい雰囲気が出ている

スツとその子供の背後から別の子供がどこからか姿を表した

先に座っていた子供はまるで来るのがわかっていたのか身動き一つせずに動じなかった

「……で、どうだった？」

「ああ、俺の手下のネズミ魔女の話によると今日の六時から死武専はババ・ガヤーの城に突入する。作戦は簡単に言えば城の周りで特殊チームが暴れるからその混乱に生じて死武専生小数で突入しアラクネを暗殺するというシンプルなものだ」

「ふーん、そのメンバーは？」

「マカ、ソウル、キリク、オックス、ハーバー、キッド、トプソン姉妹、メデューサ、そしてレイナだとさ
俺らも行くか？」

「…そうだね、今から行けば明日には着くかな？」

「まあ、余裕だろ

さて、久しぶりに暴れるとするか」

「……ぼくは暴れたくは無いんだけどね」

「ははっ！！」

そんなこと言うなって
じゃ、行きますか」

「了解つと」

二人の子供はその薄暗い森の奥に消えていった

カサカサカサカサ…だZE ミ（後書き）

さて…

アラクネ編は何話書こうかな…

もしかしたら物凄く長くなるかも（；　、　）

ゆっくり書かないと原作に追い付くんだよね…

厨二設定（例：主人公の能力）とかストーリーをいつか編集したい
と思うこの頃…

話の内容はもう諦めるがとりあえず主人公の能力を無くしたい…

書いたものは仕方ないので何かあったときの保険として残しとくよ

ww

いつか編集するから気が付いたら少し設定や名前が変わっているか
も（・　・　）

カサカサカサカサ…だZE ミ(前書き)

今回もあんまり原作とかわらないんで、流し読みでもわかると思う…

あと、久々にやる気が出たような気がするww

カサカサカサカサ…だZ E ミ

明朝6時

『やれんのかお前ら』

まるで今にもそう言いそうな顔が腹立つ太陽がギラギラと輝く日、
小数の生徒達が死武専の校庭に立っている。この生徒達は勿論いつ
も通り学校に通うためにこの校庭にいるわけでは無い。この生徒達
はある作戦の決行のメンバーの為に集まった。それぞれ生徒達は色
んな想いを秘めながら作戦決行の時を待っている時、死神様と全身
黒くまるで蛇のようなコートを着た一人の幼児が現れる

「あら？皆さんお早いおそろいで」

「…メデューサ…！」

幼児はメデューサである。本来の体は無明の手によって殺されたた
め別の体が必要となり、結果ある幼児の体に精神を宿した。
本来ならすぐにでも殴りかかりそうなマ力であったが目の前にい
る人物はメデューサでありメデューサでは無いため拳をおさめてい
るが握られている拳が青白くなっていることから相当メデューサに
対して強い想いを抱いていることがわかる

「…これで、皆集合したね。」

今から作戦を決行するわけだけど、もし何かあった時は待機部隊も
突撃するということだけは覚えていてね

それで何か質問はある？」

「…一ついいかしら？」

「ん？何よ？」

「この作戦を決行する為のメンバーの資料は予め貰ったけどあの子の資料はなかったわ」

メデューサはレイナに向かって指をさす

「あれ？渡して無かった？」

「ええ。いただいて無いわ」

「ごめ〜ん。多分私が資料貰ったまま渡さなかったと思う」

「…はあー」

まあ、いいですわ

そこの貴方簡単な自己紹介して下さい？

保険医をやっていたからだと言っても全校生徒の名前を覚えていたわけではないの」

レイナはマカ達と違いそこまでメデューサに対して強い想いを抱いていないのでいつも通りの口調で自己紹介をする

「……レイナ」カラスフィ

趣味は読書

好きなものは、読書、静かな空間にすること

嫌いなものは、勉強、戦闘、運動
パートナは無明

…よろしく」

「…死神」

メデューサは疑いの目で死神を見る

「何？」

「…そちらが選抜したメンバーだからあんまり疑いたくは無いい言
いたくも無いけどこの子役にたつの？」

「大丈夫。レイナちゃんはあるまり戦闘系に向いて無いけど、いざ
という時には頼りになる！！」

つてそこにいるメンバー達が言ってたよ」

「貴方の意見では無いの！！？」

「私も頼りになると思っているよ」

「…はあー、

これだから死武専は…
もういいですわ…」

「他に質問ある人？」
…いないね

じゃあ

『ババ・ガヤーの城
攻略部隊！！』

突撃』

「

死神様の合図と共にメデューサを筆頭にマカ達は歩きだした。

南米大陸

アマゾン川流域

「ここからは徒歩よ
ついてきて」

レイナを含む11人のメンバーはアマゾン川を下る為に使った船から下り地面に足を下ろした

「ジャングルか…
進みにくいな…」

ジャングルは沢山の木や草のせいで視界は悪く数10メートル先まで見えず太陽の光も所々しか照らされない。そしてアマゾン川流域ということもあり滅多なことでは出入りする人間も少ないため人が通った形跡も少なく草木は人の腰ぐらいまではあった

「私が何とかするわ」

メデューサは短い呪文を唱えると、メデューサの体から蛇のような矢印が出る。その矢印はまるで意思を持っているように草を切り人が通れるくらいの足元を作った

「これで先に進めるわ
皆ついてきて」

メデューサは矢印を巧みに操り自分達が歩くであろう場所にある草木を斬っていく。そしてレイナ達は離れないようにメデューサの後をしっかりついていく

そうして歩くこと数十分メデューサ達はまるで黒いペンキを大量に投げ入れたようなドス黒い川の目の前で立ち止まっていた。

「なんだコレは？」

「明らかにアラクネの罠でしょうね
どんな罠かはわからないけど…」

キッドとメデューサがその川をみてできる限りそな川のことを分析しているとキリクのパートナーであるファイヤ、サンダーが泣き始めた

「……………眠いの？」

「ちげえーよ。ファイヤ、サンダーにはわかるんだよ…
自然が泣いているのが」

「……私にはわからない」

「…わかったらすげえよ」

ぶくぶくぶく

キリクとレイナがファイヤ、サンダーについて話していると、そのドス黒い川が中心が少し泡立ってきたと思うと徐々にその泡立ちが大きくなっていく

「なんだあれは？」

「マカツ!!」

「うん」

マカを目を閉じ神経を集中させて川の中にいる魂を探り出す

「これは人間じゃない…
かなり大きい…」

「……来るよ!!」

マカがそう言っただ数秒もたたずに川の中から何かが現れた

「なんだコレは？」

「……おお。でっかいイカ」

「この川にいる生物がアラクネのせいで巨大化したんでしょうね」

川から出てきたイカは普通のイカと比べて何十倍も大きく例えて言うならゾウの二倍ぐらいの大きさであった

「散って!!」

メデューサの言葉でマカ達は木の影に隠れたり木の枝にのぼったりしてイカから距離を取った

…はずなのだが一人だけメデューサの横につつまている人物がいる。レイナだ

「…聞こえなかったの？」

「……体力の無駄」

「（何なのこの子！？さっきの言動といい死武專のノリぐらい意味不明で何考えてるかわからないわ）
貴女ね……!!」

巨大イカは勿論レイナとメデューサの会話を待つてくれる筈もなく触手のような足を伸ばしてきた

「ネークスネークコブラコブラ…」

『ベクトルアロー』

メデューサは自分に伸びてくるイカの足を間一髪魔法を唱えて矢印を操りイカの足を切ったことでイカの攻撃を止める

「（あの子のほうは…！！）」

自分に伸びてくるイカの足のことに気を取られレイナの方まで矢印を伸ばせなかったメデューサは慌ててレイナの方を見る

「……いゃん」

そんなメデューサの心配を無視してレイナは伸びてくるイカの足を紙一重で上手く体さばきを使いながらかわしていた

「…『ベクトルアロー』」

メデューサは何だかやるせない気持ちになりながら矢印でレイナの周りに伸びているイカの足を切り落とす

「……ありがとう」

「…どういたしまして」

メデューサがイカの足を切り落したところでイカは少し怯む

「焼きイカにしてやろう」

その怯んだスキを見逃さずオックスはパートナーのハーバーの槍の能力を使いイカに向かって雷を落とす

「やったか…」

イカに雷を落としたことによりイカが体をおさめている川にも雷が流れる。雷が流れたことにより川の水が少なからず蒸発したことによって水の蒸気で辺りが見えなくなる

「オックス君まだだよ！」

「えっ…」

イカを倒したと思い油断していたオックスの近くの川から二本のイカの足がオックスを川に引きずり込もうと伸びてきた

オックスは油断をしていたためそのイカの足に呆気を取られイカの足を防ぐことをコンマ一秒忘れてしまう

オックスはそのまま自分にイカの足が巻き付くと思い目を閉じ覚悟をした時

バチバチ

と、まるで感電するような音が鳴った

オックスが目を開けるとイカの足を弾くレイナがいた

「……又メ又メしてる」

レイナは伸びてくるイカの足の側面に上手く手を入れはたくように

足を押し退けながら魂の波長を流し込んでいた

二本の足はこれでもかというようにレイナに弾かれながらも足を伸ばすがレイナの両手の手さばきによりそのイカの足はオックスにとどくことは無かった

「あ、ありがとうございます」

「……お礼はいいからさっさと逃げて。私も又メ又メから逃げたいから」

「あ、はい」

オックスはその場からすぐに移動をしてイカから距離をとる。

レイナはオックスが自分の後ろにいなかったと確認したらイカの足をさばきながら徐々に後退しイカの足が届かないところまで逃げる

「オックス君の雷もきかなくて、レイナちゃんの魂の波長を流し込むのはきいてるということは……」

「ええ。マカちゃんの思っていることは正解よ
あのイカの皮膚は魔法でコーティングされ強化されているのでしょ
うね」

それを剥がさないとダメージは与えられないわレイナちゃん以外……
でもあれじゃあ……」

メデューサは横目でチラリとレイナがいる方向を見る

「……あのイカ、キモい」

「…まあ、無理でしょうね」

「じゃあどうしよう…」

「私がアローを突き刺し刺さった部分のコーティングを魔法で分解するわ

そこに一撃加えて欲しい」

「その一撃キリク君に任せるわ
こつちにいらっしやい」

メデューサは近くでイカの足の相手をしているキリクを呼ぶ

「何だ？」

「ネークスネークコブラコブラ…」

メデューサが短く呪文を唱えるとキリクの腕に拳を下向きにした矢印がついた

「何だこれは？」

「『ベクトルブースト』」

それは矢印の方向に力をかけたとき威力が倍增する魔法よ」

「オオ…」

「みんなは私とキリク君の援護を

行くわよ」

皆（レイナも一応参加）はメデューサを中心に固まる

「『ベクトルアロー！！』」

メデューサの体から出ていく無数の矢印は真っ直ぐイカに向かっていく

イカはたまたまなのか本能的に危ないときづいたのかはわからないが矢印を出しているメデューサに向かって全部の足を伸ばす

「せいっ！」

「ふん！！」

「やあ！」

「……させない」

マカ達はメデューサに向かっていく足を全て叩き落としメデューサの矢印がイカに向かうまでの時間を稼ぐ

トトトトトトトトトト

無数の矢印がイカの眉間一点にささる

「解析、分解」

そう言った直後、眉間一点に刺さった矢印がこじ開けるようにして眉間からいろいろな方向に矢印が何かを引っ張るように動く

「穴が開いた!？」

「今よ!!」

メデューサの合図と共にキリクはイカに向かって翔ぶ

「魂の共鳴!!!」

フレイム・フリント・フィスト

『F・F・F』

オラア!!!!!!」

キリクはメデューサが開けた穴に向かって矢印のついた炎を纏った拳を渾身の力を込めてイカに放つ。その放った一撃は、まるで軽い隕石の衝突見たいに重い一撃ありその一撃を受けたイカは穴を中心に真つ二つに割れてしまった

「やべえな魔女の魔法…」

「本当に凄い一撃でしたよキリク
イカの原型が無くなるかと思いました…」

「俺もそう思っただけだよ、思ったよりあのイカ固かったわ」

「貴女たちまだまだ先は長いのだからおしゃべりをするなら歩きながらしなさい」

「うす（はい）」

「（それにしても……」

レイナちゃんね

さすが無明君のパートナーと言った所かしら？

今朝はなんでこんな子がいるのかと思つてたけど案外使い物になり
そうだわ魂の波長を撃ち込むことができるのはブラック スターが
いない間は重宝できそうね。）
それじゃあ先に進みましょう」

再びレイナ達はメデューサを戦闘にジャングルを歩いていった

日が沈み始めた頃

メデューサ達はある洞窟の前まで来ていた

「ここは？」

「遠い昔に掘られた坑道よ」

メデューサがマカに説明しているとき洞窟の奥から一人のアラクノ
フォビア兵が現れる

「敵だ！皆かまえ」心配いらないわ仲間よ」「」

そのアラクノフォビア兵は自分は敵では無いと言つようにお面をと
り素顔を表す

「そいつは？」

「この子はミズネ。私の仲間でババ・ガヤーの城にスパイにいつてもらってたのよ」

ズドオオオオン！！

まるでビルが壊れたような音がなり地面が激しく揺れる

「えっ！！な、なに…？」

レイナ達は近くの木や壁、地面にもたれかかる

数秒後その揺れはおさまり全員がまた一ヶ所に集まった

「一体何だったの…？」

「…わからないわ

自然現象か、人為的な物かはわからないけど、何度も続いてはこの坑道も壊れるかもしれない…

ここを抜ければババ・ガヤーの城
壊れないうちに皆入るわよ

急ぎましょう」

レイナ達はメデューサに案内してもらいながらゆっくりと洞窟の奥へと進んでいった

「ねえ……」

「いや、悪いと思っている。本当に思っているって！」

見た目はマカ達と同じ歳ぐらいの子供二人がアマゾン川流域にあるジャングルにいた

「正確な敵の本拠地の位置ぐらい把握しておこうよ……」

「……すまん」

現在二人はこのジャングルで迷っていた。二人はババ・ガヤーの城へ行こうとしていたらしいが城の正確な位置を調べず大まかな場所を調べてきた結果迷ってしまったらしい

「そろそろ日が沈みはじめたよ……」

「寝床を確保しないとな」

「……はあー」

うんざりと言うように二人のうちの一人はため息をついた

「おっ？コレをってみろよ」

「ん？どうしたの？」

もう一人の子供が寝床を確保しようとぐるぐると歩き回った結果、不自然に切られた草木でできた道を見つける

「これ絶対にアラクノフォビア関係の奴か死武専のやつらだって！」

「っばいね」

「じゃあこの道を辿っていったらいつかはババ・ガヤーの城につながる！」

「恐らくは…」

「それじゃあ行くか」

「うん」

二人の子供はメデューサが矢印で切ったであろう草木がある道を踏みしめていく

そしてメデューサ達と同じように数分歩いたところでドス黒く染まった川に着いた

「この川黒いね。あつ、あれはイカの残骸かな？」

「こいつは魔法でコーティングされたイカじゃないか…
死武専の生徒達もこいつを倒すなんて中々やるな」

・・・

こいつが子イカということを除いても」

「これで子供！？デカっ！」

「ああ、本来のイカはコレの三倍ほどだ」

「三倍！？そんなのぼくが住んでいるアパートぐらいのデカさなんじゃ…」

「…お前の住んでるアパートが俺の知ってる普通のアパートサイズとしても、もつとでかいと思う…」

……

いや、もつとデカかったわ」

「それってどういう…」

片方の子供は急速にに日が照っている部分が無くなっているということが見てわかった。

「（日が沈むにしては早すぎる、まさか…）
やっぱりそうだよね…」

心の中でこの原因の答えはわかっていたが、そうじゃないと信じ上空を見上げた結果、

「軽いデパート並みの大きさだね…」

「こいつ一匹で1年分のイカ食えるんじゃないか？」

メデューサが倒したイカとは比べ物にならないほどの超巨大なイカが二人の子供を覆い被さるように川から姿を現していた。

超巨大なイカは二人の姿を見ると何百年も生きた木のような太さのある足を伸ばして二人に叩きつけようとする

「よっこらしよっ」

「危ないな」

二人はその超巨大なイカの一撃をそれぞれ避ける

イカの足が二人に当たらず地面に当たった瞬間

ズドオオオオン!!!

と、いう激しい音がなり地面が割けた

「うわぁ、コレぼくらの居場所音でバレバレじゃん」

「そうだな」

さっさと殺るか」

二人は地響きを気にせず喋っている

・・・

「どうする？」

再びイカの足が二人に襲いかかる

・・・

「俺になるわ」

「了解」

イカの足はそのまま二人に降りおろされた。

ズドォォン！！

そのまま二人はイカの足に潰されぺしゃんこになる筈だったのだが、そのイカの足は二人を潰さずに地面に転がった

「さて…

君に恨みは無いけど

『死んで』

┐

イカはこの言葉を聞いた数秒後大きな槍をもった一人の子供によって絶命することになった

カサカサカサカサ…だZ E ミ（後書き）

伸ばすよ

だって原作追いついてるんで…

ブラック スター編とかオックス編とか書く気が無いからやばいぞ

…

カサカサカサカサ…だZ E ミ(前書き)

原作とほぼ同じだから流し読みで) r y

次ぐらいはオリジナルを書かないと^ | ^ ;

カサカサカサカサ…だZE ミ

大きな地震のようなものを感じた後、メデューサ達はある程度坑道を進むと次の日の戦闘に備えてキャンプをすることにした

その時のちよつとした話

「……皆とお泊まり」

「場所が場所なだけに皆と寝れても楽しくねえだろ…
というよりお前は寝袋まで白なのかよ！」

「……ウフフフフ」

「ちよつ…！怖えし！俺のそばで寝ようとすんな！
マカ達のところにいけよ！」

「……ソウルの隣で寝てあげる。ウフフフフフフフ…」

「レイナちゃん
一緒に寝よ」

「……わかった

命拾いしたね。ソウル…」

「俺に一体何をする気だったんだよ！」

就寝時は男女別れて寝ることになった。修学旅行の夜のように夜遅

くまで起きるということも無く皆それぞれ早く次の日に備えて寝ることになった

「あ、ああ…白い、白い何かが俺を追いかけてく…」

「……フフフフフ…フフフフ…」

「死武専はやっぱりおかしいわ…」

生徒達が寝るなかソウルとレイナの寝言のせいでメデューサだけは一人寝るのが遅くなったことは誰も知らない…

「…皆昨日はゆっくりに寝れたかしら？」

「……はい（おう）……」

「何か変な夢を見たせいで寝れなかったような気がするんだが、どんな夢を見たのか思い出せない…」

「…気にしないでいいわソウル君」

「……？」

「今日はババ・ガヤーの城に乗り込み作戦を決行するわ。長い一日なると思うから皆覚悟するように」

皆それぞれ頷いたのを確認すると昨日と同じくメデューサを筆頭に歩き始めた。

坑道の奥に進めば進むほど罫と数が多くなりババ・ガヤーの城に近づいているということをマカ達は感じ取っていた

「この辺りから糸が多くなるわ
皆気を付けて」

「マジかよ…」

私この中で一番身長が高くて一番体が固いんだぞ…」

「大丈夫。おねえちゃんならいける！」

「いや…いけないからいつてるんだよ。パティ…」

メデューサはその体の小ささをいかして糸を避けマカ達は体を捻りながら糸を避けリスだけは武器になりキッドに運んでもらっていた

「悪いキッド…」

「体を動かす努力をすりんだな…」

アラクネの何10メートル続く大量の糸に引っ掛からないようにしながら通り奥に進み糸が無くなってからも歩き続けた

「おゝい

この洞窟もう何時間歩いてる？
疲れたんだけど…

「ただけ歩けば着くんだよ…」

「フフ、実はここはすでにババ・ガヤーの城の中よ」

「エエ!？」

マカとキッドは大体の予想がついていたのだが他のメンバーはまだ城の中と置いていなかったようである。驚愕の声を上げる

「おい…」

「大丈夫なのか…」

「大丈夫じゃないわよ
気を引き締めないとアラクネ達に見つかるわ」

「そうそうこんな風に」

洞窟の奥から一人の女性が現れる

マカ達はまたもや戦闘体勢に入るがメデューサに制止がかけられる

「仲間よ」

「はい」

私は魔女エルカよろしくね
自己紹介はいらからさつとこの服に着替えて」

そう言うエルカはメンバーの数の分だけアラクノフォビア兵の服とお面をどこから取り出した

メデューサ達はそのアラクノフォビア兵の服に着替えるとエルカに指示にしたがってさらに洞窟の奥へと進んでいく

奥へと進み続けると扉がありそこを開けて入るとかなり広い空間に出た

「同じのがいっぱい」

そこにはたくさんのアラクノフォビア兵がおり全員が全員の面をつけているため男女の区別さえつかなかった

「これからどうするんだ」

恐らくソウルであるだろう人物が隣にいる誰かに聞く

「あん？あたしが知るかよ」

「なんだリスか…」

メデューサはどこにいるんだ…」

「……背丈を見るとメデューサらしき人はいない」

「なんだと…」

じゃあさっきの魔女はどこだ!？」

「……さあ？」

「探せ！俺達もしかしたらまかれたかも知れん」

「はっ？なにいつてんだよ。てかお前誰だよ」

ソウルであろう人物を中心にそれぞれエルカを探し始めたが全員が全員同じ服と面であつたため結局ソウルたちはエルカを見つけられなかった

ソウルたちははぐれないように固まりながらこれからどうするか話しあっていた時胸にchiefとかかれたアラクノフォビア兵に声をかけられる

「そこの誰か一人ちよつと来い」

《誰だ！？》

明らかにエルカ達と違う大人の男に声をかけられマカ達は全員思う

「お前でいいや
ちよつと来い」

「え、私？ちよつと待って」

そのchiefと書いてある男は適当にマカ達の中から一人連れて行く

「誰かわからんが一人抜けたぞ……」

「……点呼を取ろう」

一人一人名前を確認したところマカが連れられて行ったことがわか

った。

「どうすんだ…俺達」

「お前達仕事だ」

「エエ!？」

マカがいなくなっでどうしようかと考えていたところ先程とはまた別のchiefと胸に書かれたアラクノフォビア兵がやってくると一人、また一人とどこかに連れられていった結果、レイナー一人がその場所にいることになった

「……暇」

レイナは皆が帰ってくるまで一人ぶらぶらしていると一人のアラクノフォビア兵が話している内容がふと耳に入った

「おい、聞いたか？」

最高傑作の魔道具兵の一人のあいつ」

「何がだ？」

「噂なんだが…」

魔道具兵を自分の戦闘実験に使っているらしい…

精神攻撃を受けた魔道具兵は精神が壊れ廃棄処分だよ。俺たち一般の兵士達もいつ実験台にされるかと思うと怖くて仕方ねえよ…」

「マジかよ…」

散々働かせといて壊れたらポイかよ…
モスキート様は何も言わねえのか？」

「モスキート様公認らしいぞ」

「嘘だろ！？怖すぎるぜ…」

「……（最高傑作の魔道具兵一人つてもしかして…）」

それからしばらく耳をすませて二人のアラクノフォビア兵の会話を聞いていたが、これ以上は有益な情報が得られないとわかるとレイナは二人の兵士から意識を外した

「やっぱり私に色気が無いのかな…」

いや、でも10年後には色気がついてるかもしれない…」

お面を取ったマカがなにかぶつぶつ言いながら帰って来るのを確認するとレイナはマカのもとへかけよった

「……マカ、お面」

「ん？この声はレイナちゃんだよね？
あつ！お面するの忘れてた！」

マカは再び面をつけるとレイナと一緒に壁にもたれ座る

「精神的に疲れた…」

「いい男だったねー」

「ねー」

「男の勲章が…」

恐らく死武専の生徒であろうメンバーが帰ってくる。再び点呼を取ることによって全員帰ってきたと思うと壁にもたれこむ。身も心も疲れて座っていた時

「あなたたちどこにいたのよ？探したわよ？」

背丈的にメデューサと思われるであろうアラクノフォビア兵に声をかけられた

「もしかしてメデューサ？」

「ええ。そうよ」

メデューサだとわかるとほぼ全員がメデューサに抱き付きに行った。よっぽど身も心も疲れていたことがわかる

「今までどこにいたの？敵地で見はなされたかと思っただよ…」

「少し下準備をね…」

さあ、始めるわよ
ついてきて」

メデューサはしばらくマカ達をあやすとアラクネを倒すため更に城

の奥に向かっていった

「さてこの辺ね」

奥へ奥へ進んでいたとき突然メデューサが立ち止まった。

「……？」

「ここからは各自で向かってもらう所があるの」

「どういふことですか？」

「アラクネがいる場所は魔法によって嚴重なセキュリティがほどこされている

その場所に入るにはいくつものゲートをこじ開けられねばならないの」

「ゲートを開ける？」

「そう。ゲートを開けるにはそれを管理している魔道具、錠前、を破壊すればいい

錠前は全部で八個あるわ」

「ハケ所にわかれては危険だ
職人と武器がばらになってしまつぞ」

「あなたたちに破壊してもらう錠前は全部で三個よ
残り私の仲間が破壊するわ」

「でも私たちは道筋がわからない」

「道筋は今教えます。オックス君、キリク君、そうね…あとレイナちゃんこっちに来て」

呼ばれた三人はメデューサの元へ行く。メデューサは三人が自分のもとへくると魔法のための呪文を唱える

『ベクトルコンダクト』

メデューサはそう言って三人の頭を触った。三人はとくに何か変わったことも起きなかったので不思議に思っている

「一体何をした？」

「……矢印が…」

「そう。矢印が見えるはずよ

その魔法は私がかじめつけておいた見えない印を見ることがのできる魔法よ

錠前はその矢印の指す方向へ向かえばいいわ」

「下準備とはこれのことか…」

「エエ…」

そして、キッド君あなたにも錠前を破壊しにいつて貰うわ」

「ちょっと待ってくれ俺はお前を監視する役目を任されている
お前から目を話すわけにはいかん」

「キッド君しかやれる人はいないの
マカちゃん達にはアラクネの元へいくために魂感知能力を使っても
らわないといけないから…」

「しかし…」

「大丈夫。メデューサは私たちに任せて！」

「マカ…」

キッドはあまり納得は行かなかったがここで揉めて時間を潰すわけ
にも行かなかったので錠前を破壊しにいくことに決める

「矢印が見えているのはそれぞれ違うわ

オックス君、キリク君は二番目の錠前

キッド君は八番目の錠前

レイナちゃんは一番の錠前よ」

「……私一人？」

「いいえ、私の仲間が後からサポートに行くわ」

「……わかった」

「それじゃあ、皆それぞれの行動に出ましよう！…！」

こうして錠前を効率よく破壊するためにばらばらになりそれぞれアラクネを倒すための行動に出ることになった

メデューサ達がばらばらに動き始めた頃

「……楽なんだが、なんだかなあ」

「文句言わない」

現在子供二人はメデューサ達が入っていた洞窟の上、崖を登っていた。片方は槍になりもう片方の子供は槍を背負いながらロッククライミングの要領で崖を登っている

「洞窟内を進んでいると今日中に城までたどり着けないかも知れないんだったら君の言う近道するしか無いね」

「まあ、そうだが…」

本当にやると思わなかった」

「時間が無いしね…」

それにしても疲れるな…

あと何十メートル登ればいいんだ…」

「なあ、数十メートル登ってから言つのもなんだが…お前の能力で足場つくつたらいいんじゃないか？」

「……………」

「……………」

「……………先言ってくれよ」

「……………すまん」

そう言っていると片方の登っている子供は懷から紙を取り出すと自分の足元に置く。

「よいしょっと…」

紙は重力に従い落ちては行かずその場にピタリと固定されているように動かなくなると子供はその紙に足を乗せる。

「ほっ！よっと！」

子供は自分の数メートル上に紙を投げまたその紙がピタリと固定されるとその紙に向かってジャンプして飛び乗る。それを何回も繰り返し数分すると何十メートルもあった崖の頂上まで来た。頂上まで来ると武器の槍は人形に戻る。

「あの蜘蛛っぱいのがババ・ガヤーの城だね」

崖の下には荒野がありその荒野にポツンと一匹巨大な蜘蛛のような城があった

「ああ、ここから恐らく直線距離で10キロ。敵には見つかりやすいがまあ、畏も無いし五分もかからんだろ」

それに何か殺気を放ちながら遠く離れた所からこちらに向かって来る輩もいるし敵はそっちに注目するだろな」

「十中八九、ブラック スターだろうね…」

「まあ、俺には誰だろうがどうだっていい。」

見たところ一つも錠前が壊れていないようだがどうする？」

「確かモスキート邪魔だつて言ってたよね？」

「ああ、あのじいさんにそろそろ引導を渡そうと思ってはいるが…それがどうした？」

「…いや、ぼくの勘ではモスキートは八番の錠前に行くからぼくたちも八番の錠前に行こうか。」

「まあ、どこでもいいしお前がそう言うなら八番の錠前にするか

じゃあ行くか、…無明」

「そうだね、…フォン」

二人は崖から飛び降りると一直線にババ・ガヤーの城へと向かっていった

カサカサカサカサ…だZE ミ

レイナ side

一人、一番目の錠前に向かってトコトコと歩いているレイナがいる

「……遅い」

メデューサやキリク達と別れて数分は経ったはずなのだがメデューサの言う『サポート』が来ないことに少し不安が募る

「……間違つてたりはしてないはず」

メデューサにかけてもらったベクトルコンダクトという魔法のお陰で道がわからなくても魔法をかけてもらった人にしか見えない矢印がちゃんと見えており、その矢印にしたがって道を進んでいたのだから道を間違っているはずも無い。

「……ま、いつかは来るでしょ」

自分一人しかいないという不安もあるが早めに錠前を壊さなければならぬという使命感の方が勝ったのかそのまま矢印の向きにレイナは進んでいった

その頃レイナと合流して一番の錠前を壊すはずであったエルカは…

「ゲコッ！！」

ここどこ〜!!ミズネ〜!!

私にもベクトルコンダクトかけてよメデューサーー!!」

一人道をさ迷っていた

「あ、もしかしたらこっちだったかも」

道を思い出したと思いきやエルカが向かっていく先は六番の錠前。

エルカがこのことに気づくのはもう少し後の話……

一方その頃レイナも……

「……あれ？矢印はこっちに向いてた」

ある一定の距離を歩いた後、突然矢印がどこにも見えなくなりレイナは道に迷っていた

「……一旦さっきのところまで戻ろう」

もしかしたら自分が矢印を見間違えたのかも知れないと思ったレイナは一番最後に見た矢印のところまで来た道を引き返す

「……??この矢印……」

最後に見た矢印のところまで戻ってきたつもりだったのだがレイナ

が最後に見た矢印の場所には矢印が無かった。いくら自分が頭が悪いからといってそんなことすら覚えてないはずがないと思いながら少し考える

(……まさか、メデューサの魔法の効果が切れたんじゃ……)

一つの仮説が浮かぶ

(……でも、道がわからなくてもいつかは着く。
時間も勿体無いしここは戻らず進もう)

矢印が最後に指していたところを頼りにトコトコとまた歩き出した

適当に右に曲がったり左に曲がったり真っ直ぐ進んだりしていたのだが錠前らしき物体は中々見えずレイナは困っていた

「……時間が無い」

少しペースを上げながら歩いていると後ろから声をかけられる

「やっと見つけたゲコ」
探してたのよ」

レイナが振り向くと洞窟で会った魔女エルカが後ろから走ってきていた

「……よく見つけられたね」

「いろんなところを探したのよ」

「……ごめん。じゃあ一番の錠前のところまで案内して」

「わかったゲコ。しっかりついてきてね」

そう言うエルカはレイナの進もうとしていた道に向かって歩き出した

「……こっちで道あつてるの？」

「そうだけど？早く進みましょう」

「……私、道まちがってたと思ってた」

「ここらへんは複雑だからしょうがないわ」

「……ねえ」

「何？」

「……私、メデューサの魔法で道わかってる
あなたはどうかなの？」

「ベクトルコンダクトのこと？私もかけて貰ったから道はわかるわよ
だからここまでこれたんじゃない」

「……あなたさっき私をいろんな所で探してたと言ってた
それに私が本当は道をわかっていないときさっきから遠回しで言うて

るのになんで疑問を持たないの？」

レイナはエルカから二三歩後ろに下がる

「……………フフ」

エルカの姿が徐々に溶けていく

「……………」

「やっぱり私には演技が苦手なようで」

「……………やっぱり」

エルカの姿が完全に溶けきるとそこには、以前レイナを精神の世界に追いやり殺そうとした魔道具兵がいた

「あ、覚えててくれました？てっきり忘れてるかと思ってましたよ」

「……………ここもまさか……」

「勿論、精神の世界ですよ？もうこれで三回目なんでやっぱりわかりますか……」

「……………だから矢印が……」

……三回？」

ここが精神世界と言うことがわかったので矢印見えなくなったとい

うことが理解できたレイナだったが、魔道具兵の言った三回目という言葉が少し疑問に思う

「……私はまだ二回」

「いやいや、三回目ですよ。もしかして覚えて無いですか？」

「……なんのこと」

レイナは今までのことを思い出すが精神世界に連れていかれた覚えが無くいまだに魔道具兵の言っていることがわからなかった

「……あの時、貴方も一緒に殺してやろうと思ったんですけどね」

貴方はあのままいい夢を見てそのまま死んでいけばよかったものを

……」

「……ま……さか！？」

「思い出しました？あなた達がBREWを取りにいったあの時あなたにいい夢を見せたのも私。

そして

悪い現実を見せたのも私ですよ」

レイナは急速に思い出していた。あの雪山の洞窟での夢とは思えない夢。植物状態だったら歩けないはずの無明が洞窟まで自分を運んでくれたこと。

「……じゃああの時無明は……」

「私が手を出す前はまだかろうじて意識があったと思いますよ?」

「……お…まえ!!」

「やっぱり私は現実では非力なようで中途半端にしか無明君を殺せませんでしたよ」

「……………」

「あれ? てつきり怒って殴りかかると思ってたんですけどね
前よりかは成長して私の力に警戒するようになりましたか」

レイナは怒っていたがこのまま突っ込むと前回の二の舞になってしまうと思い、どのように攻撃を当てるかを考えていた

魔道具兵の力は相手の精神世界に入り相手の情報を読み取り相手の頭の中にいる人物に誰でもなることが出来てしまう。それはただ姿形が一緒になるだけではなくある程度の強さもその人物と同じになっってしまう。

下手に攻撃したら恐らく反撃されるであろう。ならば相手の攻撃を待つだけ。そう決めたレイナは魔道具兵をぐっと睨み付ける

「おお、怖い。怖い。」

攻撃はして来ないんですか? まあ、そちらが攻撃して来ないんだっ
たらこちらから行きますよっと」

魔道具兵は徐々に姿が変わっていくと、魔道具兵はギリコの姿になつていた

「じゃあ…行きますよ
回転速度二速」

魔道具兵（以下ギリコ）は足に着いている鋸を回し地面を滑りながらレイナに近寄っていく

「……………!!」

以前、無明とギリコが戦っているのを見ていたレイナだが自分は無明のように動けないということはわかつている。ならどうすればいいのか？自分はギリコに勝てるのか？そんなことを考えているとレイナのすぐ前にギリコが来ていた

「さあ、どうします？」

ギリコはレイナの前まで来るとレイナの上半身を狙うのではなく、まず動きを止める為に両足を狙う。鋸が回転している足がレイナの両足に向かって放たれる

「……………!!」

レイナはどんな攻撃が来てもまずは体さばきでよければいいと思っていたが自分に向かってくる鋸の足はあまりにも大きく後退する時間もなく、レイナは大縄飛びをするように大きくジャンプをしてギリコの鋸足をかわす

「かかりましたね」

レイナが飛ぶことを予想していたのか、ギリコは鋸のチェーンが着いた手でレイナの顔面めがけて突く

レイナは自分の顔面に向かってくる鋸の手を弾くことは出来ないの
で顎をあげるにより攻撃を回避する

「やりますね」

ギリコは自分の手を引き戻しレイナが空中から着地する瞬間を狙い
チェーンを鞭のようにして着地する瞬間にレイナの足に向けて叩き
つける

「……………くっ!!」

自分の最大の武器は足なので機動力を失って行けないと思ったレイ
ナは足を庇うように手をチェーンが当たる位置に持っていく

バチン!!

と音がする

レイナは少し横に転がりすぐに立った。レイナの両足は手で防いだ
為、怪我も無かったのだが足を庇うために使ったレイナの左手は真
っ青に腫れ拳を握ることさえ辛そうに見える

「あらら、痛そうだ」

「……足ばかり」

「そりゃ、貴方の最大の武器は体さばきですからね。まずは足を狙いますよ」

「……卑怯」

「卑怯だろうがせこかろうが勝ちも勝ち。負けは負けなんでね！

これを避けられるか!？」

ギリコは自分の周囲をチェーンで覆い回転させながらレイナに突っ込んで行く

「……ちっ」

勿論レイナには避けられるはずが無かったので、レイナは近くの壁を波長を流し込んで少し壊し残骸をギリコに投げつけその場から全力で逃げ壁に隠れる

「目眩ましですか」

レイナはいったんこの場所から逃げどうしたら近づけるかを考えたので時間を稼ぐべく、少しづつギリコから遠ざかっていく。

「……どうしたら……」

「みーつけた、レイナちゃん」

ある程度ギリコから離れた位置に隠れすぐには見つからないだろう
と思っていたのだがレイナはマカの姿をした魔道具兵に見付かる

「……魂感知能力」

「そつ。だから逃げられないよ」

マカはどこからか鎌を取り出すとレイナに向けて思いっきり振る

「……………」

レイナはその自分に向かってくる鎌を避けずにマカに向かって走り
出す。

「…………しっ！！」

マカの前まで来るとレイナはマカの足を足払いの要領でかる

「いっつ！」

マカは足を刈られたことによりバランスを崩して背中から地面に叩
きつけられた。

「…………ふっ！！」

地面に倒れているマカの腹に向かって右拳を叩きつける。

「ガハッ！」

レイナは叩きつけた右拳を開け手のひらをマカの腹につけるとそのまま思いつきり魂の波長を流し込んだ

「……グフッ!!」

最後にマカの近くに落ちてある鎌を拾うとレイナはマカの首を狙って降り下ろすがその鎌は、今度は無明の二本の指によって止められていた

「……クソッ!!」

レイナは反撃される前に鎌を手放すと無明の姿をした魔道具兵から距離をとる

「よくもやってくれましたね…今の攻撃は痛かったですよ」

無明はその掴んでいる鎌をどこかに消す

「もう、許しません。貴方はいたぶって、いたぶって、いたぶって、恐怖と狂気の中で殺してあげます」

「……そう」

「そんな余裕も今のうちだ。私の修業の成果を身をもって味わうがいい!!」

少し時間は遡る

「やっぱりブラック スターだったね」

「遠くからしか見えんがそうっぽいな
早く俺たちも急ぐぞ」

「了解」

二人は八番の錠前に向けて走っていた。見張りはほぼ死武専の方へ意識を向けている為、無明とフォンのことには気づいてない

八番の錠前に走り続けているとふと無明の足が止まった

「おい！何してんだ！！時間が無いんだぞ！」

「……呼んでる」

「ああ？俺には何も聞こえないが……」

「ねえ、フォン」

八番の錠前に先に行つといてくれない？」

「別にいいが……何故だ？」

「……少し一番の錠前に行かなくちゃならないような気がして……
大丈夫。十分……いや五分ぐらいしたら八番の錠前に行くよ」

「じゃあ、ついでに一番の錠前も破壊しといてくれ
早めにこいよ？もしお前のいう通りじじいが八番の錠前にいたら俺
一人じゃ手こずるからな」

「わかったよ
じゃあ行ってくる」

「わかった」

こうしてフォンは八番の錠前へ、無明は一番の錠前に向かって走り
出した。

レイナ side

「……く……そ」

「いや、修業したかいがありましたよ
それにしても便利ですねこの能力」

現在レイナは動けない状態にあつた。

レイナの周りには小さく切られた紙が固定されており動こうとすると
固定されまるで壁のように動かない紙に体が当たりレイナはその
場から動けずにいた

「居心地はどうですか？あまりよろしくないかも知れませんがまあ、
我慢して下さいね」

「……………く……っ！」

「それにしてもどうですか私は？無明君そっくりでしょ？私とパートナになりますか？ハハッ」

「……だ…まれ…!!」

「怖いですね」

まあ、いくらでも怒り喚き恐怖して下さい
私はそんな姿を見るのが大好きですから」

「……く…そ…!!」

「それにしても可哀想ですね貴女は…
パートナーには見放され一人でここで死んでいく
ああ…可哀想、可哀想」

「……無明は…そんなことしな…い…」

「しない？なぜそんなことが言える？見放されていないなら貴女を
助けに来るのでは？

いい加減希望を捨てましょうよ
貴女は絶望の中死んでいく運命だ」

「……なぜ言える？……それは…いつも…無明は私をいつも助けて
くれるから」

レイナは固定された紙の隙間から右手を上に掲げる

「無駄なあがきを…

助けに来てくれるはずないでしょ…」

「……無明は私を助けに来てくれ…」

「夢見るのも大概にしましょう」

「……私が無明を無明が私を助けて…くれる」

「人の話聞いてます？」

「……それが私達…」

『open』

レイナの周りに固定されていた紙の時間が動きだしたのか紙は全て
レイナの周りに落ちる

「ば、ばかな…
まさか!？」

「……おかえり、来てくれると信じてた
私のパートナー」

「ただいま、少し遅くなっちゃったね」

レイナの右手には大きな鍵が握られていた

「……いい。そんなことどうでもいい」

「はっ、ありがとう。……レイナいきなりだけど行ける？」

「……行けると思う」

「そう。じゃあやろうか」

「何をぺちゃくちゃ喋っていることやら、たかが二人。この世界に
いるかぎり私を倒すことなんて出来ない！」

「だってさレイナ」

「
……ふっ
」

「
……職人と武器の力を見せてやる」
」

『
魂の共鳴
』

カサカサカサカサ…だZE ミ(後書き)

なぜ、無明も精神世界に入れたって？

(。 - -) へ……………さあ？

後付け設定うざい

(。 - -) へなんも言えねえ…

魂の共鳴は練習してなくても行けんの？

(。 - -) へ行けんじゃね？

原作とちがうんだが…

(。 - -) へそんなもんしらん

カサカサカサカサ…だZ E ミ(前書き)

アラクネは何処へ…

カサカサカサカサ…だZE ミ

キュイイイイン

無明とレイナの二人の魂が大きくなっていく

職人が武器に魂の波長を送り武器はそれを増幅させて職人に返すそしてそれを…

と繰り返すことを魂の共鳴と呼ぶ

魂の共鳴をすれば莫大な力を得ることが出来て武器が強化されるが魂の共鳴はそんなに簡単に出来るものどは無く職人と武器お互い信頼しあつてこそ出来る芸当だ

徐々に二人の魂は大きくなりある一定の大きさになると魂は元の大きさに戻る

「……私たちの力『ソロモン王の鍵』」

特に変わったこともなくレイナの手には先と同じで右手にいつも通りの無明（鍵）を握っているだけであつた。

「…は、ははっ、ハハハハハ！！」

失敗に終わったようですね！

少し恐れてしまった自分が情けないですよ…

お遊びは終わりましたよ」

「……成功してる」

「ほぞけー！！」

無明（偽）は自分の片腕を鍵にするとレイナとの距離をつめ真上か

ら叩きつける

「……………くっ」

レイナはその攻撃を右手で持つている鍵で無明（偽）の攻撃を防ぐが力は相手の方が上、それに加えて自分の左手は先程のチェーンにのせいで青く腫れまともに仕えない。魂の波長を流して反撃をすることも出来なかったのでレイナはその攻撃を滑らし軌道をずらす

「足下がお留守ですよ！」

レイナが無明（偽）の攻撃をずらしている間に無明（偽）はレイナの足下に向けて足払いをする

「……………」

レイナはその足払いを足を上げて避け逆にその足を踏み無明（偽）の動きを封じる

「あ……」

「……………はあっ！！」

動きを封じ無明（偽）の体が一瞬硬直した瞬間を狙いレイナは右手に力を入れ無理にの攻撃を弾くとそのまま鍵の柄の部分をおもいきり無明（偽）の顔面に叩きつけた

「ブフっ！！！」

と声を上げながら無明（偽）は一メートルほど吹っ飛ぶ

「…自分がやられてるみたいであまりいい気持ちか…」

「……私は無明にやるつもりでやってる」

「……マジで!？」

「……うそ」

無明とレイナが田和いもない会話していると無明（偽）はゆっくりと立ち上がった

「……鍵（無明）の硬度が上がる。それが貴方たちの共鳴ですか？それならがっかりですね

無明君…、武器の状態をやめて人になったらどうですか？」

「なんで？」

「なんで？そんなこと決まってるじゃないですか…貴方単体のほうが強いからに決まってるでしょう」

「だってレイナ。バカにされてるよ？」

「……仕方ない」

「どうしたほうがいいと思う？」

「……わかってるくせに」

レイナはその鍵を握った右手をはなさずに握りしめじつと無明（偽）のほうを見つめる

「バカな人達だ…

貴女は私の力を見たでしょう？さっきの紙の檻を。これは無明君がいる限りもう通用すると思っていませんが無明君（私）にはもう一つの能力がある」

「……ふーん」

「……バカは死なないと治りませんか
もういい、行くぞ

『第二解除』

…私には十全使いこなすことは出来ないが貴女を殺すぐらいは使いこなせる！

シネエエエエエ！……！！」

レイナの目の前にいる無明（偽）の姿がぶれレイナは姿を捉えられなくなった

「……見えない」

「仕方がないね…、相手の位置はぼくが教えるよ。後はよろしく」

「……わかった。行くよ『ソロモン王の鍵』」

「……バカは死なないと治りませんか
もういい、行くぞ

『第二解除』

…私には十全使いこなすことは出来ないが貴女を殺すぐらいは使い
こなせる！

シネエエエエエ！！！！」

バカが。低脳のクズどもめが。私がせつかく生きるチャンスを与え
てやったのに…

先に言っておくが私は別に戦闘中毒では無い。むしろその反対で戦
いはできる限りしたくない。（精神世界を除く）それなのになぜバ
カ共にチャンスを与えたか？それはあのバカの武器は中々使えるか
らだ

もしあいつが成長して強くなると私も強くなれる。能力もかなり便
利ですし戦闘能力も悪くない。気を抜くと狂気に持っていかれそう
になるのは少し痛いが…

…とりあえずあの女を殺そう。武器のことは後から考えるとしよう。
さつきは失敗したが、万が一魂の共鳴ができた場合、良いことは起
きないと思いますしね…

少のだが退魔の波長を持つてゐるのでアラクネ様の邪魔になっ
ても困るので死んでもらいましょ

向こうではなんやら二人話し合ってるようですがどうせ私の位置をあの女に言ってるんでしょう

残念ですけど無明君どんだけ言おうがそれは無駄なこと…

あの女は位置がわかってても反応できる早さが無い。万が一反応出来たとしても私の攻撃を止めるほどの技も力も無い…だから無駄。

ゆっくり話しといて下さい…

最後の会話ですから

それじゃ行きますよ？

狙うは勿論首

一発で胴体とさよならさせてあげすよ

死ね！

「レイナ、後ろだよ」

「……わかった」

無駄だ！遅い！

私とあの女との距離はおよそ五メートル。これなら一秒もかからない。そしてあの女はまだ動こうともしていない。

これで終わりだ！

ガキン！！

なん……だと？

私の手刀が鍵に止められただと？

あの女は背後を見せたままで右手にも鍵を握ったまま…

一体この鍵は……

ま…さか

「……さっき言った。魂の共鳴は成功したって」

私の手刀の先には空中に浮かぶ一つの鍵がある
その鍵が私の攻撃を防いだようだ

「たまたま防いだぐらいでいい気にならないで下さい」

どうやってこの鍵に触れずに空中に浮かし動かして私の攻撃を防いだかは知らないが所詮動かしてるのはこの女。まぐれは続かないだろう

「……私に当ててみな」

このガキイ！！

調子にのりやがって！

言っておけ！！今に胴体とさよならさせてやる

今度は足だ！

私の腕を鎌に変え足を切断させてやる

「……また見えない」

「次はどこを狙うんだろうね」

「……他人事」

会話に意識してな
スパンと行きます

ガキン！！

またしても空中に浮いている鍵が邪魔をして攻撃を防ぐ

なん……だと？

また防がれただと！？

ふざけるなあああ！！

首

ガキン！！

手

ガキン！！

胴体

ガキン！！

足

ガキン！！

脳天

ガキン！！

心臓

ガキン！！

「はあ……はあ……はあ……」

「……無駄」

「ふ……る……な」

「……??」

「ふざけるな、ふざけるな、ふざけるなああ……！」

「……キレた？」

「ガキが図にのりやがって……ふざけるな……！
もういい！もうどうでもいい！全力でお前を潰しに……潰しに力力

ルゼエエエエエエエ！！」

クロス、クロス、クロス、ロクロスロクロスロクロスロクロス
クロスクロスクロスクロスロスロクロスロス！！！！！！
！！！！

「……潰しにカカルゼエエエエエエエ！！」

無明（偽）の姿は壊れたテレビのようにぶれはじめいろんなものに
変化していく

「……一体どうなったの」

「……中途半端に狂気を使うからだよ
理性がなくなり狂気が体を支配する」

「……狂気に染まったの？」

「そうだね……もうあれは本能のままに動くただの動物だ」

「クロスクロスクロスクロスクロス」

無明（偽）はいろんな姿に変わりながらもレイナを殺そうと凄まじ
いスピードと力で攻撃するが、

「……………無駄」

右手に持っている鍵とは別の鍵が攻撃を受けとめレイナには届かない

「アアアアアア！！

これな…ラ、どうだああアアアアアア！！！！」

無明（偽）はどこからか二丁拳銃を取り握るとレイナには見えない速度で移動しながら四方八方レイナに向けて撃ち始める

「レイナ、最大まで

・・・

増やして！！」

「……………わかった」

レイナは右手に持っている鍵とは別に空中に五本の鍵を出した

「レイナ！！右、左、上、左、右、後ろ、後ろ、上、右」

キュン

キュン

キュン

無明の指示の方向に五本の鍵を巧みに動かし銃撃を全て防ぐ

「……………そろそろ」

「うん。約一秒後に北西８メートルの場所」

「……了解」

レイナは全ての銃撃を防ぎきったあと無明が言った場所に向けて空中の鍵を飛ばす

約一秒後、五本全ての鍵が無明（偽）に突き刺さり地面に横たわる

「ゴフツッ!!」

バカな……バカナアアア!!!!!!」

地面に横たわる無明（偽）のもとにゆっくりとレイナは近づき

「……ばいばい」

そう言うつと右手に持っている鍵を無明（偽）に降り下ろした

「……あれ？」

先程の場所とは違いほんの少し前まで歩いていた通路にレイナは立っていた

「……戻れた？」

周りを見渡すときどこか壁が壊れているなどは無く少し先に矢印が見えたためここは現実だろうと確信する

「…………無明は!？」

先程まで一緒に居て一緒に戦った無明が周りにいないことに気づく。
まさかあれも空想だったのでは…と思い始めたとき

「レィナ」

と後ろから声がかかった

「…………無明」

後ろを振り返るとそこにはあまり最後に会ったとき変わっていない
無明の姿があり現実の無明ということが実感できると自然とレイナの
口から声が出ていた

「ごめん…」

帰るのが遅くなって…」

「…………埋め合わせはしてもらっ」

「ええー、さっきはいいって…」

「…………言ってない」

「いや、いつ「言ってない」…………」

「わかりましたよ…」

「…………ふっ」

「笑うな!!」

「……………無明」

「ん？」

「……………皆で一緒に帰ろう」

「うん。そうだね

その為に一番錠前壊しに行くよ!」

無明とレイナは一番の錠前を壊しに通路を進んでいった

このまま私一人では負ける

あの時はそう思っていた

でも私は来ると確信していたよ

私のパートナー

無明はちゃんと来てくれた

さっきまでは勝てそうに無かった戦いも二人でなら負ける気がしなかった

「マジで!？」

「……うそ」

たわいのない会話の一つ一つが私の体に染み渡る

独りじゃない

と。

あいつを倒しあの空間から出てきたとき無明がいないことに気づいて私は心臓が止まりそうだった

今までのが空想ならもう空想の中にもいいと思うぐらいだったよ

「レyna」

この声を聞くのをどれだけ待ったか無明は知らない

無明がいなくなってから数カ月しかたつてないかもしれないけど私にとっては人生で一番長い数カ月だった

「ごめん…」

帰るのが遅くなって…」

本当に遅いよ

「……埋め合わせはしてもらっ」

「ええー、さっきはいいって……」

それくらい甘えさせてほしい……
私がどれだけ待ったことが

「……言ってない」

「いや、いつ「言ってない」……」

「わかりましたよ……」

「……ふっ」

やっぱり……、無明はかわらない

「笑うな!!」

今までいなかったのが嘘のよう。……ねえ

「………無明」

「ん？」

「……皆で一緒に帰ろう」

言いたいことはいっぱいあったけどとりあえず浮かんでくる言葉は
これくらい

一緒に帰って、また一緒にいよう

ねえ
…無明

カサカサカサカサ…だZE ミ(後書き)

くそお!!

伸ばして伸ばして伸ばして、5000文字行く予定だったのに!

案外やる気が出なくて戦闘は即終了

短くなるからレイナの心情を書いたが何か書きにくくて即終了

5000文字に到達出来ず…

台本エ

(。 - -) へ……………

キャラ崩壊

(。 - -) へ…………むしろキャラが安定してないだけだ!

ネーミングセンスよ…

(; ; ;) へ泣いた

魂の共鳴の技よ…

(。 - -) へキングダム ーツとか言うなしww

グラムさんの案使わさせていただきました。ありがとうございます
す(; ; ;) ヽー!

あのパートナー、そんなしゃべったっけ?

(。 - -) へ…………さあ?

カサカサカサカサ…だZE 三

「……これで終わり」

レイナは両手に持っている鍵を一番の錠前に向かって振るった。

ドゴオオオン！！

一番の錠前は爆音と共に壊れていく

「さあ、巻き込まれないうちに行くよ」

「……うん」

二人は崩れていく錠前に巻き込まれないように来た道を帰っていく

「…レイナ、ちょっと悪いんだけど先に皆の所へ行つといてくれる」

ある一定の距離の道のりを歩いた所で無明はレイナに言った

「……どうして？」

「錠前を壊す手伝いをしなくちゃならないんだ」

「……なら、私も行く」

「…駄目だ。そこにはとても強いじいさんがいるからね。今のレイナじゃ勝てない」

「……………」

「心配しなくても皆と一緒に帰るよ。だから先に行つて」と

「……わかった。待ってる」

少し躊躇う仕草があったがレイナは言われた通りに無明の元から離れ城の中心部に向かっていった

「さて、あのじいさんの所へ行くか…」

そして無明は八番の錠前にいるモスキートの所へ向かっていった

レイナと魔道具兵の交戦中八番錠前では…

ボズン！！！！

「爆発が近い…、八番の錠前が破壊された？」

そう言うのはモスキート。今の彼は400年前の姿でありとても老いなど感じられず若々しかった

「破壊完了」

「やったか狼男…」

破壊完了と言うのは狼男。本来なら別の場所の錠前を破壊しなければならなかったのだが道に迷ってしまい結果八番の錠前に来てしまった。だが災い転じて福となったのかキッドと協力して戦ったことにより、強力なモスキートを退け八番の錠前を壊すことが出来た

「何をした!？」

お前はずっとここにいたはずだろ」

「空間魔法『映像転送』」ここにいるのは俺のライブ映像だ!本体の俺は錠前にいる」

「その場でバタバタしていたのは狼男が錠前に移動していた様子だ」

「そういうこと

女王蜘蛛の間が空くのはもう時間の問題だ」

「おのれ…

このままではアラクネ様の身が危ない
そのBREWしばらく預けておく」

モスキートの400年前は、一番多かった時代。モスキートは女王蜘蛛の間へ行く為に体を無数の蝙蝠に変えて飛んでいった

「くそ…、あんな若造共にここまでされるとは」

モスキートは全ての錠前が壊れたことに気がつき急いでアラクネの元へ向かっていた

「まあ…いい。」

BREWの力があるうが退魔の波長があるうが所詮はガキ…

あと4回変身できる私の敵では無い

すぐに私が全て排除してやろう…」

「……排除されるのはお前だよ、じいさん。」

「誰だ!」

モスキートが向かっている通路の先にはここからは通さないとでも言うように一人の子供フォンが立っていた

「お前は…

確か、フォン…」

「400年遡ることで記憶力も良くなったようだなじいさん」

「戯け!!何のようだ!?!そこをどけ!私の邪魔をしに来たのならお前も排除してやろう」

モスキートはフォンをジッと睨み今にも手を出そうとしている

「だからさっきもいった通り排除しに来たんだよ」

先に手を出したのはフォン。あらかじめ詠唱してあったのか喋り終

わると同時に火の矢が数十本モスキートの周りに現れるとモスキートを殺そうといっせいに放たれた

「……………!?!」

モスキートは先程のキッドとの戦いで負傷してしまったせいでフォンの奇襲に反応が遅れ、火の矢を避けきれず全弾命中する

「あれ？ 呆気ないものだな…」

まあ、400年前ごときじゃしょうがないか……………」

期待外れだったのかまるでつまらないというような顔をしてフォンがその場から立ち去ろうとした時、モスキートがいたところから強い狂気を感じて足を止めモスキートがいた場所を見る

体中血だらけで焼け焦げていたがモスキートはゆっくりと壁に手をかけ立ち上がった

「…み、…見せて……………やろ……………う…」

これが500年前の力だああああ!!」

モスキートの魂が膨れ上がり徐々にその重傷の体が治りながら姿は変わっていく。

「500年前の時代、それはすなわち私が一番眼だった時代、」

モスキートの体は筋肉で盛り上がり2メートルほどの大きさになり、そして顔にはいたるところに眼がついていた

「これで死角はなくなった。行くぞ！」

その体の大きさからは想像のつかない早さでフォンの近くに駆けよると筋肉で盛り上がった腕でフォンに殴りかかる

（200年前と、いやそれ以上に早いかも知れん！！）

避けるより防御をした方が早いと感じたのかフォンは殴られるであろう場所に腕をクロスして防御する

ドゴオオオン！！

その盛り上がった筋肉は見た目だけでは無いと言つように防御をしたままのフォンを力で殴り飛ばす

「…腕が持つていかれるかと思つたぜ」

吹っ飛ばされたものの体勢を崩れず、また意識を失わなかったので短く呪文を唱えると再び炎の矢をモスキート目掛けて放つ

「死角が無いと言つたはずだ」

前後左右から放たれる炎の矢をモスキートはいとも簡単に避けていく

「それは囷だ」

いつの間にかモスキートの近くまで駆け寄っていたフォンは腕を槍

に変えモスキートの心臓目掛けて突く

「何回言わす気だ？死角は無いと言ったはずだ」

モスキートはフォンの槍の腕をガッチリ掴み逃がさないようにすると

「子供は寝る時間だ」

防御もしていないフォンの顔を狙って思いっきりその筋肉だらけの拳を放った

メキメキメキ

フォンの体に変な音がしてそのまま数十メートルフォンは吹っ飛んでいった。

まるで捨てられた人形のように吹っ飛びやがて地面に転がり止まるとフォンは動かなくなった

「さて、一刻も早くアラクネ様のところへ行かなくては……」

モスキートは動かなくなったフォンをまたぎアラクネのもとへ行こうとしたときフォンの体が燃えているのに気づいた

「最近の子供は夜更かしするのが当たり前なんだ」

キズ一つ無くなり立ち上がるフォンを見てモスキートは少し苛立ち

を感じる

「こちらには時間が無いというのに厄介な魔法だ……」

「即死じゃない限り俺は死なない」

「…なら一瞬で殺してやるわ」

「遠慮させてもらう。俺にはまだやることがあるんでな」

フォンは今度は素早く長く呪文を唱え始めた

「私には死角が無いから無駄だというのに」

「ああ、わかってるさ」

だからもう死角をついた攻撃なんてしない」

フォンはニヤツと顔を歪め魔法を唱える

その瞬間フォンを中心に半径20メートルほどの通路が炎に包まれた

「ふんふんふん」

「ガキが！！」

「死ねえええええ！！」

魔法は術者が死ぬと消えてしまうと言うことを知っているモスキー
トはフォンを殺そうと殴りかかるが、炎の壁によってその拳は遮ら
れた

「くそ、くそおお!!」

手当たり次第モスキートは腕を振るうがフォンには当たらず熱気と酸素不足によって意識が飛びそうになる

「今度こそ終わりだ。」

じいさんはとつとと逝きな」

フォンはさらに魔法を唱えると、モスキートの全身が炎に包み込まれる

「ガアアアアア!!」

フォンはしっかりと燃え尽きていくモスキートを視認し完全に燃え尽きたとわかると全ての魔法を解除した

「これでさすがにあのじいさんも死んだだろう」

フォンは灰となったモスキートを見つめる。いくらモスキートが変身するたびに体が治ったとしても灰からは治らないだろう。ましてや死んでしまつては変身以前の問題。

「あー、疲れた。魔法唱えすぎたかな？」

フォンがその灰を蹴飛ばし通路の先を行こうとした時、いきなりフォンの左腕が切断されたようにずるっとずれ落ちる

「!?!」

痛みや悲鳴を上げるのを我慢して、すぐにその場から移動した

「フフ、フフフ。これが私の700年前の力だ」

フォンは咄嗟に灰を見る。そこには灰は残っておらずあるのはただの床だけ。そしてモスキートの姿はどこにも視認出来なかった

「これが700年前の力。すなわち私が一番見えなかった時代だ」

「じいさんの癖に子供のかくれんぼに付き合っているのか？」

「たまには子供と遊んでやらんとな」

声をもとにモスキートの位置を把握しようとするがその場所にはモスキートはいない。

「どういうカラクリかは知らんが子供騙しは聞かんぞ」

「その言葉は私の攻撃から耐えてから言っただな…」

フォンは一つも焦った感情を見せず、魔法を唱え自分の腕を元に戻す

「（すぐにあの世に連れて行ってやる。）」

モスキートは音も立てずフォンに近より一瞬で殺そうと背後から脳天目掛けて自分の腕を突き刺そうとするが

ガキン！！

その腕は脳天に届かずある鍵によって防がれる

「なん…だと？」

見えない筈の自分の攻撃を防がれモスキートは驚きの声を上げる

「遅かったな無明」

来るのがわかっていたようにフォンは背後にいる無明に対して言った

「…ごめん」

「まあいい、さっさと終わらせるぞ」

「そうだね」

カサカサカサカサ…だZE ミ(後書き)

伸ばす、伸ばすぜえええ!!

前回と展開が同じじゃね?

(。 - -) へしゃーない

モスキートさつさと800年前になれよ

(。 - -) へそんなことしたら伸ばせないじゃないか!!

ワンパターンww

(- - ;)

600年前は?

(。 - -) へさあ?

戦闘描写ww

(- - ;) へこれが限界なんだよ…

モスキート原始的な戦いしてんな。技使えよ

(。 - -) へじゃあ技名考えてくれww

何話アラクネ編やる気だよ…

(。 - -) へあと、出来たら二三話はいきたい! 行けんかもしれんけど…

カサカサカサカサ…だZ E ミ(前書き)

あかん。無理だった…

カサカサカサカサ…だZE 三

「ほざけ！！まぐれで防いだごときで調子にのるなよ？」

「だってさ。バカにされてるぜ？」

「そうだね」

「貴様ら…！！殺す」

モスキートは無明から一旦距離を取ると二人の隙を伺った。

実際モスキートの700年前の姿は眼では見えないし、かといって音で居場所を特定されるほど無様なことはしない。尚且つ最新の注意を払いながら動いている。

（まぐれはそう続かない！まずは回復魔法が使える彼奴を…）

モスキートは今度はあえて真正面からフォンを狙うことにする。あの程度の距離からフォンの真正面まで移動するのにおよそ一秒前後。相手の動きが見え次の攻撃の予想が出来るほどの実力があるものなら反応が出来ないことは無いかもしれないがモスキートの姿は見えないので恐らくそれは無理であろう。

（今度こそ死ね…）

鍛えられた肉体は全てが凶器。真正面からフォンの心臓狙ってモスキートは一突きするが…

「おっと、危ない」

今度はフォンに腕を掴まれそのモスキートの攻撃はガードされる

「あらよつと」

フォンはその腕を掴んだまま思いつき振り回し壁に投げつけた。

バゴォォン!!

端から見たら何が起きているかはわからないだろう。わかるとしたら目の前の空気を掴み投げその空気が壁にぶつかり壁が壊れた。そのようにしか見えないはずだ。だが実際空気では無くそこにはモスキートがいる。絶対に目には見えない筈のモスキートが…

「何故だ…何故…」

どこからかモスキートの声が二人の耳に聞こえてくる。

「800年も生きてる癖にそんなことにも気がつかないとは…」

「いや…、普通なら気がつかないと思うけど」

「貴様ら何を言っている…」

「700年も若返ってるんだから、そのピチピチ脳で考えな…行くぞ無明」

「へーい」

無明は全身を鍵に変えると地面に突き刺さる。

「さて…」

こっちからも行かせてもらおう」

地面に突き刺さった無明を引き抜くとフォンは一直線に見えていない筈のモスキートへ向かう

「!?!」

モスキートはもしかしたら音で自分の位置を把握されてるのでは？と少し思っていたのだがその考えは一瞬で崩れ去ることになる。

なぜならモスキートは現在空中で一切音も立てずに止まっていたからだ。

音も立てず目では確認できない筈の空中にいるモスキートに向かってフォンは鍵を振るった

「くっ!?!」

咄嗟にモスキートは両手をクロスしてガードするもあまりにも重い衝撃を殺すことが出来ずにそのまま地面に転がり落ちる

「休む暇は無いぞ」

モスキートに向かってフォンは鍵を投げつけた

「くそ!？」

痛みをこらえながらモスキートはその場から移動し一直線に向かつてくる鍵を避け、フォンに反撃しようとするが、

「ガハッ！」

突然背後から衝撃が走りモスキートは方膝をその場についた

「ぼくもいるんでね」

「だから言つたろ？休む暇が無いって」

フォンは見えていない筈のモスキートの後頭部を踏みつける

「くそ……くそおお!!!!」

何故だ…何故なんだ!？」

「…哀れだな。アラクネのすぐ近くにいるお前がまだ気が無いとは…仕方ないな、教えてやろう」

答えは簡単『狂気』だ。じじい」

「なん…だと？」

「ぼくたちにはね。見えるんだよ…」

おじいさんの『忠誠心』と言う狂気がね」

「だからなお前がいくら姿を隠そうが俺達には意味が無い

残念だっ…これは!？」

「頭の中に蜘蛛が…」

ゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワ

「ふふ、フハハハハハ!。アラクネ様はご無事のようだ!」

「……………」

無明とフォンは下を向いたままいつこうに動かない

「精神を殺られたか？」

まあいい。すぐに肉体も殺してやる」

モスキートはゆっくり立ち上がると二人を殺そうと腕を振るった

「何？」

今まで目の前にいた筈の二人はいつの間にか消えておりモスキートの腕は空を斬る

「…全然駄目だな」

「…ほんとその通りだね」

二人の声がした方向をモスキートは咄嗟に見た。二人はモスキート

からおおよそ10メートル離れたところにさつきと変わらない姿勢で立っているままである

「…じじい」

「なんだ小僧」

「800年何を見て何を学んできた？」

「…何を言っている？」

「…じじいも感じているんだろう？この蜘蛛の狂気を…」

「ほう…お前ごときこの素晴らしい狂気を感じることが出来るとはな」

「…じじい、やっぱりお前は駄目だな」

「さつきから何を言っている！？」

「アラクネごときの狂気を素晴らしいと言ってる時点でお前はもう駄目だ…」

冥土の土産だ…

最後に鬼神までとは行かないが俺達がお前に狂気を教えてやろう。
無明」

「ああ」

『狂喜』

二人の中から何かが溢れでてくる

「じじい…、五秒待ってやる
800年前に戻れ」

「な……なんだと……」

モスキートは始めて恐怖を感じていた。アラクネとは違う狂気。今まで出会ったことのあるなかで最も鬼神に近い狂気。

今まで空間に漂っていたアラクネの狂気の波長が一瞬で二人の狂喜の波長に浸食されていく

モスキートは本能でわかっていた

今のままでは勝てない

と、殺らなければ自分が殺られる

勝つため、生きるために殺らなければならない例えどんな犠牲を払ってもだ。

そう心に決めたモスキートは無言で力を貯める

「これがあ、私の800年前の力だああ!!」

それすなわち私が一番すごかった時代いい!!」

姿が見えると同時にみるみるモスキートの姿が変わっていった。

モスキートの姿は完全に人では無くなり片方の目が三つ、体は蚊が巨大化したようになっていた

「なるほど、確かに凄い
な。今までのとは比べ物にならないくらいの力を感じる

だが俺達はもっと凄いことが出来るぞ

無明」

「またか…

まあ、いいけど」

またもや無明は鍵になると地面に突き刺さった。
フォンその鍵を少し掴む

「見ておけ

【狂喜共鳴】

」

二人の魂が大きくなっていく

「バカな…！武器と武器で共鳴だと！？
そんなことできるはずが…」

フォンが今まで下を向けていた顔を上げる。
そこには顔全体で邪悪な笑みを浮かべていた

「さよならだ…」

【ギー・ス】

「

モスキートがその言葉を聞いた直後、モスキートの頭は地面に転がり落ちた

「あれ？いつの間にかアラクネの狂気の波長消えてるよな？」

「死武専の生徒、恐らくマカさんがアラクネを倒してくれたんだろ
うね」

現在二人はモスキートの魂を回収するとその場で待機して今後のことについて話し合っていた

「で、どうすんの？取り合えずぼくは死武専に戻るけど」

「そうだな…」

アラクネも死んで一先ず落ち着いたし…

まあ、取り合えず自由行動で」

「遠足!？」

「何かあったらちゃんと連絡入れるから大丈夫だ」

「あつ、そう」

「とにかく、ここからは別行動だ。ちゃんと腕磨いとけよ」

「そっちこそ」

「ハッ、…先に俺は行くぞ。まだ死武専の奴等に姿を現す訳には行かないんでな」

「そうだね…
じゃあね」

「ああ」

フォンはそう言うとして一人通路の奥に消えていった。

「…ぼくも帰ろう」

無明も一人城の外へ歩いていった

死武専校長室

「ただ今戻りました」

「うん。お帰り無明君

一体今までどこに行ってたんだい？」

「…鬼神に対抗するための力をつける修業と少し鬼神のことについて調べていました」

「…一人で？」

何か気になったのか死神は無明に質問する

「…そうですね。『一人』です」

「そう…。なら別にいいんだけどね 皆君の帰りを待ってたんだよー
キッドも会いたがってたんだけどね。少しすれ違いになっちゃった
みたい」

「…パティー達から話は聞きました
キッド大丈夫だといいますが」

「心配しなくても大丈夫だよ。あの子は死神で私の息子だ。大丈夫
大丈夫」

「はあ…」

「ま、話はこれぐらいにしようか。外でレイナちゃんたちが待つ

てるからいつてあげなよ」

「はい。わかりました。それじゃあ失礼します……」

無明は長い長い道を歩いて校長室から出ていった。

「死神様。何をそんなに気になったのですか？」

死神のずっと隣にいた死人は死神の異変に気づいていた

「ちよつと……ね。」

それよりあの子供の魔女をここに連れてきてよ」

「……わかりました」

死神が何かを隠していることに気付くがあえて何も言わずに死人は校長室から出ていく

「……………」

死神は一人、ずっと無言で虚空を眺めていた。

カサカサカサカサ…だZE ミ(後書き)

めっちゃ省き急いで終わらせアラクネ編終了

とくに急ぐ必要も無かったけど、これ以上何もネタが思い浮かばないので終わらせました(・・)

次は何書こうかな…

じじい…

(。 - -) へ弱いねww

狂喜だと？フツ

(*´ー´*)

武器どうして共鳴出来んの？

(。 - -) へ頑張ったらいけんじゃね？調べて無いからわからんけど…

死神黒幕フラグww

(。 - -) へ大丈夫。黒幕は無いww

原作によるけどな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6751r/>

ソウルイーターの世界にいこうZE ヽ

2011年11月17日18時18分発行